

創造神が行く幻想の世界

しぐれ水天丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公でありこの世界の創造神である洩矢武志。彼は自身の創った地球に憧れを抱き、暮らし始める。自分だけの世界で武志は仲間と楽しく過ごしたり厄介事に巻き込まれるというお話。

CAUTION:

○この小説には少々のチート要素、オリキャラ、時代に沿わない現代世界や近代武器が多数含まれています。

○基本的に書きたいものを描いているため無茶な事や意味不明な事を書いたりしています。

それでもいいよって方はどうぞゆっくりと見ていってください！

※基本的に不定期投稿です。

※過去の章のリメイクが終了いたしました。台本形式を通常形式にしたため読みやすくなったと思われれます。

目次

第一章 この世の誕生と創造神の誕生

PART. 1	創造神の誕生	1
PART. 2	双子は自分を知る	3
PART. 3	世界創りますか	7
PART. 4	天界の発展	10
PART. 5	神使（神獣）を従えました。	13
PART. 6	神使の教育	17

第二章 謎の古代都市

PART. 7	いざ古代都市へ	20
PART. 8	古代都市のもてなし	23
PART. 9	居候も楽じゃない	26
PART. 10	従軍しました。	29
PART. 11	はじめてのおしごと	34
PART. 12	月移住作戦　くOperation. ITM　く	40

（実行編）

PART. 14	創造神の孤独な闘いと帰還	48
PART. 15	古代都市の跡片付け	52

第三章 諏訪大国の土着神

PART. 16	土着神の創造	54
PART. 17	愛用する武器の創造	58
PART. 18	戦争の兆し	61
PART. 19	会談	65

PART. 20 ケロちゃん特訓する | 70

PART. 21 諏訪大戦・開幕 | 74

PART. 22 諏訪大戦のその後 | 79

PART. 23 旅立ち | 82

PART. 24 天界の再開発 | 85

PART. 25 自立という名の家出 | 88

第四章 飛鳥の都の聖徳伝説

PART. 26 いざ都へ | 92

PART. 27 夕飯の間 | 95

PART. 28 馬と秦河勝の話 | 98

PART. 29 邪仙の目的 | 102

PART. 30 そして語り継がれる伝説 | 105

PART. 31 常世神伝説の幕開け | 109

PART. 32 常世神伝説の終焉 | 114

第五章 妖怪寺の友情物語

PART. 33 修行の果てに | 119

PART. 34 対ムラサ戦 ～雨降る夜の対決～ | 122

PART. 35 平穏と不穏 | 126

PART. 36 昔話 | 129

PART. 37 暗躍 | 132

PART. 38 対陰陽師集団 ～命蓮寺大戦～ | 137

PART. 39 兄弟決戦。そして暫しの別れ | 142

第六章 武志は新世界を創りたい

PART. 40 久しぶりの訪問 | 146

PART. 41 天界にて | 151

PART. 42 いざ制作 | 155

第七章 第一次月面戦争記〜Moon War I

PART. 43 悪報 | 160

PART. 44 潜入（という名の戦争）の準備 | 165

PART. 45 RとYの新世界探索 | 169

PART. 46 第一次月面戦争・開戦 | 172

PART. 47 対決・白覆面男 | 177

PART. 48 潜入作戦 | 181

PART. 49 地下・研究室にて | 186

PART. 50 vs 綿月依姫 〜地下室での決闘 | 189

PART. 51 帰還そして案内そして戦果報告 | 194

PART. 52 速報は碌な情報ではない | 200

第八章 新たに生まれるは二つの幻想の世界

PART. 53 天界は三度変わる | 206

PART. 54 蘇生 | 211

PART. 55 軍備拡張 | 214

PART. 56 理の神の復活 | 220

PART. 57 思い出（理都編） | 227

PART. 58 兄弟対決 〜二柱の戯れ | 232

PART. 59 依頼 | 236

PART. 60 対幻想百鬼夜行 〜The Dream Qu

alification | 243

PART. 61 人間と妖怪が共存する世界 | 250

PART. 62 理都の旅立ち | 256

第九章 忍び寄る悪魔、諏訪洩矢郷の乱

PART.	63	悪魔襲来	263
PART.	64	敵前逃亡? いや、戦略的撤退だ。	267
PART.	65	情報戦	273
PART.	66	反撃の援軍	277
PART.	67	やられたらやり返す、倍返しで。	279
PART.	68	いざ、決着の時	289
PART.	69	大団円	293
PART.	70	復興及び改築	299
第十章 幻想郷への片道切符			
PART.	71	いざ幻想郷へ!	307
PART.	72	探索	312
PART.	73	探索(隠密)	317
PART.	74	スペルカード	322
PART.	75	愛する従者達への試練	325
番外編 ここまでの設定集			
番外編1	すべてのオリキャラ設定		335
番外編2	その他設定まとめ		352
第十一章 東方紅魔郷 く公害 ダメ ゼツタイく			
PART.	76	青い空、白い雲、紅の霧…?	361
PART.	77	いざ紅魔館へ!	364
PART.	78	vs フランドール・スカーレット戦	369
PART.	79	愛と絆の姉妹戦	376
PART.	80	宴会。そして不穏な影(霊夢編)	382
第十二章 東方妖々夢 く終わらない冬、春を探してく			
PART.	81	さつむ!	386

PART.	90	異変の終わり	425
PART.	89	v s 異変解決者たち	419
PART.	88	警備	414
PART.	87	初仕事	410
PART.	86	再開	406
第十三章 東方永夜抄 く異変の裏仕事編く			
400			
PART.	85	v s 西行妖 く伐採も神様のお仕事ですく	
PART.	84	冥界にて	397
PART.	83	幻想郷雪中行軍	393
PART.	82	理都からの手紙	389

第一章 この世の誕生と創造神の誕生

PART・1 創造神の誕生

何も無い空間。そこには光すらなくただ真っ黒の空間に私はいた。周りの様子もよく見え、本当にただ虚無が広がっていた。

(ここはどこだ？そして私は誰だ？…ダメだ…全く分からない。) その空間で漂いながら少し考えていると、何処からか、一人の声…おそらく女性のだろう、その声が響いてくる。

「起…き…ろ…」

(誰だ…そしてここは何処だ…)

「おい…起…き…ろ…」

(何も分からない…本当にここは何処なんだ？そして私に語りかけてくるのは誰なんだ…?)

少し考えていると、

「起きろー！ー！！！」

「ファツ!」

「やれやれ、やっと起きましたか。」

その怒鳴り声のする方向に視線を向けると、そこには一人の銀髪ロングヘアで、着物を着こなした美人の女性が立っていたのだ。た…

「おはようございます♪お二人とも♪」

「お二人」という言葉に引掛かり、すぐに横を向くと、そこにはもう一人、長めの髪をした男性がいたのだった…

(ここは勇気を出して目の前の女性に色々聞くべきか…)

と悩んでいると、隣にいる男性が、

「誰だお前。そしてここは何処か教えろ。」

この態度には私も唾然するばかりだった…

あらあら…ずいぶん反抗的な態度で…私はあなたたち二人の母親、そしてここは私が創った空間ですわ♪」

と、優しく微笑みながら話すのであった。だが、

(額に小じわが…これ明らかに怒ってるな…)

と、内心怯えているのであった。

「とりあえず、まずは自己紹介から行きましようか。って言っても貴方たちはまだ名前がなかったわよね？」

二人「そうだな。」

「ならその貴方からね？」

と、自分を指さし、

「貴方の名前は、洩矢武志よ。そしてまたの名前を洩矢武志之創造神よ！貴方はこの世界における森羅万象、そして万物を創り出す者よ！」

「いい名前だな…ありがとうな。」

「そして貴方は洩矢理都。またの名前を洩矢理都之大能神よ！貴方はこの世界の森羅万象、万事万物の理を創り出す者よ！」

「いい名前じゃないか…ありがとうな。」

「そして最後になっちゃったけど、私がこの世界全てを統治する者、洩矢大蝦蟇全能神こと、洩矢千古よ！」

と、目の前の女性が名乗るのだった…

「ところで、名前が二つあったが、それは意味があるのか？」

と、千古という女性に問いかけると、

「ええ♪勿論意味がありますわ♪最初の名前は言わば貴方達の普通の名前。名乗るときとかに使いといいかもね♪そして二つ目の名前は神名。つまり貴方達の神様の名前ってことなのよ。」

「つまり私たちは神様ってことでもいいのか？」

「そうよ♪武志は創造神、理都は理神よ。そして貴方達は双子の神として、この世界を創造していくのよ♪」

ここに双子の男神が誕生した瞬間だった…

PART・2 双子は自分を知る

二人が生まれた次の日のこと…

「そういえば、私達はこの世の神様みたいな事言ってたけど、何かできるのか？」

武志はふと疑問に思ったことを千古に問いかけてみた。

「ええ。その前に一つ、能力について教えようかしら？」

「お願いする。」

「…なら理都が起きてから話しましょうか。その方が良いでしょう。」

「分かった。」

そう言われたので暇つぶしにその辺を飛んで回る。

くくく男神飛行中くくく

「ふああ… 皆おはよう…。」

「おはよう。」

「おはようございます♪」

朝の挨拶をして、本題に入る。

「理都、ちよつとそこに座りなさい。話があるのよ。」

「どうしたんだ？ そんなに改まって？」

理都はそう言いつつ、俺の隣に座る。

「実は貴方達には一つずつ能力というものが備わっているのです。例えば、私は全能を司る程度の能力を持っているわ。」

「それは一体どういう能力なんだ？」

「簡単に説明すると、この世の全てを操ることができるわね。」

それを聞いて武志はこう思った。

(いやその能力はチートだろと…)

だが、

千「まあ、操るのも割と大変だけどね。それより、貴方達の能力だけど、武志は【万物を創造する程度の能力】。理都は【理を司る程度の能力】よ。」

「なるほどな。私の能力はいろいろなモノを作り出すということदै

いのか?」

「なら、俺のは理を作ったり消したりできるのかな?」

「ええそうよ。二人ともその解釈で合ってると思うわ。」

「なるほどな...」

(コクコク)

「反応が薄いわね二人共...」

千古にそう言われるが実際何も言えないのだ。仕方ないとはいえ流石に悪いと思ったので、

「まあ便利そうな能力だと思うよ。ありがとうな。」

「オホホホホ!ありがとうね武志!」

褒められて見たことのないテンションの千古を見た瞬間だった。

(絶対おだてるとメンドクサイ人... いや神だな...)

と、内心苦笑いしていた。

「まあ、とりあえず、能力を扱えるように練習した方が良いだろうか」「ええそうね。能力は解釈によって幅を広げたりすることもできるの。だから貴方達が思っているより色々なことができると思うわ。そして、貴方達は能力を使うときに、【神力】を扱うの。私達は原始の神としてほぼ無限に近い神力を持つてるから、心配はいらないと思うけど、一応知識としては知っておいてほしいわね。」

と、説明が入る。

「さらに、力が無限に出てくるとはいえ、浪費しすぎると回復が追いつかなくなつて大変よ? 最も、二人ならその点も能力で直せると思うけどね。」

と、続けて説明が入る。確かに、能力でその神力とやらを創造すれば即興で回復できそうだからな。

「そうか。しかし力が無限に湧き出るとは最高だな。」

「まあ確かにそれはいいけれども、力の放出の制御には気を付けてよ? 力を制御できないものは大体弱くなつてしまうからね? それに周りにも迷惑だからそこら辺も気にかけてほしいわね。」

「善処する。」

(相変わらず反応が薄いわね... そうだ!)

「ねえ、双子同士で戦ってみてよ！」

「いきなりだな…。」

「はっ!？」

本当にいきなり過ぎてこの親は頭に矢でも刺さってしまったのかと思っただ。

「まあいきなりでもいいから♪合図が鳴ったらスタートね♪」

そう言われて仕方がないので、二人とも向かいあつて構え始める。すると千古はどこからか取り出した金属のベルみたいなものを取り出し、思いつきりそれを鳴らす。

／／／カーン／／／

金属の甲高い音が鳴り響く。ていうかどこから持ってきたんだよとツツコミたくなるが、これは戦いだ。勿論戦いでそんな余計なことを考えていたら、

シュツ!

理都の右ストレートが飛んできた。

「危ないなっ!？」

「いや戦いに危ないも何も無いからなく？」

というが、ギリギリのところ回避に成功した。

シュツ! シュツ! シュツ!

「うおっ!危ねっ」ボカッ!

武志の連続フックがヒットすると勢いに乗って攻撃が多段ヒットするが、理都も負けじとガードしようとするが、

武「いけっ!」パコン!

(もらった!)

決めようと振りかぶった一瞬の隙をつかれカウンターを決められた。

「痛いなあ〜!」

流石にこれは痛かった。流石にお互い消耗が激しいのか、お互い構えて、最後の一撃を決めようとする。

「これで終わりだー！ー！」

「やってやらーくらえー！」

二人共その一撃はクリーンヒットし、

「ゲフー！」

「ぐっふー！」

バタン！ ドサツ！

二人共倒れ、この勝負は引き分けとなったのだった。

「まさか引き分けるとはなあゝ」

「本当だな。だがいい勝負だったぜ。」

「こっちこそな。」

「フフフフフフ♪」

「ハハハハハハ！」

二人は笑いあい、拳を交えたことで、前よりも仲が良くなったのだった。

「フフフ… 大成功ですね。」

千古も二人の仲が良くなったのか、遠目から笑顔で見守るのだった。

PART. 3 世界創りますか

前の話から数百年後…。三人は能力の練習や戦いの練習、そして三人で組み手などをしていた。武志も理都も大きくなり、前よりも仲が良くなったが、千古はあまり変わらなかつた。そんなある日のこと、「そういえばこの何も無い世界にもそろそろ飽きてきたな。」

「確かに何も無いもんなあ…。」

そう、この世界にはまだ何も無いのである。流石に何も無い真つ黒な空間で毎日同じことをしていたら飽きが来てしまうのも当然である。暫く考えていると理都がとある提案をする。

「ならおふくろにこの事を話してみるか？」

「それが安泰かもしれんな。」

くくく 双子移動中… くくく

「母さん、そろそろこの何も無い世界に何かを飾りつけないか？ずつとこのままと言う訳にはいかないだろう？」

「俺からも頼むよ。おふくろ。」

二人からお願いされた千古は、少し考えて、

「そうね…。そろそろ良い頃かしらね…。」

と、呟くが、二人はまさか一発で許可が出ると思わなかつたため、キョトンとしていた。しかし、そんな事は気にせず、千古は続けて、「貴方達にはその生まれ持った能力を使ってこの世界に飾りを創ってほしいのよ。二人ならきつと良いものを作れると思うわ！」

「そうと決まれば、理都！どちらがいい飾りを創るか勝負するぞ！」

「ああ！望むところだ兄さん！」

と、二人は勝負して飾りを制作するのだつた…。そして数日後、

「二人共飾りはできましたか？」

「ああ。」

「勿論OKだ。」

（この飾りなら理都どころか母さんにも勝てそうな気がするな…。！）

武志は創造神であり、その能力故、いい感じの飾りを創ることがで

きたが、理都はというと…

(飾り一つ作るのがこんなに大変だとは思わなかった…)

と、半ば心が折れかけているのであった…

「なら私からお披露目しましょうかね…♪ それっ!」

「デカいなこれ…」

「あっつ!」

と、二人共驚くのであった。皆様の言葉ではこういうでしょう。

「この飾りの題名は【太陽】よ。世界の中心で私みたいに光り輝くモノをイメージしたわ。」

というが、二人ともこれには、

「ナルシストだ…」

「完全に思考がナルシストのそれだな。」

と、ただただ呆れるばかりなのであった。

「さて!次は誰がお披露目する?」

「俺が行こう…」 武志は絶対にいいモノを作るからインパクトに欠ける…!

その眩きは誰にも聞こえることは無かった…

「俺が創ったのはこれだ。」

「多いですね〜」

「これだけの量よく作ったな。」

と、感心されるが、実際は、失敗を繰り返し、最終的に形として残ったのは6個である。その中には、何故か周りにリングができた【土星】、赤く乾いた【火星】、小さい【水星】、そしてとても大きい【木星】、そして【天王星】があるが、

「その中でも俺はこれを代表として出すぜ。」

「なんか不思議な光を放つ飾りですね〜」

「ああ。思わず見とれてしまうな。」

「この飾りの題名は【月】だ。」

「貴方にしてはいい名前ね。理都。」

「うるさいやい…」

「さて、最後は武志。あなたの番よ。」

と言われ、前にでて発表する。

「私が創ったのはこれらだ。」

「どれも凄い飾りだな…。すげえや…。」

「どれもいい飾りね。」

武志が見せた飾りは、金色に輝いている【金星】と、とても青く澄み渡っている【海王星】があるが、

「その中で俺はこの飾りを代表として出そう。」

そういつて出したのは、緑と青で構成されていて、所々に白が混じっている飾りを出した。

「これは【地球】という飾りだ。」

「おお…。すごいものを創ったわね武志…。」

「ああ。完敗だな。俺はこの星が一番良いと思うぜ。」

「理都もそう思うのね♪私もそう思うわ♪」

そう。この二人も自分の作った飾りが一番だと思ったのだ。

「おめでとう武志。一番になったから何か願いがあったら言うって頂戴。」

「願いか…。ならこの地球に生命を誕生させてほしい。母さんは許可を、理都にはその生命が規律良く生きていられるような理を創ってほしい。」

「ふふっ♪その位ならいいわよ♪沢山の生命を創って頂戴ね♪」

「分かったよ母さん。」

こうして地球は誕生した。そしてそこには沢山の生命が誕生し、それを規律良くするために生死という理や、生命を守るための理が創られた。

後に作られた飾りは、千古によってひとまとめに、【星】、【惑星】と名付けられたのであった。

そして、現在の活動範囲を地球のとある島周辺まで縮小し、これからは地球を中心に活動することにしたのであった…。

PART・4 天界の発展

惑星が出来てまた数百年……………

神様の数も増え、武志と理都にも【天照】アマテラス【須佐之男】スサノオ【月読】ツキヨミという三人の子供たちが出来た。尚、武志の能力で創られているため、実質の子供である。

「母さん、私たちの子供？も増えたことだし、そろそろこの空間を拡張して新たな拠点を創りたいのだが、いいだろうか？」

と、五人だとそろそろ手狭に感じてきたので、千古に問いかける。

「ええ。そうね♪何なら、この先のことも考えていつそ町でも作ってしまいましようか♪あ！町の外観については一任するわ♪あなたならセンスもいいし任せられるわ♪」

許可をくれると思いきや、街を創ろうと言ってきたよこの全能神BBAしかも一任って一番大変な奴だよ。

「いいのですか？」

「ええ。見た感じ地上はもう生物の活動が活発になっているし、ほら、あそこを見て。」

と、いきなり向こうに指をさす。その指の先には、

「なんだありや。あんなものを創った覚えはないけどなあ。」

そう。見るからに大きめの都市があったのだった。

「あれは【人間】というとても賢い生物が創ったと思われる都市よ。」

【人間】ねえ…よくあんなの作るなあ…。」

「まあ生物には住むところが必要ですからね。」

「ふん…賢いな…」

と、人間の知能について関心するのだった。

「とりあえず、あの都市については俺らの中から守り神でも派遣させるとして、町でも作ってくるとします。」

「ええ♪お願いね♪」

と、その場を後にし、そのまま町づくりを始めるのだった。

「外観は一任する…か…」

武志は千古から言われた町づくりのことについて考えているので

あった… そうこう考えていると…

「どうした？ 悩み事か？ 出来ることなら話し相手になるぞ？」

いきなり背後から理都が訪ねてきたのだった。でも丁度いいと武志は思い、

「理都か。そういえば、町を作るならどんな外観が良い？」

「えー、いきなり言われてもな…。」

まあ無理もないだろう。いきなり無理な質問を投げかけたのだから。

「あー、無理ならいいや…。」

と、最後まで言い終える前に、理都は、

「そうだな、やっぱりあの都市を元に、建物を全体的に低くして、高台か何かに俺らの家を作ってほしいね。」

と、希望を述べるのだった。

「分かった。その意見を参考にして町を作ろう。」

そういつて武志は拠点の外へ出るのだった。

くくく男神移動中… くくく

拠点から少し離れたところに来ると、

「とりあえずここに基準となる高台もとい俺らの拠点を作るか…。」

と、手を伸ばすと、枠が出てきて、少し手を捻ると、枠が実体化して、高台ができるのであった。

「先に周りの建物から作るか。」

といい、頭の中に建物を思い浮かべて、手を伸ばし、捻ると、次々と建物ができるのであった。

「こんな感じかな。」

と、いって、できたのは、今という和風な感じの住宅街に、4〜5階くらいの高い建物を作るのであった。

「次は拠点か。」

建物の時と同様のことを行う。これを暫く繰り返し、一つの大きめの町を創る。

「完成した〜！」

拠点ができるのであった。因みに、外観は、門は漆喰と朱い柱と瓦屋根で中華風に作り、建物と中庭は寝殿造を再現し、地下には、自分の地下実験場を作るのであった。

「早速千古たちを呼びに行ってみるか。」

~~~~『神様招集中…』~~~~

「遂に町が出来たのですね♪楽しみだわ♪」

「どんなものになったか楽しみだぜ。」

「ふふっ♪お父様の作った町、気になりますわ♪」

「ああ！本当にたのしみだぜ！」

「みんなの言う通りホントたのしみだねえ〜」

と、千古や理都だけでなく、自分の子供たちも期待してくれているのであった。

「到着しましたよ皆さん。」

「おお、すげ〜！」

見に来た一同からは感嘆の声が上がり続けるのだった。

町を案内しつつ、拠点に向かうと、

「すげえええ！ここに住むのかよ！」

「ホント凄い物作るわね武志♪」

と、皆から大絶賛されるのであった。

そして千古によつてこの世界は【天界<sup>てんかい</sup>】と呼ばれ、この町は中心部として栄えるのであった。家のある高台は、武志によつて【高天ヶ原<sup>たかまがはら</sup>】と名付けられたのであった。

PART・5 神使（神獣）を従えました。

神界ができて暫く経ったある日のこと…

「いや、しかし、こう、神々も増えてきたなあ。勿論、神々が増えるのはいいことなんだけど、仕事が増えてしまったなあ…。」

「はあ…。」

武志が大きなため息をつくとき、千古が入ってきて、

「大分お困りね？武志？」

「ああ… 神や生物が増えて、この世界に住みつくようになったのはいいが、仕事が多くなってなあ…」

そう。ここに住む神達は少しながらも増え。さらに下界にも生物や妖怪が増え、仕事が増えたのである。

「書類も多いが、なぜあんなに妖怪が増えてるんだよ…」

「妖怪とは、人間が理解を超える奇怪で異常な現象だったり、あるいはそれらを起こす、不可思議な力を持つ非日常的・非科学的な存在なのよ。」

「つまり、人間が生み出した存在って事か…」

「そうね。また、人間が妖怪を恐れ、その恐れをエネルギーとして増えたり強くなったりしてみたいなのよ。まあ、増えすぎないように貴方と理都で調整しているのでしょうか？」

「まあな。だが直接的なことをすると下界にも影響を及ぼすのさ。だから遠回しなことしかできない。」

そう。理都の理で数を増えすぎたりしないようにすることは可能なのだが、それでは下界の環境が大きく変わりがねない。だから地道にスサノオと狩っているのだが、それでも数が追いつかないのである。理都の理もあるにはあるが、微々たる数しか抑制できないのである。

「まあ、下界の連中も短期間であそこまでできるのなら、何らかの手は打つだろう。俺らにはこれ以上どうすることもできないしな。」

「成程ねえ… それで、話を戻すけど、貴方は仕事が多くて大変なのね？」

「そうだな。すっかり元の話を忘れてたな…。」

「そうだった。妖怪の話をしていたが、話の本題は仕事が多いって話だった。」

「なら、神使、もとい神獣を作るのはどうかしら？ここにいる神の中には作っている方もいるのよ？」

「そうなのか？」

「ええ♪例えば天照も神使を従えているのよ？」

「えっ、そうなのか！」

まさか身内にもいるとは思わなかった。そう驚いていると、

「神使はとても便利でね、ペットにするのもいいのだけれど、命令したらその通りの事をしてくれる子もいるみたいなのよ…♪」

(まじか… とても便利じゃん….)

「どうやって作るかとか分かるか？」

「そうね〜これは私よりも天照に聞いた方が早いかも。」

そういつて千古は天照を呼ぶと、少しして、

「どうしましたかお婆様？」

天照が速攻で来るのだった。

「天照、武志に神使の作り方を教えてやってくれない？」

「分かりました。」

どうやら了承してくれたようだ。天照はさっそく説明を始める。

「神使を作るのは簡単です。自分の血を動物に飲ませるか、自分の力を動物に宿させるかの二つがあります。最も、創造神であるお父様なら神使を自分で作るのもアリだと思いますが…。」

これはいい事を聞いた。だったら自分好みの奴を創ればいいじゃないかと。

「分かった。ありがとうな。」

「いえいえ。ところで私の神使を知りませんでしたか？三本足の鳥でヤタガラス八咫鳥というのですが…。」

と、言われるが、そんな鳥なんて見ていないので、

「いや見てないな…。」

と、言うしかなかったのであった。

「そうですか… あの子よく何処か行ってしまおうので… 見つけたらお願いします。」

「わかった。」

「分かったわ♪また見つけたら教えるわね♪」

「母さんもありがとうな。」

「いえいえ♪困ってたから助言してあげただけよ♪私は理都の所へ行つて神使について話してくるわ♪」

と言い、この場を去っていくのであった。

「神使かあ… とりあえず作つてみるか…。 とりあえず研究所に行くか…。」

~~~~~男神移動中~~~~~

「とりあえず大まかな案を考えるか。」

と、暫く考えると、幾つかの案が浮かぶ。

「やっぱリデカくてカツコよくて、せつかく作るならオンリーワンな奴にしたいな〜」

と、大体の案を思いつく。 以外にも彼は少年気質だったようだ。

「そうと決まれば話は早い。 とりあえず形を出そう。」

と、能力を使つて形を作る。 そんな手間を踏まずにいきなり作ればいいじゃないと思う方もいるだろうが、彼は動物… いや、命を作ることが出来ず、動物を作ろうとすると、動物の死骸が出来てしまうのである。

「出来た〜。 あとはこの機械を弄つて〜。」

そういうと何かの機械の数字やボタンを弄り始める。 因みに、この機械は、彼の作つた動物の形に命を吹き込む機械である。 何気に理都との共同作品である。

「よし…あとはこのボタンを押したら… カチッ」

ボタンを押すと、その機械から眩しい光が放たれ、すぐに消える。すると、そこには、

「ブルルルルッ」

頭は馬、上半身と手は筋肉質な人間の体。 下半身は蛇で、しっぽの先には大きなハサミが付いている、高さ4メートルくらいの怪物が出

で来るのであった。

「よーし、おい、お前は今から俺の神使だ。今からお前に神使としての名前を与える。」

「ブルルツ！ブルルツ！」

「嬉しいか。お前の名はユレイドスだ。キメラ・オブ・ユレイドス。いい名前じゃないか？」

「ブルルルル!!！」

と、目の前の怪物もといユレイドスは、喜ぶのであった。

「とりあえずお前にこれを与えよう。」

と、ユレイドスに一本の金ぴかの槍を手渡す。

「これは『進退の槍』。これを使えばあらゆる物を進化させたり退化させたりできるぞ。」

「ブルルルツ！」

「これはしゃべるようにさせた方がいいかなあ…。」

と、武志は内心思うのであった。

PART・6 神使の教育

前回の続きから……。

「さて、理都の所へ行って手っ取り早く言葉をしゃべることができるようになりますか。」

と、言つて、理都の所へ急ぐ。因みにだが、神使は神獣石という石にして持ち運んでいる。あんな巨体、この屋敷の中に入らないからだ。因みに、神獣石から元の姿に戻すのはとても簡単だが、使い方を間違えたら神使が消滅するから注意だ。

「理都いるかい?」

「どうした? 兄さん。」

「早速だけどこの子に俺らの言葉が話せるようにしてほしい。あと私達みたいな体になれるようにも頼む。」

と、言いながら、神使を召喚する。尚、私達みたいな体とは人間の体の事である。

「化け物みたいな神使だな……」

「とりあえず頭をあげなよ。兄弟同士堅苦しいのは嫌だしね。それで? 要は人間化してほしいのか?」

「ああそうだ。後でこいつには罰を与えておこう。」

自分の神使を貶された気がしたからな。

「言葉は構わないのだが、外観までは保証できない。それでもいいのか?」

「勿論。」

「なら早速始めようか♪」

と言うと、理都は呪文? を唱え始める。

「ルールを制定する。目の前にいる神使は人間になる。」

というと、神使ことユレイドスは淡く光り輝き、人間の姿になるのだった……が

「…… 凄い奴が出てきたな。」

「Oh……」

そこにいたのは馬のマスクを被り、手には槍を持ったガチムチの筋

肉質の男性が裸で立っていたのだった…。

「ご主人様、我にこのような力を与えてくださりありがとうございます！今後はご主人様のお役に立てるように精一杯頑張ります！」

「お、おう。これから俺の部下として頑張ってくれ。とりあえず、そのままなのもアレだからこれを着てくれ。」

そういって、武志は今でいう白のワイシャツと、黒のベルトの付いたストラップスそれから黒の革靴と、金のペンダントを出すのだった。「ありがとうございます！」

と言って、さっそく着替え始める。正直、目の前で着替えるのはやめてほしい。暑苦しいし、誰得なので。

「着替えました！」

「お、かなり似合ってるね。」

「ありがとうございます！」

「なろうと思えば元の姿にも戻ることができる。まあ、そのままの姿の方がいろいろ便利だろうが。あと、兄さん、」

「ん？なんだ？」

と、理都が問いかけてきたため、反応を返すと、

「元の姿に戻っても人間の言葉は喋ることができるようにしておいた。」

「そうか。ありがとう。」

これは嬉しい。これならコミュニケーションも楽になるからな。

「なら俺は戻るよ。こいつにも色々用があるからな。」

「分かった。また何か用があるならいつでも来いよ。」

「用があったらな。」

と言って、この場を去るのだった。

「さて、お前には私の神使としていくつかやってほしいことがある。頼めるか？」

「分かりました！何でもやりますよ！」

「ハハハ。それは頼もしい返事だな。ならこの紙に書いてあることを頼むよ。」

「はい。頑張ります！」

因みにその紙には以下のこと書かれていた…

1. 主が困っていることがあつたら手伝うこと
2. 一部書類の作成。判があるものは主に必ず持つてくること
3. 妖怪狩りの手伝い
4. 日々のあとがき担当

「分かりました！これらをやればいいのですね！」

武志「ああ。頼むぞ。」

「はいー」

武志に心強く暑苦しい、神使が出来た瞬間だった…

そして理都には後日、頭に矢が大量に降ってくるという罰を課したのであった…。

第二章 謎の古代都市 PART. 7 いざ古代都市へ

前の話から一週間後のこと…

「ちよつとみんなで話し合いたいことがあるから一時間後に本殿の会議室までに来てくれない？」

「いきなりだな…。分かったけど。ユレイドス。お前も来い。」

「分かりました！」

くくく 一時間後… くくく

「皆集まったわね？それでは第一回臨時会議を行うわよ！」

「一体何を話すんだ？」

「それは今から言うわね♪それは、あの例の都市についてよ。」

例の都市と聞いて心当たりがあるので聞いてみる。

「あの時に見つけた都市か…。？そういえば今はどうなっているんだ？」

「あそこは今、あれより遥かに成長しているわね。今では10階もある建物や、ここと同じくらいの広さの建物もあるわ♪」

「おい！ここよりも広いのか!?ただでさえ結構広いのによ♪」

「ええ♪それで、あそこの民は月読を崇めているわね♪」

「本当に嬉しいよねえ。私の像まで建ってるしねえ。ただ見た目は大分違うけどね。」

「それで、あの都市を誰か地上に降りて調査してほしいのよ。」
「成程な。」

ただこれ完全にスパイしに行く奴だな。まあ私達もそうだが、神達は死なない。ただ、私たちは一回休みと呼んでいるが、一回致命傷を負うと一定期間休眠して蘇るという事になるな。だから実際バレても安心してスパイしに行ける。

「なら私が行こう。それでいいか？」

「良いでしょう♪入るには月読の使者とでもいえばいいわ♪嘘はついてないし大丈夫でしょう♪」

おいそれ大丈夫なのか。まあ確かに嘘は何一つついてないけど。

「色々言いたいことはあるが、それで？何をすればいいんだ？」

「とりあえず何があったかの報告をすればいいわ。それを聞いてからまた考えるわ。」

「分かった。ならこの後行こうかな。」

「行つてらっしゃい♪元気でね♪」

「とりあえず、もう会議は締めてもいいですか？お婆様。」

「そうね天照。ではこれより会議は終わるわ♪皆解散ね♪」

こうして会議は幕を閉じたのだった…

「ご主人様… 下界に行かれるのなら私もお供しますよ…！」

「やめとけ。それより、俺がない間の仕事は任せた。」

ユレ「分かりました！ご主人様のいない間も頑張ります！」

武志「ああ。任せたぞ。なら俺はそろそろ行こう。じゃあな。」

ユレ「はい♪」

こうしてユレイドスは天界で武志の代わりを務め、武志は下界で暮らしていくのだった…。

「ここが下界かく。なんかテーマパークに来たみたいだな。」

武志が到着したのは都市から約500mくらい離れた森の中である。

「とりあえずあそこに門が見えるな。向かってみるか。」

~~~~「男神移動中…」~~~~

「止まれ。貴様は何者だ。」

「月読の使いだ。月読から文書を預かってきている。」

「そうか!?それは申し訳ない。今すぐ使いの者を呼ぶから待って下さい。」

「なんか申し訳ないな。」

「いいのです。月読様と言えば我らの崇める偉大なる神様です。そんな方からの使いを粗末に扱ってしまうのは失礼となってしまうのです。」

「へえ。好かれてるねえ月読も。」

「これはこれは月読様の使者様。こんな何もない街にお越しくださいり  
ありがとうございます。さあさあこれに乗って下さい。」

「ありがとうございます。」

こうして武志は送迎用の車に乗って町の中心部に向かうのであつ  
た……。

PART. 8 古代都市のもてなし

「この都市は本当にすごいな。」

と、車の窓の外を見ながら言う。景色もそうだが、沢山の人々が自分に向かって手を振ってくれるところを見ると、ちよつと誇らしい気分になる。

「そうでしょう！長い年月をかけて発展したのですよ！それに月読様の使者のために沢山の人が手を振ってくれてますぞ！」

「そういうば貴方はまだ名乗ってないな。名をなんというんだ？」

「おっと、まだ名乗ってなかったですか！失礼。私の名前は坂東魯鷓ばんどうろむと申します。肩書はこの国の大佐を務めております！」

（だったら俺も名乗るべきか・・・でも月読を知ってるなら俺の名前も知っているだろなあ・・・ここは話をややこしくしない為に偽名でも使っとくか。）

「私は洩神武疏もりがみたけると申します。一応貴方に合わせて肩書を言うならば、月読の配下の神だ。よろしくお願いする。」

「それはそれは！あ、そろそろ到着するみたいですね！」

「ほう、何処に到着する予定なんだ？」

「この国の首脳がいるところです。ほら、あの建物です！」

そう言われて窓を覗くと、とても大きな建物が見えるのだった。

「すごいな。彼処にこの国の偉いのがいるのか。」

「ええ、そうですよ！あ、もう到着しましたね！今所定の位置に移動するのでもう少し座っていて下さい！」

魯鷓と名乗った男はそう言うと、門を潜り、また車が進み始める。

そうして居るうちに、車が止まる。

「ささ、到着致しました！どうぞ足元に気をつけてお降り下さい。」

「ありがとう。」

そう言つて、車から降りると、そこには明らかに偉そうな男性と、その両隣にまたまた地位の高い所に居ると思われる2人の女性が居るのだった。

「ようこそ我が国へお越しいただきありがとうございます。私は

那珂の皇子。この国のトップでございます。そして横に居るのが、

永琳「この国の頭脳を担っております八意永琳と、」

サグメ「……稀神サグメです。よろしく願います。」

と、目の前の3人は自己紹介するのだった。

「これはどうも。私は洩神武琉。月読の配下であり、使者を任されている者だ。」

と、自分も偽名で自己紹介をするのであった。

「とりあえず、立ち話もアレだ。中に入らないかね？」

「そうですね。行きましようか。」

と、5人は中に入るのであった。

「ふむ、内装も割と整っているな。」

「ありがとうございます。ここの内装は私と八意が設計したものです。」

「へえ。あなた方がねえ……それはすごいものだ。」

そんな他愛もない会話をしていると、

「あ、この部屋です。どうぞ。」

「おっと。すまないな。」

大きめの応接室と思われる部屋に連れられるのだった。

「すまない。稀神、八意。お客様にお茶を淹れてくれないか？それと魯鷗、お前はこの部屋の前に立って関係者以外誰も入れないようにしてくれ。」

「分かりました。」

「御意。」

「……。」

と、三人は部屋の外に出ていくのであった。

「さて、前置きが長くなってしまったな。其方の要件は一体何でしょうか？」

「言いたいことは二つある。一つ目はこの文書を受け取ってほしいことだ。」

と、言い、出発する前に月読から貰った手紙（親書）を渡す。

「成程な。これは後で目を通しておこう。そしてもう一つは何でしょ

うか？」

「もう一つは…私を暫くの間この国に滞在させてほしい。無理なら断っても構わないのだが…。」

「いえいえ！滅相もない！心から感謝申し上げます！是非滞在して下さい！！」

(あくなんか申し訳ないなあ)

「そうか。なら住居はどうすればよいかな。」

その時、ドアが開いた音がする。

「すみません。お茶をお淹れしました。」

「そうだ！八意、この方を貴方の家に泊めることはできるか？」

「えっ!?それは…いいですけど…。知らない男性を家に泊めるなんて…。／／／」

「あく、八意様の家に泊まればよいのですね？」

「…そつ、そうだな！八意、長い間にはなるがよろしく頼むぞ！」

「は…はい…」

永琳は終始赤くなっていたのであった。



## PART・9 居候も楽じゃない

前回の話の翌日…

「ふああ… おはよう…。」

「おはよう。武琉。」

「八意様朝早いですね…。」

そう。天界は時間の概念が下界と異なるため、現代でいうところの時差ボケを起こしているのであった。

「早いも何ももう9時よ?」

「はいはい…。」

そうして目覚め、遅めの朝ご飯を食べる。

「このご飯は美味しいな。こんなご飯を食べるのは初めてだ。」

「そういつてくれると嬉しいわ♪さあ、どんどん食べなさい!」

そういうやり取りを続けること約20分…

「ギブギブ… さすがに無理だ…。」

「あらくもう音を上げるのね♪天界の使者も大したことないわねえ〜」

「いや、流石に扱いが荒すぎますよ…。」

「でも那珂様から、「あの使者の扱いは自由に任せる。」と言われたからね♪ここに住むからには、ここの常識や仕事に慣れてもらうわよ!」

「ハハハ…。」

と、永琳のドSっぷりを見せつけられ武琉は困惑するのだった。

「ところで、貴方は普段、一体何をやっているんだ?」

「そうね… この国の頭脳として、日々色々な薬の実験や開発を行っているわ。」

「へえ〜、なら他の人は一体何をなさっているんだ?」

「そうね… 那珂様はこの国を治めていますし、サグメはと同じ頭脳として、私の元で頑張ってくれているし、魯鷓様はこの国の軍隊を指揮しておられるわ。」

「へえ〜。皆色々仕事をしているのはこっちでも同じなのか…。ところで私にもできることはあるのかな?」

「ん〜、幾つかあるけど、とりあえず私の護衛をして下さらない？ここ最近治安が悪いのよ。」

「問題ない。これでも下界…。いやこの地上の妖怪を倒す仕事をしていたからな。」

「なるほどねえ…。なら軍の教官になるのもアリね…。まあとりあえずは先ほど言った護衛をしてね。」

「分かった。貴女を必ず敵から守る。」

「頼りにしてるわね♪」

こうして武琉はこの国で永琳の護衛という職を手に入れるのだった。そして、武志はふと思ったことを聞いてみる。

「そういや、そのサグメって人、喋らないけど何かあるのか？」

「あく、あの子の能力のせいね。あの子は【口に出すと事態を逆転させる程度の能力】を持っているのよ。」

と、答えるのだった。それを聞くと武琉に一つ心当たりが思い浮かぶ。

(待てよ…。そういえば昔に、神として天界に來たはいいけど、理都の怒りを買ってぼこぼこにされて地上に追放された奴がいたな…。確か天探女アメノサグメとか言ったっけな…。名前的小おそらく同一人物だろう…。まあ面識はないから身分がバレる心配もないだろう。)

という事を思い出していたのであった。

「どうしたの？」

この一言で武琉は現実に戻る。

「いや大丈夫だ。それより何かあったのか？」

「いいえ。何も無いわ。」

「分かった…。それより貴女や他の人も何かそういった能力を持っているのか？」

「ええ♪私は【あらゆる薬を作り出す程度の能力】。魯鷓は確かそのような能力はなかったはず…。那珂様は【結界を操る程度の能力】だったと思うわ…。そういえば貴方は何か持ってるの？」

武琉にいきなり問いかけられるが…

(これは俺の能力は答えない方が良いかな…。)

「いや私は特に能力はない。まあ低級の神から仕方ない。」

「そうなのね……。なら今から本格的に働いてもらおうよ♪さあまずは記念すべき一つ目の仕事！この薬を飲んでみた感想を言いなさい♪」

と、薬の入った透明な小瓶を渡されるが、色がどう見ても口に入れたらアウトな色をしていた。

(いやこれ飲んだら大ダメージな奴だろ……。でも飲まなかったら殺されるよな……。仕方ない飲むか……。)

武琉は小瓶の蓋を開けて薬を一气飲みする。

「どうかしら?」

うむ。やばそうなのは色だけだったか。特に効果もないみたいだし感想を言おうとした瞬間、

「大じようB……グハアツ！」

いきなり武琉は血を吐いて倒れたのだった。そして武琉は1週間寝込み続けるのだった。

因みにあの薬は元々は新型の麻酔薬だったらしい。のちにあの薬は劇毒として使用されることとなるのであった……。

PART・10 従軍しました。

前回の話から数年たったところの事。

「ちよつといいかしら。武琉。」

「ん？なんだ？」

「ちよつとこのチラシを見てほしいのよ…」

「どれどれ…」

そこには大きな文字で、

従軍希望者募集中

と、書かれていた。

「これに参加しろというのか？」

「そうよ。察しが良くて助かるわ。」

と、永琳は言うが、下に読み進めていくと、

希望者の職種、年齢、性別は問いません。テストに合格すればすぐに従軍できます。出来が良ければいきなり隊長クラスになることができるかも…！

と、書いてあった。それを見て武琉は…

(テスト後いきなり隊長で…責任重大すぎだろ…)

と、心の中でツツコミを入れるのだった。

「で、どう？出る？」

「ああ。勿論出るさ。」

「そう♪なら頑張つてね♪」

実際の話、永琳の警備は侵入者も少なく、特に目立ったこともしないので、薬の実験台にされる方が多かったのである。その現実を打破するために武志は参加するのであった…。

「あ♪言い忘れていたけど、軍隊は週休二日制だから、仕事のない日は私に付き合ってもらおうわよ。」

「え…まじかよ…」

合格しても打破することができない事にショックを覚える。しかも参加すると言った手前、今更やめることもできないので仕事が増えるだけである。やめたら永琳に殺されそうだしな。

「何か言ったかしら？」

と、物凄い真つ黒な笑顔で微笑んでくる。

「い…いや？気のせいじゃないかな？」

と、この永琳の黒い顔にはさすがの武琉もビビってしまうのだった。

くくく一週間後くくく

「遂にこの日がやってきたよ…。」

「そうね♪応援してるわ♪」

「…私も。」

そう。今日は待ちに待った従軍テストの日。武志はこの日を楽しみにすることもなくただ早く終われと祈るばかりだった。

「テスト参加者の方は10分後に三号館手前に集合してくださいー」

「じゃあ行ってくるよ。」

「頑張ってるね♪応援してるわ♪」

「ハハハ。嬉しいねえ」

と、言い残して集合場所へ向かう。

「はい。テスト参加者の皆さんこんにちは。坂東魯鷗と申します。位は大佐です。今日は皆様にテストのご案内を申し上げます。まず最初のテストは、組み手をしてもらいます。ゼッケンの番号が同じ人を探してください。」

「あ、あの人かな…？」

そこには人相の悪い、どう見てもヤのつく見た目の人が立っていたのだった。

「すみませくん」

「おう、どうした。もしかして兄ちゃん、あんたが俺の相手かい。」

「そうだ。今日はよろしくな。」

「よろしくな。兄ちゃんよお。」

と、二人は握手をするのだった。

放送「それでは相手は見つかりましたか？それでは第一試合と第二試合を同時に行います。Aコートにゼッケン1の方、Bコートにゼッケン10の方どうぞー」

私たちが10番のようだ。Bコートに向かおうか。」

「おっ、そうだな。」

二人はBコートへ移動するのだった……。

「それではBコート第一試合を行います！右は八意様推薦、八意様専属護衛の洩神武琉！左はこの国一番の力持ち、やまてるとし耶摩輝利！」

「兄ちゃんはあるの八意様の専属護衛だったのか！これは燃えるぜ！」

「この国一番の力持ちってすごいな。私は力はあまりないから羨ましい。」

「それではお互い見合って……… ファイト！」

「先手必勝……！」

開幕いきなり耶摩のストレートパンチが飛んできたが、

「ふっ……！」

これを見事のない方法でしゃがんで避ける。そして、下からアツパーを入れる。

「これくらいで終わると思うなよ……！」

なんとアツパーを掴まれ、そのまま投げられてしまう。しかし、華麗に着地して、

「やっ！ はっ！ やっ！」

連続ストレートを決める。そして、

「とどめだー！」

数々の侵入者を一発K.O.した技、一歩間違えば首の骨を折る大けがをする技を決める。

「ぐぼはあ……!!」

「勝者！洩神武琉！」

と、武琉の勝利で終わるのだった。しばらくして、第一テストが終わるのだった。

「第一テストを通過した皆さんありがとうございます。第二テストは射撃のテストです。ターゲットとなる的が動くので、当ててください。正確さと時間で評価します。」

射撃か。これなら得意だから取りたいものだ。

「それでは銃とを皆さんに配ります。弾はマガジンに8発入るので、

弾数には注意してください。」

と言われ、拳銃を配られる。

「それでは一人ずつ行ってください。ゼッケン1番の方からどうぞ」

しばらくして、自分の番が回ってくる。

お待たせしました。ゼッケン10番の方どうぞ

と言われ、会場に向かうのだった。

「それではマガジンを配ります。それでは頑張ってください。」

と言われ、リロードして構える。

スタッフ「それではスタートです！」

バババババババン！ カチャリ ズバババババババン！

という具合に、目にもとまらぬ早打ちで、しかもターゲットを全員ヘッドショットで満点を取るのだった。

スタッフ「終了です！向こうの方に向かってくださいーい」

といわれ、移動する。その先には、

面接会場

と、書かれていたのだった。

「どうぞ。それでは面接を行うので、準備が出来たら入って下さい。」

「分かりました。」

と、言われ、ノックをしてはいる。

「失礼します。」

「はい。名前言ってから座るのネ。」

「洩神武琉です。」

そういつてから、用意された椅子に座る。

「最初の質問だけど、どうして従軍しようと思ったんだい？」

「はい。軍に入って、この国を妖怪から守るためです。そして八意様に限らず、多くの人の笑顔のために頑張りたいからです。」

「成程ネ。なら次で最後の質問だけど、貴方は今まで八意様の護衛をしていた訳じゃないのネ？その時の仕事の感想と、なぜそれを蹴ってここに来たのか教えてほしいのネ。」

「八意様の護衛をしていた時は、侵入者を捕まえたり、八意様の雑用を

やっています。私は誇らしかったですし、手伝った研究が世に評価されたこともありました。このテストも八意様の推薦で来ました。彼女曰く、貴方ならやれる」だそうです。」

「成程ネ。確かに八意様から推薦頂いてるのネ。」

「それと、先ほどのテストの結果。おめでとう。合格だ。」

「それと貴方みたいな方は滅多に居ないのネ。隊長として1週間後から来てほしいのネ。」

「おめでとう。洩神君。君の活躍を楽しみにするよ。」

そう。武志は隊長クラスとして、入軍するのだった。



## PART. 11 はじめてのおしごと

「武琉ー！起きなさいー！」

朝から永琳の怒鳴り声が家に響く。

「ああ… 今日から軍隊で仕事をするのか…。」

本来ならまだ寝ている時間だが、軍の仕事が今日からなのを思い出し、起きる。あと、ここで起きないと永琳に殺されるから起きなければならぬ。

「全く… 貴方はそろそろ一人で起きたらどう？ 今日だって軍隊の仕事が初日でしょ？ 初日から遅刻とかいろいろOUTよ？」

「はい… 起きる努力はします。」

ここで反抗するとまた殺されかねないので素直に反省する。そんなやり取りを行いながら朝ごはんを食べる。

「なら行ってくるよ。」

「フツッ♪お仕事頑張ってるね♪」

と言い、仕事場である軍事基地に向かう。

「おはようございます。」

「おはよう。確か貴方は今日からの新入りですよね？」

「はいそうです。隊長に任命された洩神です。」

「ああ、あの大佐大絶賛の方ですか。おっと、ここで立ち話をするのもアレだ。そろそろ向かった方が良いでしょう…。そうだ。大佐から、一号館の二階に来るようにとのことだ。すぐに行った方がいいだろう。」

「ありがとうございます。」

入口を見張っている監視員と他愛のない会話をして、一号館の二階に向かう。

（大佐がお呼びか〜一体なんだろうか。）

そんなことを考えながら足早に向かう。

『隊長移動中…』

「お呼びですか大佐。」

「おお…！これはこれは… 洩神様。お久しぶりでございます。さ

さ、どうぞこちらにおかけください。」

「いやいや。いいですよ。貴方の方が立場は上ですから。」

「いえいえ。こちらの世界になじんだとはいえ、貴方は月読様からの使者なのです。そんな風には扱いませんよ。」

と、いつの話かも分からないことを言ってくる。正直、自分が元使者だつてことをすっかり忘れていた。まあ、もうこの都市の人間なのだからそんな扱いはいらぬが。

「そうか…。まあ勝手にしてほしいですが…。それより大佐、ご用件は何でしょうか。」

「おつと。すまない。貴方が指揮する部隊の紹介をしようと思つてな。こちらについてきてくれないか？」

「分かりました。」

「なら行きますぞ。」

そう言われ移動すること数分…。

「この扉の向こうに貴方が指揮する部隊がある。人数は平均的な30名。そしてそこそこの実力を持つ優等生集団さ。」

と言われるが、武琉はとある言葉に引つ掛かる。

「えつ、新入りである私にそんな優等生集団を任されてもよいのですか？」

「おいおい、そんな卑屈になるなよ。私は貴方の才能に投資をしているんだ。貴方ならこの集団を任せることができるだろう。頑張れよ。」

と言われた。そんなやり取りをしていると、

「おつと、こんなところで立ち話をするのもなんだ。とつとご対面と行こうじゃないか。」

と言い、扉を開けると、そこには兵士たちがきれいに並んで待っていたのだった。

「今日からお前たちを指揮することになった洩神武琉だ。よろしくな！」

と、軽い自己紹介をすると、

「ハイ！」

と、威勢の良い返事が返ってくる。

「洩神様は本日着任された方です。まだわからないことだらけだと思うのでそこは貴方達でフォローしてあげてください。」

「それでは私はここでお暇するよ。規律に違反さえしなければどんな訓練や考え方をしたって構わない。それではこの隊の健闘を祈るよ。」

と、坂東大佐は去っていくのだった。

「それではお前たち、点呼を取りつつ名前を覚えていくから、名前を呼ばれたら返事しろよ！」

「ハイ！」

「ハハッ！いい返事だな！それを維持できるように頑張れよ！それでは点呼を始める。………」

と、一人ずつ点呼を取っていく。

「点呼終わり！これで全員だな？」

「ハイ！」

それでは早速訓練を始める。とりあえず装備を付けながらフル馬拉ソン42キロ走れ！だいたいこのコースを7周だ！

「ハイ！」

と威勢のいい返事だけ返ってくるが、兵士たちの顔は青くなっていた。

そしてマラソン中……。

「そー！へばるな！おい！お前は吐くなら隅で吐け！」

と、典型的なスパルタ式トレーニングをするのだった……。

そこに一人の女性を通りかかり、こう聞いてくる。

「あそこで走ってるのは貴方の部隊の方々ですか……？」

「はい。そうです。」

「あんなに苦しそうなのになぜそこまで走らせるのですか？しかも装備を付けて。」

この国の装備は戦国時代の兵士が着ていた服装に近い。そう問われると、

「そうだな……単純なスタミナ増強というのもあるが、実践では装備

を付けて走るだろう？トレーニング用の服でやっても体が付いていかないのさ。それに慣れさせるために装備有で走らせているのさ。」

そう。要は実践を意識した訓練をさせているのだ。鎧を付け慣れていない状態で動いて変に転んだらケガもするし、敵がいたら隙をつかれて殺されてしまう。だから鎧を付けている状態で体を動かすことに慣れさせているのだ。

「へえ……。無理はさせないでくださいよ？」

「分かっていますよ。この後休憩させるつもりです。」

と言いつつ、軽く会釈して女性はこの場を去っていく。そうして、兵士たちが次々に走り終えてその場にダウンしていくと、

「お前らーこのくらいでへばるとは何事だ！まあいい。とりあえず30分自由休憩。30分後ここに集合だ！解散！」

先ほどの女性に休憩させると言ったからには休憩させようと考えた。そうして、休憩中に次の訓練を考える。そして休憩が終わると、「次はお前たちの腕を見たい。と言う訳で俺と勝負だ！武器の使用は許可するが、味方には当てないようにしろよ？」

「ですが隊長は……？」

「俺のことは心配するな！さあ！来なさい！」

と言いつつ、8人くらいが後方から弓を構え、残りが特攻してくる。

「君はまっすぐ来すぎだ！」パコン！

「君はもうすこし相手の動きを見るとよい。」バシン！

と、素手で撃退していく。そうして3分もしないうちに残り五人になった。

「さあ……。来なさい。ええと、確か……」

「私は大鹿美晴です！」

と、長い剣を持った女性は名乗り、

「僕の名前は一ノ瀬世界」です！

と、銃を構える兵は名乗り、

「俺の名前は山本比呂士だ！覚えとけよ！」

と、大剣を持った兵は名乗り、

「私の名前は勝馬純平でございます。」

と、盾にハンドガンを持った兵は名乗り、

「僕の名前は華田翔はなだしろうです！」

と、槍を持つ兵は名乗った。

「わざわざ自己紹介ありがとなーだが戦場ではそんな悠長に喋っている時間は無いぞ！」

と、銃。見た感じ旧式のスナイパーだろうか。を持っている一ノ瀬との距離を一気に詰める。

パシン！ カキン！

「くっ…」

「君は敵の動きを見て距離を取ろうね！」 パコーン！

と、まずは一人ダウンさせる。

次に勝馬に詰め寄り、攻撃をすると、横から華田が突っ込んでくる。

「君は横を取るのには素晴らしいが、油断はしないようにしようね！」

と言いつつ、攻撃しようとする。

「させませんよ！」

と、山本が妨害を入れてくるのだった。

「連携は素晴らしいね…でもまだ甘い！」

と言いつつ、また華田に詰め寄り、盾をはじくと、そのまま一撃を入れる。

「君は盾に頼りすぎない！そのハンドガンは飾りか？」

「ぐっ…」 ドサツ

山本「おらああああ！」 ドーン

と、山本がすごい勢いで一撃を入れるが、それを避ける。

「一撃の威力はすごいけどそれだと隙が大きいから気をつけようね！」

と、カウンターの一撃でダウンさせる。

「覚悟です！」 カキーン！

大鹿が素早く剣を振ってくるが、避け続ける。すると横から、華田が一撃を入れてくる。

だが、大鹿は一瞬仲間が来て油断したのか慢心したのか隙を見せた。それを狙ってカウンターを入れる。

「その一瞬の隙が命取りだよ！」　パシン！

そして勢いで華田に詰め寄り、

「君も相手の動きは見ようね！」

と、言い残してダウンさせる。

「やりすぎたかな…。」

と、30名の兵士が気絶しているのを見て眩くのだった…。

PART・12 月移住作戦 〈Operation・ITM〉 (計画編)

前の話からさらに10年の月日がたち、武琉の部隊はエリート軍団と言われるほどになった。そんなある日、とある会議が開かれた。

「コホン！本日はお集まりいただき誠にありがとうございます。今回は秘密裏に計画していた作戦を軍の皆様にお伝えしようと思います！それでは、皇子様、どうぞ。」

「皆様。最近の地上は穢れが多く、とても危険であります。そこで、あの穢れなき月にこの国の国民全てを移住させようと思うのです。その名も、月移住作戦だ。」

そういった瞬間、会議の参加者である隊長クラスの人間たちがざわめく。そして永琳が口を開く。

「作戦の概要はこうです。民間人を十台の大型ロケットに分乗させて、先に順次飛ばしていきます。この時、東西南北で外からの穢れ共の侵攻を食いとめます。それで、民間人を乗せたロケットが飛び次第、残りの軍隊を後退させてロケットの方まで避難させます。そして、最後のロケットを飛ばして月に移動します。これがこの作戦の大まかな流れです。ここまでで質問がある方はいますか？」

特に誰か質問をする様子もない。つまり肯定という事だろう。それにしてもし力のない者から先に逃がすという作戦は永琳らしいやと思う。

だが、説明は続くようで、

「防衛についてですが、先ほど東西南北と言ったのは、穢れ共がその四方向から来るためです。偵察班曰く、南から穢れの大軍がくるみたいよ。つまり南側が激戦区予想ね。」

「ええ…マジかよ…。」

「おいおい…大丈夫か…」

と言った声が漏れてくる。すると坂東大佐が、

「それで防衛なのですが、今までの班は統廃合して、民間人を誘導する

二つの小隊と、東西南北で四つの大部隊を結成します。まず東側だが、中佐殿いけますか？」

と、白く長いひげを伸ばした男が立ち上がる。

「分かりました。」

「西は勝馬。行けるか？」

「なら精一杯頑張らせて頂きます。」

「大激戦の南だが……洩神。お前に任せた。」

「はい。承知致しました。」

「そして北は私が直々に指揮をしよう。そして、少佐殿、那珂様とお二方で民間人の護衛を行ってほしい。」

「ハイ。那珂様と一緒に任務に貢献出来て嬉しい限りです！」

「ハハハ……頼りにしてるよ。」

と、それぞれの役割が決まった。

「これで最後になりますが、飛び立った後、二発の原子爆弾を軍人が乗ったロケットから落とします。これは穢れ共に対しての最後の抵抗です。そのため決して乗り遅れた人がいないようにしてください。」

「それでは今日の会議はここまでとする。大佐殿、あとは任せましたよ。」

「分かりました。それでは皆様、今日は解散とします。明日、部隊について紙を配りますので、隊長の方は人数分貰ってください。それでは、解散！」

と言われ、永琳と合流する。

「永琳。お疲れ様。」

「あら武琉。そっちこそ南の防衛線頑張つてよ。」

「ああ。勿論頑張るさ。そして月に行こうじゃないか。」

と言うが、内心は、

「ごめんな永琳。その約束は叶えられそうにないんだ……」

と、思っているのであった。

運命の日まで一か月。



PART・13 月移住作戦 〽 Operation  
n・ITM〽 (実行編)

そして前回の会議から一か月がたち、ついに例の計画Operationを実行する日がやってきた。

時は雲一つなき静かな夜。大体20時頃。場所は国の南側、南正門の前。そこに武琉達は陣取るのだった……。

「いよいよですね……。」

「ああ……。妖怪が攻めてきたら中央で合図を送るらしい。それが開戦の合図だ。」

そこにはかつての仲間ですらに優秀であった勝馬以外の四人がいた。武琉は振り返ると、

「いいか！全員生きて月に行け！」

と、周囲に聞こえる大きい声で言うのだった。すると、

「ん……。あれは……。」

武琉「妖怪だな。しかも情報通り大軍で来ているな。だが、まだ攻める時ではない。合図が来てからでないと陣形が変に崩壊する危険がある。」

そういつて、少しの間見つめてみると、

パシユーーーーーン！ ボーン！

という爆発音が聞こえる。おそらく合図だろう。だから武琉は部下たちに、

「皆、出陣だー！生きて帰れー！」

「オーーーーー！」

と言う掛け声と共に防衛線が開始したのだった。

カキン！ チャキン！ バーン！ ごらあ!! ドカツ！

兵士たちの掛け声や叫び、鉄砲の音、刀などの金属がぶつかる音が鳴り響き、それまで静寂を保っていた一帯は一気にうるさくなった。

「どりゃー！」バーン

武琉も、永琳たちや軍の技術部が開発した新型兵器を手にして戦う。因みに、現代でいうショットガンの事だ。

武琉「永琳たちが開発したという新武器はやっぱり強いなあ！敵が一撃で吹き飛ばねえ！」バーン

実際、引き金を引くと、妖怪たちが声を上げる暇もなく吹き飛んでいく。武琉は後方で支援するだけではなく、前衛で兵士たちと一緒に戦いを繰り広げていた。

「はっ！」ズバツ！

「ぐわーっ！」

「グギャー！」

「うわーっ！」

と、一人の兵士が妖怪の鋭い爪で攻撃されそうになるが、  
チャキン！

「早く後退してください！」

「ありがとうございます！」

男鹿が素早く割り込んで、爪を刀で受け止める。兵士が後退するのを確認して、爪をはじき、とどめを刺す。

「キシシ…！」

裏を取ろうとしていた妖怪がいたが、

「おっと、裏からは進ませませんよ。」バーン！

「キヤーー！」

裏を取ろうとしていた妖怪の眉間に綺麗に弾丸が的中し、その妖怪は倒れる。

「ギャー！」

「ギュー！」

「ブギャーッ！」

妖怪たちが一気に薙ぎ払われている。その中心には、

「ハッハッハ！妖怪たちも大したことないなあ？一斉に吹っ飛んでいきやがる。」

と、大剣を振り回す山本の姿があったのだった。

その後ろに、とある妖怪の姿が見える。その妖怪は鎌を振りかざそうとすると、

「しまっ……」

山本は気づくが、すでに遅かったと思われたが、

「させませんよ。」ブスッ！

その妖怪は華田の槍で貫かれ、振りかざそうとした鎌もダランと垂れる。

「戦場では常に慢心をしない。これはいつも武琉様が言っていることじゃないですか。」

「すまん…… 完全に見くびっていた。助太刀ありがとな……。」

そうこう戦っていると、放送が流れる。

『民間人と護衛隊の避難90%完了。南側以外の部隊は速やかに撤退を開始してください。南側の部隊はもう少しの間辛抱してください。繰り返します。民間人と……』

という放送が流れると、武琉は、みんなに聞こえる大きな声で、

「聞いたか！皆あともう少しの辛抱だ！耐えて絶対に皆で月に行くぞ！」

「オー……！」

と、言うのだった。皆も家族や友人など、守りたいものがあるから戦うのだ。そして武琉の一言で部隊の士気は上昇する。すると、

「くらえ！」

と、奇襲攻撃を仕掛けてくるが、

「甘い！バーン

至近距離でショットガンをぶっ放すのだった。そして、妖怪の上半身は木っ端みじんとなる。そのようなことが数分続くと、

「こちら西側。避難完了しました。」

「東側避難完了しました。」

「北側撤退完了であります。」

という声がトランシーバー越しに聞こえる。すると、

「他の門の避難完了。南側も大至急撤退を開始してください。」

「皆！門に向かって走れ！」

その声で一斉に部隊が撤退を開始する。武琉は近くにいる華田に、「全員の撤退が完了したら合図をしてくれ。そうしたら私が撤退するから門に入り次第すぐに閉めろ。」

「隊長はその間どうするのですか!」

「なに、少しの間時間稼ぎをするだけだ!すぐに戻る!」

と、言い残して駆けていく。妖怪たちは逃げていく兵士達を追いかけようとするが、

「くたばれえ!」バーンバーン

そう言いながらショットガンを妖怪たちに乱射する。妖怪たちは奇声を発して武琉に攻撃しようとするが、

「これでも喰らえ!」【拡散ガトリングバレット】

バラバララララララララララララララララララ!

そういうと、自分の能力でタレットを設置し、一斉掃射する。勿論、巻き込まれた妖怪たちはハチの巣状態になって地に伏せている。そうして時間稼ぎをしていると、合図の信号弾が打ちあがる。すると、武琉は周りの妖怪達を振り払って、手の上にお手製のフラッシュグレネードを出して足元に落とす。そして武琉が走り出すと同時に、パシューーン!

周囲にフラッシュが起こる。妖怪たちは視界を奪われてその場で眩しそうにしている。そうして、武琉は門までたどり着き、門が完全に閉まる。

「大丈夫か華田!」

「全員大丈夫です!」

と返してくる。武琉は全員無事でよかったと思う。

兵隊長お疲れ様です!」

と、兵達は敬礼をしてくる。

「さ、感動の再開は後回しだ。ロケットに向かうぞ!」

「はい!」

その一声で全員は大急ぎでロケットに向かう。

「武琉... 遅いわね... 無事だといいのだけど...」

永琳は武琉が来るまで待っていた。すると、無数の走ってくる音が

聞こえてくるのだった。その方向を見ると、

「あれは南側の部隊… という事は武琉も…！」

南側の部隊がこちらに向かって走ってくる。そして永琳は一人の男を注目する。その男は…

「武琉…！」

そう。武琉だった。これには永琳も、

「やっぱり武琉はいつになっても変わらないわね…♪」

そうして南側の兵士たちもロケットに入っていく。

「誘導お疲れ様。永琳。」

素晴らしいながら永琳とロケットに入る。

「貴方こそ♪お疲れ様♪」

扉を閉めようとしたその時、門が壊されて妖怪たちが入ってくる。

「おいおいまじかよ…。」

武琉は急いで扉を閉めようとするが、遅かった。見るからに重たそうな妖怪たちがロケットにたどり着こうとしていたのだった。勿論、ロケットにしがみつかれたら重量オーバーで飛ばないだろうというのは確実だった。そのため、

(仕方ない約束は破るけど背に腹は代えられん…！)

この時、自分は決心した。友を、この国の仲間を守るため、

「永琳すまん。皆によろしくと伝えてくれ。」

「…え？」

閉めようとした扉を開け、外に降りる。そして扉を閉め、開閉スイッチを破壊する。そう。武琉は自分を犠牲にしてこの国の仲間を守ろうとしたのである。そして閉まった扉をたたく音が聞こえ、

「ちよつと〜！武琉〜！開けなさ〜い！」

そう。永琳がドアを叩いているのだ。

「悪いな。永琳。俺は元々この大地の神様であり、やっぱり月に行くわけにはいかないんだよ。だからお前らだけで行け！これは宿命だ！」

永琳「ふぎけないで！そんなの嫌よ！それが宿命でも何でも、そんなのは関係ないわ！」

「すまないな。永琳。」

少し間を開けて、

「またいつか会う時があれば、その時は一緒に酒を飲もうじゃないか！」

最後の別れになるのなら、せめて笑顔で送ろうと考えたのであった。

「嫌よーここを開けなさい！」

だが、ロケットは発射準備を終え、飛び立とうとしていた。そして、カウントダウンの声が聞こえだす。

5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・0

永琳「嫌〜！武琉く〜く〜く〜!!!」

と、永琳の大きな悲痛の叫びと共にロケットは飛び立つのだった。それを見送ろうとすると、妖怪がロケットにしがみつこうとするが、

武琉「させるか！」バーン

形見なのか分からないが、先ほどのショットガンを撃つ。

その妖怪はロケットに届くことは無く、弾き飛ばされて地に伏せたまま動かなくなる。

そして、ここから武琉の孤独な戦いが始まるのだった。一方、永琳は、

「ぐす・・・」

永琳は泣いていた。最愛の友を失ったことがただ悲しかったのである。

「武琉・・・今までありがとうね・・・」

と、遠くなつていく地球に向かって武琉にお礼を呟くのだった・・・。そしてこの日、永琳は、出会いがあるから別れがあることを知ったのである。

PART・14 創造神の孤独な闘いと帰還

ロケットが発射した後も、武琉は地球に残って妖怪と孤独な戦いを繰り返していた。

「喰らえ！」 バァン

「ギャー！」

武琉は作戦で使用していたショットガンで応戦していたが、

「あーもうキリがない！数が多すぎるんじゃない！」

倒しても倒しても数が全然減らないため、苦戦する一方だった。すると、一匹の妖怪が後ろから武琉を攻撃しようとする。

「キシヤーー！」 ザシュ！

「カハッ！」

一人で何時間も戦っていれば疲労もたまるだろう。武琉は敵の攻撃に被弾してしまったのである。

「くっ… まだここで死ぬわけにはいかん！」

因みにだが、武琉は死ぬことは無い。死んだら力が大幅に減って蘇るだけである。勿論老衰で死ぬこともない。実質的な不老不死である。だが、そんなことは知っていても死ぬことは嫌なのである。

「ここで死んだら永琳たち仲間にも申し訳がなくなる…！」

「俺は…！死ぬわけにはいかないんだ！」

すると、周囲に変化が起こる。妖怪たちは次々と木っ端みじんになり、周辺の地形が壊れ始め、火が付いているところもある。

武琉は突然の状況に困惑した。すると突然、頭痛がしだし、武琉の頭の中にとある文字が浮かんでくる。そしてそれはこう書かれていた。

【万物を破壊する程度の能力】

「これは…俺の新しい能力か…？」

そう。これは武琉の言う通り新しい能力である。すると武琉はとあることを思い出す。

「そういえば千古がこんなことを言っていたな…。確か、」

~~~~~

「武琉、理都、貴方達には二つの能力があることを知ってるかしら。」
「いや。知らないな。」

「同じく。」

「そう。なら教えてあげるわね。貴方達には正の力と負の力があるわ。正の力は皆を助けたり、笑顔にしたりする力でまあ、貴方達が普段使用している力ね。負の力は民を苦しめたり、怒りとなって表れる力ね。」

「それって自由に扱えるのか？」

「いい質問ね♪正の力はいつでも使えると思うけど、負の力はとある事がキツカケとなって使えるようになるわ。一度キツカケを掴めばあとは自由に使えると思うわ。」

「そうか。」

「あと、その力を使い分けることも可能よ♪姿を変えたりして、この時だけ正の力！なんて事もできるわ♪それと大体の負の力が正の力の反対になってることが多いから。ある程度は予想できるかもね♪」

「そうか。ありがとな。」

~~~~~

というやり取りを脳内で思い出す。

「つまりこれが俺の負の力ってことだな！暴れ倒してやるか！」ドカーン

そういつた瞬間、周辺が爆発したりして、一瞬で地獄絵図となる。もう武琉に歯向かってくる妖怪はあまりいなかった。すると、空から落ちてくる物体を見つける。

「何だあれ… あつ、原子爆弾か！」

武琉は計画で話していた原爆について思い出す。

「ならあれが落ちる前に帰還しないとー！」

そうして、足元にテレポーターを出現させる。

「さらば下界ー！」 シューンー！

こうして、武琉もとい武志は下界から脱出するのだった。そしてその直後、爆弾が着弾し、周囲に大きな爆発が発生するのだった…。  
「ただいまー」



「お帰り武志く♪お疲れ様く♪」

「やめろよ母さん。この年になつてみつともない。」

久しぶりに帰還したからなのか、千古のテンションがラブラブの夫婦並みで少し困る。

「それで、ある程度は下界から見たけど、どうだったの？なんか物凄い大爆発が起こってたけど…。」

「ああ、下界には下界なりに楽しい生き方をしているんだなと思つたよ。それと、あの爆発はおそらく爆弾だね。移住作戦に成功したから落ちてきたんだよ。」

「移住作戦？」

移住作戦について聞かれたから簡単に説明する。

「なんか穢れが増えてきて下界から月に移住するんだとき。私は作戦には参加したが月にはいかなかったさ。」

「へえ、下界にもそんな技術があつたのねえ…。まあ、続きは皆がいるときに話しましょうか♪」

「そうだな！」

そういつて、千古と別れる。

「ユレイドス！ただいま〜！」

「ご主人様！おかえりなさい！」

武志はユレイドスのもとに行く。

「ユレイドス、頼んでいた仕事は全うしたか？」

「はい！最初は大変でしたが、三か月もすれば完全に慣れました！」

その事を聞いて安心する。ここで前々から考えていたことを口にする。

「そうかそうか。ところで君を神使から神へと昇進させてあげよう。」

「本当ですか！ありがとうございます！」

「ああ。君は今から進退の神、【ユレイドスのしんたいしん諭令度須進退神】と、名乗るがいい。進退を司る神として頑張りなさい。」

と、神名を頂くのだった。

「本当にありがとうございます！」

「皆く集まつて〜」

と、千古が大きな声で皆を呼ぶ。

「おっと、お母様がお呼びだな。行くぞ？諭令度須進退神？」

「はい！」

こうして、千古の集会に行つて、武琉の下界での話をした後、千古や天照、月読などから最近の天界の様子について聞かされるのだった。

PART・15 古代都市の跡片付け

古代都市が消滅して数日たったころの事：

「武志くー！いるかしら〜！」

千古が大声で武志を呼ぶ。

「私はここだ。どうかしたのか？」

「あの都市の跡地を綺麗にしてほしいのよ。」

「ほう… どうしてだ？」

素直に疑問となったから聞く。自然の力で長い年月をかけていけばいつかは風化するため、綺麗にする必要があまり感じられなかったからだ。

「理由なのだけど、まずこのままこの地に生物が何もいない状態で月日が流れていくのはまずいのよ。歴史とか生態系にも差がつくし。それに新しく人間を作るとき、風化せずにあの都市が残っていたらということを考えて残してはおけないのよ。」

と言ってきた。つまりあの都市が存在していたという証拠を消したいのだろう。

「分かった。ついでに新しい生物を作ってもいいよな？」

「問題ないわ。ただ人間はまだ作らないでほしいのよ。」

「どうしてだ？」

大方予想はつくが一応聞いてみる。

「生態系が根付く前に人間たちを作っても死んでしまうからよ。人間はとても賢い生き物だけどとてもひ弱ではかない生物だからね。」

「分かった。」

予想通りの答えが返ってきた。生物を作っても、暫くは生態系や食物連鎖が不安定になるため、少なくとも食物連鎖が安定するまでは人間は作れないのだ。

「なら俺は地上に行ってくるよ。」

「行ってらっしゃい♪気を付けてね♪」

『神様移動中…』

「ついたついた…」

武志はかつて存在して自分も住んでいた都市の跡地にたどり着く  
のだった。

「懐かしいなあ。ここら辺に俺と永琳の家があつて、ここに軍の訓練所があつた。」

武志は過去の思い出を振り返りながら歩いていく。

「はあ… 壊すのは名残惜しいが仕方ないか。」

そういつて構えると、

「消えろ」

と、ただ一言呟くと都市の残骸は一瞬できれいさっぱりなくなる。そして、そのまま横に動かすと、土地がきれいになる。

「さてさて… 粗方整地は終わったから生物を出すか…」

と、言うのと、今度は別の詠唱を始める。

「この地球に住まうことになる生物たちよ… 今この時この地球に宿るが良い…！」

と、唱えると、辺り一面に生物が出現する。

「… これで仕事は終わりかな…。そろそろ帰るとするか。」

『神様帰還中…』

「ただいま。」

「おかえり〜」

「おかえりなさい兄さん」

「理都もそろつてどうしたんだ？」

「ああ、さつき作ってもらった生物たちが快適に生きることができ  
る理を作ってもらったのよ♪」

「まあ前からあったものを改良しただけだけどなく。」

「あと1300年くらいで人間を作ってもいいと思うわ♪またその時には合図するわね♪」

「分かった。」

… こうして1300年後、武志は人間を島… いや日本に創造し  
なおし、その人間たちは繁栄を続けていくのだった…。

### 第三章 諏訪大国の土着神 PART・16 土着神の創造

古代都市が消滅し早数千年……。前回の話から、人間を創造して300年くらいたった時の事……。

「やつと下界にも生物、そして人間が増えてきたな。」

「そうね♪本当に嬉しいわぁ♪」

と、千古と二人で談笑していた。マザコンかよと言いたくなるが、一人で眺めているときに千古から話しかけてきたのでマザコンではない。(たぶん)

「なら俺はまだやらなければいけないことがあるからこれで。」

「寂しいわねえ〜。」

「仕方ないさ。仕事があるのは榮えてる証拠だし。」

「まあそうね♪なら行ってらっしゃい!」

「下界に行くわけではないんだがな……。まあいいや。」

と、内心呆れていたが、千古の所を後にする。

自室にて……

「さて、俺も地上に拠点(神社)を作りたいんだよな。私は信仰は必要ないが地上に拠点として構えるには神社があった方が便利だしおまけ程度に信仰ももらえるからな。……おっと、独り言が過ぎたな。早速向かうか。」

そう言って武志はとあるところへ行く。

「着いた。ここが私が目を付けていた場所だ。」

武志がたどり着いたのは山の中に大きな湖があるところ。現代でいうところの諏訪湖だ。つまり武志は諏訪の所に拠点を構えようとしているのだった。

「さて、どんなのを創るかな。」

と、考えていると、殺気を感じる。

「チツ」ドーン!

攻撃が飛んできた方向を見ると、とても大きく、赤い目をした白蛇

がこちらを睨みながら攻撃してくるのだった。

「ここを元々治めていた神か…！まさか先客がいたとはな！」

だが、民間信仰の神と、中央神話の上級神が戦えば結果は一目瞭然だろう。

「クタバレ！そしてこの土地は貰うぜ！」セイヤツ！

と、その白蛇を一瞬にして叩きのめす。白蛇はその場で気絶して動かなくなった。

「崇り神か… そうなると管理する奴も必要になるな… それに崇り神は信仰を変えられないからな… 仕方ないこの地域の守り神をもう一人創るか…。」

と、その場に座り込む。

「しっかしそれ抜きにしても良い所だな。さてどんなのを創るか… やっぱり大きくて豪華なのが良いかなあ…。」

と、考えた末に、湖の南側の平野に一つの大きな神社を作り出す。

「出来た！名前は… 後で考えるか。信仰目的じゃないし…。」

そして少し離れたところに離れを作り出す。

「これで湖の周りは俺の土地となったかな。」

と、計四つの建物を作り出す。

「この一番大きいところに私が住んで、この離れを研究所にするか。」と、決めていく。因みに、現代でいうところのそれぞれ上社、下社である。

「出来た。これなら別荘として機能し、且つ、地上の神達にも俺の力をいい感じに誇示できる。これなら攻めてくることはないだろう。」

と、武志はあることを思い出す。

「しまった。俺がいない間の守り神を作ってないや。ここに拠点の神社を設置して… よしー！」

武志は拠点から離れたところに小さな神社を作る。

「よしよし… 名前は私の直轄だとわかるように【洩矢神社】としよう。次に守り神だが… 俺の能力を少し分けるような能力でいいだろう。」

武志はそういうと、武志は一人の少女を作り出す。

「ふああ… おはよう…?」

「おはよう。目覚めたかい。」

「私は一体誰?そしてここは何処?」

「君の名前は『洩矢諏訪子』。そしてここは私と君が治める土地であり、君が住むところさ。」

洩矢諏訪子の名前の由来は、武志が直々に生み出し、能力も武志譲りのため、洩矢の姓を引き継がせ、湖と共に長くいてほしいから諏訪子なのである。

「なるほど。そして貴方は誰?そしてこの蛇は何?」

「私は洩矢武志。君を創った神さ。そしてこの蛇はミシヤグジというこの元々の神様だ。この蛇は君が管理するんだ。そうしたら信仰もミシヤグジを通して君に入ってくるはずさ。」

簡単に言うと、実質的な信仰はミシヤグジ様だが、集めるのは諏訪子って事である。ミシヤグジ様が集めた信仰が、諏訪子に戻ってくるということだ。まあこんな回りくどい言い方をする必要はないんだけどな。

「つまり?」

「君がミシヤグジ様を管理すれば信仰が入ってくるという事さ。」

「成程ね♪分かったわ♪」

「それと俺は基本的に天界という空の向こうにある世界に住んでいる。だから殆どここには来ないだろう。」

実際、ここも別荘として作ったため、そんな頻繁には来れないことを伝えておく。

「分かったわ♪私頑張るね♪」

「頼んだぞ。ならここに里を作ってあげよう。それと、君には『坤を操る程度の能力』…まあ地面を操るようなものだ。その力でこの民を統べるがよい。それと。もし敵が攻めてきた時のためにこれをあげよう。」

といい、最新式の武器である鉄製の輪っかを出す。

「分かったわ♪ありがとね〜!嬉しいわ〜♪」

「ああ。この諏訪大国は君に任せただぞ!そして一人じゃ大変だろうか

ら補佐役も創造しておいた。それではまたな！」

と言つて、天界に戻る。一方、残された諏訪子は、

「私にできるかなあ…。」

と、呟く。その時、ふと近くを通りかかった村人が諏訪子に話しかける。

「諏訪子様、良ければ私が貴女を補佐しましょうか?。」

と、いきなりトンデモなことを言いだしてくる女性が話しかけてくる。諏訪子は、

「君は…?。」

「私の名前は」東風谷瑠美こちやるみと申します。それで、貴方を助けたいのです  
が…。」

(もしかして武志が私を助けるために創ったのかなあ…。)

「いいよ!ならこつちへ来てよ!。」

と、自分の神社に案内するのだった…。



PART・ 17 愛用する武器の創造

帰ってから数日後…

「はあ、暇だなあ…。」

「武志、いるかい？」

「理都か。珍しいな。一体どうしたんだ？」

「いやさ、武器を作ってみてなく、どうよ。この剣。」

理都は真つ黒でとても細い飛燕剣を見せる。

「かっこいいな。だが、そんな細くて折れないのか？」

そう。その剣は折れそうな程細いのである。

「折れないさ、それより、切れ味試したいから、なんか硬い物出してよ。」

「そういう事か…いいだろう。外に出ようか。」

二人は屋敷の庭に出る。

「ここに大岩を出す。それを斬ってみろよ。」

と、目の前に10mくらいの大岩を出す。

「行くぜ！」 ジャキン！

と、理都が剣を振ると、その大岩は綺麗に真つ二つになるのだった。

「すごいな…しかも剣も折れてないどころか刃こぼれすらしてない…。」

「まあな。すごいだろ。」

「すごいな。」

これには素直に感心せざるを得ない。

(俺も武器を作ってみるか…)

と、武志は心の中で呟くのだった。

部屋に戻ると、武志は自分の武器の案を考える。

「やっぱりあんな感じの飛燕剣は欲しいなあ…。あとは創造神らしい最新鋭の武器とか？」

と、考え続ける。考え続けていると、

「とりあえず飛燕剣だけは出しておくか。」

と、自分の横に二つの金色に輝く細い剣を作る。

「あとは… 都市で使ったような遠距離武器とか…？」

と、考えた末に、一つの銃を出す。

「あとは… やっぱリアレかな。最新鋭の武器と言えればこれしかないだろう。」

と、黒塗りの本体に金色の刃が付いたチェーンソーを出す。

「とりあえず武器はこれでいいか…。あとはこれらを収納するため  
の倉庫があるな…。」

と、考えた末に、一つの端末を出現させる。

「コレをちよつと弄って、コレを付けて…。」

と、武志はこの端末に複雑な術をかけて、カバーをはめる。

「出来た！早速起動して、こうすると… おつと。まあ成功だな。」

そう。武志が端末に施した術は、画面の中に収納空間を作る術である。それを使って、最後の道具である大きめのハンマーを端末から引き出すのだった。

「とりあえず名前を決めないとな… と言う訳で名付けの儀の開幕だな。」

と、謎の儀式が始まる。

「この双剣のうち、「ここ」が雷の奴が「金龍剣」唐夜叉丸・雷「で、ここが炎の奴が「金龍剣」唐夜叉丸・焰」だ。

と、双剣の名前を決める。

「そして、この銃は「MR24」かな。」

と、銃の名前を決める。それはかつて都市で持ったショットガンと同じような感じの名前だ。

「それで、チェーンソーの名前が、「神鋸」黒金刃「だ。」

と、チェーンソーの名前を決めていく。

「このハンマーが「大槌」カタストロファイ「だ。」

と、この先が黒く、柄が金色のスレッジハンマーの名前を決める。

「最後にこの端末… と思ったけどこれ元はただのタブレットだからなく。まあいいや。この端末は「チエルベツロの板」だ。」

と、長々とした儀式を終える。

「さて、次は武器の試し切りと行きますか」

と言つて、庭に行くと、理都の時と同じ岩を出して、唐夜叉丸を構える。

「せいやつー！」 ジャキン！ ジャキン！

と、唐夜叉丸を振ると、岩が粉々になる。しかも切れ味はとても鋭く、刃こぼれもしていない。

「合格だ……。さて、次だ。」

と、唐夜叉丸をチエルベツコの板に収納する。そして、鉄の塊を出してから黒金刃を構えて、電源を入れる。

「動作確認よし！ 行くぜー！」 ギュイイイイイイイーン！

と、黒金刃を振ると、何の感覚もなく鉄の塊が切れる。勿論刃こぼれはしていない。チエーンソーのため多少切り口は汚いが、鉄も切れるなら問題はないだろう。

「これも合格……。と。」

黒金刃をまたチエルベツコの板に戻し、今度はカタストロフィーを出す。そして同様にして構える。

「行くぜっー！」

と、岩に振り下ろすと、岩にヒビが入っていき、粉々になる。

「合格だな……。やっぱりこれくらい派手でなくちやな。」

と、岩を消しながら思うのだった。

## PART・18 戦争の兆し

武器を作ってから数十年経ったある日の事、武志は前に創った屋敷に来ていた。

「ここは本当に平和だねえ。しかも町も前より発展して賑わっているから暇もしない。」

と、愛用の剣を磨きながら呟く。すると、頭の中に何かが流れてくる。

「武志、何処にいるか分からないから直接脳内に語り掛けるけど、すぐに集会所まで来て頂戴。」

「はあ…直接語り掛けてくるなんて意外だな…それ程重要なことがあるのか…仕方ない。すぐに向かいますか。」

は屋敷から出て、離れに向かう。因みに千古が直接脳内に語り掛けてくるの緊急事態が起こった時である。

「さてと、それじゃあ向かいますか。」

と言い、テレポーターで自室まで向かう。

「さてさて、着いたから直ぐに向かうか。」

集会所に向かうと、そこにはたくさん神々が集まっていた。そしてそれらを見下ろすように、千古の他、理都をはじめ、天照などの三貴神と、最近神々の中でも優秀な八坂神奈子など数名の神が座っていた。

「遅くなってすまないな。最近天界や下界を散策することにハマっててね。それにしても、一体何があったのか単刀直入に聞きたい。」

「実は…下界に私たちと同じ洩矢の姓を名乗る神がいるらしいの。それもかなりの力を持ったね。」

「ふむ。」

(それって絶対諏訪子の事だよな…?)

と、内心焦り始める。この雰囲気ではバレたら色々終わりそうだ。そしてこの千古の発言に会場がざわめく。

「その洩矢の神がどうしたのですか?」

「いや、洩矢の姓を名乗るのは別に構わないのよ。一応ある程度の力

はあるみたいだし名前が紛らわしい神様がいるのも今に始まった事じゃないわ。」

「珍しいな。おふくろにしては。いつもなら叩き潰すのに。」

「叩き潰すとは何よ！… まあそれはいいとして、問題は、この神に勝手に宣戦布告を行った者がいるのよ。」

と、神々の間にも衝撃が走る。

(おいおいまじかよ…。)

「それで、犯人を捜せとは言わないわ。そんなことしても不毛だし面倒くさいからね。それに私達の威厳にかけても一度送った宣戦布告を取り消す訳にはいかないわ。」

「だったらどうするんだお婆様よ！おちおち黙って見過ごすのかよ！」

「まあ落ち着いて、宣戦布告の日は二か月後となっているわ。それまでに色々考えておくわ。だから今日は解散。あ、そうそう。私がいりましたという人がいたらこの後こっそり私の所まで来てくれるかしら。」

そう言つて、この会議は解散となった。

「おいおいマジか… ややこしいことになってきたぞ…。」

と、足早に自室に戻つてテレポーターを起動し、洩矢神社に向かうのだった。

「大変だぞー！」

と、言つた瞬間、

「武志く助けてえ〜！」

と、諏訪子が泣きついてくるのだった。

「え〜と、武志様… これを見てください…。こんな物がちよつと前に届いたのです。」

そこには明らかに先程の会議で話題となった宣戦布告の紙が置いてあったのだった。おそらく一緒に置いてある矢に括り付けて飛ばしたのであろう。

「まあまあ、落ち着け。とりあえず私が言いたいのもこの事について

だ。」

「一体どうするの…?」

「いいか。この件は神々の方でも話題に上がっている。そこでだ。え〜と?」

そこにはどこか瑠美の面影のある少女が座っていたのだった。

「翠。東風谷翠と申します。えっと、一応諏訪子様からお話は聞いていますが、貴方は武志様で合っていますよね?」

そうか。大方瑠美の子だろう。あの子も立派になったなあと思っただが、そんな暇はない。

「ああ合ってるさ。」

「それで? 一体何の話ですか?」

「用事なんだが、翠。お前には今から天界にここからの使者として向かってほしい。一応途中までは送るし、私も神様の方で参加するだろう。どうだ? 出来るか?」

「えっと、ちよつと怖いですが、諏訪子様のため、この国のため頑張りたいと思います。」

この姿には諏訪子も

「頼もしいねえ〜」

と声を上げる。私も頼もしいと思う。結構威厳ある奴らばかりだからな。単純に知らないだけだとは思うが。

「それならこの後送るから、この紙に書いてあることを読んで、自分の言葉で神達に伝えると言いき。」

と言い、紙を渡す。

「それなら向かうぞ。掴まっていなさい。」

と、翠をお姫様抱っこしながら天界の端までひとつとびする。

「着いたぞ…ってあれ?」

翠には負担が大きすぎたのか、失神していた。

「仕方ない。少し休んでから向かうか。」

と、近くの岩に腰かける。少しすると、

「…はっ(こ)は何処? 私は誰?」

と、記憶喪失者のテンプレのような発言をして翠が起き上がる。

「ここは天界の端でお前は東風谷翠だぞ。」

「あく思い出しましたありがとうございます。つてそこはボケるところですよー!」

「知らないしメタい!」

「だっってお母さんはいつも「いつも常識に囚われるな」と私に言い聞かせてくれましたよ?」

「瑠美…なんでそんな事を子供に教えるんだ…」

これには頭を抱えてしまう。メタいというか子供に変な教育を施すのは本当にやめてほしい。

「とりあえず、高天ヶ原の屋敷に向かうぞ。」

二人は高天ヶ原にある千古たちの屋敷に向かうのだった…

屋敷に向かう武志と翠。その先に待ち受けていたものとは……！

という前回のあらすじを挟み、二人は屋敷の近くに到着する。

「ここから先は別行動だ。私は先に入ってお前を待つ。だからお前は後から屋敷に入ってくれ。諏訪大国の使者と言えば入れると思うから。」

と言いつつ武志は屋敷の中に入っていく。

「私が諏訪子様のため、あの国のため頑張らないと……」

と呟いて溜美も門に向かう。

「すいませくん。」

「どうした。ここは君みたいなのが入っていい場所じゃないよ。さあ、戻りなさい。」

と、門番に止められる。が、武志が言っていたことを口にする。

「いえ、私は諏訪大国からの使者です。今日は全能神様にお話をしたく参ったのですが……」

と言うと、門番は目に見えて動揺しだす。

「え、えつと、ちよつと待ってくださいね。」

「すぐ使いの方が見えるそうなのでここで待っていてください。」  
すると、門の奥からとある神が見える。

「ご苦労。客人と言うのはこの方か？」

「はい。諏訪大国の使者という事ですが……」

「成程……その貴方。名をなんと言う？」

「東風谷翠と申します。それで？全能神様には合わせてくれるのですか？」

「ああ。勿論だとも。ついて来い。案内する。」

と言われ、翠は須佐之男の後を付いていく。すると、

「この扉の向こうに皆集まっている。準備はいいかい？嬢ちゃん。」

「はい。大丈夫です。」

と返事すると、須佐之男が扉を開ける。そこには千古をはじめ、理



都や天照、月読など、いろいろな神がいた。勿論、武志もいる。

「これはこれは遠い国からわざわざお越しいただきありがとうございます。私は全能神である洩矢千古よ。まあ堅苦しい肩書じゃなく普通に千古と呼んでくれたらいいわ♪」

「は、はあ。私は東風谷翠と申します。面会の時間を設けていただきありがとうございます。」

自己紹介の後、武志が質問をする。

「貴方が諏訪大国の使者と言うのは聞いた。それで、どんな願いがあつてわざわざここに来たのか教えてほしい。」

「はい。私は貴女方との戦争について、一つ提案をしにやってきたのです。」

(言いたいことは伝えてるな。いい感じだ。)

と、武志は内心感心している。

「へえ♪続けて?」

「私たちの領土をかけて1vs1で決闘という形にしてほしいのです。全能神様、どうかお願いできませんでしょうか。」

千古は少し考えた後、

「いいわよ♪その提案に乗りましょう。その件については私達にも非があります。でしたら一か月後に貴方の国の近くの平原で決闘を行います。いいわね?」

「はい。問題ありません!」

「なら諏訪大国まで送ってあげるわね♪」

「ありがとうございます!」

そういうと、緑の足元が光りだす。そして眩しい光と共に翠はこの場から消えたのだった。

「さて、客人も送り返した事だし、誰が行くか決めましょうか♪誰か立候補する人はいないかしら?」

「なら私が行きましょう。」

と、八坂神奈子が手を上げる。そしてその他の神は全員手を上げない。

「他に立候補もないみたいだから神奈子、貴方に戦いは任せるわ。」

頑張つてね。」

「はい。軍神として全力を尽くして戦います。」

そう。八坂神奈子は軍神で戦いは須佐之男とタイマンでできるくらい強いのです。それでも武志や千古からしたら弱いですが。

「なら解散♪」

その一言で全員バラバラになるのだった。

「なら俺も速攻で向かうか。」

と、自室のテレポーターで諏訪大国に向かうのだった。

In 諏訪大国…

「諏訪子様〜！」

「どうしたの翠。そんなに慌てて。」

「先ほど天界にいる全能神様と話をして、戦争が1vs1のタイマンになりました〜！」

「本当!? やったあー！」

「本当ですよ! これなら無駄な犠牲も出さなくて済みますね！」

「でも… 当然相手は戦神とか軍神が来るんですよ… ? そんな奴が来たなら勝ち目無いよ…」

と、諏訪子は布団に包まりながら怯えた口調で話す。だが、

「大丈夫ですよ。いざとなれば武志様出せばいいのですから。」

「そっかあ。なら多分大丈夫だね！」

と、翠が励ます。

すると、いきなり障子が開く。

「ただいま。諏訪子いるか?」

すると諏訪子は布団から顔を出しながら、

「いるよ〜」

「いきなりだけど、戦争の件だが〜…」

と話そうとすると、

「あゝ、あのタイマンの決闘の話でしょ? 勿論知ってるよ。さつき翠から聞いたから。それで? 武志様が出るんですよ?」

「そこまで聞いているか。だがひとつだけ違うな。戦争で戦うのは諏訪子。お前だ。」

諏訪子はそれを聞くと、驚いた感じで話し始める。

「えっ!?ちよつと!そんなの聞いてないよ!私だと負けちゃうよ!」

「そうですよ。諏訪子様よりも武志様の方が戦闘も強いですし、絶対戦った方が勝ちますよ。」

武志はそれを聞いて反論する。まさかここまで平和ボケした奴らだったとは。

「あのな。確かに私はこの国を作った。だが、ここを治めているのは諏訪子。紛れもなくお前なんだ。皆の為に体を張るのが頂点の務めじゃないか?それにお前には戦えるだけの力もある。なのにそんな腑抜けたことを言ってそれでもこの国のトップの神様か?だったら神様とかこの国の頂点とかは辞めろ。正直言って全く向いてないから。」

と、述べる。それを聞いた諏訪子は。

「そう...だよ。やっぱり、私が行かなきゃ駄目だよ。皆の為、国の為。私は体を張って正々堂々戦うよ!」

と、決意を表す。

「その意気だ。だったらお前が戦う相手を教えてやろう。軍神の八坂神奈子だ。」

「八坂神奈子...」

「軍神って... まあ大能神とかが来ないだけマシだったのかな...? それにしてもだったらなんで武志様が行かなかったのですか?」

という質問をしてくる。だが、あえて行かなかったと言うと大変なことになると考えたので、適当に挑発を入れて誤魔化す。

「母... 全能神様が直々に命じたのさ。「あの程度の国、貴方でも行けるわよ」とか言ってたね。」

「それは許せないね...!その程度なんて言わせないようにしてやる。」

挑発にあっさり乗って少し心配になるが、意気込みは100点なのでそれについては言わないようにする。

「そうそうその意気だ。その心があるなら明日から一か月みっちり  
と訓練だ。ついてこれるな？」

「勿論！」

「諏訪子様頑張ってください！」

と、翠も応援してくれている。これには武志もほほえましいと思っ  
てしまう。

「ハハハ。なら今日はゆっくり休んで明日から頑張ろうか。私は  
ちよつと戻らなければいけないがまた明日からは泊りで来るよ。」

と言いつつ、帰還する。そして家に着くと、

「明日からの訓練どうしようかなあ…。」

と呟くのだった。

## PART・20 ケロちゃん特訓する

宣戦布告が届いた翌日、武志と諏訪子はさっそく戦争のための特訓を始めるのだった。

「よし！なら昨日言った通り特訓を始めようか。」

「一体どんな特訓をするの？」

武志「いい質問だ。まずは軽く体力作りから始めようか。朝一の走り込みという事で軽く42km走ろうか。」

と、ウォーミングアップのつもりで言ったのだが、諏訪子の顔が青ざめる。なぜだ。

「あ〜う〜、いきなり長距離走なのか〜」

と、何かを悟ったような感じで話してくるが、自分にとってこんなのは準備運動でしかない。

「まあ体力作りの一環だし、自分のペースで走ればいいから。取り合えずがんばれ。」

「分かったよ〜」

と嫌々そうに返事をして走りだす。

「あっ、どのくらいが目安か言うの忘れた…。仕方ない。」

と、すぐさま走っていった方を向き、

「この国の外周2周でいいからな〜」

と、走っていく諏訪子に向かって叫ぶのだった。聞こえたかは分からないが。

暫くして、諏訪子が走り終える。

「いきなり42kmは辛すぎるよ〜」

「ハハハ。何を言っているんだい諏訪子。これは毎日続けていくよ。」

と言うと、諏訪子はなぜか失神するのだった…。

… 一時間後

「あのですね〜貴方は限界と言うものを見誤っています。朝一番で42kmとか正気の沙汰じゃありませんよ！第一疲れてフラフラな時にそんなこと言いますか？そりゃショックで倒れますよ〜！」

武志は翠からずっと説教をさせられていたのだった。すると、

「あくうく、おはようく。」

と、諏訪子がダルそうに起きてくる。

「ほら諏訪子様が起きられたのですから貴方も謝って下さい。」

「…申し訳ない。」

と、素直に謝ると、

「ハハッ！いいよいよ。武志も私の事を思ってやれと言ったのでしょ？確かに辛いけど、戦争の為ならいくらでも頑張るよ！」

「ハハハ。その意気でこれからも頑張れよ。とりあえず朝ごはんにしようか。」

「そうだね！」

と、三人は仲良く朝ごはんを食べるのだった。

「さて、朝ごはんも食べたことだし、次は君の武器である鉄輪の訓練と行こうか。」

鉄輪は武志がかつて諏訪子の為に武器としてプレゼントした、当時も今も変わらず最先端を行く武器である。

「鉄輪は勿論、近接攻撃にも使えるが、投擲して遠距離武器としても扱えるんだ。」

「それくらい知ってるよ。」

「知っているなら話は早い。今からの的を出すから、その鉄輪を当ててよ。」

「わかったよ。」

そういうとともに、的となる金属の板を出現させ、空に自由に飛ばす。

カキン！ カキン！ カキン！

「このくらいの速さならまだ当てられるよ！」

と、順調に的に当てていくが、

「そうか。ならこれはどうかな。」

と、いきなりスピードを上げていく。

「うわっ！いきなり速度を上げるねえ！しかも当たらない！」  
速度が上がって当たらなくなった。

「的が動く位置を先読みして投げることも重要だぞ。」

と、アドバイスをする。

「分かった！」 シュツ！ シュツ！ カキンツ！  
「当たった！」

三つ投げたうちの一つが的に当たったのだった。そしてそれを境にして、また命中するようになったのだった。

「その調子だ。今度はさらに変則的になるぞ。だが感覚は先ほどまでとほぼ同じだ。だが、動きはよく見るんだぞ。」

と、動きをさらに変則的にし、動きも緩急がつくようになった。

(動きを読む動きを読む。：)

「そこだ！」 カキン！

投げた鉄輪は一発で当たったのだった。

「流石だな。その調子で続けてくれ。」

と、さらに続けていく。小一時間経った頃には命中率は97%くらいになるのだった。

「一回休憩しようか。休憩することも大切だからな。」

と、休憩をする。

「さて。休憩も終わったことだし、次は接近戦の練習をするよ。先ほどの鉄輪を使っていいから模擬戦をやるうか。」

「そういうえば武志って武器使わないの？」

「俺か？あるにはあるが強すぎてな。正直模擬戦に使う物じゃないんだよな。…」

「え、でも見たいな〜！」

流石に上目遣いでそこまで言われると拒否もできないので、チェルベツロの板を取り出し、その中からMR24を取り出す。

「俺はこれを使う。ケガするなよ。」

「いいよ！さあ行こう！」

と、諏訪子が先制で鉄輪を構え距離を詰めるが、

「甘い。」 シュツ！ ダダダダダダダ！

それを無駄のない動きで避けると、MR24を連射する。

「うわっ！危ないなあ。ならこれでどうだ！」

と、さっそく先ほど覚えた鉄輪の投擲をしてくるが、

「先ほど覚えた投擲術か。確かにいい感じだが俺には効かん。」  
ダダダダダダダダ！

と、MR24を撃つて撃墜する。そして間合いを詰めて、MR24の銃床を諏訪子の顎に軽く当てる。

「勝負あったな。」

「うえ、負けちゃったか。」

この勝負は武志の勝ちで終わるのだった。

「まず動きが単調だ。そしていちいち敵の攻撃に驚くな。今言えるのはこのくらいだな。」

「なるほどね。参考になるね。」

「まあこの二つを覚えたら動きも変わるはずさ。とりあえず頑張ろうか。」

「うん！」

武志と諏訪子はこのような特訓を一月間続けるのであった。

そして運命の日がやってくるのであった…



PART・21 諏訪大戦・開幕

諏訪子は武志のスパルタトレーニングを一月続け、最初よりも格段に強くなった。そしてついに運命の日を迎えるのだった…。

「いよいよだね…。」

「ああ… いよいよだな。君はここまで頑張っている。前よりも強くなった。だから、今日の決闘は全力を出して戦うが良いさ。」

「そうですよ。諏訪子様はここまで頑張ったんですから。今まで通りの事をやればいいですよ。」

「武志… 翠… ありがとう…。」

諏訪子は泣きそうな顔で、感謝の意を表す。

「おいおい、まだ泣くのは早いだろう。… おっと、そろそろ時間じゃないか？」

「そうだね！ さあ向かおうか！」

諏訪子の号令を聞いて三人は目的地である諏訪大国の近くにある平原に移動する。

「着いたな…。」

「誰もいないね…。」

そう。ついたはいいが誰もいないのである。

「とりあえず待つか…。 あ、そうだ。今のうちに正体を隠しておこう。」

武志は自分の顔を変えて完全に別人になる。何も知らない人が見れば同一人物だとは思わないだろう。武志の能力を使えば自分の容姿を変えるくらいはたやすくできるのである。

「何それ…。」

「他の神から正体がバレないようにするための変装さ。」

「変装というよりはもう生まれ変わってませんか…？」

~~~~~10分後~~~~~

「さあて♪到着したわね♪」

「全く… おふくろはいつもテンションがおかしいなあ…。」

「ちよっと！聞こえてるわよ♪」

「ちよつと全能神様、これから私が諏訪大国の方と決闘するのですから、それらしい雰囲気で行った方が良いのではないのでしょうか。」

「そうね。加奈子の言う通りだわ。確かに威厳は大事ですからね。」

(チヨロいな…)

(チヨロいわね…)

「しかしこういったときに創造神様がいないのは驚きですね。」

「そうね。ちよつと用事があると云ってたわ。すごく残念がってたわよ。」

「ああ、それは残念ですね。」

と、千古と理都と神奈子の三人と、後ろには三貴神の他数名の神の姿が見えるのだった。

「相手のご一行が到着したみたいだな。諏訪子、ここからは一人でやるんだ。分かったな？」

「分かったよ。」

と、諏訪子は神達の方に向かっていく。すると、

「諏訪大国の神よ、私は八坂神奈子である。私と相手する者は前に出てこい！」

と、加奈子が名乗りを上げる。他の神達が下がっているという事は当初の予定通り神奈子が相手で間違いないな。それに対し、

「私が諏訪大国の神であり、貴方と相手する洩矢諏訪子だ！さあ、決闘を始めようか！」

と、諏訪子も名乗りを上げる。すると、理都が少し前に出てくる。

「審判は私、洩矢理都が行います。それではこの剣が地面に刺さったら決闘開始でございます。」

と、手に持っている剣を上に向かって投げる。そして、放り投げられた剣は綺麗に刃を下にして、地面に刺さる。決闘開始だ。

「先手必勝…！」 シャキッ！

諏訪子は手に鉄輪を持ち、一気に間合いを詰める。すると、
「甘い。」

と、いきなり御柱を壁のように設置する。そして、鉄輪は綺麗にはじかれる。

「今度はこちらの番だ！」

と、御柱を浮かせて、ミサイルのように投擲していく。それを諏訪子は、

「でやあー！」ドーン！

地面を盛り上げて、壁にして防御する。これは諏訪子の能力である【坤を操る程度の能力】で地面を操っているのである。

「ふむ、今のでやられないとはやはり洩矢の姓を名乗っているだけあるねえ。」

「そんなことを言う余裕があるのかな？」 ヒュツ！ヒュツ！ヒュツ！

と、鉄輪を連続で投擲していく。神奈子はそれを華麗に避けていくが、

「そこだっ！」

「なっ！」バシーン！

鉄輪の一つを避けられず、被弾してしまうが、

「っ… まだまだね…」

「まだ立つか…！ならこれで！」

と、鉄輪を構えるが、

「させないよ。」ブオン…！

と、また御柱を投擲していく。しかも先ほどより密度が高い。更にランダムに飛ばしているせいか一つ変な方向に飛んでいく。

(… あ、変な方向に飛んで行った。まあ大丈夫だろう。)

「っと、また防げは…！」

と、先ほどみたいに土壁を作ろうとするが、

「同じ手は通用しないよ。」

「しまっ…」ドカツ！

神奈子に後ろに回られ、蹴りをくらう。そして御柱の一つに激突する。

「グハ… でもまだまだ…！」

と、鉄輪を構えて一気に距離を詰める。すると神奈子も、
「まだ来るか…！」

と、御柱の壁で防御するが、
シャキーン!

御柱が綺麗に切れ、神奈子もダメージを喰らう。
「ぐっ… なかなかやるね… つつ!」

追撃でさらに鉄輪を構えた諏訪子が切りかかろうとしてくる。それをまた御柱で防ごうとするが、
ジャキツ!

先程と同様に御柱は二つに切れる。

「どうしたの? そんな同じ手を使つて。」

八坂「その鉄輪を見ても同じことが言えるのか?」

「何を言つて… ってえ!」

そう。諏訪子が鉄輪を見ると、鉄輪は錆びて使い物にならなくなっていた。そう。先ほどの御柱には蔦が撒かれていて、その水分で錆びたのだった。

「さらば! 御柱!」 ドスツ!

「ぐへっ!」

驚いて居る諏訪子に御柱が直撃するのだった…。

「あ〜う〜…」

そして諏訪子は起き上がらなかった。

「勝負あり! 勝者八坂神奈子!」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ

という神達の大歓声が起こる。そんな中、武志と翠は諏訪子たちに
駆け寄り、

「お疲れ様。よくやった。」

「諏訪子様お疲れ様です。」

ねぎらいの言葉をかけるのだった。

「あ〜う〜、ごめんね二人共負けちゃつて。」

「気にするな。君が無事ならそれでいい。」

「そうですよ。諏訪子様は頑張りました。それでいいのです。諏訪子様が生きていて何よりですよ。」

「武志… 翠… ありがとう…。」

と、諏訪大戦は幕を閉じるのだった…

PART・22 諏訪大戦のその後

諏訪大戦が幕を閉じた後、三人に神奈子と理都が近づいてきた。

「それで？私が勝ったからこの地域の信仰は私達のものではないんだよね？」

と、話しかけてくる。

「ああ、そうだ。」

と、正体バレしないようにできるだけ低い声で言う。

「だったら・・・」

と、神奈子が何かを言おうとすると、

「あくうく、おはよう・・・」

と、諏訪子起きる。

「それで？君はここの信仰をもらいに来たんだよね？」

と、問いかける。

「そうだ。残念だがお前はここでお別れになるだろうがな・・・」

「……………」

「諏訪子様……………」

と、諏訪子は下を向いて何も言わなくなる。そう、諏訪子は信仰を元に成り立っている神なので、その信仰がなくなると弱体化、悪ければこの世界から消えてしまうのだ。それを見ていた武志はここで助け舟を出す。

「お前たち一ついいか？この国の信仰を奪うのはたぶん無理だぞ。」

と、ぶつちやけた発言をする。これには全員思わず

「……は？」

と、驚いていた。

「ああ……大体分かったかもしれないな……」

と、理都は言う。

「理都様、どうかその理由を教えてくださいませんか？」

「まあまあ、それについては彼奴から説明があるだろう。」

と、理都が自分に話を振ってくる。

「この国は確かに諏訪子が治めている。」

「そうだね…」

「でも実際の信仰はミシヤグジ様という崇り神なんだ。」

「ここで諏訪子と神奈子は理由が分かったのか、何かを察した顔をす
る。」

「もしかして…」

「そう。そのもしかしてだ。簡単に説明すると、この国の信仰の対象
はミシヤグジ様、もとい崇り神だ。人間たちはその崇りを恐れてい
る。だから他所から来た神を信仰することができない。崇られるか
もしれないという恐怖があるからね。」

「えくと、つまり？」

「私たちがしたことは全て無駄だったということね…」

「腑に落ちないがそういう事だな。」

「そう思うのは当然だろう。自分たちはなぜここまで来て戦いをし
なければいけないのかと考えてしまうからだ。だがこれこそ武志の
策だ。武志はこれを知っていたが、あえて諏訪子に言わなかった。理
由は、この事を言うのと更に自墮落になると考えたためこのような処置
をとったのだった。」

「だが、理都や他の神達にも悪いと思っただため、

「だが信仰を獲得する方法はある。」

「本当か！」

「と、神奈子が食いついてくる。」

「まあまあ、落ち着け…。方法は簡単だ。二神制にすればいい。」

「だが、諏訪子と神奈子と翠は思わず首をかしげる。」

「二神制？」

「そうだ。そちらの神を一人ここに住まわせて、表向きにはその神様
が立って、裏では諏訪子が働けばいい。そうすれば信仰も獲得できる
だろう。」

「なるほどねえ…。その案乗った！神奈子！お前がここに残れ！」

「えっ、私ですか！」

「と、神奈子はいきなり理都に推薦されて焦りだす。」

「そうだ。一緒に戦った仲なら問題なからう。それにここまでやるの

が君の役目だ。違うかい？半ば追放みたいな形になってしまうのは申し訳ないがこれは君にしかできない事なんだ。」

と、述べる。神奈子は少し考えた後、

「分かりました。慎んでお受けいたしましょう！」

と、返事をする。

「決まりだな。全能神様には俺から伝えておいておこう。」

「ありがとうございます。」

神奈子がそういうと、諏訪子と翠は神奈子に近づいて、

「よろしくね神奈子！」

「よろしくお願いします神奈子様。」

と、二人共挨拶をする。

「よろしくな諏訪子そして翠だっけ？」

「はい。合っていますよ。」

「そしてお前は誰だ？」

「響志だ。」

因みに響志というのは武志がとつさに考え付いた偽名だ。おそろくこの先も使うことは無いだろう。

八それじゃあ改めて諏訪子、翠、響志。これからもよろしくな。」

「はい。よろしくお願いします！」

こうして諏訪大戦は全ての幕を閉じたのだった…。

PART・23 旅立ち

諏訪大戦も終わり、いつもの日常に神奈子が入って、より賑やかに
なった。そして一週間が経った頃、

「おい！諏訪子、それは私の魚だぞ！」

「知らなくい。早い者勝ちだもんね。」

「ハハハ。二人共元気だなあ。」

「お二人共仲良く食べてくださいよ。あと響志様も笑っているだけ
じゃなくて止めてくださいよ。」

二人「だってこいつが！」

「やれやれ……」

と、本当に賑やかな生活になっている。因みにだが、武志は顔と名
前を変えているため、本性はバレてはいない。バレると後々厄介なこ
とになるからだ。

神様は見た目を自由に変えられるが、千古や理都、武志など、肉体
を持つ神様はそう簡単に変えることができない。だから自身の能力
で整形しているのである。

「まああれだ、喧嘩するほど仲がいいともいうから、ああ見えても実際
は仲良しなんじゃないかな？」

「どうでしょうね……」

と、ここで前々から思っていたことを言う。

「なあ、少し大事な話があるんだ。」

すると三人はこちらを向く。

「私は明日ここを出発しようと思う。そして、もうここに戻ってくる
ことは暫く無いと思う。」

それを聞いた三人は、

「そうですか……」

「寂しいなあ」

「そうか……」

翠と神奈子は寂しそうな顔でそう呟き、諏訪子はああ言っておきな
がら泣きそうになっていたが、別れを受け入れているようにも見え

た。

「お前はここに住まないのか？」

神奈子からは住まないかと提案をされる。

「ああ。私は元々こここの者ではない、俗にいう流れ者とか旅人という奴さ。それに、ここも前に比べたら賑わっている。私はその姿が見ることができただけで幸せさ。」

と言つてその提案を拒否する。

「そうかく。なら今日は送別会つてことでパーツと行きますか！」

「だな！」

「そうですね！」

皆は武志がいなくなる寂しさをぐまかすために飲むのだった…。

「皆、ありがとう。」

と、武志もお礼をして一緒にお酒を飲むことにした。

そして翌日、神社の前に皆集まって、

「今までありがとう武志…。」

「ああ、今まで本当にありがとうな。」

「お元気で…。」

と、皆が武志に別れの言葉を告げる。

「よかつたらこれ… 持つていつて下さい！」

と、あるものを手渡される。その中身を見ると、中には翠が握ったと思われるおにぎりが入っていた。

「お昼にでも食べてください…。」

「ありがとう翠。」

そっぴいながら翠の頭を撫でる。

「ひやつ！えつ！ありがとうございます…。／／／」

翠が物凄いい照れる。そして手を離すと、

「なら私はそろそろ出発するよ。もう会うことはほぼ無いだろうが、これからも元気に暮らしてくれ。じゃあな。」

「じゃあね〜！」

「達者でな〜！」

「さようなら〜！」

と、皆はそう言つて武志を送り出すのだった。そして、翠は、

「翠、なんで泣いているの?」

そう。翠は泣いていたのだった。その位武志のことが好きだった、尊敬していたのかが分かる。

「あれ?何ででしょうか...。」

と、翠は袖で涙をぬぐい、それを見た神奈子は気遣いなのか、

「さあ、家に戻ってみんなで酒でも飲もうか。」

「そうだね!」

「ですね。」

そう言つて三人は神社の中へ戻っていく。翠は暫く武志が向かった方向を見ながらこう呟くのだった。

「さようなら武志さん...。」

因みに、後に洩矢神社は二神制となったため、神奈子の居場所がなくなっておかしいという事になり、守矢神社と名前を改めるのだった。そして遠い未来にその子孫と二人の神達が大騒動を巻き起こすがそれはまた別のお話である。

PART・24 天界の再開発

武志が諏訪大国から帰還して少し経ったある日のころ、千古からこんな相談を受ける。

「ねえ武志く。天界の再開発をしてくれないかしら？」

「いきなりだな…で、なんで再開発しなければいけないんだ？土地ならまだ少し残っているだろう？」

「まあ土地が少ししかないってのもあるけど…一番は天人が増えてきて神と住む場所を分けたいのよ。」

と、聞かれるが、天人について分からないので尋ねる。

「天人とは？」

「ここ天界に憧れて、厳しい修行をして、その末ここまで来た人間の事よ。」

と、言われる。正直、人間たちの執念には驚いた。

「今はまだ少ないからいいのだけれど、この先増えることを考えると、やっぱり住む場所は分けたいのよ。神としての威厳もあるし。」

だったらいい方法がある。それを実行するために千古に確認を取る。

「成程ね…ならいい方法がある。

「何かしら？」

「今の天界の上、そして高天ヶ原より下に新たな世界を創る。そこを神界として神達が住まう樂園としよう。勿論、今より豪華な建物を建てよう。そして、その間は今まで通り自由に行き来できるようにしよう。」

「素晴らしいわね♪なら貴方に一任するわ♪」

「分かった。」

と言い、武志は工事予定地に向かう。

「ここだな。早速工事を始めるか。」

と言い、早速チエルベツ口の板を取り出しあらかじめ書いておいた設計図を映す。

「始めるか。」

そう呟くと、周囲に設計図と同じ形をした、青味がかった半透明でグリッド（マス）のある図形を召喚し、その図形は一瞬で実体化する。そう。これは武志がただ出すだけではつまらないという理由で作成した演出である。

「やっぱり演出があつた方がかつこいいなあ…。つてそうじゃないな。細かいところを作るか。」

と、言つて、街灯や道を作つていく。街灯は和風な感じだがどこか現代的な見た目で、道は石煉瓦で舗装されている。これらは全てかつての古代都市で仕入れたものである。

「完成：。つと。さて、千古とか呼んで案内するか。」

と武志は千古や理都、三貴神を呼んでくるのであった。

~~~~~10分後~~~~~

「さて、新しく神々が住まうところ、【神界】の街並みが出来上がったから案内しよう。と言いたいのだが須佐之男は？」

「彼なら下界の方に出張していますね。」

そうなのか。それは初耳だった。まあいないのは仕方ないから続行するが。

「そんな事よりも楽しみね♪」

「そうだな。」

皆素直に楽しみに喜んでくれて助かる。こちらにも案内に熱が入る。

「まあこんなところで立ち話するのもアレだ。案内するよ。」

一行は天界方面の入り口から入り、上に登つていく。そして雲を抜けるとそこには和風な感じだがどこか近未来的な世界が顔を表すのだった。

武志「やっぱり神として威厳のある世界にしたいと思つたのと、下界にある神社やかつての都市みたいな感じにしたんだよな。」

「流石ねえ…。。」

これには千古も驚きを隠せないようだ。

「流石お父様はセンスがありますね♪」

「とても洒落た世界ですね。」

「流石だな〜」

この三人も素直に感心してくれて嬉しい。頑張つて考えた甲斐があつたものだ。

「それで、このメインストリートを抜けると、環状になっている道があるのさ。」

「確かにここからでは分かりにくいけど輪状になっているわね。」

「この輪を十字に貫くようにメインストリートがあるんだけど、この真ん中の建物が神界での私たちの家だな。ここから高天ヶ原の家に行けるぜ。」

と、扉の先に入りながら言うが、真ん中の建物は高天ヶ原の家よりもはるかに豪華で、和風のビルみたいな感じがする。そして真ん中には高天ヶ原へと続く光の柱が立っている。

「ここに俺らは住めるのか…。」

「流石ねえ〜♪まあ高天ヶ原からは出ないだろうけど。」

「これを須佐之男が見たらなんて言いますかね…。」

「すごい！とても豪華だ〜！」

皆驚いているようで何よりだ。

「まあとりあえず神界はこんな感じになっているから、これからはここに神達を住まわせるよ。」

「そうね♪早速神達を呼んでくるわ♪」

こうして新たな神界と呼ばれるところが出来、そこには神達が住まう事となった。神達の反応も良く、皆喜んで住み始めたという…。

PART・25 自立という名の家出

再開発も終えて気ままに休んでいるとある日の事。千古が自室の扉をノックして入ってくるのだった。

「武志く、理都何処にいるか知らなくい？」

「なんだいきなり…。いや知らないが。」

「前に案内されたときから帰ってきた後どこにも見当たらないのよ」

「そんな事言われてもな…。まあ一緒に捜そうか。」

「ありがとう武志♪」

「とりあえずこの家はくまなく探したのか？」

「勿論♪能力まで駆使して探したけど見つからなかったわ♪」

「なら天界と下界だな。いるとしたら。急いで捜すぞ。」

「分かったわ♪」

と言つて、二人はその場から離れる。

(まあ母さんには黙っていたが大体の心当たりはあるんだよな…。)

と心の中で呟き、その場所へ向かう。それは天界の隅にある桃の木が群生している森。その中の小さな広場みたいところに理都はよくいる。

「やつぱりいたか。」

「ああ、誰かと思えば武志か。」

やつぱりここにいたようだ。武志は本題を切り出す。

「母さんが探してたぞ。早く向かった方がよくないか？」

「ああそうだな…。ところで武志よ、」

「ん？なんだ？」

理都がいきなり質問を投げかけてくる。

「俺さ、この神界から家出して下界に永住しようと考えているんだ…。」

と、いきなりなことをカミングアウトしてくる。

「いきなりだな。」

「いきなりだろ？でもさ、考えてみたんだ。このまま神界でおふくろ

の元で働いているのもつまらないなとさ。」

「確かにな…。」

確かに神界にいる間は休みもあるが、ほぼ母さんもとい全能神千古の元で雑用や、神としての仕事をするだけだ。それに神界や天界は何の面白みもない。それに比べたら下界は日々変化に富んでいるため暇しない。私も下界に憧れているからよく分かる。

「それでさ、お前はと思うよ。」

「ふむ、私も下界に憧れているフシがあるからな。いいだろう。応援しよう。」

「ありがとうな。」

「いいさ。とりあえず家に戻ろうか。母さんも探してるし。」

「そうだな。」

二人は高天ヶ原の家に戻るのだった…。

「母さん、見つけたぞ。」

「すまないな。心配かけて。」

「いいの、無事で見つかって何よりよ。」

「それでなんだが、一つ大事な話がある。」

「いきなりね、まあ言ってみなさい。」

「俺、下界に移住したいんだ。こんな変化のない毎日より日々変化している下界の方にいたいんだ。」

理都が先ほどの事を伝えると、自分もカミングアウトする。

「その事なんだが、私も下界に移住したい。」

「えっ…。」

「二人が地上に移住ね。」

理都は想定外だという感じで驚き、千古は悩んでいるみたいだ。

「いやまあ私のかわいい双子たちの願いを受け入れてあげたいのは山々なのよ。ただ、そうすると他の神達との区別がつかなくなるし、貴方達だけにしかできない仕事もあるから、そこをどうするかなのよ。」

と、理由を述べて遠回しに却下してくる。だが武志はとある案を思



いついた。

「だったら私の能力を使って分身を作ればいい。まあ私の場合はユレイドスが代理を務めることができると思うが。」

「それはいい案だな！おふくろ！その案じゃダメなのか？」

「それならいいわよ♪だけど本当に作れるのかしら？」

「ああ。勿論作れるさ。」

勿論言ったからにはやらなければならない。まあ神様を作るのは簡単だし、能力を使いこなせるようになって人間を生きのまま創ることもできるようになったから苦ではなくなったが。ただ、かなり疲れるし、使いすぎると世界のバランスが崩れるかもしれないので人間はあまり作らないが。

「だったらその案を採用するわ♪武志、今すぐ分身を作って頂戴。」

「分かった。」

そう言って武志は理都の分身を出現させる。

「理都のはできた。私の代わりはユレイドスがやってくれるから問題ないだろう。」

「分かったわ。だったら今日は送別会を開きましょうか♪二人の旅立ちを祝って乾杯しましょう♪」

「ハハッ！そうだな！」

「そうだな。最後の夜を楽しもうか。」

こうして二人は送別会という名の飲み会を行い、最後の夜を満喫するのだった。そして翌日…

「なら私は出発しようと思う。」

「俺もそろそろ旅立つとするよ。」

「ええ♪二人共元気でね♪」

「下界に移住すると聞いたときは驚きましたが、お二人共お体には気を付けてください。」

「また機会があったら顔を見せに来てね。」

「ああ、また逢う日までな。」

と、四人が出発に見送りに来てくれたのだった。

「ありがとうな。また機会があればちよつと顔を出すよ。」

「じゃあな皆。そしてこの神界よ。」

「さようなら〜」

という感じで二人は下界に降り立つのだった…

「さてと、下界に着いたがお前は どうするんだ？」

「俺は適当に山にでも籠って修行しようと思う。そういう武志はどうなんだ？」

私はこの近くにある都に身を置こうと思っている。そこで今の人間たちの生活とかを観察しようかな。」

「そうなるよここからは別行動か。」

「そうなるな。」

「そうか。ならお互い下界… いや地上で頑張っていこうや。」

「そうだな！ならここで別れだな！」

「そうだな。じゃあな武志！」

「理都も元気でな！」

二人共こう言って別れたのだった…。二人の地上暮らしはここから本格的に始まるのだった…。

## 第四章 飛鳥の都の聖徳伝説 PART・26 いざ都へ

武志は理都と別れ、都のある方に歩いて向かっていた。

「はあ…：しかし遠いなあ…：。」

武志はかれこれ10kmぐらい歩いている。神の感覚からしても流石に遠いようだ。

「仕方ない…：目立つが飛んでいくか…：。」

と、武志は飛んで向かうのだった。

(あれ…：都まだ見えないのか…：?)

かれこれ30分ぐらい飛んでいるが、所々に集落はあれど都は見えない。それもそのはず、武志達が降りたところはこの世で一番高い所の麓。つまり富士山麓なのである。この時代の都は都は現代でいうところの奈良県にあるため、ちよつとやそつとの移動では着かないのである。

(あのくらい近いと思ったのだが…：やはり実際に移動しないと分からないことも多いんだな。)

そう。天界や神界から見たら日本なんてとても小さいが、実際に降りると割と広いのである。そしてかれこれ五時間弱飛んでいると、

「はあ…：やっと都が見えてきた…：。さて、近くにでも降りるとするか。」

と、近くの林の中に降りる。

「さて、衣服もこのままじゃいけないよな…：。服装さえ分かれば自分で作れるが…：手ごろな奴は…：いた！」

と、近くにいた都に向かう人を隠れて観察する。

「よしよし。なら…：。」

と、その人の服を見よう見まねで創造する。

「あとはこれを着たら…：。」

と、武志はその服を着て、元の服をチェルベツ口の板に収納する。「なら私も都の中に潜入しますかね。」

と言って、都に入っていくのだった。

「やっぱり都は活気があっていいね。」

武志は都をふらついていた。

「しかし宿はどうするか、最悪そこらへんに簡易的な拠点創って生活するけど…」

そんなことを考えていると曲がり角で

ゴチン!

という音がして、その瞬間私は視界が90。くらい傾いているのだった。そして私の都の記憶もここで途切れているのである…。

~~~~~

…

武志は我に返ったように起きる。

ガバツ!

「あれ… 私は何を… そうだ何かにぶつかられて…」

「大丈夫ですか? 私の従者が飛んだご迷惑を…」

と言われ、大体の事情を察する。恐らくそこで盗み見している従者の銀髪の子にタックルをされたのだろう。

「ああ…、すまないね、」とところで貴方は… ?そしてここは何処だ… ?」

「ああ、名乗るのが遅れましたね。私は豊聡耳神子。聖徳太子の名で世間には知られていますね。そしてここは私の家です。貴方が倒れて動かなくなつたので私の家に運んで看病していました。」

私も名乗らないといけないと思つたが、どう名乗るか考える。聞いた感じ割と偉い人みたいなので変に名乗ると自分の正体がバレる可能性があるからだ。そして考えた末、

「私は洩矢武志だ。そしてあそこで盗み見しているのが貴方の従者か?」

名前を特に変えずに名乗る。同じ名前だと分かつて偶然で通るだろう。そして従者がこつちを見ていることも一緒に伝える。

「え… ?」

と、神子が後ろを振り返ると、その従者が気付いたのか逃げだす。

「あつ… 私の従者が重ね重ねすいません。」

「いやいや、元気があつていいんじゃないですかね？」

「ところで貴方見たところ旅人みたいですが宿はどうされるのですか？」

「いや… 特に決めていないが…、ところでなんで私の思考が読めるんだ？」

「私の特技…、と言ったら変ですが、耳が良いんですよ。あの時貴方が呟いているのがかすかに聞こえたので。」

「ああその時か…、なんか恥ずかしいな…。」

「話を戻しますが…、それで当てがないのなら私の家に泊まりませんか？ 貴方には失礼なことをしてしまったのでその償いも込めてなのですが。」

「ならお言葉に甘えて泊まりましょう。」

「そうですか。でしたらそろそろ夕餉の時間なので行きましょうか。」

「そうだな。」

と、武志は神子に案内されながら夕飯の席へ向かうのだった。こうして、武志の都での生活が始まるのだった。

PART. 27 夕飯の間

「ここです。」

神子に連れられてやってきたのは大きな部屋で、そこには先ほどの銀髪の子と、緑の髪の子が座っていた。

「皆様初めまして。洩矢武志と申します。今日はここに泊まることになりましたよろしくお願ひします。」

「よろしくじゃ。我は物部布都じゃ。太子様の使いをやっておる。日中は本当にすまなかつたな！」

「おう私は蘇我屠自古だ。よろしくな。」

と、二人と自己紹介をして座る。

「それでは食べようかの！」

「そうですね。いただきます。」

「いただきます。」

と、給食みたいな挨拶をやって食べ始める。礼儀正しいのはいい事だ。

「おいしいですね。」

「そうであろう！太子様の作った飯が不味いわけなからう！」

「おい！そう言ってるけど作ったの私だからな？」

「二人共、今この場で喧嘩をしないでください。」

「はい……」

と、喧嘩を始めるが、神子の一言によって収まる。その様子を見るに、相当二人を扱うのには手慣れているなと思う武志であった。

「しかし今日はいつにも増して豪華じゃのう。」

「ええ。今日は年の瀬ですから豪華に作るようお願いしたのです。」

「ふふん！どうだ！私の本気を出した料理は！」

「本当に美味しいです。」

「どうってことよ！」

「そういえば貴方は先ほど旅人だとおっしゃっていましたが、前まではどのような旅をされていたのですか？」

「そうだな……私がいたところは諏訪の方の田舎で、そこから当ても

なく歩いて都まで来たって感じですね。」

「諏訪ですか……という事はとても遠くから来られているのですね。」

「まあそうなるな……本当に遠かったですよ。」

「おぬしがなく？」

布都よ、不思議がるのはいいがぺちぺちするのはやめてくれ。

「布都やめなさい。それより、今後はどうするのですか？」

「本当に当てがないからなあ、まあ暫くこの都でゆっくりするつもりだ。」

と、お茶を飲みつつ言う。

「でしたらその間私の家に泊まりませんか？」

と言われ、飲んでいたお茶を吹き出す。

「ゴホゴホ……なんでまたいきなり……」

「貴方は優秀そうな人材だからです。それに布都や屠自古も賛成のようですが？」

と、その二人の方をチラツと見ると、二人共にっこりと笑っているのだった。

「分かった……だったら暫くはここに泊まろう……。布都、屠自古、改めて暫く居候することになったがよろしくな。」

「こちらこそよろしくな！」

「ああ、歓迎するぞ！」

「それでは新たな住人が増えたことを祝って乾杯でもしましょう。」

「カンパニー！」

こうして四人は新たな住人の歓迎と、年の瀬のお祝いで豪華な宴を開くのだった。

夜が明けて……

「ふああ、よく寝た〜。」

あくびをしながら起きて扉を開けると

「おはようございますそしてあけましておめでとございます武志さん。割と早起きなんですね。」

「おお、あけましておめでとうございます。まあ、旅人の朝は早いからなく」

神子が朝の運動?というか座禅をしているのだった。

「えくと、何やっていますのですか?」

「ああ、日課の修行です。体を鍛えるために毎日やっているんですよ。よかったら一緒にやりますか?」

「なら私もやりますよ。」

と、朝一番から神子の隣で一緒に座禅を組むのであった。

こうして、武志は新たな地での生活を一步踏みだしたのだった…。

PART・28 馬と秦河勝の話

前回の話から数日が経ったある日の事、武志は三人と一緒にとある所に向かっていた。

「今日は一体どこへ行かれるのですか？」

「今日はとある国から馬が献上されたとの知らせが入ったので、早速一頭貰いに行こうかと。」

「馬か、楽しみじやのう！現在の馬もいいものではあるがそれを更に超える馬がほしいからの！」

「そうだな。」

と、指定された場所へ向かう。

「おお、太子様！こちらです！こちら！」

「おお、河勝か！」

神子は河勝と呼ばれている男の所へ向かう。

「すみません、あの方って誰でしようか。」

「ああ、貴方は初対面か。彼は秦河勝^{はたのかわかつ}。私が信頼している部下の一人だ。」

「ああ、君は新入りの方か。太子様から話は聞いてある。太子様もおっしゃっていたが私は秦河勝。太子様の側近である。」

「私は洩矢武志。新しく太子様の部下となりました。よろしく願います。」

「そんな固くならなくていい。気楽にやっついこうや。」

「はい。」

(とところであの河勝って奴……どこかで見た覚えがあるんだよな……)

と、一つの疑問を抱えながら話は進んでいく。

「話がそれだが、他国から良馬がたくさん届いてな。まあ、選んでいただくさいや。」

「分かった。お前も一緒について来い。」

「はっ！」

と、いつもの四人に河勝とその場にいた人を連れて馬を見て回る。「しかしどれもいい馬だな。」

「はい。その国もとても自信のある様子でした。」

「その赤い鬣の馬なんてかなりいい馬だろう…。おっ?」

「太子様。どうされましたか。」

「ああ、あの黒と白の馬を見せてもらえるか?」

「分かりました。どうぞこちらへ。」

神子はその体は黒く、脚が白い一頭の馬を見る。

「やっぱりな…。」

「やっぱり…。とは?」

「ああ、この馬はおそらく神馬だろう。河勝、私はこの馬をもらおう。」

「分かりました。」

「調使麿、この馬を外に誘導してくれ。この馬に早速乗ってみたい。」

「わかりました!」

と言い、外に出て人気のないところまで誘導する。

「こちら辺でいいだろう。さあ、君も乗りなさい。」

「はっはい!」

「武志、布都、屠自古。お前らは河勝とここで待っていてくれ。それでは私はこの周辺を試乗がてら一周してくる!」

そういうと神子はさっそく馬を走らせる。が、その馬は地面から離れ、神子ともう一人を乗せたままどこかへ飛び去ってしまった。

「太子様…。!」

「おい!? 太子様が飛んで行ってしまったぞ?」

「まあ大丈夫だろ。後ろの奴はともかく太子様なら。」

「お、おうそうだな。とりあえずこのまま待つて、返ってくる気配がないなら今日は解散しよう!」

と河勝が言うてからその場で何時間も待つが、神子が一向に帰ってくる気配もなく、

「帰ってこないなあ…。仕方ない。今日は帰るぞ。」

「仕方ないなあ、布都、屠自古、お前らは先に帰れ。俺は後から行く。」

「分かったぞ! お主も帰ってくるのじゃぞ!」

「先に飯作って待つてるからな!」

と言い、二人を先に返し、見えなくなったところで武志は河勝に詰め寄り、話をする。

「さて、お前に話したいことがいくつかある。」

「なんだ？聞いてやろう。」

「お前さ・・・人間じゃないよな。例えば・・・神とかじゃないか？」

「ハハハ！面白い奴だなあ。私はそんなに神々しいか。」

「いえ、摩多羅神じゃないですか？あの秘神と呼ばれる神ですよ。」

全てお見通しのため単刀直入に正体をばらす。

「うっ・・・お前そこまで分かっているのか・・・いいだろう。私は摩多羅隠岐奈。お前の言う通り秘神さ。そして、私の正体が一目で分かるなんてお前何者だ？」

「河勝・・・いや隠岐奈さんなら分かるんじゃないでしょうか。私は洩矢武志之創造神。これが私の正体ですよ。」

と聞かれたので自分の正体を正直に教える。

「なんと・・・貴方が全能神様が最初に創られた二大神の片割れでしたか・・・」

「ハハッ、私はそんな偉く思われていたのか。面白いなあ。」

「それで？どうしたんだ？私を神界に連れ戻していくのか？」

「そんなことはしないさ。ただ秘神と呼ばれたお前がなぜここにいたのかが気になっただけさ。」

「私はただ下界で平和に暮らしたかっただけさ。それに私がここで暮らして伝説を残せばその名は後世まで語り継がれるからね。」

「成程ねえ・・・なんとというか話に聞いた通りだな。『秘神は表には出ない。だけど目立ちたがって存在を誇示したがる』ってね。」

「私もひどく言われたものだなあ。まあ間違っってはいいのかな。とりあえず私を神界に連れていかないだけよかったわ。」

「しかしなんでそんなに神界を嫌がるんだ？」

「神界で閉じこもって生活するのが嫌だったからさ。下界は変化もあるし、何より、今こうして自分の正体を隠しながら楽しい生活を送っているからね。」

と、自分と全く同じことを言ってくる。

「ハハハ… お前はやっぱり面白い奴だな…。」

「おかしいか！」

「いやおかしくないよ。私もお前と同じ理由で神界から来たからな…。」

と、カミングアウトする。

「そうなのか…。まあとりあえずお互いの正体は黙っておこう。その方がお互い良いだろう？」

「ああ、いいだろう。もし破ろうものならお前を破壊神の名のもとにおいて消滅させるからな？」

「いいだろう。それではまた次の機会に。」

「ああ、またな。」

と言い、二人は別れるのだった…。

そしてその後、帰るのが遅くなったことについて、屠自古から雷を落とされるのだった…。

PART・29 邪仙の目的

神子が飛んで行った翌日、武志は神子がいない間も縁側で修業をしていた。

「お主はいつも修業をがんばっておるのお。」

「ん？ああ、布都か。」

「そうじゃ。お主はいつもその修業をやっておるが、それは太子様の修行と同じじゃろ？」

「そうだ。太子様から教えてもらったのさ。そういえばこれっていつもお前や屠自古もしているのか？」

「勿論じゃ。我も太子様ほど朝早くにはしないが、太子様に勧められていつもやっておるぞ。」

「ハハハ。太子様はすごいなあ。」

「そうじゃろ？なんたって太子様なのじゃから！」

「布都！お前ちよつとこつち来い！」

「屠自古が呼んでおるな・・・じゃあまたな！」

と言って布都は呼ばれた方向に走っていく。

「なら私も今日はこのくらいにしておくか。ところでそこのお前、分かってるから出てこい。」

すると空間に穴が開き、そこから青い髪の胡散臭い女性が出てきたのだった・・・。

「あらあら、見つかってしまいましたわね。」

「お前誰だよ。」

「失礼、私は霍青娥ですわ。青娥娘々と呼んで下さいね。」

「なら聞くぞ青娥。お前の正体は何だ？そしてなぜここに来たのかを押しえてくれ。」

「あらあら。私は仙人ですわ。そして太子様に仙術の凄さを教えるために来ましたわ。」

「そうか。太子様は現在外出中だ。用がないなら帰れ。」

「そんな冷たいこと言わずに、貴方も仙術をやってみないかしら？仙術を習得すれば仙人として不老不死になることができますわ。」

不老不死は人間にとって魅力的だろうが、武志は神であるため、元々不老不死である。故に自分には必要ないと感じた。

「それはすごいと思うが、私は興味ないからやめておくよ。」
すると青娥は残念そうに、

「あらく、残念ねえ。太子様はやろうと考えているみたいなのに。」

「そうなのか。だったらその手伝いくらいはやろう。」

「ありがとう。なら私は帰らせていただくわね。」

「分かった。あと最後に一つだけいいか？」

「なんででしょう？」

「お前… 邪仙だろ？」

と、気配を感じて思ったことを言う。

「あらく、バレてしまいましたか。そうよ。私は邪仙なのよ♪ホント。困っちゃうわね♪」

と、かわい子ぶった調子で言う。

「邪仙なら尚更早く帰れ。裏があると困るからな。」

「そんな裏なんてないのに… まあいいわ。また後日出直すわね♪」

と、また空間に穴をあけて帰っていくのだった。

それから二日後…

武志は布都と屠自古でいつもの修行をしていると、

「ただいま！」

「うおつ、太子様！」

「太子様おかえりなさい！」

「おかえり太子様…。どこまで行ってきたんだい？」

「えくと、東国の方まで飛んで行って、信濃の国まで飛んでいきましたね。」

「それはまた遠くまで…」

「まあ私は無事に戻ってきましたから。調使磨！この馬を厩舎まで運んでくれ。」

「はっ！」

と、その馬を厩舎まで引いていく。

「時間も時間だし、屠自古。飯の準備をしてくれ！」

「分かった。太子様も戻ってきたことだしやってやんよ！」

「貴方達も私がない間修業をやってくれて嬉しいです。よくがんばりましたね。」

「勿論じゃ！」

「日課としてがんばりましたから。」

「それよりこんなところで話すのもアレですし、中に入りましょうか。」

「そうだな。」

「早く飯が食べたいぞ！」

「布都、はしたないですよ。」

「ハハハハハハ！」

三人はその様子を見て笑い、また四人そろったいつもの日常へと戻っていくのだった…。

そして神子が乗っていた馬は後に神子の手によって黒駒と名付けられたのだった…。

PART・ 30　そして語り継がれる伝説

夕飯の時間になり、武志と神子たちの四人でご飯を食べる。それはいつもの光景だった。

「おかわりじゃ!」

「はい。」

と、本当にいつもの光景だが、神子は何かに迷っているような顔をしていた。

「太子様、どうかなされましたか?」

「あ、いや、何もない。ただ考え事をしていただけだ。」

「そうですか。」

(おそらく青娥の言っていた仙人についてだろうな。まあこれに関しては私からは何も言えないからな...))

そして数分間経った頃神子がいきなり吹っ切れた感じで口を開く。

「決めました... 私、豊聡耳神子は仙人になろうと思う!」

(ついに決心したか...))

「えっ!」

「それは誠か!」

「ええ。今の世は仏教によって支配され、我らが信仰している道教は衰退の一途を辿っている!だから私は一度眠り、また時が来た時に道教を広めようと思う!そして貴方達は自分たちの道がある。自分の意志で私についていくか、私を見送るか選択してくれ!」

神子はそう述べると、二人は考え始める。

「我は太子様についていく!それが我の道じゃ!」

「ああ。私もついていこう!太子様と一緒に死なんて怖くない!」

と、二人共神子についていく決心をした。

「二人共... ありがとうございます。」

「ああ。太子様... いや神子さんの意志はしかと聞いたさ。私は今の世を生きるが、また生まれ変わったら逢おう。」

「そうですか... 武志さんは行かないのか。少し寂しくなるが武志さんも元気になってくれ。」

「ところで……そろそろ出てきたらどうだい？青娥。」

そういうと壁の一部に穴が開き、青娥が入ってくる。

「流石ね〜武志さんは♪」

「誰じゃ？」

「この方が青娥か？」

「そうですが……なぜ武志さんがその名前を……？」

「いや数日前に会った……。」

「あ、分かった。」

「しかし私をすぐに見破るんだもの♪やっぱり貴方仙人にならないかしら……」

「断る。私は今の世を満足に生きればそれでいいからな。」

「残念ね〜」

「ところで……話は聞いていたんだろ？」

「勿論よ♪彼女らがしつかり蘇るようにサポートはするわ♪」

「心強いな。」

「ところで……武志さんはもう仙人にはならないのですよね？」

と、寂しそうに聞いてくる。

「ああ。まあ、さつきも言ったけど、俺がまた生まれ変わって逢えたらその時はまた仲良くしてくれ。」

自分は死ぬことは無いため、神子が蘇ればまた逢うことはできるのだ。そんなことを考えながら武志はさらに口を開く。

「ええ。また蘇ったときはよろしくお願いします！」

「我も頼むぞ！」

「私の事も覚えとけよ！」

「ああ……皆ありがとうな。」

「ところで眠りにつくまでどのくらいあるのじゃ？」

「大体2〜3週間後よ♪だからそれまでは今の時間を大切にしているね♪」

「分かったぞ！」

そして三週間後、彼女たち三人が眠りにつき、彼女たちの葬儀が始まった。

「太子様……、貴方は良い人でしたよ。」

「…… そうだな。また来世でも幸せになつて下さい。」

と、河勝と武志で別れの言葉をかける。

「私が太子様に貰った面、永遠に大事にしますよ……。」

「私が太子様から貰ったご恩は絶対に忘れません。居候の身ながら側近として屋敷に止めてくれて本当にありがとうございます。」

そして葬儀が終わって、河勝と別れた後、武志は誰もいない屋敷に戻つてたそがれる。

「……。」

「どうしたの？ やっぱ寂しいのかしら？」

何も言わずただ黙っているだけの自分に話しかけてくる。

「いや、青娥……。」

「何かしら？」

「彼女たちが迷わないようにしっかりと道を示してくれよ……？」

また元気な姿で合えるように願いを込める。それに対して青娥は笑顔で答える。

「勿論よ♪」

その言葉が聞けただけでも満足だった。そして後ろを振り向き、

「私はもうしばらくここにいたいよと思つているが、また何か手伝つてほしいことがあつたらいつでも訪ねてくるといい。」

「分かったわ♪ それじゃあお元気で♪」

と言つて壁にめり込んで消える。そして上を向いてこう呟く。

「神子様、布都、屠自古……、次逢うときはいつになるか分からないけど、また逢えたらその時はよろしくな……。」

と呟く。そして武志は不自然な場所におかれた箱に気づく。

「そういえばこの箱見覚えがないな……。なんだ……？」

箱のふたを開けるとそこには一つの面と、手紙が添えてあつた。

「何々……？」

” 武志さんへ 今までありがとうございます。最初は居候の身でしたが、私の側近として今まで勤勉に働いてくれたことを誇りに思う。この面は河勝に送つた物とは別の物だ。【未来の面】とでも名付

けておこうか。また遠い未来で生まれ変わった君と会えることを祈るために私が手作りした面だ。その時を私は楽しみにしているよ。

豊聡耳神子”

と書いていたのであった…。

「これが未来の面か…。ありがとうございますごさいます神子様。」

そして武志もまた一人の生活に戻っていくのだった。

PART. 31 常世神伝説の幕開け

太子様こと豊聡耳神子とその従者たちが眠りについてから数年間
が経ち、武志は河勝からとある話を聞くのだった…。

「久しぶりだな。」

「おう河勝か。久しぶりだな。ところで、話ってなんだ？」

「ああ、お前はいつも単刀直入に話してくるな。」

そう言われるが、早めに話して損はない。武志は無駄話あまり好きではないだけである。

「まあいい、話したいことだが、駿河国に新たな神を祀る宗教が出来たってのは知っているか？」

「知らないな…。なんとという神を祀っているんだ？」

「確かその神の名前は…常世神だ。とこよのがみ神体は蝶の幼虫だったはずだ。お前はこの神について心当たりはないか？」

武志が創造神というのは河勝もとい隠岐奈も知っているため、おそらくこの神についての情報を聞きに来たんだろう。

「いやそう呼ばれている神に心当たりはないし、幼虫の神というのも分からんな。おそらく信仰を広めるためにつけた俗称だろう。」

「そうか…。それでなんだが、その宗教が少し危険でな、一緒に遠征してその宗教を滅したいのだが、手伝ってくれぬか？」

と、協力を申し出られる。

「分かった、協力しよう。その代わりだが、その宗教について教えてくれないか？」

「ああ、その宗教なんだが、教祖はおおうべのおお大生部多でな、地方の祈祷師だ。」

「ふむ。」

「祀っている神は先ほども言ったように常世神。そして何が危険かという、大生部は『それを祀れば貧しい者は富み、老いた人は若返る』と人々に吹聴して、村人から財産を巻き上げ、経済を停滞させているらしい。しかもその村人は虫を台座に安置し、踊り狂って富が来るのを待っているらしい。」

「とんだ詐欺宗教だな。」

「とまあ、その宗教についてはこんな物だな。遠征は一週間後から行く。遅れるなよ。」

「分かった。またな河勝。」

と言つて二人は分かれる。そして一週間後、遠征の時がやってくる。

「おお河勝、久しぶりだな。」

「ああ、武志か。それじゃあ向かうぞ。」

因みにだが、武志は普通の馬に乗っている。本来なら黒駒でひとつ飛びたいが、黒駒は太子様がなくなった後、一週間ぐらい絶食してなくなっている。

くこうして馬を走らせること数時間後く

「着いたぞ。ここが駿河の国か。」

「ああ、明らかに邪悪な気が漂っているな。これも大生部多と常世神のせいかな。」

「そうだろうな。行くぞ。」

と、二人は駿河の町の中心部に向かって馬を走らせる。

「しかしここまできると酷いなあ。」

そう。町民のほぼ全てが往来で馳走を振る舞い、狂ったように踊っているのだ。

「私も話には聞いていたがまさかここまでとは… 急ぐぞ。」

「そうだな。」

武志と河勝はさらに急いで馬を走らせる。そして中心部にある大生部多の屋敷の裏にたどり着く。

「とりあえずここに馬を停めて、裏からこつそりと進入するぞ。」

「待て、その前にこれを持っておくといい。」

武志は古代都市で使っていた型の通信機と、変装用のペスト医師の衣装を出す。

「これなら顔バレもしないし、帰り際に血がついて目立つこともない。それに屋敷の中はどうなっているか分からない。通信機を持っておいて損はないだろう。あ、通信機というのはこれだ。遠く離れていても会話ができるものだ。」

と、軽く通信機の説明を交えながら、変装用の衣装と通信機を渡す。「あ、ああ。そうだな。ところで、見たことない衣装だな。これはなんだ?」

「ああ、古代の都市にいた特別な医者が身に着けていた衣装さ。」
「古代の都市…まさかな。でも創造神なら知っていても可笑しくないか。」

「ん? なにか言ったか?」

「いや。何も言っていない。それより早く向かわないか?」

「そうだな。行くぞ。」

と、二人は衣装と通信機を身に着け、塀を超えて屋敷に潜入するのだった…。

「ふむ。外から見てもそうだが、割と広いな。」

「そりやそうだろう。彼奴は民から巻き上げた富で屋敷を大きくしているからな。」

「本当にひどい話だ…っと、前に二人いるな。どうするか?」

「奴らは大生部多の部下だろう。奴らの生死は問わない。」

「分かった。」

そういつて武志はチェルベツコの板から唐夜叉丸を二本とも出し、素早く斬りかかる。

「大生部多様が布教している宗教は本当に面白n」ザシユ!

「そうだ…っておいどうし」ムグウ!

一人は声を上げる間もなく首が胴体とおさらばし、もう一人も抑え込む。

「俺の質問に答えろ…大生部多と常世神は何処にいる?」

「知らん! 誰がお前なんか教えるか…!」

「教えないならいい。そのの奴と同じようになるだけだからな。」
「くう…分かった！教えるから放せ！」

そう言うので拘束を緩める。

「あの方はこの屋敷の一番奥にいる。常世神は知らんがいるとしたら同じ部屋だろう。どうだ？言ったぞー！」

「分かった。ありがとう。あと人の話はよく聞くことだな。」

「え？どういう」ザシユ！

と、もう一人の首も斬り落とす。

「お前もかなり惨いことするな。」

「嘘はついてないだろう？それに奴は洗脳をされている様子はなかった。敵には厳しく、味方には優しくが私の戦闘の、人付き合いのモットーだ。」

実際、言ったから命を保証するとは一言も言っていない。それに戦場や侵入でそんな甘いことをしていたら逆にやられてしまう。

「ところで、さっきのは聞いていたか？」

「ああ。勿論聞いていた。どうする？このまま向かうか、他の奴も無力化してから向かうか？」

「後者で行こう。常世神と戦っているときに邪魔が入ってほしくないし、勅令とはいえ、こんなことをしているとところが広まってほしくないからな。」

「分かった。ではここから別行動でいいか？」

「いいだろう。それじゃあまた一時間後にここで落ち合うぞ。」

「それでいいだろう。ではいくぞ。」

と、二人別れての探索が始まる。武志は、出会う奴は全て殺し、女性などは拘束させて気絶にとどめた。こうして、二人共大きな騒ぎになることもなく、一時間経過した。

「どうだ？何かあったか？」

「おそらく大生部多がいるだろう部屋の扉があった。そこに向かうぞ。」

「了解。」

二人はその場所まで移動する。

「ここだ。」

そこには明らかに異質な雰囲気とする扉があった。

「これはいるだろうな……。」

「いよいよ元凶とご対面か。」

と言つて、チエルベツロの板からカタストロフィーを取り出すと、扉に振り下ろして派手に扉を破壊して突入するのだつた……。

PART・32 常世神伝説の終焉

武志と河勝は扉を破壊して突入する。そこには大生部多と常世神と思われるアゲハチョウの羽が生えた少女がいた。

「お前が世を混乱に陥れた宗教の教祖、大生部多か！」

「いかにも。我が大生部多だ。」

「お前には今後の為死んでもらう！この秦河勝いざ参らん！」

「ほう、我とやろうというのか……。面白い……。常世神よ！我に力を与えて下され！」

と、叫ぶと、隣にいる少女が手を天に掲げる。すると、大生部多の頭上から光が差しこむ。

「これだ……。これだ……。常世神様よ感謝いたします！」

「強化されたな……」

と言い出す。おそらく常世神から力を分けられたのだろう。河勝もとい隠岐奈なら苦戦するだろうが、私は創造神、神達の中でもトツプ3に入る神だ。信仰が厚いとはいえ低級の神には負けないだろう。っと、慢心は良くないな。とりあえず目の前の奴に集中しなければいけない。

「そして……。こうだ！」

すると周辺に邪悪な気が漂い始める。

「扉は封鎖した。これでお前らはここから逃げることはできまい。」

しかも逃げ道まで封鎖したと来た。完全に彼奴はやる気のようにだ。

「いけるか？」

「勿論さ。援護は私に任せておけ。」

「心強いな。」

「大生部多！お前はここで残酷に住ね！」

「面白い！我らの神の力ここで存分に見せつけてお前らは永遠に晒し者にしてやろうではないか！」

と、河勝らvs常世神らの戦いが始まるのだった。

「ここには彼奴以外の人間はいないし、扉もあかない。能力や神器は使い放題だろう。」

「ハツハツハ！好条件だねえ。なら容赦なくいかせてもらおうか。」

「ほう…暢気に会話する余裕があるか…だがその余裕はいつまで続くかな！」

と、刀を持って斬りかかろうとしてくる。すると、
ジャキン！

大生部多の刀は綺麗に真つ二つになる。そう。武志が素早く唐夜叉丸・焰を抜刀したためだ。

「なっ…」

「扉の封鎖ありがとよ！」 ジャキン ザシュ！

さらに唐夜叉丸・雷も抜刀し、帯電させて大生部の体を貫く。

「グワアアアアア！… まだだ… まだ終わらんとぞ… 神の力を存分に見せてやる…！」

「口ほどにもない奴だ。それと、喧嘩を売る相手を間違えたな。」

「なっ」 ザク！

いつの間に後ろに回ったのだろうか。河勝が後ろから近距離で弓矢で華麗に狙撃する。頭に矢が刺さっているためもう再起不可能だろう。

「やるな… 河勝」

「そっちこそな… しかしあれだけ大口叩いた割には弱すぎるな…。」

「神から力を分けてもらったとはいえ所詮人間だ。それに私が上位の神というのもあるだろう。」

そう。確かに普通の人間よりは手ごたえがあったが、低級の神の力をもたらった人間と上位の神では力の差がありすぎたのだ。

「さて、次はお前の番だな常世神。」

武志は椅子に座っている常世神に向かって吐き捨てるように言うのだった。

「くっ…」

「どうした？戦うつもりがないと？」

「貴方は一体何なのですか！その刀はあの創造神様の剣のはず！どうして貴方が持っているのですか！」

と、質問してくる。

「答えは簡単だ。私とその創造神なのだからな！」

と、自身の気をまき散らしながらトラウマが残りそうな顔で返す。

「くっ… 来るなあ！」

攻撃を仕掛けてくるが自身の気の前では攻撃も意味をなさない。実際、放った弾幕が消えていくのだから。

「安心しろ。殺しはしない。ただし暴走しないように力を抑えるだけだ。」

「来るなあ！」

もう為す術がないのか、攻撃が弱まる。

「創造と破壊の神のもとにおいて云う。目の前の神は弱化されて永遠にこの世界から追放される！」

と、カタストロフィーを取り出し、常世神に振り下ろす。そして、まき散らしていた気を消す。

「すまないな河勝。こんな汚いやり方で。」

「構わんさ。ところで常世神はどうしたんだい？」

「常世神なら神ではない別の何かになったさ。それが人間か妖怪かは知らないけど。」

「そうか… では目的も果たしたし帰るか。あ、そうそう。大生部の首を取ってさらし首にしよう。」

と、歩こうとしたその時

ガタン！

「あの押し入れに何かいるな…」

「ああ、一斉に突撃するぞ。」

と、小声で話した後、静かに近寄ってその押し入れの扉を開けようとする。

「行くぞ… 3… 2… ぐわっ!？」

いきなり押し入れの扉が外れ、武志は防ぐことが出来ず直撃する。

「河勝！」

「分かった！」

河勝が逃げたやつを追う。すると一分後、

「捕まえたぞ！」

そこには緑色の着物を着た子とピンクの着物を着た子がいたのだった……。

「放せ……！」

「よくもお父様を殺して！貴方達何者なの！」

「彼奴子供がいたのか……それも双子の。」

「こいつらはどうする？」

「私は子供は殺さない。私のもとで働かせてあげよう。」

武志は見てしまった。それは河勝ではなく摩多羅神としての顔をした河勝がいたのだった……。

「とりあえず初仕事だ……大生部多を晒し首にしろ。町中に奴の最後を見せつけるのだ。」

「……はい」

「」

「……分かった。」

「……お前も残酷な奴だな。二人を操って自分の親を晒し首にさせるなんて。」

「ハッハッハ。そのかわり二人は今後とも永遠に私のもとで働けるのさ。これ以上嬉しいことはなからう。」

「どうだかな。」

そうだった。河勝は摩多羅神。その実態は誰もわかっていないが、まさかそんなに残酷な奴とは思わなかった。

「とりあえず戻ろうか……。」

「そうだな……。」

二人は都へ戻るために馬を走らせるのだった。その途中、

「なあ、私はそろそろ都から出ようと思うんだ。」

「いきなりだな。」

「もう都にいる理由もなくなつたし、また新しい世界を見たいと思っ

てな。」

「そうか。実は私もな、都を去ってまた隠居しようと考えているのさ。」

「そうか。残念だな。」

「ああ、これからは【後戸の国】。まあいつも私がいた空間だな。そこに戻ろうと思う。お前ならいつでも来ていいぞ。」

「そうか。ありがとうな。」

そうして二人は都に戻り、その一週間後、武志は都から去り、後を追うように、その3週間後河勝もまた、二人の少女と共に都を去ったという……

第五章 妖怪寺の友情物語

PART・33 修行の果てに

武志は都を出てから長い間各地を転々としていた。そしてそのような生活が続いて約150年…。武志はとある山で修業をしていた。そして色々な武器のこなしや、能力の改善が見られた。更に武志は能力を一つにまとめ、「万物を司る程度の能力」とした。そんなある日、気分転換に少し遠めの山に来ていた時の事だった。

「しかしこの生活にも慣れたな。確か最後の町にいたのが数十年前だったっけか。そろそろここから出てても良い頃かもしれないな…。ん？」

そこには荷物を持って山を登る女性がいた。恰好からおそらく尼さんと思われる。

「はあ、こんなところに一人で来るのも珍しいな。仕方ない、ちよつと話を聞くか。」

と、その女性の所へ武志は向かう。

「ちよつと、そこの方、こんなところに一人できたら妖怪やらがいて危ないですよ。」

その女性は振り返り、

「あら、すいません。私は大丈夫ですよ。すぐその寺まで行くだけですから。」

「いやいや、危ないですよ。だったらそこまで荷物を持ちましょうか。」

「あら、大丈夫ですよ。いつもそこまで歩いているので…。ほら、迎えが来てくれましたよ。」

武志はその方向を見ると、そこには、青い頭巾をかぶって、雲を纏っている少女と、明らかに神々しい感じの少女がやってきたのだった。

（妖怪達…。でもそれにしては友好的だな…。それに微かに神力も感じる…。ただ者ではないな…。）

「すまない、この子たちは誰だ？」

「ああ、私と一緒に暮らしている子たちですよ。」

驚いた。この尼は妖怪と一緒に暮らしているのか。だったら襲われないのも納得できる。

「ところで貴方は誰ですか？」

「まさか侵入者！」

「まさか。違いますよ。この方は今さっきそこで手伝いを申し出てくれた優しい方ですよ。」

「そうだ。よろしくな。」

「いえいえ。侵入者じゃないだけいいですよ。最近は陰陽師とかいう妖怪を狙う輩が増えましたからね。私たちも安心して暮らせないのですよ。」

と、青い頭巾の子は言う。かつて都にいたときは妖怪も少なかったし、対抗する人間勢力もいなかったが、今はそこまで人間たちも活発になっているのかと、時代の流れを感じる。

「そうだ。せつかくのぐ縁ですし、私たちの寺に来ませんか？」

つと、いきなりの提案だな。まあ断る理由もないから行くんだが。

「じゃあお願いします。」

「分かりました。ではついてきてください。」

と言われ、案内が始まる。そして五、六分ぐらい歩いただろうか。恐らく目の前の尼さんが言っている寺にたどり着いた。

「では靴を脱いで入って下さい。」

「あ、お邪魔します。」

中に入ると、ネズミの耳をした少女がこちらを見ていた。

「おかえりなさい聖、ご主人、ところでその人は誰だい？」

「彼はお客様ですよ。お茶を淹れてきてください。」

と、ご主人と呼ばれた神々しい少女はそう言うと、

「ここは聖たち、あ、聖というのは」

「私ですよ。」

と、聖と呼ばれる先ほどの尼さんが割り込む。

「ここは命連寺。私はごこの住職であります聖白蓮と申します。そしてこちらが、」

「寅丸星です。毘沙門天の代理をやっております。そして先ほどお茶を汲みに行ったのがナズーリンです。」

「私は雲居一輪。そしてこちらが雲山ね。ここは聖に助けてもらった妖怪たちが住んでいるのよ。ところで貴方は誰かしら？」

「おっと、私は洩矢武志。そぐそこの山で数十年修業を行っている身だ。」

「武志さんでしたか。でしたらこの寺で貴方も一緒に修業を行いませんか？」

と、提案をされるが、

「いや、私の修行はおそらく誰もついてこれないだろう。だからそれはできないな。」

「そうですか・・・」

聖は少し残念そうな顔をするが、続けて、

「だが、君たちに少し興味がわいたよ。この寺に住むことはできないかな？」

すると聖は最初驚いた顔をしていたが、笑顔になって、

「はい、勿論いいですよ。私達命連寺の皆様はあなた方を歓迎します。」

と、武志の命連寺での生活が始まるのだった・・・。

そして、ナズーリンは忘れられていたのだった。

「悲しいな。ご主人。お茶を淹れて戻っても誰も気づかないし、なんか住人が一人増えているし。」

「ごめんなさいナズーリン。本当に忘れていたのよ」

PART・34 対ムラサ戦 雨降る夜の対決

昨日、夕餉の席で話して分かったことだが、この命蓮寺は住職の聖白蓮が、弟の命蓮から名を取って付けた寺で、その聖は、人間と妖怪は皆平等という精神の元、妖怪たちを保護しているらしい。これはそんなある日のお話だ。

「聖さん、どこからお出かけですか？」

聖が笠を被り、草履をはいていたので尋ねる。

「ああ、武志さんですか。そうです。今からここから離れた海に向かいます。戻ってくるのがしばらく後になりそうなので暫く寺の事をお願いします。」

「海か…なぜそんなところに？」

「その海にはあらゆる船を沈める舟幽霊がいると聞きます。今日はその舟幽霊を救いに行こうかと。」

「なるほどな…。」

武志はふとあることを思いつく。

「だったら、私もつれていってくれないかな。」

そう言った理由はただ一つ。聖がどのようなにして妖怪を仲間に行っているのかが知りたかったからだ。

「武志さんもですか…？勿論いいですよ。」

「分かった。なら行こうか。」

こうして二人はとも離れた海まで移動する。到着するころには大雨が降ってきたのだった。

「ここがその舟幽霊が出ると噂の漁村なんですが…」

「ああ、とても閑散としているな。おそらく舟幽霊に沈められて漁が出来ないからだろう。」

こういう漁村は、村の生計を漁業で賄っているため、その漁業が出来なくなると収入がなくなるため、村全体にも大打撃なのだ。

「とりあえずまずは話を聞いてみましょう。」

と、偶然いた村民に話しかける。

「すみません。この辺に舟幽霊が出ると聞いてやってきたのですけど、何か知っていることはありませんか？」

するとその村民はかすれた小声でこういう。

「あんた陰陽師の方かね…。あれは恐ろしい存在じゃ…。あいつはワシらの大事な船を沈め漁をできなくした…。しかもやつつけに来た陰陽師も壊滅。もうワシらにもどうすることもできずただ死を待つのみじゃよ…。」

「そうですか。では私が何とかしましょう。」

「やめときな…。あれはあんたら二人が戦って勝てるような奴ではない。死にたくなければすぐに帰るんだな…。」

「そうですか…。ご忠告ありがとうございます。」

そうして二人はその村民を後にする。

「どうしますか聖さん。村人たちも活気がないばかりか完全に自棄になってますよ。」

「諦めるのはまだ早いです。とりあえず舟を探しましょう。そして直接教えを説くのです。」

「分かった。」

二人は船を探した。船は案外すぐに見つかった。そして出航する。

「とりあえず沖まで出しましょう。あらゆる船を沈めると聞いたのでおそらくこの船も沈めてくるでしょう。その時に説法しますよ。」

「了解。」

武志は暫く舟をこいで、沖合2kmぐらいに差し掛かろうとした時の事だった。

「…む。聖、もう少し来たら沈めてくると思うぞ。」

「分かりました。武志さんも気を付けてください。」

「わかつて」

武志が言い終わる前に海が大荒れとなり、大きな波が武志たちを飲み込む。

「くっ！」 ブクブク…

「大丈夫ですか武志さん！」

「私は大丈夫だ！それより自分の心配をしろ！来るぞ！」

するとすかさず第二波が来る。第一波よりも強い波が武志たちを更に飲み込む。

「シシシ……！二名様ご案内。」

「そうはいくかな。」

「なっ!?」

武志はその舟幽霊の肩を後ろから掴んで言う。

「とりあえず痛い目見ろ！」

と言つてそれを投げ飛ばす。

「アイタツ！」 ザパーン！

「武志さん！戦つてはダメです！私が教えを説くので貴方は後ろで下がっていなさい。」

と聖が言つてきたのでおとなしく後ろに下がる。その時の聖はとも光り輝いているように見えた。

「ああもう！ひどいなあ！」

「申し訳ございません、私の連れが粗相をしてしまつて。」

「全く！お前らは何で沈まないんだよ！喰らえ！【転覆 撃沈アンカー】！」

と、宣言すると、特大アンカーが聖に向かって放たれる。

「聖！」

何という事でしょう。聖はそのアンカーを避けることなく受け止めましたよ。

「何!?!」

「貴方はこの船を探していたのでしょうか？」

そういうと、聖の光り輝いていたオーラが一つの光の船となった。

「その船は！」

「そう。貴方はこの船を探していたのでしょうか？だから違う船は全て転覆させてきた。違いますか？」

「その船は……！ああ、懐かしい……！」

「私達を乗せてきた船は、不慮の水難事故で沈んでしまいました。私の法力で新しい船を創りましたが、これは特殊な船で操れる者が居ません」

そう言いながら聖はその光の船ごとその舟幽霊に近づく。

「この舟を操るのは貴方です」

「……がと……」

「ありがとうございます。私はこれでこの呪われた海を捨てることができると……」

「いいのです。迷える妖怪を救うのが私の使命ですから。」

そういうと、二人は和解する。哀れな舟幽霊が仲間になった瞬間だった。

「もういいか？」

「ああ、武志さんですか。もういいですよ。」

「とりあえず色々聞きたいことはあったが……、とりあえず教えを説いたみたいだな。」

「ええ。この子是不慮の水難事故で船と共に命を落とし、その船に再び出会うために違う船をすべて沈めたらしいのです。」

「それは怖いな……。」

「とりあえず、もう暗いですしもどりましようか。その前に、名前だけいいですか？」

そういうと、セーラー服を着た舟幽霊はこう答える。

「私の名前はムラサ。あとは無いわ……。ねえ、新しい名前を付けてほしいの。あの呪われた海から脱出できた印として残しておきたいのよ。」

「そうですか。でしたら、これからは村紗水蜜と名乗りなさい。あと、私は聖白蓮と申します。」

「私は洩矢武志だ。」

「ありがとうございます……皆さん……。」

ムラサは泣きながらお礼をするのだった。

「さて、もう暗いですし戻りましようか。さあ、私たちの寺へ向かいませよ。」

こうして武志と聖の外出は幕を閉じたのだった……。

そして雨はもう止んで、空には満月が浮かんでいた。

PART・ 35 平穩と不穩

村紗が命蓮寺の一員となった翌日の朝のこと

「聖さんおはようございます。」

「あら、武志さん。今日も朝早いですね。」

「ああ。早起きは三文の徳とか言うからな。」

実際そうだ。早起きはいい事ばかりなので心がけよう。

「武志さん、そろそろ朝ごはんにするので他の皆様も起こしていただけませんか?」

「分かった。」

そう言って寝室に向かう。

「皆… 熟睡だな…。」

武志はとあるものを出す。そう。現代でいうところの目覚まし時計だ。

「時間をセットして… と、これで良し。それじゃあ私は厠にでも行つてきますかね。」

五分後、恐ろしいほどの大音量アラームが辺り一带に鳴り響いたそう…。

「全く、貴方は少し加減というものを覚えたらどうですか。流石にあれはやりすぎですよ。」

「そう言われてもなあ… ああでもしないと起きないんだよ。」

「しかしですね… あれは迷惑なのでやめてください。少し前にも熱湯を大量にまき散らして起こしていたじゃありませんか。貴方は基本的に強すぎるのですよ。」

武志は説教されていた。もうかれこれ1時間ぐらい続いている。

「君は本当に雑だねえ。」

「ナズの言うことは本当ですよ。貴方はもう少し丁寧に起こしてください。」

「お前らは黙つとけよ。文句あるなら早めに起きろ。」

「それは無理ですね。」

ナズーリンや星、一輪や雲山までもが武志に説教してくる。正直、

事の原因はお前らだろという感情が顔に出ないようにやり過ぎず。そして武志が聖の名前を呼ぼうとしたとき、それは起こった。

「ところでひじr」 ヒューン グサツ！

「!?」

いきなりどこかから矢が飛んできたのだ。しかも驚くべきはそれだけじゃない。その矢には手紙が括り付けられてあるのだ。

「聖… これは…！」

「ええ。おそらくこれはとても重要な手紙なのか、それとも…」

聖が口を噤んでいるので話をつなげる。

「とりあえず読んでみないか…？」

武志はそう提案する。

「そうですね。まずは読まないと分かりませんしね。」

「ですね。とりあえず開けましょう。」

聖たちは手紙を開封する。その手紙にはこのようなことが書いてあった。

『聖へ』

あなたの数々の功績は素晴らしい。だが、我々は貴方が妖怪を匿っていることを知ってしまった。妖怪は我らの敵であり、妖怪に味方する者は禁忌となつている。聖、貴方は本当に素晴らしい人だ。だから貴方をこんなことで失いたくはない。今夜、貴方の元へ向かい、最後の交渉をしようと思う。だから待っていてください。

帝と陰陽師一同』

これを聞いて皆は戦慄する。これは実質的な果たし状だからだ

「聖… これは…」

「ええ… とうとうこの時が来ましたか…」

聖は何か思う節があるようだ。そしてみんなに向かつて話し始める。

「皆さん、私は皆さんを守ります。だから陰陽師達と戦闘になるでしょうが、そうなったら皆さんは逃げてください。そして皆さんで隠れて暮らしてください。私はおそらく捕らえられるでしょうが気に

しないでください。私は皆さんのために戦いますから。」

と言う。聖は私たちを守る気みたいだ。だが、一輪が話す。

「嫌！私は聖と一緒に戦うよ。生きるときも死ぬ時も聖と一緒にだよ！」

それを聞いた村紗と星も、

「そうだよ！私たちは聖あつての私たちなんだから！だから一緒に戦うよ！そして聖も一緒に隠れて暮らそうよ！」

「そうです。私たちは聖に恩があります。今ここでその恩を返す時です。」

「全くご主人は… 私も手伝おう。」

「ああ。聖だけ犠牲にはできない。私も一緒に戦おう。」

ナズーリンと武志もそれに続く。

「皆… 本当にありがとうございます。」

聖は泣いていた。

「聖、まだ泣く時ではない。来る陰陽師達をどうするか考えないといけない。」

「でしたら私にいい考えがあります。」

聖は小声でその作戦について話し始める。

「ほう… やってみようじゃないか。」

武志たちは陰陽師戦に向けて準備を始めるのだった。

私は聖白蓮。この命蓮寺の住職です。先ほど武志さんを叱っていたらどこからか矢が飛んできて果たし状が届きました。そこには交渉をしようと書かれていましたがおそろくどちらにせよ私の妖怪たちは退治されてしまうでしょう…。私は妖怪たちを守るべくとある作戦を思いつき、皆様に話しました…。そして各自解散させたあと、私は武志さんに呼ばれて今、1対1で向かい合っています。

「武志さん、何の御用でしょうか。」

「なんてことは無い。ただ少し聞きたいことがある。」

聞きたいこと…。何でしょうか。

「いいですよ。何でも聞いてください。」

「いくつか質問があるんだが、一度に言っていていいか？」

「勿論いいですよ。」

「なら単刀直入にいこう。貴方は一体何なんだ？そしてあの力は一体何なんだ？あの村紗の時に使った光り輝く船や、錨を片手で受け止める力。あれはただの僧侶や陰陽師が使えるものではない。教えてくれ。一体あれは何なのか。」

それは予想外の質問だった。武志さんはあれだけで私の正体を不審に思ったのですか。確かにあの力は陰陽師からしたらあり得ない力。でも普通の人間には陰陽師と大差ない力です。武志さんは一体何者なのでしょうか…。

「いいでしょう。その質問には答えますが、少し私の昔話に付き合ってもらえませんか？」

「いいだろう。どうぞ。」

~~~~~以下、回想シーンが入ります。~~~~~

「私は昔、命連という弟がいたんです。命連はとても強い力を持ち、伝説の僧侶とも呼ばれ、軽々と鉢を飛ばし、その鉢でごうつくばりな長



者の倉を持っていったり、離れた場所にいる人間の病気を治したりという事をしていました。また、陰陽師とも協力して数々の妖怪から民を守っていました。ですが、その力の代償故か、体が弱く、病気にかかっていたことが多かったのです。そして私は命連から法力を学びました。私はもうその時にはだいぶ年老いていましたが、普段から命連の法力が詰まった飛倉で生活していたので、その法力は完璧に習得することが出来ました。」

「そうなのか。しかし、そんな年老いているようには見えないな。」

「ええ。因みにですが、その法力が貴方の気になっていた光り輝く船を作り出した時の力です。」

「成程。」

「それで、話はまだ続きますが、命連は結局私より先に病で亡くなりました。私は勿論嘆き悲しみました。あの時の悲しみは今でも忘れませんよ。そして私は死という物が極端に怖くなりました。『自分もいつか死んでしまうのだろう。』そんな恐怖がずっとありました。だから私は若返りの術を手に入れました。ですが、その力は法力よりは魔術の類だったのです。それは陰陽師、いや、人間達からしたら異端児扱いなのです。」

「だが今貴方はこうしてここにいらっしゃるだろうか？」

「ええ。私はその時まで表舞台には立ってなかったのです。それで、私はもう寿命の心配をしなくてよくなったのですが、次に感じたのは『この力が失われたら私はどうなるのだろう』という恐怖が頭をよぎるようになりました。先ほど私は魔術の類といましたが、ここ日本ではそれは妖術と大差ないので。つまり、私がこの力を維持するためには妖怪たちの力が必要なのです。妖怪たちがいなくなったら私のこの術が維持できなくなる。そうなったら私は死んでしまう。そうなりたくはなかったので裏で妖怪たちを敬い、助けていました。表向きは妖怪たちを退治していましたが、裏では助けてここに匿っていたのです。丁度、貴方が見ていた村紗さんのように。」

「成程な。という事はこれは自分の私利私欲のために妖怪たちを助けていたのか？」

「最初はそうでした。ですが、いろいろな妖怪たちを助けているうちにいかに妖怪たちが不憫な過去を過ごしていたか知ったのです。私はそれを知って、私が何とかしなければいけないと思いました。勿論、だからと言って人間たちに牙をむくわけにはいかない。だから私はここで隠れ住んでいるのです。そして表舞台で活躍するようになったのですが、どこからか私のこの秘密が漏れてしまっ、今現在に至るわけです。」

「成程な。結局お前は何なんだ？」

「妖怪も人間も皆平等という信念を持つ高僧ですよ。」

「ふむ。それで取引はもう妖怪たちを守るんだらう？」

「ええ。そのつもりです。」

「だったら気をつけろ。恐らく妖怪たちは交渉の結果にせよ退治されるだろう。この作戦が成功しなければ彼女たちに明日はないさ。」  
「…。」

「まあ、そういう事だな。では、私もそろそろ準備するでしょう。」

「ちよつと待つてください。」

聖は武志を呼び止める。

「貴方は… 一体何なのですか？」

「私か… そうだな… 一介の修行人というところかな。それ以上でも、それ以下でもない。」

「そうですか…。作戦、成功するといいですね。」

「ああ。それでみんなで暮らせたらいいな。」

そう言い残して武志は準備をしに向かうのだった。

PART. 37 暗躍

洩矢武志Side

聖からの話を聞いた後、武志は山の上にある大木に向かう。丁度こ  
こは命蓮寺が一望できる位置だ。ここなら作戦が実行できるだろう。  
「ここでもいいかな。ちよつと登ってみるか…。」

武志は大木に登り始める。

「割と足場が安定しているな。ここなら大丈夫だろう。」

武志は命蓮寺側に伸びる枝を足場にして座る。そしてとある物を  
出現させる。

「MR-24。狙撃用には少し不安が残るがここから命蓮寺まで30  
0m。狙撃できないことはないだろうし、この時代の主な遠距離武器  
は弓。射程は55mくらいまでしかないし、長距離となるともう十分  
狙撃できるといえるだろう。」

実際、アサルトライフルや弓の有効射程はこのくらいのため、特に問  
題はない。

「しかし監視を兼ねているとはいえ暇だなあ。何かないかな。」

武志は日が傾き始めるまで木の上で時間をつぶすのだった…。

ナズーリンSide

私はご主人から呼ばれた後、聖が言った作戦を聞いて、ネズミた  
ちが沢山いる秘密の場所へ向かった。

「やあ、ネズミたち。元気になっていたかい？」

そこにはナズーリンが使役している多数のネズミたちがいた。ド  
ラ○もんなら勢いで地球を破壊しかねないだろう。

「君たちに任務を与えよう。都に行つて陰陽師の動きを見てきてほし  
い。」

そういうとネズミたちは都に向かって走り出していくのだっ  
た…。

「さて、私も探すとしますかね。」

そういうと今度は小屋から独特な形をしたダウジングロッドを取

り出し、また命蓮寺に向かって歩き出すのだった。

「はあ…：せつかく一か月住み込みで命蓮寺で修業していたと思ったらまた指令なんてね。ほんと、ご主人はネズミ使いが荒いねえ。」  
そう呟きつつ向かうのだった…。

雲居一輪・雲山&村紗水蜜 Side 【村紗視点】

私たちは命蓮寺裏手の平地にきています。これも聖からの命令で動いております。今現在は聖を逃がすために作業をしているところです。

「一輪、雲山の調子はどう？」

「ああ、少し作業が続いて疲れてはいるが大丈夫みたいだ。」

雲山は現在このあたりの木をすべて倒しているという作業をしているため、相当疲れているみたいです。

しかし拳で木を薙ぎ払うって凄いですよね…。

「そうですね。少し休憩をはさんでもいいんですよ？」

「いや、もうあまり時間もないからね。もう一気に終わらせちゃうよ！」

そういうと更にスピードアップする。私は雲山の作業が終わるまで暇なので少し休むとする。何もしてないけど。

一時間後…。

「村紗、終わったよ？」

あ、作業が完了したようですね。私も向かわなければ。

「はくい。ちよつと待って〜」

「分かった。私は聖を呼んでくるね。」

「了解です。」

一輪は命蓮寺へ急いで向かうのだった。

私は雲山が作業していたところに向かうと、木が伐採されて少し大きめの広場になっていた。しかし、あんな短時間でよくここまで出来たなど感心する。

「すごいなあ… よくあんな短時間でここまでやったなあ…。」  
聖が来るまで村紗はまたのんびりするのだった…。

聖白蓮&寅丸星、(ナズーリン) Side 【聖視点】

私たちは寺に残っていた。私は一輪の作業が終わるのを待ち、星さんはナズーリンが来るからとここで待機している。

「しかし聖もよくあんな作戦を思いついたね。」

「ええ。陰陽師とも少し面識があるのでその作戦を少しまねしました。」

「へえ… という事は陰陽師もあんな感じで来るのですかね？」

「それは分かりませんが… 可能性はあるでしょう。」

そんな会話を続けていると、ナズーリンがやってくる。

「ご主人、約束の物を持ってきましたよ。」

「ありがとうナズーリン。あとで渡してください。」

「分かりました。」

そういうとナズーリンはここで一緒に待機する。すると一匹のネズミが出てくる。ナズーリンはそれに気づくと外に出る。

「おっと、結果が出たようだ。ちよつと待っててくれ。」

ちよつと待つと、外から「それは本当か!？」と大きな声で聞こえてくる。一体何があったのでしょうか。

「おかえりナズーリン。それより一体何があったのですか？」

「ああ、ネズミたちが調査に行つてその結果を聞いたんだけどね… 凄いことが分かったんだ。」

「なんですか？」

「まず陰陽師の作戦を少し聞いたんだけど、結果次第ですぐに退治できるように陰陽師はこの辺一帯を完全包囲するらしい。しかもそれだけじゃないんだ。ここにはあの有名な陰陽師、安倍晴明あべのせいめいや、蘆屋道満あしやどうまん。また最近成果を上げている小野田理暁おのだりぎょうと、陰陽師の精鋭たちが来るらしい。」

「それは本当ですか…。」

「ああ、これは確からしい。だから一層気を引き締めていかないと全

員退治しかねない。」

寺の中に不穏な空気が流れ始める。すると、いきなり扉が開く。

「聖様、作業が終わったので来てほしいです。」

一輪だ。作業が終わったみたいですね。

「分かりました。案内していただけますか？」

「分かりました。ついてきてください。」

聖は一輪と作業現場に向かうのだった。

S i d e 聖白蓮&村紗水蜜 S i d e 【聖視点】

私は一輪からの案内を終え、その場所へやってきたのですが…結構広いですね…。予想以上です。しかし村紗さんは一体どこにいるのでしょうか。

「聖、こちらです！」

ふいに私を呼ぶ声が聞こえる。その方向を振り返ると、村紗がいた。

「村紗さん、そこにいたのですね。」

「はい。とりあえず作業を進めちゃいましょう。」

「そうですね。では村紗さんは少し離れていてください。危ないですから。」

「分かりました。」

村紗さんは数歩下がると、座り始める。私は術を展開して祈り始める。すると、どこからか飛倉が飛んでくる。飛倉はその広場の真ん中に鎮座すると、今度は形を変えて大きな船へと変わる。

「凄い…。」

そう。これはあの時村紗戦で使用した時の光り輝く船である。

「はあ…。これでいいでしょう。これでここから逃亡できます。これで遠い地に行つて逃げる事ができるでしょう。村紗さん。これはもうあなたの船です。ですから、ここからは貴方が自由にしてください。」

「分かりました。それでは私はメンテナンスをします。聖はどうしますか？」

「私はもう交渉に備えて寺へ戻ります。」

「そうですか。お互い頑張りましょう。」

「ふふっ、そうですね。」

私は来た道に戻って寺へ戻るのだった。そして、そろそろ日が傾き始めるのだった。

交渉まであと2時間後……。

PART. 38 対陰陽師集団 〈命蓮寺大戦〉

【武志Side】

日も傾き、夕暮れになり始めたころ、陰陽師達は寺に向かってきた。見た感じ150名近くはいるだろうか。大勢で来ることは予想していたがこれは予想以上だ。武装した農民や貴族も混ざっているのだろうか。武志はそれを遠目で眺めていた。

「こちら武志、陰陽師の大軍がそちらに向かっている。準備をするように。」

そう武志特製の通信機を通して喋る。命蓮寺にもう片方が置いてあるため、遠い所からでも連絡が取れるという話だ。

「分かりました。合図が出たら攻撃をしましょう。ただし、殺さないようにはしてくださいね?」

「分かった。」

今回は殺害禁止のようだ。まあ、今までが異常だったのかもしれないが、仕方のないことだろう。神にとって戦いとは死ぬか殺すか。そんな世界だからだ。今回は特別な神力弾を使って狙撃しようと思う。これなら頭に命中しても死ぬことは無いだろう。たぶん。

そんなことを思っていると、陰陽師達がばらけ始める。成程。これが先ほどナズーリンが言っていた隊列か。確かに、寺が完全に包囲されている。暫くすると、おそらく帝だろうか。厳重に警備されたいかにも高位の身分の人が現れる。ここからは交渉に入るだろうか、それを遠目で見守ろうか。

【聖Side】

「窓から多数の灯が見える。ああ、遂に陰陽師達が来られたのですね。ここですべて話して、どんな結末が待ち受けようとも私は受け入れません。」

すると不意に扉が開く。そこには厳重に警備された男が立っていた。

「帝様、遂に来られたのですね。」



「ああ。お前と最後の話がしたくてな。」

「そうですか。どうぞお座りください。」

「そうか。おい、ここを二人だけにしてお前らは誰も入らないように警備させろ。」

護衛達は寺の周りに警備しに行くと、二人は座り、話を始める。

「白蓮殿、我としても貴方が妖怪を匿っていたという話は信じがたいのだが、その件はどうなんだ？」

「そうですね。私が妖怪を匿っていたのは事実です。私は人妖関係なく、平等に接しているのです。」

「平等か… そうか。それが事実なら今この場にその妖怪たちを呼ぶことはできるか？」

「ええ。呼びましようか？」

「頼む。」

聖は扉を開けると、一輪の名前を呼ぶ。一輪は縁側の下に隠れていたため見つかつてはいなかった。

「読んだ？ 聖。」

「ええ。少し来てほしいのですが。」

「分かったよ。」

聖は一輪を連れて帝の元へ戻る。

「連れてきました。」

「まさか本当にいるとはな…。」

帝もこれには苦笑いする。

「しかしなあ、貴方のようなお人をこんなことで失いたくはないのだよ。白蓮殿、今ここにいる妖怪とその周辺にいる妖怪をすべて退治するか、それを拒否するか選んでいただきたい。無論、妖怪を退治するならあなたのこの一連の件は無かったことにしよう。」

聖は即答でこう答える。

「私は妖怪たちを守ります。たとえ私の命が失われようとも私はこの子たちが元気に生きていければそれでよろしいのです。貴方が私を妖怪の仲間として討伐したいならば、私は精一杯抵抗しましょう。」

「そうか… 残念だがそれは拒否として受け取っていいのだな？」

聖は静かに頷く。

「仕方ない…：総員、白蓮殿を捕えろ！」

その掛け声と共に周辺にいた陰陽師達が聖を捕えようと動き出す。さながら大乱闘のようだ。

「すまないな。これも世の中の為なんだ…：。」

帝はそう言い残し、急いで後ろに下がっていくのだった。

「皆、出てきなさい！」

聖の掛け声で隠れていた皆が戦闘態勢になる。一輪は雲山を召喚して陰陽師をタコ殴りにし、聖も自身を強化して戦い、星も宝塔の力を借りて陰陽師達を無力化し、ナズーリンも二本のロッドで対抗する。

「皆、ある程度倒したら星蓮船へ向かいなさい！」

『了解！』  
ラジャー

【武志Side】

陰陽師達の動きが変わったと思ったら帝と思われる男性が逃げるように出てきた。恐らく戦闘態勢だろう。武志はスコープ付きMR—24を構えると、引き金を引く。帝と思われる男性の足に直撃し、その男性は派手に転んで動かなくなる。サイレンサーを付けているため発砲音も聞こえてないだろう。そして、次々に陰陽師達の手足を狙って狙撃する。彼らは暫く立つことができないうが、命があるだけまだいいと思う。

「ハハハ。楽しいねえ。」

そうして暫く狙撃していたが、交戦している下っ端と思われる陰陽師は三分の一くらいに減った気がする。聖が星蓮船に逃げようとすが、強めの陰陽師二人にてこずっているようだ。仕方がないので髭の凄い奴の頭に照準を合わせる。そして引き金を引こうとしたときだった。

「さらば髭やr」ガサガサガサッ！

なんと物凄い振動が来て木から派手に落ちる。

「イタタタ…：何があった…：？」

「全く…：まさか遠距離の狙撃がいるとはね…：つてえ？」

「そうか陰陽師の一員か…。なら残念だが死んでもらおう。え？」

お互いの目が合い二人はびつくりする。それもそのはず、

「何でこんなところで武志兄さんが狙撃しているんだよ！」

「何で理都お前がいるんだよ！」

そう。理都だったからだ。まさかの再開である。

「いや理都よ、何で陰陽師に混じってドンパチしているんだい？」

「いや、元々別れてから俺は弟子をつけ、妖怪の山と呼ばれるところで鬼と天狗と河童を中心とした百鬼夜行を結成したんだけど、人間たちの生態を学ぶついでに陰陽師に入って妖怪を勧誘していたんだよね。」

「成程な。という事は今回も…？」

「いや今回は別さ。今回は聖白蓮を討伐する予定だったんだけど、殺さずに封印しようかなと考えているんだよね。彼女らはこの先必要になってくる存在だから。」

「この先とは？」

「あく、人間と妖怪と神が共存して暮らせる世界を創りたいんだよね。百鬼夜行はそれに賛成する奴らの集まりさ。」

「成程な。」

「で、兄さんは何をしていたんだい？」

「私は元々この隣の山で修業していたがある日を境に聖白蓮のもとで修業している身さ。彼女もお前と同じ人間と妖怪が共存する世界になってほしいと願っていたね。」

「そうか…。やっぱりか。だったら兄さんもその夢に参加しないかい？兄さんなら大丈夫だと思っただけ。」

「なら後でそれについてゆっくり聞こうかな。ところでお前は陰陽師側だけど聖を殺す気はないんだろ？」

「ああ。何なら他の奴らと同じことを考えている。それ程にあの方は素晴らしいお方だったからな。」

「そうか。だが私たちの作戦を邪魔する奴を野放しにするわけにはいかない。そうだろう？」

「ああ。たとえ兄さんでも危険人物を擁護する奴は容赦しないよ。倒

された陰陽師の仇だ！覚悟しろ！」

こうして二人の戦いが始まるのだった…。

PART・ 39 兄弟決戦。そして暫しの別れ

「先手必勝！」

理都は開幕から一撃を決めようとする。が、

「甘いな」

その一撃は躲され、逆にカウンターで一撃を喰らう。

「これならどうだ！」【呪符「リーマンの神秘」！

札を構えてからそう唱えると円形の魔法陣が出て、四か所から多数の弾幕が展開される。しかも展開する場所は回転しているため、中々の密度となっている。

「これが陰陽術だ！」

陰陽術とはいわば技みtainなもの。一緒に来ている清明や道満も似たような術を持っている。

「成程な。だが単調だな。」

武志は避けながらMR―24を連射する。そして技を繰り出す。

【乱射「拡散バレットヘル」】

そう唱えるとタレットが出現し、一斉掃射を開始する。この弾幕はランダムに飛んでいくのと、圧倒的弾幕量の為、避けるのはなかなか難しい。理都もこれはまずいと感じたのか技をとめる。そしてまた札を構える。

【結界「リーマンウォール」！

そう唱えると今度は大きめの結界が展開され、武志の散弾を全て受け止める。

「ふむ… やはり散弾では結界はきついか… ならこれはどうだ！」

【掃討「ガトリングバレットヘル」】

するとタレットが一回消え、また別のタレットが出てくる。先ほどのタレットが銀色だったのに対し、これは黒となっている。そして砲身が回転し、物凄い弾幕が連射される。これには理都の結界にもヒビが入り始める。

「マジかっ！」

理都は素早く回避するが、ガトリングはまだ理都を狙い続ける。理

都はひたすら回避するが、それでもきつそうだ。

「ルールを制定する。この戦いの間時代に合わない機械は動かなくなる。」

理都の理だ。まずい。これではタレットが動作しなくなるばかりかチエルベツコの板が使えなくなる恐れがある。元は現代のタブレットに近いものだからだ。武志は急いでチエルベツコの板からカタストロフィーを取り出す。そして取り出した直後、タレットは動作を停止し、チエルベツコの板も画面が付かなくなった。

そして理都が素早く近接戦を仕掛けてくる。武志もカタストロフィーで応戦する。カタストロフィーは、叩くものすべてを破壊するが、柄の部分で応戦しているため、理都が吹き飛ぶことは無い。それに誤爆防止のため自分から叩かないと物が壊れることは無い。

「やるな… 理都！」

「兄さんこそ。」

武志は理都をはじくと、技をかます。

【破壊神のロックブラスト】

カタストロフィーを振り下ろす。すると物凄い衝撃波と共に、大地が隆起する。理都はそのうちの一つをよけきれず被弾する。

「ぐっ… だがまだまだ！…これでも喰らえ！」

【司法の鎖】

すると多数の鎖が射出される。ただ、あらゆる方向から飛んでくるため、下から来た鎖に武志は足を拘束されてしまう。

「しまっ…」

それを皮切りに次々と鎖で拘束される。武志は完全に動けなくなる。

「… ーまでか。」

「一回痛い目を見る！」【神剣「黒常御剣」】

それはかつて武志が神器をつくるきっかけとなったあの黒い飛燕剣だった。武志はそれで胸から腹にかけてを斬られる。

「ぐっ…」

武志はそのまま崩れ落ちる。よってこの勝負は理都の勝ちとなっ

た。

「やるな… 理都。」

「兄さんこそ大分強くなってたよ。それにその傷も早く治るでしょ？」

「よく言うよ… まあ10時間もあれば治るかな。」

一応手加減はしてくれていたのか分からないが割と傷は浅かったので時間をかければ治りそうだ。

「それで？お前は聖を封印しに行くのか？」

「ああ。そのつもりなんだが…、もう終わったようだな。」

武志は後ろを振り返ると、そこには紫と金色のまばゆい光が放たれていたのだった。

「そうか…。最後に別れの挨拶ぐらいはしたかったな。」

「仕方ないさ。この時代、人間からすれば妖怪は悪の対象。そして人間でありながら妖怪に味方することが一番の重罪とされているからさ。殺されないだけマシだったと思うよ？」

「そうか…。それで？聖はどこへ封印されたんだ？」

「確か魔界の果て、法界というところに嚴重に封印する予定だったはず。そして他の妖怪もおそらく別の所へ封印されるだろう。」

「そうか…。分かった。お前はもう味方の元へ行つてこい。私は暫くここで休んでいるよ。」

「わかった。またいつか。」

そう言つて二人は分かれる。

「聖…。」

その呟きは誰にも聞こえることは無かった。

五時間ぐらいして、ある程度傷も癒えたので寺へ戻る。するとそこには数々の戦った後、ところどころ焼け焦げた木材、そして寺は半壊していた。

「武志さん！無事だったんですね！」

声がしたので振り返るとそこには星とナズーリンがいた。

「星か。他の皆は？」

「聖はどこかに封印されました。一輪や村紗も船と一緒にどこかへ封印されました。」

「私とご主人は毘沙門天様のご加護があったから封印の影響を受けることは無かったが、それでもこの有様さ。」

「そうか……。辛かったな……。」

「そんな事よりその傷は大丈夫ですか!」

「ああ。問題ない。大分治りかけてきたからな。」

「しかしその回復能力は一体……。」

自分の回復能力の高さに驚いたのか変な事を聞いてくる。ただ、正直に答えると話がややこしくなるので話をぼかす。

「ああ。元々治癒能力だけは高くてな……。おかげでちよつとの傷なら死ぬこともない。」

「ああ、貴方は妖怪だったんですね。」

「まあそんな所だな。」

嘘はついてないのでよしとする。しかしこの惨状をどうするか。

「しかしここからどうするんだ?」

「私は聖を見殺しにしてみました。だからその償いも兼ねて暫くここに残ろうと思います。」

見殺して。一体何があったんだよ。だが、深くは追及しないことにする。星も話したくないだろうから。

「そうか……。まあ何があったかは聞かないでおくが、残ることは分かった。私はまた新天地を求めて旅をすることにするよ。」

「そうですか……。お元気で……。」

「またな。武志さん。」

「ああ。二人共元気でいてくれよ。」

こうして武志は命蓮寺だった建物を後にするのだった……。



## 第六章 武志は新世界を創りたい PART・40 久しぶりの訪問

武志は命蓮寺から去った後、また各地を転々としていたが、そんな生活にも飽きてくるのだった……。

「これで命蓮寺を去ってからちょうど200年か……長いよう短かったな……。」

武志今、命蓮寺から大分離れた山の中にいる。

「ここで修業するのも飽きてきたな……。そろそろ移動するにしてももう当てもないしなく。」

そう。武志はこの長い年月の間で今日本のほとんどの場所を見て回ったのである。

「これから先どうするか……。」

その時武志に一つの案が浮かぶ。

「そういえば隠岐奈が自分だけの世界に籠るとか言っていたっけ……。少し見習ってみるか……。」

その時武志に更に案が浮かぶ。

「そうだ！ だったらついでに隠岐奈の所にも遊びに行くか！」

すると武志の後ろに扉が開く。そしてそこから見たことあるような二人の少女が出てくる。

「おっと、二人とも誰だ……。って何で後ろに扉が……？」

「それはね〜お師匠様が扉を開け〜って言うから、」

「私たちが来たんだよ〜♪」

「お師匠様……。ああ、彼奴か……。」

武志の頭に一人の秘神が浮かんでくる。

「それで？ お師匠様はなんて言っていたんだ？」

「それはね〜、キミを連れてきてくれと言われたからだよ〜」

いやもつといい言い方があっただろう。とにかくこの二人は隠岐奈の部下で間違いないだろう。違っても強硬手段で帰ればいいだけだ。

「そうかそうか。ところで君たちは何て名前だ？」

緑の方が、

「僕は丁礼田舞だよ」

ピンクの方が、

「私は爾子田里乃よ」

と自己紹介をする。

「そうか。私は洩矢武志。最も、そのお師匠様の知り合いだから名前も聞いていると思うがな。」

「そうですか。とりあえず立ち話も何なので早くいきましようか。」  
「そうだな。」

三人は扉を通って、隠岐奈の元へと行くのだった…。

〜後戸の国〜

「着いたよ〜！」

「ここが後戸の国ですよ。」

「ここがな。」

「隠岐奈の奴、自分の世界に籠るとか言っていたが、凄い世界だな。」  
「そうか。誉め言葉をありがとう。」

後ろを振り向くとそこには摩多羅隠岐奈が立っていたのだった。

「隠岐奈か。久しぶりだな。」

「こちらこそ久しぶりだな。わざわざこんなところまで何の用だ？」

「扉を開いたのはそっちだろ？まあいい。私がここに来たのは新しい自分だけの世界が欲しいからさ。隠岐奈ならそこら辺の事分かるだろ？」

「いや分かるには分かるが… お前創造神だろ？」

「創造神だな。」

創造神以外の何物でもないな。

「だったらさ、世界を創るなんて得意分野だろ？なぜいちいち私に聞く？」

確かにそうだ。武志は創造神。創造神なら新しい世界を一つ作る

くらい簡単だからだ。だが、聞きたいことは別にあるためそれを口に出す。

「ああ、創るにあたって、どんな感じにすればいいか迷ってね……。だからこの世界を見に来たってわけだ。」

「成程な。まあ扉ばかりの世界だがゆっくりしてくれ。」

「そうさせてもらおう。」

「お待ちせー！」

「温かいお茶だよー！」

舞と里乃の二人がお茶を運んでくる。

「ありがとう。」

「まあ聞きたいことがあれば何でも聞くがよいき。もっとも、創造神の貴方に話すことはあまりないでしょうが……。」

「そんなことは無いさ。」

そんなことはない。聞きたいことは沢山ある。

「早速だが、世界はどんな感じにしたらいいと思いますか。」

「そんなこと言われてもな……。自分の世界なんて自分の好きな感じにすればいいと思うぞ？何も迷う必要はない。自分の直感で作ればいい話さ。創造神の貴方なら簡単だろ？」

「まあな。」

確かにそうだ。自分だけの世界なんて自分の好きに作ればいい話だ。だがそれが思いつかないのだ。だが、話は続き、

「それが思いつかないなら探せばいい。もしくは自分の神の性質に当てはめて作ればいい。私も秘神だからな。このように扉を沢山作つたさ。」

「そうか。ありがとうな。」

「お安い御用さ。それで？これからどうするんだ？」

「私はその世界の元を探すためにまた旅を続けるよ。ありがとうな。」

「ああ。分かった。気を付けてな。出口は好きな扉を通ればいい。扉の先は現実世界のどこかにつながっている。きっといい旅となるだろう。」

「分かった。じゃあな。」

「ああ。さようなら。」

武志はとある扉を選び、潜り抜ける。その先は明らかに日本ではないが身に覚えのある世界が広がっているのだった……。

「あゝ、これは戻った方が良さげかなあゝ」

武志が後ろを振り返ると、扉はもう消えていたのだった。

「……仕方ない。ここで新しい世界の元を見つけるか……。つて言ってもなあ……。ここはなあ……」

そう。ここは神界。それも高天ヶ原の近くに出てきてしまったのだ。当然ここには、

「あらく武志じゃない♪」

後ろを振り向くとそこには武志の親である洩矢千古がいるのだった……。

「……母さんか。久しぶりだな。」

「久しぶりねえ♪」

「しかし、その頭のツノは何なんだ？それに翼も。」

そう。千古の頭には見慣れない角と翼があったのだ。しかも翼は蝙蝠、角は鹿を彷彿とさせるような感じだった。

「いやゝ、今まで神名が【洩矢大蝦蟇全能神】じゃない？」

「そうだな。」

「それで、この世界の蝦蟇って弱いじゃない？」

「確かに弱いな。」

蝦蟇。つまりカエルの事だな。確かにカエルは食物連鎖の頂点ではないな。

「そうそう。だから蝦蟇をやめてもつと強い存在になろうとしたの♪」

おいおい。それは大丈夫なのか。まあ全能神だから大丈夫だとは思うが……。チートだし。

「大丈夫よ♪私の力を使えば外見なんて何でもないわ♪」

大丈夫だった。まあある意味で千古らしいな。

「それで？それは何の真似なんだ？」

「私は【龍】という存在になったのよ♪」

「龍…聞いたことが無いな。」

「あたり前よ。今作ったんだから。」

「やっぱり何度でも言おう。この神チートだと。」

「作ったって…、そうなるよ。神名はどうなるんだ？」

「新しい神名は【洩矢千龍全能神】よ。もりやせんりゆうのぜんとうしん略称は全能神でも龍神でも

どっちでもいいわ。」

「まあ普通だな。」

「反応が薄いわね、まあいいわ。と言う訳でよろしくね♪」

実際そんな反応するほどの名前ではないと思うのだがな。

「まあいい、よろしくな。」

「ところで武志、」

「どうした母さん。」

「ここに戻ってきたという事は当然しばらくゆっくりするんでしょ？」

「という事を聞かれる。当然、ここで新しい世界の元を探すのため暫く滞在するのだが。」

「ああ、暫くここでゆっくりしようと考えている。」

「だったら天界や神界を見るといいわ♪あの頃からかなり変わったから♪」

「そうか。そりゃあ楽しみだ。」

「とりあえず今日は帰りましょう。皆喜ぶと思うわ♪」

「はいはい…。」

武志は半ば強制連行という形で高天ヶ原に連れ戻されるのだっ  
た…。

PART. 41 天界にて

「久しぶりに帰ってきたけど千古の言ってきた通り大分発展したな。」

武志は現在、神界から天界に向かって歩いている。その理由は先ほど千古と、

~~~~~

「そういえば武志、昨日天界や神界は見た方が良かったわね。」

「ああ。確かに言っていたな。それがどうしたのか？」

「いや、前よりも天人や神が増えてきたから、他の神々の力を借りて発展させたのよ。」

「ほう。それは楽しみだ。しかし、誰が発展させたんだ？ユレイドスか？」

「ユレイドスも関わっているけど…、一番頑張ったのは桂姫ね。」

「桂姫… ああ彼女か。確かに彼女なら簡単だな。」

「と言う訳で一回身に行ってみよう。」

「分かった。あとで行ってみよう。久しぶりに顔も見せたいしな。」

~~~~~

というやり取りがあったからだ。

「桂姫か… 懐かしいな…。」

「桂姫… もとい埴安神桂姫。私が創った神の一人で、造形神として信仰されている神だ。でも確か彼女は陶芸家だったような…。まあ千古あたりが力を貸したのだろう。させたとか言っていたし。」

そんなことを考えながら歩く。すると誰かと正面衝突をする。よく見ると天人のようだ。もう天界なんだな。

「痛いわね！アナタ何処見て歩いているのよ！」

「それはすまなかった。大丈夫か？」

「全く… 私を誰だと思っているの！」

誰だとして… そんなの分からないため適当に答える。

「え、嫌いガキ。」

「…！」プルプル

「あ、これ地雷踏んだかもしれない…。」

でも実際言っていることは間違っていないため反省はしない。というかトラブルを起こして私を誰だと思っているの？とか言う人は一般人よりかは地位が高いが、上には上がいることが多いため、威張るだけ無駄であることが多い。少しこちらからも似たような質問をする……。

「むしろ私を知らないのか……？」

「アナタなんて知らないわよ！ってか質問を質問で返さないでくれる？」

ほほう。天界ではもう私を知らない世代がいるのか。確かに千古の言う通りかなり人口は増えたようだ。

「ちよつと、無視しないでくれる？」

そこの小娘がいろいろ言ってくるので少し脅しをかける。

「おい、あんまり煩く言うな。そんなにギャンギャン吠えることが出来るなら大丈夫だろ。被害者だからって何言っても許されるわけじゃないからな？覚えとけよ？」

つと、流石にやりすぎたのかその娘は泣きそうになっていた。

「ちよつとやりすぎたかな……？」

なんてことを思っていると、向こうから一人の女性が走ってくる。

「総領事様、やつと見つけましたよ。」

「げ、衣玖じゃない。ちよつと聞いてよ、この人がぶつかってきたのよ。」

と、自分を指さして言ってくる。その衣玖と呼ばれた女性も見てくるが、私の正体に気付いたのか目を丸くして、

「これはこれは創造神様！今日はどうしてこのような所に！」

「ちよ、ちよつと衣玖く、どうしてこんな奴に頭を下げるのよ。」

「総領事様ご存じなかったのですか？この方はこの世界を創った創造神様ですよ！貴方も早く謝りなさい。」

「え、ちよつ！」

無理やり頭を下げさせてくる。いや、こつちが悪いのだからそこまですしなくてもいいのだが。

「いやいや。悪いのはこつちだ。だから気にしないでいい。」

「いえいえ。こちらこそ総領事様にご迷惑を。」

「いや、悪いのはこっちだ。本当にすまない。」

「そんなやり取りがしばらく続く…。流石に相手も空気を呼んだのか、

「あつ！もうこんな時間ですか！行きますよ総領事様。」

「といって、その総領事様と呼ばれた娘を引つ張って帰って行くのだった。名前を聞いていなかったがまあなんともないだろう。そんな事より探索を再開しよう。」

天界はかなり様子が変わっていて、今いるところは高い建物が無いどころか、豪邸が数軒あるのみで、そこらじゅうで天人たちが酒盛りをしているが、先ほどぶつかったところや、中心部の方はかつての神界みたいに和風のビルや、マンションみたいなものが建設されている。そして、道のわきには桃の木が生えていて、いかにも天界って感じがする。そしてまた少し広くなったような気がする。まあ中心部はそんなに広くないが。

「本当に変わったなく。今度は神界も見てみるか」

武志はそうして神界に向かう。神界と天界を分ける門も前よりも立派になっていた。

「うわ凄いな…。」

門を通るとそこには目を疑うような光景が広がる。

「うわあ…。また大分発展したようで…。」

武志が目にしたのは、かなり高い高層ビルや、高層マンション。かつての環状線はそのままに、建物が前よりもかなり発展していた神界なのだ。それはまるで現代の大都市のような風貌だった。

少し歩くと、いつもの屋敷と光の柱が見える。心なしか、少し敷地が広くなっているような気がした。

「行きは天界までひとつとびだったが、歩いてみると結構広くなっていたんだな…。」

「あら、創造神様じゃないですか。こんなところでどうされましたか？」

「ん？ああその声は桂姫か。」



振り向くとそこには埴安神桂姫がいた。

「そういえばこの神界はお前が作り直したんだよな？」

「ええ。私がユレイドス様と協力して作り直しました。」

「かなりいい感じじゃないか。」

「創造神様にそう言われると嬉しいです。ありがとうございます。」

「ハハハ。まあ元は私が創造した神だからな。美的センスも私に似たんだろう。」

実際そうだ。前に出てきた洩矢諏訪子も今回出てきた埴安神桂姫も元は武志が創った神であり、その力やセンスも武志から受け継がれているのだ。

「とりあえず龍神様から武志に会えと言われているのですが…。」

「あゝ、例の件か。いいですよ。」

恐らく千古の粋なはからいだろう。

「ああゝ、この神界ってどんな物を元にしたんだ？」

「そうですね…、ユレイドス様から下界の1000年後くらいの風景を見せてもらって、それを元に造形して作成したという感じですよ。私は基本陶芸しかやらないので少々龍神様に力を貸してもらってこの街を創りましたね。」

「成程な…。」

どうやらこの神界は1000年後の風景のようだ。まさかここまですべて変化するとは思わなかったな。でもこの風景は割と気に入った。ちよつと息苦しさもあるからそこを取り除けばいい感じになりそうだ。

「分かった。ありがとう。」

「いえいえ、創造神様のお役に立てただけでも十分です。」

そして二人は別れる。そして新世界の案も思いついたことだし、もう少し滞在してからここを去って、自分だけの世界作りにとりかかりますか。

そんな事を考えながら武志は屋敷に戻るのだった…。

PART・42 いざ制作

武志は一週間の滞在の後、とある真っ白な世界に来ていた。その理由は二時間前にさかのぼる……。

〜二時間前〜

「さて、そろそろ世界作りにとりかかるかな。」

武志は地下のラボに向かうと、念じ始め術式を詠唱する。普段使うようなものは一瞬でできるが、星や世界を一から作るとすると時間がかかるからだ。一時間後、念じ終わるとそこには新しい空間へと繋がる裂け目が出来上がるのだった……

「成功だな。」

武志はその裂け目に入ると、その裂け目は消えてなくなる。そしてその先にあつたのは何も無い真っ白な世界だった。

武志はもう一回裂け目を開き、それをくぐると元居たラボに出てる。

「うん。しっかり行き来もできる。とりあえず世界の元はこれで大丈夫だろう。」

そういうとまた裂け目を開き、真っ白な世界に入っていく。「さて、そろそろ始めるか……。」

武志は次々に高層ビルやマンションを出現させ、更に片側二車線道路や、高速道路、更には線路まで出現させる。そして、世界の端は海岸や堤防となり、その向こうには青々とした海が広がっていく。陸の広さは大体300?で、実在の都市だと名古屋市より少し小さいくらいである。

「ハハハ。やり遂げたよ……。私は少しこの誰もいない世界で休憩するとしますかね……。」

武志は少し休憩と称して眠りにつくのだった……。

〜3時間後〜

「…おはよう。って誰もいないのだったな。」

あたり前のことだが、この世界に生物はまだいない。いるのは武志ただ一人である。

「とりあえず、残りの仕事を片付けるか。」

武志は世界の中心にそびえたつタワーへ飛んでいくと、チエルベツ口の板を取り出し、とある術式を詠唱する。

「…これでよし。これで変な奴が勝手に抜け出すことはできない。まあ、そんな奴がいたら速攻で制裁を加えるが。」

武志が展開したのは内側から勝手に外の世界へ抜け出すことが出来なくなるようにする結界。まだ生物はいないが、後々必要になると思っただけのものだ。

とりあえず、私の拠点に向かうか。

武志は南方へ飛んでいく。するとそこには明らかに他の物とは雰囲気が違う建物だった。

「ここだな。我が拠点は。」

武志はその中へ入っていくと、【執務室】と書かれた看板の隣にある豪華な扉を開けて、中に入る。そこには、シンプルでモノトーンカラーの机と椅子が置いてあったのだった。

「ここで日々の仕事を行うとなると最高だな。」

そう。武志はこの世界で神界からの仕事をして暮らそうと考えていたのだ。

「だが、先にこの世界に生物を作るのが先だな。この世界はまだ味気ない。」

そう。生物は武志だけだと完全体を作ることが出来ない。それは武志に生を与える力がないからだ。

「とりあえず千古に相談をして、無理だったならそれから考えるか。」

武志は裂け目を通して千古の元へ向かう。

「母さん、ちよつと相談があるんですが、」

「ん？いいわよ♪続けて♪」

「私に完全な生物を作ることが出来る力が欲しい。」

「生物ねえ、いいわよ♪」

「そうか仕方ない…。え？」

これは予想外だ。拒否されると思っていたのにあつさり許可が出るとは。

「いや、私も最近大変だから生物を武志に任せたいと思っていたのよ。」

「分かった。その使命を全うするでしょう。」

「じゃあ力を与えるからこっち来て。」

武志は千古の元へ行くと、千古の手から淡い緑色の光が出てきて武志を照らす。

「これでいいわよ♪あつ、そうそう、これであなとも生物を作れるわけだけど、その生物に力を持たせる場合、自分の好きな力を持たせることが出来るけど、それだとかかなり大変だから、自分の力の一部をコピーさせるのが良いと思うわ。最も、貴方ならそんな事簡単でしょうけど…。」

これはいい情報も聞けた。

「分かった。」

「あ、最後に一つだけ。くれぐれも悪用はしないで頂戴ね？下手すれば貴方を封印することになるかもしれないから。」

「分かった。気を付けて扱おう。」

武志は再び自分の世界へ戻ると、再び生物について考える。

「とりあえず自分の秘書的な役割の人が欲しいな。ユレイドスを引き抜くのもいいけど彼奴はもう神界でかなり重要なポストを任されているみたいだから新しく召喚するべきかな。それと私の所で雑用…。まあ働いてくれる人も欲しいんだよな…。いざとなれば戦ってくれるような方。」

そう考えながらとりあえずどんな見た目と力にするか考える。考えた末とりあえずその二人を作ってみることにした。

「さあ行くぞ。」

武志は二人を早速召喚する。一人は黒いベレー帽に紺色の軍服ワンピースに黒ブーツを履いた茶髪ショートボブで黒い瞳の娘と、黒の

ブレザーに白いシャツと赤いスカートとりボンで、黒いカンカン帽をかぶっている黒髪ポニーテールで緑の瞳をした娘だ。

「…あれ？ここは…？」

「んんん、ここはどこ…？」

「おはよう君たち。」

「貴方は誰？そしてここは何処？」

後者の子がそう訊いてくる。

「私は洩矢武志。君たちを生み出した神さ。とりあえず君たちに名前を付けてあげよう。」

そういうと名前を考える。因みにだが、武志にネーミングセンスは悲しいほどない。それはもう酷い名前だ。

「まず君が金河吉美。」

黒いベレー帽の娘に向かってそういう。

「わく！いい名前をありがとう！」

「そして君がラダヴィーニャ・A・ハルトマン。」

カンカン帽の娘に向かってそういう。

「長いけどいい名前だね。ありがとう。」

で、ここがどこかだけど…、

(そういえばこの名前決めてなかったな…。まあいいか。)

「ここは私たちが住む家だ。」

「名前ってあるのー？」

吉美がそう尋ねてくる。

「いや特にないな。まあそれについては後で考えるところとして、このモニターに私の過去をダイジェストで映すから見てください。」

そう言いながらモニターを出し、武志の過去のビデオを流す。大体150分くらいだろうか。

「終わったぞ。」

「貴方って創造神だったのですね。」

「なんか深かったです！」

「まあ、俺の事は適当に呼んで構わないから。」

「だったらマスターと呼んでいいでしょうか？」

「私もー!」

マスターか。まあいいだろう。

「いいぞ。」

「それでだ、この建物の名前を決めようじゃないか。」

「だったらいい案があります。」

「いいぞ。ラダヴィーニヤ。」

「創造神であるマスターの名前からとって【創武殿そうぶでん】という名前はどうか。」

創武殿か。悪くないな。

「ああ。いいだろう。つてか意外にセンスあるんだな。」

「ありがとうございます。」

「まあとりあえず吉美は私の従者として働くことが多くなると思うが頑張ってくれ。ラダヴィーニヤは私の秘書として頑張ってくれ。そして今日から君たちは我が洩矢武志之創造神の神使…とまではいかないが私の従者としてこれからも頑張ってほしい。」

「はい!頑張ります!」

「分かりました。お役に立てるように頑張ります。」

「よし。今日は歓迎会という事で派手にいこうじゃないか。」

武志は豪華なご馳走やお酒を出して、朝まで派手に宴会を開くのだった。そして、これから武志の新しい世界で新しい従者との生活が始まるのだった。

第七章 第一次月面戦争記 Moon War I  
PART・43 悪報

新しい世界に住み慣れてきたころ、武志の元にとある手紙が送られてくる。

「ここに本日の書類を置いておきますね。」

「分かった、ありがとう。」

武志は今、天界や神界からの書類を見ている最中である。この世界には一部の生物（鳥や魚）はいるものの、人間はまだこの世界にはいない。武志曰く、この世界に慣れてから考えるとのことだからだ。

「今日もまた書類が多いなあ…。母さんの奴送りすぎだろ…。」

高天ヶ原と事務室のポストは繋がっており、高天ヶ原から書類が直で送られているのである。そのためかは分からないが、千古が仕事の書類を大量に送り付けてくるのである。

「マスター、あとこんなものがポストの外に落ちていたのですが…。」

「なんだそれ。」

それは明らかに天界からの物ではない一枚の手紙だった。武志はそれを読んでみる。

「えくと…何!？」

それを読んだ武志の顔が青くなる。

「なんて書いてあったのですか?」

「それを説明するから今すぐ吉美を呼んでこい!」

ラダヴィーニヤも事情を察したのか、

「…!分かりました。」

直ぐに向かうのだった。

「これはまずいことになったぞ…。」

「呼んできました!」

「何があったのマスター!」

「ああ、今から説明するからよく聞いてくれ。」

そこにはこんなことが書いてあったのだ。

『武志兄さんへ。』

前に会ったのは白蓮の騒動の時だったかな？もう知っているかもしれないけど白蓮は魔界で嚴重に封印されて眠っているよ。とまあ、こんな話は置いて本題に入るけど、今度俺達の妖怪組織……鬼とか天狗とか河童とかなんだけど、そいつ等と月に攻め込もうとしているんだけど、流石に彼奴らだけだとちよつと不安だから兄さんの力を借りたいんだけど、とりあえず会って話がしたいから、妖怪の山もしくは兄さんの所へ案内してほしいな。返事はいらぬから早めに結論を出してほしい。無理に参加しなくてもいいから兄さんの都合と相談して決めてほしい。忙しいと思う中申し訳ない。理都より。』

という事が書かれていた。武志はこのことを簡潔に説明する。

「月と戦争ですか……。」

「月ってあのモニターにも映ってたけどどれくらい強いのか？」

「月の兵士はとても強い。今の私みたいな戦い方をする奴がうじゃうじゃいるんだ。当然奴らだけでは厳しいだろう。しかもあれから時間も流れているんだ……。きっと装備も強化されているだろう。」

二人との間に冷たい空気が流れる。

「とりあえずラダヴィーニヤ、理都の所につないでくれ！」

「分かりました。」

前回言い忘れたが、ラダヴィーニヤの能力は「人妖神をつなぐ程度の能力」。つまり人と人の間で声だけつないだり、その人の所へ行けたりもするのだ。そのため、この世界から裂け目を作る権限は彼女にもある。吉美の能力は「兵器を扱う程度の能力」。有人兵器を手を触れず操れたりする能力である。

ラダヴィーニヤが理都の所へ裂け目をつなぐと、武志はそれをくぐる。二人もそれに続いて入っていく。

「理都はいるか？」

「兄さんか！手紙を読んでくれたのかい？ところでそっちの二人は？」

「ラダヴィーニヤ・A・ハルトマンです。武志様の秘書を務めておりま



す。」

「金河吉美です！マスターのもとで働いているよ〜！」

「そうか。俺の名前は洩矢理都。武志兄さんの双子の弟でこの妖怪組織の長をやっている。」

それに続いて小声で、

「あと俺が神様ってことは秘密にしているんだ。くれぐれもそのことを言わないでくれ。あと兄さんも妖怪ってことにしてくれ。話がややこしくなるから。」

「了解。」

「それで？月に攻め込むだつて？」

「そうさ。月に攻め込み月の技術を手に入れる。それが俺達の第一目標さ。」

「そうかそうか。だつたらやめておけ。」

「何でさ？兄さんもいるから安心でしょ？それに月の使者がこつちに来たときは全員返り討ちにしたさ。あのレベルならなんてことない。さらに元々あの古代都市で指揮官をやっていた兄さんなら敵でもないでしょ。」

武志は大きなため息を吐いてから、

「あのなあ……月の使者が何しにこちらへ来たのかは知らないが、月の兵力は倍以上あるんだぞ？さらに私がいいた時からもう大分経っている。兵力も倍増していることだろう。悪いことは言わん。侵攻はやめておけ。」

「そうだよ！マスターがそう言っているんだからやめた方がいいよ。」  
「そんな事言われてもなあ……。もう他の妖怪もノリノリだし何ならもう準備に取り掛かっているんだ。力にならないならもういいさ。少々不安だが自分たちの力で何とかするから。」

「そうか……。ならいいさ。」

武志が振り向いて帰ろうとすると、

「あら、お客様ですか。」

「……お前が月に攻め込むうとしている妖怪達の一人か？」

金髪の胡散臭い妖怪が口を開く。

「ええ……。その前に貴方達の名前を教えてくださいませんか？」

「私は洩矢武志だ。」

「ラダヴィーニャ・A・ハルトマンよ。」

「金河吉美で〜す♪」

「私は八雲紫よ。それで？なぜ貴方達は私たちが月に攻め込むことを知っているのかしら？」

「ああ、それは俺が教えたんだ。兄さんはとても強いからきつと役に立てると思って呼んだんだけど、どうやら拒否したみたいだね……。」「そうだ。月に攻め込むのはやめた方が良い。お前らの力では到底かなう訳ないだろう。」

「あら……。お師匠様はとても強いのに……。？私たちの力を合わせれば月なんて余裕ですわ。」

駄目だ……。この妖怪も攻めることにノリノリなようだ。警告を込めて最後の忠告をする。

「理都……。いいのか？ここで攻めて下手すればこの妖怪も、お前も命を落とすかもしれない。それでもいいなら勝手に行け。」

「あらく貴方結構冷たいのねえ〜。」

「当り前だろう。お前らは月の勢力を嘗めすぎている。月には高威力で強烈な光線を放ってくる兵器や空を飛んで爆弾を無差別に落としてくる兵器があるんだぞ？それに対してこっちは何か対策しているのか？してないだろ。それが分かればさっさとその話はなかったことにしてこっちで平和な生活を送っておくんだな。」

そう吐き捨てるように言って、裂け目を作って帰ろうとする。

「待って……。貴方は本当にこの戦いには参加しないの……。？」

「ああ。私は参加する気はない。まあ月の技術は欲しいから別で月にいくかもしれないけどな。まあ無駄な戦争を起こす気はない。」

それだけ言って武志は裂け目に入って帰るのだった……。

「マスター、あれでよかったのですか？」

「ああ。あれくらい言っておけば侵攻を辞めなくても、やる気に火はつくだろう。それにいざとなれば偶然を装って手助けをするつもりだ。」

「だけど月の首脳組にはほとんど顔バレしているよね？それはどうするの？」

確かにそうだ。月のトップの那珂皇子、月の頭脳の八意永琳、稀神サグメ、軍の魯鷓大佐。そして月の首脳クラスの綿月姉妹も私の顔くらいは知っているだろう。

「とりあえず覆面でいくから大丈夫だろう…。」

「あと、月に攻め入る日時を聞いてなかったですが大丈夫なんですか？」

「…。まあ、いつかの満月だろう。満月は妖怪にとって一番力が増す時だからな。準備がかなり進んでいたことを考えると一週間後に次の満月が来る。恐らくその時だろう。」

「だったらその時に合わせて向かいますか？」

「そうしよう。とりあえず準備をすろぞ。」

武志たちは来る戦争に向けて準備を始めるのだった…。

## PART. 44 潜入（という名の戦争）の準備

武志たちは来る戦争に向けて着々と準備を進めていくのだっ  
た…。

「ラダヴィーニヤ、準備物のリストは出来たか？」

「ありますよ。ちよつと待ってください。」

「マスター、これは何？」

「それか？ 接敵した時に敵を吹き飛ばす物の設計図さ。」

「マスターそんな物騒なものも準備するの？」

「一応な。使わないことが望ましいが。」

準備としては、主に武志が武器の設計図を制作し、ラダヴィーニヤと吉美がリストをまとめて、武志がそのリストに載つてあるものを作るのである。因みに武器の設計図を作っているのはその武器をいつか自動化させたり、他の人に教えるときに役立つかららしい…。

「マスター、例のリストが出来ましたよ。」

「ありがとうラダヴィーニヤ…。つて揺動部隊に持たせる銃多くな  
いか？」

「陽動作戦の人数は多い方がいいって言ったのはマスターですよ。」

「むう…。仕方ないか。」

武志は揺動部隊に持たせるARやSGを作る。

「マスターの能力って便利ですね〜」

「まあな。ただ割と戦いでは工夫がいるから大変だぞ？」

実際、武志の能力は便利ではあるが、戦いだと武器を出せてもそれ  
で倒せないという意味がないからだ。

「さて、ちよつと戦闘員を増やすから外に出てくる。」

「そんな近くの店に行く感じの勢いで行くようなものですかそれ。」

「いいんだよ。なんせ私は神だからさ。」

武志は創武殿の外に出て能力を使用する。するとそこにはナイト  
マルチマムの迷彩服に黒いアーマー、黒いヘルメットにゴーグルやサ  
ングラスを付けた兵士が大量に整列していた。割と軍の特殊部隊に  
近い見た目だろう。そして彼らは武志が作り出したアンドロイドで、

通常の人間よりも丈夫で力も強く、ある程度の攻撃なら自分で回復することが出来る高性能のアンドロイドである。

「これでいいかな。ざっと500人かな。揺動ならこれくらいは必要だろう。この戦争が終われば彼らにはここの警備員でもやっってもらおうかな。」

因みにだが、内訳はこんな感じである。

- ・一般兵…150名
- ・工兵…150名
- ・機動兵…100名
- ・盾兵…50名
- ・狙撃兵…45名
- ・無線兵…5名

揺動どころかそのまま前線を突破しそうな勢いである。

「これくらいいれば足りるだろう。」

そして武志はメガホンを取り出し、全体に指揮をする。

「こんにちは皆さん。私はここ創武殿の主でありこの世界の創造者であり、君たちのボスとなる洩矢武志だ。皆さんには来る月面作戦で揺動作戦を行う。この作戦が成功するかどうかは皆さんにかかっている。皆の健闘を祈る。」

『ウオオオオオオオオオオオオ!!!』

「素晴らしい…！俺はあんたについていくぜ！」

「ボスの為俺達も頑張らせていただきます！」

武志に向かって大喝采が起こる。

「ありがとう。戦争まであと3日しかない。それまでは自由にこの世界を行動しておいてくれ。ただし、三日後には必ずこの屋敷に戻るようにしてくれ。」

『ハイ！』

「ヨシ！なら解散だ！」

武志はそう言って、部隊を一時解散させる。

「さて…、私も戻るとするかな。」

武志はラダヴィーニヤと吉美の所へ戻る。

「ただいま戻った。」

「おかえりなさいマスター。」

「マスターおかえり〜！」

「作業は進んだか？」

「ええ。あとはマスターがこの紙に書かれたものを作るだけです。」

「分かった。数が多いから少し離れておけ。」

ラダヴィーニヤと吉美はそれを聞いて少し後ろに下がる。それを見計らって武志は能力を駆使し、武器や道具を制作していく。そして、

「これが君たちのための装備だ。」

武志は特注の装備を二人に渡す。余談だが、ラダヴィーニヤにはナイトマルチカムのチェストリグに、現代のP10RONIカスタムのような銃を渡し、吉美には黒と紺色のミリタリージャケットと黒のベルトに、現代のP90のような銃を渡す。そして二人に小さめのヘッドセットと黒の手袋を渡す。

「マスター、これ本当に貰っていいの？」

「ああ。一回装備してみなさい。」

二人共装備を着る。吉美は上に羽織り、ベルトをつけ、ラダヴィーニヤは

ジャケットを脱いでシャツの上に装備する。

「二人共よく似合うじゃないか。」

「…／／／テレテレ」

「ありがとうマスター！ところでマスターは着替えないの？」

「私か。私の分ももちろんあるさ。ちよつと待ちなさい。」

武志は部屋から出て自分の服装に着替える。因みに、武志は能力で自分の体に合わせて召喚し、同時に今着ている服を消してチエルベツ口の板の倉庫部分に収納すればいつでも早着替えができる。

（そういえば今着ている服とは別に普段着も一新したいなく。また戦争が終わった後で考えておくか〜。）

そんなことを考えながら二人の前に姿を現す。

「すごいー！マスター似合ってるよー！」

「凄いですね。」

「そうかな。そういつてもらえるとありがたい。」

武志はダークグレーの戦闘服を着て、黒のアーマーにベルト、頭にはアンドロイド兵と同じヘルメットをかぶっているが、更に緑のヘッドセットと黒のケブラーマスクを装備して、月の民に顔バレをしないように心掛けているのと共に、カツコよさも追及している(らしい)。とりあえず、今の装備がこれからの君たちの装備となるが、他に何か欲しいものは無いか？

「ん、私は特にないかな。」

「私も大丈夫です。」

「なら次の説明に移るが、このヘッドセットはラダヴィーニヤの能力を使わなくても、このヘッドセット同士が特別な力で繋がっているからラダヴィーニヤの能力を使わなくても声だけ通信ができるという優れものだ。」

特別な力のおかげで電池も通信機器も必要なく、どんな距離でも音声クリアに聞こえて、更に傍受もされにくいという利点も持つ。最も、特別な力と書いたが実際は武志の神力が元である。

「だったらこれで準備は完了だ。これからは各自体を休めるように。そして町に民間人を追加するから、好きな時に遊びに行きなさい。ただし任務に支障が出ない程度でな。」

「分かりました。」

「分かったよマスター！」

「それじゃ解散という事で。」

そして武志は能力を駆使して町の全域に民間人を召喚させるのだった…。

PART・45 RとYの新世界探索

マスターから解散という指示が出たので創武殿から外に出て周囲を探索する。見た感じはここだけ島になっていて向こうに本土があるといった感じね。

「ラダちゃん行くよ♪」

私はいつの間にか吉美ちゃんからラダちゃんと言われている。本人曰く長くて呼びにくいかららしいけど、私としてはかなり新鮮な感じだ。

私たちは橋を渡って本土へ向かう。民間人を追加したとか言っていたけど本土にいるのかな。

「しかし風が気持ちいいね♪」

「そうだね。」

こんなたわいもない会話を続けているといつの間にか本土に到着したようだ。見た感じはかなり発展しているようだ。

「凄いね。THE, 都会って感じがするよ。」

「ね。あつ、箱が走っているよ！」

「あれもマスターが作ったのかな。凄いね。」

ラダヴィーニヤが見つけたのは電車である。この島には島を一周する環状線と東西と南北に走る路線がある。意外と交通も発展しているのである。

「あそこから出ているよ。行ってみよう！」

「あつ、待って吉美ちゃん！」

二人は向こうに見える駅に向かう。

「わく♪人がいっぱいいる♪」

「ホントだね。さつきとは違って人が多いよ。」

「ラダちゃん、あれなんて書いてあるの？」

「あれは… 匠たくみがうらえきヶ浦駅かな？」

そう。ここは匠ヶ浦駅。武志曰く、この屋敷と本土をつなぐ重要な駅と捉えていて、ここには環状線と南北線、そして地下鉄が乗り入れているとのこと。また、規模も大きく、立派な駅ビルは周辺のお洒落



な港湾都市となじんでいる。

「あそこにお店があるよ！行ってみようよ。」

「ちよつと待って、お金あるの？」

「あつ… ないや…。」

「だったらまた今度だね。マスターも連れてみんなで行こうよ。」

「うん！そうだね！」

二人はお店から離れ、通りを歩いていく。

「しかしこれをマスターがすべて作ったと考えると凄いね。」

「そうね。本当にマスターのセンスには目を光らせるものがあるね。」

「ねえラダちゃん！あれ見て！」

「どうしたのあそこを指さして。」

ラダヴィーニヤは吉美が指をさした方向を見ると、そこには映画館が建っているのだった。

「… 映画見に行きたいの？」

「うん！」

ラダヴィーニヤは呆れた顔で告げる。

「あのね… 吉美ちゃん。今日は二人共お金を持ってないでしょ？だからお店には入れないの。また今度マスターを誘ってみんなで行こうよ。」

「そうだね！」

二人はまた歩き始める。

「しかしこの並木道は綺麗だね。まるで南国みたいな感じがするよ。」

二人は今、ヤシの木みたいな植物が生えている並木道を歩いている。ここは匠ヶ浦の中心地から少し離れたところにある、【匠ヶ浦海浜公園】に来ているのである。

「向こうには船も見えるし、本当に南国に来たみたいだね。」

二人がそんな感想を述べていると通信が入る。

「あー、二人共、休憩中悪いけど、そろそろ屋敷に戻ってきてくれ。」

「… 聞いた？吉美ちゃん。」

「聞いたよ。ラダちゃん、マスターまでつないで。」

「分かった。」

ラダヴィーニヤが武志の所までポータルをつなぐと、そこには大勢の兵の前で堂々としている武志の姿があったのだった……。

「来たか二人共。」

「マスター、これは…?」

「ああ、こいつらか。こいつらは一緒に戦ってくれる素敵な仲間たちさ。しかも私の力を直に受け継がせたアンドロイドだから丈夫だし、壊れてもすぐ元通りになる。それでだ。君たちには任務を与えよう。」

「何ですかマスター。」

「吉美にはこの兵士たちを指揮してもらおう。そう簡単には死なないから少しくらい無茶してくれても構わない。」

「分かったよマスター!」

「ラダヴィーニヤは私と一緒に潜入して色々手助けをしてほしい。」

「分かりましたマスター。」

「よし。それじゃあ三十分後には出発する。各自準備をしておくように。三十分後にはここに集合な。分かったか。」

「分かりました。」

「はい。マスター!」

こうして皆は準備して、戦争に備えるのであった……。

PART. 46 第一次月面戦争・開戦

30分後…

「よし、二人共戻ってきたな？」

「はい。」

「はい！マスター！」

「それでは作戦の概要を話そうかな。」

二人と特殊部隊の仲間たちは武志から作戦の概要を聞いていた。

「月の都はこうなっているんだがまずA部隊は正面から攻めてくれ。」

『わかりました！』

「それで、B部隊とC部隊はそれぞれ横から攻めてほしい。」

『分かりました！』

「そして私たちは裏から侵入して警備の薄い所を抜けて、目的の物を回収する。」

「マスター、質問をいいですか？」

「どうぞ。ラダヴィーニャ。」

「目的の物って具体的に何ですか？」

目的の物か。確かに月の技術が欲しいとは前に話したが具体的には決めてなかったな。

「んく、とりあえず月の技術で、なんか使えそうなものを頼む。特に生活に便利なものや武器が嬉しいかな。迷ったら私に聞いてくれ。」

「分かりました。」

「それで、話を続けるが、私たちが中心部に侵入している間、君たちが粘って兵力を集中させるのが目的だ。だから月軍を無理に滅ぼす必要はない。あと、地上の妖怪たちも参戦するらしいが、彼らとは仲良くしたい。決してこちらからは攻撃しないように。」

『ハイ！』

「ただし、こちらに敵意を示し、意図的に攻撃を仕掛けてくるようなら容赦はするな。」

『ハイ！』

「それでは作戦の概要は以上だ。そろそろ出発する。君たちの健闘を

祈る。」

『ハイ！』

特殊部隊たちの返事が響き渡る。そして武志は小声で吉美にささやく。

「吉美、彼らを頼んだぞ。」

「分かりました！マスターも頑張ってください！」

「ああ。勿論だ。… そうだ、一つだけ言っておくべきことがあったんだった。」

「なんですか？マスター。」

「誰かいい感じの奴を見つけたら捕虜…。スカウトしてもいいぞ。私の神名と月読の名前を出せば恐らく皆ついてくるだろう。」

「分かったマスター。いい感じの人がいたら連れてくるね！」

「ああ。ただそんなに連れてくるなよ？せめて強い奴二人までにしてほしい。それに私が指揮していた奴らは連れてくるな。彼奴らはここにいないべきじゃないからな。」

「分かったマスター。例の部隊以外で強い人がいいよね？」

「勿論だ。それじゃあそろそろ行こうか。」

「はい！」

武志はマスクをつけ、ヘルメットを被ると、ポータルを開き、

「このポータルの向こうは月の都の辺境だ！各員、気を引き締めていこう！」

『ハイ！』

「いざ、突撃——！」

武志の掛け声と共に特殊部隊たちと吉美の操る兵器が侵攻していく。武志とラダヴィーニャはそれを見守る。最後に吉美がくぐり、

「ではマスターも頑張ってくださいね！」

その声と共にポータルは消えていくのだった…。

「それじゃあ私たちも行こうか。」

「そうですね。」

武志はまたポータルを開くと、それをくぐる。その先は遠くに都が見えるが、それ以外は何もない辺境だった。

「ここがマスターの言ってた月ですか……。」  
「そうだな。で、あそこに見えるのが月の都だ。」  
「あれが月の都ですか……。結構大きいんですね。」  
「そうだな。とりあえずあそこまで歩くぞ。」  
「あそこまでですか……。乗り物は無いんですか?」  
「乗り物はないし、あんまり早く行き過ぎても見つかりやすくなるだけだぞ?」  
「うええ……。マジですか……。」  
「マジだな。さあ行くぞ。」  
武志とラダヴィーニャは月の都まで頑張って歩いていくのだった……。

吉美 Side

ここが月の都か。なんかすごい綺麗な所だな〜と思ったけどこれから戦争だもんね。がんばらなくちゃ。

「みんな！作戦通り別れて進軍するよ！」

『ハイー!』

特殊部隊のお仲間たちは三手に分かれて進軍していく。しかし、心なしか少し防衛が弱いような……?

私はマスターから貰った望遠鏡を持って空を飛んでみる。すると向こうで戦火が上がっているのが見えるね。恐らくマスターが言っていた妖怪達だろう。見る感じ派手な兵器とかは無いけどそれでも月軍相手に奮闘しているようだ。

「みんな！今のうちにどんどん行くよ！」

そういうとみんな進軍するスピードが速くなる。そういえば揺動が目的って言っていたけどあわよくば本陣まで制圧しちゃってもいいよね?

ただ、次の瞬間、

ドゴーン!

と、爆発音が鳴り響き、装甲車が一台爆散する。

「… えっ!？」

それを皮切りに次々と兵がやられていく。

「嘘でしょ!?! B部隊、C部隊応答して!」

すると、

「こちらB部隊。何かありましたか?」

「こちらC部隊。ご用件は?」

良かった。とりあえず無事のようなだ。こちらの現状を伝えよう。

「A部隊は次々と兵がやられています。恐らくですがどこかから狙われていると思います。それらしき人影がいるようなら攻撃してください。」

「分かった。プツン」

「分かりました。プツツ」

とりあえず探さなくちやな。飛ばしているヘリコプターから索敵をする。すると、それらしき二人の人影がそれぞれ別のビルの上に見えた。

「あれは… 確か一ノ瀬君だったかな… ?それともう一人は誰だろう… ?」

吉美は少しだけ考えていたが、

「まあいつか。あの人強そうだからあの人スカウトしようかな〜♪」

「そのみんな! スナイパーを倒すからついてきて!」

仲間たちは了解と言った感じについてくる。そして一ノ瀬君じゃない方がいるビルの根元まで行く。

「いい?ここにいるスナイパーは殺さずに捕まえてね?」

(コクコク。)

「じゃあ行くよ!」

ドアを開けて侵入すると、中に数人の月兵がいる。しかし、この程度じゃ私たちの部隊の相手にもならない。月兵は次々とやられていく。

「それじゃあここが最後かな?多分ここから屋上に行けると思うから油断しないでね?」

ドアを開けようとした瞬間、

「ゴハア!!」バタリ

「えっ、どうしたん」ゴツン

部隊の一人が倒れ、突然後頭部に衝撃が来る。一体何がいるんだろう…。

「痛いなく、」

目を開けていると、そこには白の覆面を被って、武装した男がいた…。

「…まだ生きていたか。」

その一言で周りを見ているとアンドロイド兵たちが機能停止していたのだった…。

(あれ…、これって結構やばい状況…?)

「…まあいい。俺の姿を見たやつはいないし、見たやつは全員死んでいる。それに相棒には指一本触れさせんぞ。」

(相棒って…、こいつ上の奴の仲間か。見た感じ月軍のエリートかと思っただけどこいつもおそろく同じくらい立場だろう。ってことはどうしよう結構ヤバイ状況だよ…!とりあえず交渉してみようかな。もしかしたら仲間になるかもしれないし。)

「君も月の奴の仲間かい?」

「…そうだ。ただ俺らは傭兵みたいなものだ。」

「だったら仲間にならない?今強い人を探しているの。」

「…それはいいな。ただ今は月軍の仲間だ。残念だが、敵であるお前には死んでもらうしかない。たとえそれが女でも容赦なししないぞ。」

(ああああああ交渉が良い感じになると思ったら決裂したー!もうこうなったら戦うしかないなく!)

「あら、せっかく良い人だと思ったのに。仕方がないね。ちよつと痛いけど貴方にはやられてもらおうよ!」

吉美は一人で目の前の覆面男と戦うのだった…。

PART・47 対決・白覆面男

私は今、目の前の覆面男と戦闘になっています。とても不味い状況となっております。

「そうか… 仕方ない。これは戦争だ。お互い手加減なしで行こうじゃないか。」

「そうだね！」

そう戦おうとして銃を構えようとした瞬間、突然覆面男の姿が消える。

「えっ…！」

何処を見渡しても姿は見えない。そう戸惑っていると、

「戦場での迷いは命取りだ。」

後ろから声が聞こえてくる。よけようとするも、ちよつと刃物が掠ってしまったみたいだ。疑問をぶつけるとという意味でちよつと話しかけてみる。

「貴方、どういうトリックで姿を消しているのかしら？」

「… 敵であるお前に教える義理は無いが、俺の能力とでも言っておこう。」

この人も能力者か。姿を消すという事はきつと厄介な能力なんだろう。

「そうかく。きつと良い能力なんだね。」

「それでもないがな。」

するとまた消える。私もそれに合わせてショットガンを出現させる。マスターほどではないけど一応武器くらいなら出せるもんね。

お互いタイミングをうかがっているのか動きが無い状態が少し続く。すると後ろに若干の気配がする。それに合わせて振り向き、ショットガンを撃つ。

「グウアッ！」

覆面男の声が聞こえる。恐らく命中した模様だ。だがまだ姿は現れない。しかし何処からか声が聞こえてくる。

「なかなかやるな… この俺に被弾させたことを天国で誇りに思うが



良い。」

あつ、これはなかなかにお怒りのようですね。だけどころいう人つて冷静に対処すれば簡単に倒すことができるよね。

「……喰らえ」バラバラバラバラ

「ちよつ！」

いきなり高連射の銃を撃ってくる。でもこれつてラダちゃんの銃と同じくらいの連射力の気が……。そんなことを考えても仕方ないので私もショットガンを捨て、愛銃のP90で応戦する。弾の飛んでくる方向に向かって連射する。

しかし手ごたえがない。仕方がないのでこの日のために準備した技を使う。

「仕方ない。【古代兵器「エンシエントアロー」】

これは矢を辺り一面に発射する技。しかもその矢は大量にランダムで落ちてくるため、非常によけにくい技となっている。実際、覆面男も姿を現して避けたりナイフで矢を無力化している。あの人かなりすごいよね。しかし矢に集中しすぎているため、

「これで終わりだよ！」バババババ

「……！」

これは被弾したと思ったその時、矢と弾丸が消滅する。

「危ないな。全く。」

「えっ？」

目の前の出来事に困惑すると、彼は再び消える。恐らく第二ラウンドのようだ。そんなあ。しかし嘆く暇もないので敵が踏むと起爆する小型特製透明対人地雷を適当な位置に出現させる。味方が踏んでも何も起こらない私の自慢の一品だ。

すると地雷のうちの一つが起爆する。私はそこに向かって連射する。しかし手ごたえはない。すると後ろからナイフが私をかすめる。私はそこにまた連射する。しかし当たった感じはない。怖いよ。

すると今度は近くで地雷が起爆する。私はそこにマスターから貰ったグレネードを投げる。すると、覆面男の姿が露になる。私はそこに連射する。そして、彼に命中し、彼は倒れる。そう、私が投げた

のは能力阻害グレネード。どんな能力も一定時間使用不可にするというグレネードだ。最初に彼はこれを能力と言い張ったので使用したらまさかこんなふうまくいくとは思わなかったよ。

私は彼に近寄る。

「うう… お前、なかなかやるな…。」

「まあね。マスターのもとでかなり特訓させられたからね。」

「そうか…。俺の負けだな。もうボロボロだ。」

負け宣言を頂いたところで、本題の事を聞いてみる。

「そう…。ところで、もう一回聞けど、私たちの仲間になる気はない？」

「仲間か…。いいだろう。だが相棒がなんというだろうか。」

相棒…？ あつ、そういえば上のスナイパー忘れてた。すると上から足音がする。

「おくい、そっちはどうなったか…。って、こりゃ派手にやったなく。ヤバい。これはまた戦わなければいけない奴だ。私はすぐに身構える。」

「お嬢ちゃん、そう身構えなくていい。君はその白マスクに勝ったんだろ？」

「そう…。ですけど。」

「だろうなく。敵が入ってきたのは察したが、静かになって降りてきたらこれだからなく。」

「貴方は戦わないのですか？」

「無理無理。接近戦でその奴に勝てるなら俺には絶対勝てないさ。つまり降参だ。降参。」

目の前の方は降参してくれるようだ。それほどに強かったのかこの人。

「なあ…。こいつが私たちの仲間になろうとか言ってるけどどうするんだ？」

「仲間ねえ…。なあ嬢ちゃん、君らの所は暇しないかい？」

暇しないかか。私はそれについて少しだけ考える。

「たぶんだけど暇しないと思うよ。むしろ毎日が楽しいし、絶対に後

悔しいと思う。」

「そうか……。だったら俺も嬢ちゃんについていくとするよ。」

「そう！だったら私たちの所に案内するよ。そうそう、一応捕虜という扱いにしておかないと他の味方から攻撃されるかもだから一応この手錠を着けさせてもらうね。」

「……」

「世知辛いね。」

「……これで良し♪さあ行こうか♪ところで名前だけ聞いていい？」

「俺は白魔しろま 大無たいむ」と覆面男。

「俺は望月もちつき バンデイ」

「そう！私は金河吉美。よろしくね♪」

「ああ。」

「よろしく頼むよ。」

吉美は二人を連れて本陣へと戻るのだった……。

PART・48 潜入作戦

武志とラダヴィーニヤは月の都のすぐ近くまで歩いてくるのだっ  
た……。

「マスター、まだく？」

「もう少しだ。ほら、無駄話せずに行くぞ。ここから大きな声で話し  
たら見つかるかもしれないからな。」

「……はいい。」

そうこう言いながら月の都のすぐ隣まで歩く。

「ほら着いたぞ。ここが月の都だ。」

武志とラダヴィーニヤは月の都の入り口にたどり着く。

「うわあ、凄い門だね。」

「そうだな。で、本来ならここに門番がいるはずなんだけど……、」

武志は辺りを見回すが、見る限り門番はいない。

「おそらく反対側で妖怪達や吉美たちと交戦しているんだろうな。と  
りあえず早めに侵入するぞ。」

「はい。」

だが門は固く閉じているしかも防御結界まで張られているようだ。

「どうやってこの先に進むのですか？」

「この結界は緊急用の丈夫な奴だ。だから並大抵の装備では壊せない  
だろうな。」

「だったら迂回するのですか？」

「私は創造神であり破壊神だ。少々音は出るが、いい方法がある。」

武志はおもむろにチエルベツ口の板からカタストロフィーを取り  
出し、鉄の扉に振り下ろす。

ガキン！

凄いい音がして鉄の扉がへこむ。

「これで結界は壊れた。あとはもう一回……！」

武志はもう一回振り下ろす。

ガキン！

鉄の扉に人が一人通れるくらいの穴が開くのだった……。

「さあ行くぞ。恐らく敵に侵入を感じられている可能性がある。早めに入るぞ。」

「はい」

二人は穴を通って月の都の中に入る。

「ここが月の都…。」

「ああ。私がいところよりも発展しているな。」

月の都は建物が中華風だが、それ以外は武志の新世界並みに発展していたのであった。

「とりあえず急ぐぞ。目指すはあの建物だ。」

「はい。」

二人は中央にある大きな建物に向かうのであった…。

「流石にここまでくると警備が固いな…。」

「そうですね…。」

「流石にここからじゃ無理だ。裏から入るぞ。」

二人は見つからないように裏口にまわる。すると塀の上にある鉄柵が途切れているところを見つめる。

「丁度いい。ここを登って入るぞ。」

「ここですか!？」

「そうだ。登れなくてもギリギリを飛ぶ感じで行けば問題ないと思うが。」

「それもそうですね。」

「じゃあ行くぞ。ここからは敵の本部だ。見つからないように気を引き締めていくぞ。」

「はい。」

二人は壁を登って侵入する。

「ここからだが、暫くは私について来い。その後はまた別の指示をする。とりあえず建物内に侵入しよう。」

「でも大分兵士が多いですよ?。」

そう。見渡す限り武装した兵士が5名くらい休憩・警備している。流石、戦争中とだけあって守りは厳しいか。幸い、気づかれてはいないが、この人数を相手するのは流石に無理がある。

「仕方ないか…。」

武志は手りゅう弾を取り出すと塀の向こうに向かって放り投げる。

「耳をふさいでおけよ…！」

「えっ」

ドカーン

「おい！すぐそこで爆発音がしたぞ！」

「なんてこった！休憩してる暇じゃないな。敵が来ている！すぐ行くぞ！」

「全員、兵の向こうへ！敵がいるかもしれない！気をつけろ！」

兵士たちはみんな揃って爆発音のした兵の向こうに走っていくのだった…。

「さあ、急いで中に入るぞ。奴らが戻ってくる前にな。」

そうして武志たちは建物の中へ侵入するのだった…。

「建物の中に入りましたが、これからどうしますか？」

「そうだな…とりあえずこの技術倉庫というところに行ってみていね。」

「技術倉庫…地下ですね。ところでその紙はなんですか？」

「これか？さっきの兵士達、作戦でも練っていたのか、警備用の地図を置いていったから、勝手にコピーして持ってきた。」

「何でしょう…さすがの能力ですね…。」

「まあな。とりあえず、これで大まかな警備の位置、カメラの位置は分かる。」

「でしたら先にこのセキュリティルームに行った方が良くないですか？」

「確かにね。だけどここを見てほしい。」

武志が指をさした先には、地下サーバールームとの文字が。

「こつちの方が、警備は固いだろうけど、成果も大きい。」

「でも警備固いならやめといた方が良くないですか？」

「まあ全ては技術倉庫の中身次第という事だな。それにさっきの地図もあるからセキュリティの意味もないだろうよ。」

「…つまり技術倉庫の中身があんまりよくなかったらサーバー

ムに向かうという事ですね？」

「そういう事だな。とりあえず向かうぞ。」

「そうですね。」

二人は警備の目を盗みながら地下に向かう。

「この先が地下への階段ですよね？」

「ああ。気をつけろ、地下への通路はここと反対側の一個しかない。だからここで見つかると思わぬことになる。分かったか？」

「はい。」

「ならいい。急ぐぞ。」

二人は地下へと進む。

「しかし、戦争中なのかは知らないが、あんまり人気がないな。」

「そうですね。…つと、あそこに地下研究室がありますよ？」

「ほう、帰りにちよつと覗いてみるか。もしかしたら現在開発中のものがあるかもしれないからな。」

「すっかり思考が産業スパイになってますね。…」

「そうだな。そういうえば吉美は上手くやっているだろうか。」

「ん、どうでしょう。一段落ついたら連絡しましょう。」

「そうだな。…つと、ここが技術倉庫のようだ。」

「ここがですか。中に人がいるかもしれないので慎重に入りましょう。」

「そうしたいところなんだが…鍵がかかっているようだな。…」

そう。扉の横に、カードキーを通すところと思われる切れ目と、暗証番号式のロックがかかっているのだった。…」

「これは…結構嚴重な奴ですね。…」

「だな。これは誰かを連れてくるか、カードキーと暗証番号を持ってくるしかないな。」

「だったら先ほどの研究室に行ってみましょうよ。もしかしたら何かあるかもしれませんよ。」

「そうだな。一回戻ってみるか。」

二人は先ほどの研究室に戻り、扉を開けようとする、またとあることに気づく。

「おいおい……ここもカードキーじゃないか……。」

「ええ……つてことはどうするんですか？」

「誰か適当な人を探してカードキーをありがたくもらうしかないな。」  
「マジですかあ……。」

二人はカードキーを持っていそうな人を探す。

「あそこの警備員なんて持っていそうじゃないか……？」

武志が指をさしたのは武装状態でガスマスク＋白衣を身に着けている警備員だ。

「ならあの人を倒すのですか……？」

「そうだな。彼なら服装的にカードキーを持っているだろう。こちらに気づかれてはならないみたいだから行くぞ。」

「は……い。」

二人は音もなくその警備員に忍び寄り、後ろから羽交い絞めにする。数秒した後警備員は気絶して動かなくなる。

「ラダヴィーニャ、カードキーを持っていたぞ。」

「これで研究室に入れますね！」

「ああ。さあ行こうか。つと……その前にこの人は適当な場所にしまっておこう。見つかると大変だしな。」

武志はその警備員を抱え上げると、近くの箱へ放り込む。

「これでいいだろう。さあ、行くぞ。」

「はい。」

二人は研究室に入っていくのだった……。



PART・49 地下・研究室にて

武志とラダヴィーニヤは研究員から借りた（強奪した）カードキーで研究室の中に入る。

「すごいね。いろいろな薬品や機器があるよ。」

「そうだな。でも触るなよ？危ないからな。」

「は〜い。」

研究室はとても広く、しかも内部に身分の高い人の研究室まであった。鍵がかかっていたが窓から内部を見ることができ、相当高度な実験などを行っているように見えた。

「しかし、こんな研究をするなんて一体何を作っているのでしょうかね。この戦争だつて半分妖怪たちの奇襲みたいなものでしょう？」

「ああ。恐らくだが、これは薬を作っていると思われるな。その証拠に、そこに怪しげな瓶がいくつも並んでいるからな。」

「どうします？いくつか持っていきますか？」

「いや持っていかなくていいだろう。それより早くパスワードだけ見つけて倉庫に入るぞ。」

「は〜い。」

二人は研究室の中でカードキーを探す。机の中、引き出し、壁の掲示板など、あらゆるところを見るが、それっぽいものは見つからなかった。

「見つかりませんね。」

「そうだな。仕方がないが最終手段でいこう。」

「え？まだ何か案があるんですか？」

「ああ。とりあえずついて来い。」

二人は先ほどの技術倉庫の扉の前に行く。

「カードキーはまだ見つかってませんが…。」

すると武志はカードキー？それはなんだ？というような感じで、「これを使うんだよ。」

と、カタストロフィーを握り、それを振り下ろす。

ガキーン！

金属音が辺り一帯に鳴り響くと、技術倉庫の扉はそこにはなく、技術倉庫の後ろの方まで吹っ飛んでいたのだった。

「さあ、入ろうか。今の音を聞いて敵が駆けつけてくるかもしれないから早めに行こうか… っと、その前に、いいモノを渡しておこう。」

武志が差し出したのは大きな鞆と、よく分からない機械だった。

「これは…？」

「ああ、これは大きな鞆と、カメラなどの監視ツールから姿を消すことが出来る機械さ。ちよつとカメラの方にノイズが行くから多用はしたくなかったけど、倉庫の中にカメラがあつた場合厄介なことになるからとりあえず渡しておく。電源は入ってるからすで見えないはずさ。さあ今度こそ行こうか。」

二人は技術倉庫の中に入ろうとすると…、

「そこまでよ、侵入者さん。」

「…！」

「ほう… この番人のお出ましですかねえ…！」

（おいおい… 山本と大鹿か… 懐かしい顔ぶれだな…。それに綿月姉妹の… どっちだったかは忘れたがかなり重鎮がお出迎えのよ）

そこにはかつて武志の同僚だった山本比呂士と大鹿美晴、それに綿月依姫という、月の都の中でもかなり実力のある方々が集まっていたのだった…。

「色々聞きたいことはあるけど二つだけ聞きたいことがあるわ。」

「どうした。」

「貴方達は一体誰かしら。それと、貴方達の目的は何かを教えてください。」

「私達の目的は、この月の都の技術を少し習得すること。そして、私達が誰かという質問だが、それは愚問だ。私達は貴方の敵であり、今表の方で戦っている部隊の総大将だ。」

「じゃあお前らを倒せばあの謎の部隊は帰ってくれるんだな？」

「そうだ。」

「じゃあ決まりだお前らを今ここでぶちのめせばいいんだな？」

山本が大剣を持ってそういうが、依姫がそれを制止する。

「やめなさい。まだ話は終わってないわ。」

山本は素直に大剣を下ろす。

「最後に一つだけ聞きたいわ。貴方は今ここで部隊ごと引き返すことは可能かしら？」

「それは愚問というものだ。依姫よ。私は貴女の敵であるのだ。」

「…っ、こいつ、私の名前を…！」

「それにこっちにも技術を習得せねばならない理由がある。そんなくだらない取引で引き返すわけがない。すまないがここで少し寝てもらうよ。」

「ラダヴィーニヤ、少し下がって使えそうなものを集めておけ。私はこいつらの相手をする。」

ラダヴィーニヤは何も言わず後ろへ下がる。山本と大鹿の二人が追いかけてやってくるが、腰から拳銃を取り、二人に向ける。

「おっと、悪いけどここから先に行かせることはできない。」

「…。二人とも下がちなさい。ここは私が行くわ。」

「依姫様…。」

「貴方達は下がってなさい。」

「…は、はい！依姫様本気だ…。」

「分かりました！あんなに怖い依姫様を見るのは初めてだよ。」

「…さて、貴方を少し問い詰める必要がありますね…。」

「おお、怖い怖い。」

～次回へ続く～

PART・ 50 VS 綿月依姫 く地下室での決闘

武志と依姫は1vs1で戦うのであった。

「教えなさい！貴方はなぜ私の名前を知っているのか！そして貴方は誰なのか！」

「どっちも敵であるお前に教える義理はない。」

「…っ、交渉は無駄みたいね。祇園様よ、あの者を捕えよ！」

依姫が地面に剣を刺すと、武志の周りに多数の剣が生えてくる。

「祇園の力か… 恐ろしいことをするな。お前、神下ろしができるのか？」

「ええ。私の力よ。貴方はこの力によりひれ伏すのだ。」

「そうか。それは怖いな。」

「この期に及んでだいぶ饒舌になってきているわね。この力に怖気づいたのかしら？」

「どうだかな。」

（まてよ…、祇園様って須佐之男の事だよな…？ だったら一杯食わせてやるか。）

「須佐之男、聞こえるか？今すぐ私を開放して目の前にいる依姫を捕まえてくれ。」

「その声は武志様か!?分かった。今すぐ放すぞ！」

そう。依姫の力は普通の妖怪相手には凶悪だが、武志は創造神であり、かなりの上位神であり、下級の神を呼び出しても武志には効かないのである。祇園こと須佐之男はその声を聞いて、すぐに武志を開放し、依姫を拘束する。

「なっ…！」

「その程度の力なのか…？ 依姫さん。」

「もう放してやれ。須佐之男。」

すると依姫の周りの剣は消える。

「貴方は一体…！」

「どうだかな。【ガトリングバレットヘル】」

武志はそう唱えると周りに6つのガトリング砲が出現し、砲身が回

転を始める。

「貴方達は隠れて！」

ただ傍観していた二人に隠れるよう言うと、ガトリング砲が依姫に向かつて集中放火される。この技は相手に向かつてガトリング砲を集中放火するという技だ。正面から受けようものなら圧倒的物量で突破されるが、依姫はこう唱える。

「金山彦命よ、目の前の弾とあの砲塔をを砂に還せ！」

するとガトリング砲と発射された弾は砂へと還ってしまふ。

（ふむ… 神おろしが出来るとは聞いていたがさっきのスサノオといい、結構な数を呼び出せるんだな…。）

「そして持ち主へと返しなさい！」

「えっ…！」

すると武志の周りにガトリング砲が出現する。しかも宝塔が回転した状態で、銃口は武志の方を狙っている。

（流石に洒落にならん…。）

武志はガトリング砲をすべて消去すると、次の技を唱える。

【破壊神の鉄槌】

この技はカタストロフィーを取り出し、地面を叩いたその反動で攻撃する技だが…

「…！貴方、その槌をどこで…！」

その質問の答えは簡単だ。武志が作ったのだから。だが、ここで正直に言うと話がこじれると考えたのか、

「ああ、この槌かい、これは下界の大きな神社で拾ったのさ。」

そしてカタストロフィーを振り下ろす。すると叩いた反動で地面から岩が飛び出してくる。しかも衝撃ももろに喰らうと中々のダメージとなるので結構強い技である。

「厄介ね、だけど次ですべてを終わらせるわ…！破壊神洩矢武志よ！目の前の相手を破壊しなさい…！」

まさかの名前を言ってきた。自分が神下ろししようとしてきたのだ。さすがにそれはNGのため、武志は自身のクローンと入れ替わり、武志自身は呼び出される。

「私は洩矢武志。目の前の輩を駆逐する。」

なんとなくて自己紹介だけ言い、後ろから依姫をカタストロフィーで静かに気絶させる。

「なん…で…:…:。」

依姫は倒れて動かなくなる。つまりこの勝負は武志の勝利となるのだった。

「…:…: そういえば他に二人いたな。」

武志は周辺を探すが、それらしき人影はないし、気配も感じない。

「…:…: 逃げたか。腑抜けた奴らだな。まあいい。記憶処理だけして撤退するか。」

武志は依姫に手をかぎして、先ほどの戦いのシーンを当たり障りのない物に差し替える。

「…:…: これでよし。ラダヴィーニヤ、準備は大丈夫か?」

「…:…: マスター、終わったんですね。こちらでいい感じの設計図をいくつか発見したので持っていきましょう。」

「了解。今そっちに向かうからそこで待っていてくれ。」

「マスター、位置はわかりますか?」

「大丈夫だ。問題ない。」

「…:…: まあ言葉通りの意味でとらえておきますよ…:。」

武志は軽く物色しながら探すが、設計図を持ち帰るほどのめぼしい物もなく、ラダヴィーニヤの元へたどり着くのだった。

「マスター、お疲れ様です。」

「ラダヴィーニヤこそ。お疲れ様。吉美の所へ繋いでくれ。」

「分かりました。」

武志たちはポータルをくぐって吉美の元へ帰るのだった…:。

「吉美、お疲れ様。」

「あつ、マスターお疲れ様〜♪」

「そっちは今どんな感じ?」

「こっちはね〜絶賛膠着状態って感じだよ〜敵の守りも固いし正直早く来てほしいとずっと思ってたよ〜」

「ハハハ。それはすまないな。ところであそこの二人は誰だい？」

武志は向こうに座っている白魔とバンディを向いて言う。

「あく、あの二人はねく、私が仲間に勧誘したの♪ほら、マスター強い人がいたら交渉して連れて帰ってきてくれて言ってくれよ？だから仲間にしたの♪」

「ほう。偉いね。半分無茶ぶりだったけどよくやったよ。」

「えへへく頑張ったよ。」

すると二人がこちらへ向かってくる。

「… あんたがこの嬢ちゃんの言ってたマスターかい？」

「ああ。そうだ。君たちの名前を覚えてくれないか？」

「… 白魔大無。ステルスが得意だ。」

「俺は望月バンディ。ここではスナイパーをやってたさ。」

「そうか。私は洩矢武志。この子から聞いているかもしれないが、創造神だ。」

「へえくつてことは月読様のお父様って事かい？」

「まあそうなるな。」

「そりやすげえや。こんな偉い人の元にいられるとか最高か？」

「… まあ君たちが今までどんな生活をしていたのかは知らないが、今よりも自由で、裕福で、楽しい暮らしになるだろう。少なくともそれらは保証しよう。」

「そうか。よろしくなボス。」

「… よろしくお願ひするぞ。ボス。」

「こちらこそよろしく。とりあえず私たちの世界へ帰るか。」

「そうだね。」

「ボスたちのいた世界かく楽しみだね。」

「… どんな世界だろうな。」

「そう期待されるとなんだか照れるな。まあ似たような世界だから… ん？」

武志が空を見上げると、大きめのレーザーが向こうの方へ飛んでいくのだった。

「あああれは対神・妖怪用の迫撃レーザーだね。恐らく誰か重要人

物を狙い撃ちしたんじゃないかな?」

「怖いね。マスター、早めに帰ろう?」

「そうだな。総員撤退!」

こうして武志たちは撤退をはじめ、無事、何事もなく撤退することが出来たのだった……。



PART・ 51 帰還そして案内そして戦果報告

武志たちは月面から帰還し、自分たちの世界へと戻ってくるのだ  
た…。

「さあ、着いたぞ。ここが私たちの世界だ。」

「待ち時間に吉美ちゃんから聞いたが、ボス自らが作ったんだって？」

「ああ、そうだ。この世界全て私が作っている。」

「…凄いな。」

先の戦いでスカウトした二人はこの世界にただ驚くことしかできない。今、武志たちがいるのは創武殿の前で、一つの島みたいになっているところだ。ここからの景色はとてよく、お洒落な橋があつてその向こうには匠ヶ浦とその先の西川のビル群がうつすらと見えるというかなり見晴らしのいい景色が楽しめるのである。

「月の都にもこんな感じのビルはあつたけどまさかあそこ以上におしゃれなビルがあるとはね〜」

バンデイも何処からか取り出した双眼鏡を覗きながら景色を楽しんでいるようだ。

「それよりマスター、早く他の所も案内しよう？」

「そうだな。二人共、そろそろいくぞ…とそうだ。他のメンバーたちを宿舎へ送り返さなければな。」

「しかしこの人数をどうやって送り返すのですか…？」

戦いである程度消耗し、戦車や航空機は撤退する際に能力で消したとはいえ、数百人単位でまだ人が残っているのである。

「一応は併設されてるけど流石にこの人数は入れないからな…。」

あくまでも併設されているのはこの創武殿を護衛するチームのみで、60名くらいしか収容できないのである。

「彼らには悪いが今回は消えてもらうか。また後々再編成しよう。」

「所詮は戦争のための存在…か。」

武志は能力で特殊部隊員を全員消す。

「さて、改めてここを案内しよう。ここは私たちが住むことになる創武殿という建物だ。ここで基本的な事務作業を行うことになる。」

創武殿は地上10階建ての洒落たガラス張りの建物で殿とついでる割にはビルの方が近いのである。さらに、外に出て階段を降りるとプライベートビーチがあったり、テニスコートやガレージ、果てには釣り場やバー、先ほども言った護衛班の建物もある。(地上4階)

「それじゃ案内するよ。ついてきてくれ。」

武志は一階から案内していく。因みに主な部屋割りはこんな感じだ。

10F：執務室、屋上庭園、展望台

9F：武志の部屋

8F：ラダヴィーニヤの部屋

7F：吉美の部屋

6F：バンデイの部屋

5F：大無の部屋

4F：AVルーム、客間

3F：客間

2F：お風呂、食堂

1F：ロビー、休憩室

B1F：ガレージ、ラボ

B2F：地下サーバルーム

~~~~~ 神様案内中~~~~~

「…意外と広いんだな。」

「ね。私も最初驚いたけど今ではもう慣れたよ。」

「しかも警備班と共用とはいえ色々楽しめそうな場所もあるしな。気に入ったよ。」

「そうかそうか。気に入ってよかった。」

「ところでボス、この建物は全面ガラス張りだけど安全面は問題ないのかい？」

「いい質問だ。バンデイ。」

武志はその質問に答えるためにロケットランチャーを取り出す。

「まあ見てろよ…！」

武志はロケットランチャーを発射すると、その弾は創武殿の3階く

らしいに着弾する。

「つとまあ、この通り超強力な結果を張ってるから無傷なわけだ。だから安全面は心配いらないよ。飛行機やビームが飛んできても破壊される心配はない。」

「頼もしいな。」

「だろ?」

ここで武志はとあることに気づく。

「そういえば戦果を発表してなかったな。」

「確かにそうですね。私からはこちらです。」

ラダヴィーニヤが見せたのは3枚の設計図と一つの紐だ。

「この紐は…、とても丈夫で劣化せず、切れないし燃えないという紐だったかな?」

「そうなんですか?」

「ああ。私も似たようなものを使うからね。なんとなく感覚で分かるんだよ。」

そう。それはフェムトファイバーの組紐。詳しいことは東方儚月抄で説明しているので省くとして、武志の言う通り丈夫で劣化しない究極の素材である。ただ、武志も似たようなものを使っているため分かったのだ。

「似たようなものとは?」

「あく、分かりやすく言うと、私の使っている神器は全てそれを使っているし、創武殿の建材もそれだ。」

武志のはとても頑丈で、溶けず錆びず劣化せずという似たような究極の素材を使っているのだ。因みに武志は【完全物質】と呼んでいる。なるほど。要はもう似たようなのがあると。」

「そういう事だな。だがかなりいい物ではあるな。」

武志のが金属に近いという事を考えると、繊維に近いそちらの方が利便性が高いかもしれないからだ。

「そして…これらの設計図だが、とりあえず作ってみるか。」

そうしてできたのが用途不明の小さな箱のような機械、銃みみたいなもの、そして現代でいう電卓みみたいな機械

「なんだこれ…？」

「…これは見覚えがあるな。確か戦車を一撃で吹き飛ばす拳銃だったかな。」

大無は銃みたいなものを持ってそう言う。

「へえ…そんな物騒なものがあるのか…。」

「ああ。ただ重すぎるのと反動が凄くて当たらないという理由で倉庫送りになったものだ。」

「悲しいな。」

「そしてこれは電卓だな。式を打ち込めばすぐに計算ができるという優れものだ。」

バンデイがいうには電卓みたいじゃなくて電卓のようだ。

「電卓か…、それは神界にもあるんだよな…。」

「そうなのか。向こうも進んでるんだな。」

因みに神界は地上より500年くらい技術が進んでいると言われています。ただ、そのほとんどが天界や一般への持ち出し厳禁のものなので実際にはもう少し技術の水準は低いです。

「そして残ったのがこれだが…？」

「それは分からんな。設計図にはなんて書いてある？」

「え〜と…読めないです！」

「ちよつと貸してくれ…ふむ、分からんな。」

「マスターでも分からないなら全員分かりませんよ。」

「仕方ない。これはなかったことにしようか。恐らくこれは私たちの手には負えない代物かもしれん。」

という事でその機械は消えるのだった…。

「そして私からはこれだ。」

武志が取り出したのは何らかの薬が入った瓶である。

「これは私が拾った設計図を基に作ったものだが、設計図に禁忌により持ち出し、閲覧を禁止しますという説明が書かれていた上にかなり嚴重に保管されてたんだよな。」

「マスター…それどうやって取ったんですか？」

「え…？普通に封印の術式を破壊して堂々と取ったけど。」

「… 私は何も言いませんよ？」

「でもよ、月の奴らがそれほど嚴重に封印していたことは相当重要なものなんじゃないのか？」

「その通りだ。これはおそらく蓬莱の薬だと思われる。」

蓬莱の薬。それを聞いた皆（特に大無とバンデイ）は戦慄するのだった…。

「マ、マスターそれって…。」

「ああ。飲んだものを不老不死にするという、いわば理都の理を無視する…というこの世にはあつてはいけないものだ…。」

バンデイは加えて、

「しかもな、それを飲むことは月では最大の禁忌とされていてな、飲んだものは月から即追放なんだ。確か少し前に輝夜という高貴な方が蓬莱の薬を飲んで地上に追放されていたな…。刑期を終えて戻るときに護衛の永琳と共に裏切つて逃げたけど。」

武志はとある言葉に引つ掛かる。

「ん…、今永琳つて言わなかったか？」

「ああ。永琳。八意永琳だな。確かその蓬莱の薬を作つたのも彼女だったな。確か月の大使のリーダーを務めていた月でもかなりの大物だ。ニュースでこのことを見ていたが正直彼女が裏切るとは思つてなかったな。」

「そうか…。彼女も元気にしてるかな…？」

「分かんが新しいリーダーが綿月姉妹で、彼女たちが懸命に搜索しているらしいが今のところは見つかつてないらしいな。」

「だったらきつと大丈夫だな。また今度会いに行きたいね。」

「… ボスと彼女の間になががあつたかは知らないが、会えるといいな。」

「ありがとう大無。ところで、この蓬莱の薬どうしようか？」

「私たちは元々不老不死みたいなものだしね。」

武志は創造神という高貴な神の為、肉体を持ちながら寿命を持たないという性質を持ち、吉美、ラダヴィーニヤの二人も、武志の作つた人造人間であるため、寿命という概念を持たない。よつてこの三人に

とっては蓬莱の薬などただの薬に過ぎないのだ。

「… だったら俺ら二人に出来ないか？」

「… なぜだ？」

「ボス、貴方は創造神だと聞いた。ボスを永遠にお守りするためにはこの薬を飲むしかないと思っただからです。」

「… そしてボスに永遠の忠誠を尽くそう。」

「なるほどな…。」

武志は少し考えて、

「ここに蓬莱の薬が二つある。これを君たちに渡そうではないか。飲むなり捨てるなり自由にしなさい。」

「ボス… ありがとうございます！」

「… ありがとうございます。」

こうして戦果発表を終えて、またいつもの日常へと元通りになるのだった…。

PART・52 速報は碌な情報ではない

案内を終わらせた翌日の事だった。武志は平穏な日々を過ごそうとしていた。

「そういえば前々からずつと忘れてたけどこの世界つて名前がないよな。」

「確かにそうですね……。物凄い今更感がありますけど。」

「確かになく。戦争もあつたからつてのもあるけど、一番はバタバタしてたからな。」

武志たちはこの世界に移り住んで数年がたつが、いまだに名前が決まっていないのは、準備や神々の仕事で忙しかったというのと、月面戦争関係で手が回らなかつたからであるが、一番の理由は武志本人が忘れていたからである。

「まあ実は名前の候補はもうあるんだ。」

「へえ。何ですか？」

「【諏訪洩矢郷】。私が過去に作ったお気に入り神様の名前から取つた地名だ。」

因みにだが、名前の元ネタは言うまでもなく洩矢諏訪子だ。そのままだとか言わないでほしい。

「いい名前じゃないですか……。」

「だろ？」

少々軽い気もするが、この世界の名前は【諏訪洩矢郷】へとなったのだつた……。

「さく、名前も決まったことだし仕事でもやr」 ドーン！ ブツ

「武志く久しぶりね〜♪」

いきなり扉が蹴破られる。

「母さんか……。どうしたんだ？」

そこには武志の母、千古が笑顔で部屋に来ているのだつた……。

「いや〜、ちよつと用事があつてね〜♪それより貴方結構いい所に住んでいるわね？」

「まあな。とりあえず扉を蹴破つて入るのはやめてくれ。」パチン
武志が指パッチンをする。扉は元に戻る。

「それはすまないわねえ。それで、ここに来た理由が二つくらいあるんだけどね、」

「ほう。」

「一つ目は天人が増えすぎた結果、天界を完全に切り離すことが決まってね、その作業をやってもらいたいのよ。」

「それはまたいきなりだな...。」

「それでね、新たな天界の案も決まっっていて、こんな感じなのよ。」

「いい感じじゃないか。」

そこには多数の浮島がある世界で、今よりもはるかに幻想的な世界だった。

「でしょ？また今度でいいから天界に戻ってきてこれをお願いしたいのよ。」

「分かった。また都合が付いたら連絡しよう。」

「お願いね。それで、もう一つの方が本題んだけど...。」

千古の声が詰まる。大方二人にしてほしいという事だろう。ラダヴィーニヤもそれを察したのか無言で部屋から出ていく。

「ええ、それでもう一つなんだけど、前に月面で戦争が起こったじゃない?。」

「ああ。あの戦争か。」

「そういえば武志も参戦してたわね。まあいいとして、その戦争で理都がちよつと一回休みになったのよ。」

「マジか...。」

恐らく百鬼夜行の妖怪をかばおうとして対妖怪用の迫撃レーザーか何かに命中したんだろう。

「それでね、理都自体もかなり深刻でね、復活にはもうしばらく時間がかかるのよ。」

「マジか...。それってかなりの致命傷では...?。」

「まあ私たちが肉体を持っているってのもあるけどね。肉体を持っていれば他の神よりも強い力を持つことが出来るけど、傷の再生が遅く

なるという欠点を持つから。」

「それで?どうしろというんだ?」

「理都の復活を早める手伝いをしてほしいのよ。天界の時と一緒に大丈夫だから。」

「分かった。できるだけ早めに向かおう。」

「ではお願いね♪あつ、せっかくだからこの世界の案内をしてくれな
いかしら?この世界かなり広そうだし♪」

「だったら大雑把だけど案内しよう。どうせならこの前加入した奴ら
も一緒に案内するか。」

武志はドアを開けてラダヴィーニヤに話しかける。

「ラダヴィーニヤ、今からこの世界の案内に行ってくる。吉美を頼ん
だぞ。」

「分かりました。楽しんできてくださいね♪」

武志はバンデイと大無にも話しかける。

「二人共、今からこの世界を案内するが、どうする?」

「…行こう。」

「おつ、ならご一緒にしましょうかね。」

「分かった。だったらついてきてくれ。」

武志、千古、バンデイ、大無の四人で案内が始まるのだった…。

「しかしこの街は広いわね♪」

「だろ?」

武志たちは現在匠ヶ浦駅から電車に乗って西川方面へ向かってい
る。因みに、前にも言ったと思うが、この世界は名古屋市ほどの広さ
がある。

「今からこの街の中心部へ行く。そこで色々案内するよ。」

「楽しみねえ♪」

~~~~~神達移動中~~~~~

「着いたぞ。ここがこの街の中心部、西川だ。」

「へえ、中々良い所ねえ。」

「ここ西川地区は経済の中心地区として様々な会社やお店があり、高層ビルが立ち並びいかにも都会という感じの地区である。」

「せっかくだからそこで何か食べていこうか。」

武志が指さしたのはとある喫茶店。

「いいわね♪」

「なら行こうか。」

武志たちはその喫茶店に入る。

「凄いな。俺らはこんな洒落た店に初めて入るぜ。」

「… ああ。」

「ここにはこんな感じの店が沢山あるぜ?」

「それはすごいわね♪」

実際、この周辺だけでも数軒はある。

「ご注文はお決まりでしょうか。」

店員さんが注文を聞きに来た。

「コーヒーでいいか?」

コクン コクコク ウンウン

「どうやら肯定のようだ。ならいいだろう。」

「ならアイスコーヒー三つとブラックココアのアイスを一つ、それから店長のおすすめケーキ2つと日替わりパフェ2つで。」

「かしこまりました。」

注文を言うと店員さんは帰っていく。

「… ボスってコーヒー飲めないのか?」

「ああ… うん。あんまり得意じゃないんだよな。」

「確かに神界にいるときもココアばかり飲んでたわね♪」

「… それは言わなくてもいいだろ。」

「フツッ、ごめんなさいね♪」

そんな話をしていると、注文の品が届く。おすすめケーキは天界産仙桃のケーキ、パフェはチョコバナナ味だった。

「このケーキ凄く美味しいな。」

「… 桃の風味が最高だ。」

「ごつちのパフェも負けてないわよ。いい感じのバランスですごい美味しいわ〜♪」

「ああ、確かに美味しいな。」

こうして四人は絶品スイーツを堪能するのだった…。そして、また武志たちは案内をするのだった…。

(ここからはダイジェストでお楽しみください。)

西川より、諏訪郷立図書館。この世界一番の蔵書数を誇り、この世界の学問を詰め込んだような場所。漫画や雑誌などの本から、難しい学問の本や魔導書までも置いてある。

同じく西川より、八坂屋本舗。この世界一番のデパートであり、いつも人でぎわっている場所である。因みに駅から繋がっているため、アクセスも良好である。

民成より、鉄道博物館。この世界の鉄道について語られている場所であるが、そこに書いてあるほとんどの歴史は武志が捏造したものである。まあ鉄道の仕組みなどについてが多く語られているので問題はないが。

同じく民成より、西民成工業地帯。この世界の工業の6割を占めている大工業地帯。近くには物流センター街もあつたりして、別の意味でにぎわっている。

倉富より、イドラパーク。この世界唯一の遊園地。ただ、唯一とだけあつてかなり広く、全部遊びつくすのには丸一日じゃ足りないらしい。

倉富より、倉舞温泉。この世界で数少ない温泉地であり、最も温泉が湧くところである。ただし、武志の能力で沸かせているので、ロマンは少ない。

桜田より、桜田通と桜田センター街。桜田地区の中心となつている大商業地帯である。数々の飲食店やブランド店などが集まっている。

同じく桜田より、諏訪国際空港。国際空港と銘打ってる割には外国との接点はない。主に神界とこの世界をつなぐ役割をしているが、千古も武志もワープで直接迎えるため、空港を使う者はいない…。

匠ヶ浦より、ゴールドタワー。この世界で一番高い建造物で、上階の展望台から見える景色は格別である。下階には商業施設が集まっております、この世界随一の観光地でもある。

同じく匠ヶ浦より、ホテルニューモリヤ。この世界で一番豪華なホテルであり、数少ないリゾートホテル。温泉もあるし、ビーチのすぐそこであるため、夏場は海水浴客でにぎわう。

などなど、沢山の場所を案内して、創武殿へ戻ってくる。

「ただいま〜」

「お疲れ様。」

「流石に疲れたわね〜。でもとても楽しかったわ♪ありがとね。武志。」

「いいよ。自分でもいまいち何があるか把握しきれてなかったから復習にもなったしね。」

「確かに大分広かったからなあ。」

「…移動時間もかかったしな。」

「それじゃあ私はそろそろ帰るわね〜♪今日はありがと。また神界で待ってるわね〜♪」

「ああ。またな母さん。」

「そういうと千古は神界へ帰っていく。」

「さあ、私たちもそろそろ夜ご飯にしようか。」

「いいね〜♪」

「…腹減ったしな。」

「マスターの飯、楽しみにするよ。」

「ハハハ。ありがと。それじゃあ待ってけ。」

「こうして武志たちは平和？な一日を過ごしたのだった…。」

## 第八章 新たに生まれるは二つの幻想の世界 PART・53 天界は三度変わる

千古が訪れてから一週間、武志は溜まった仕事に追われていた。

「ああもう、なんでこんなに仕事を送ってくるかな？」

「ざっと見た感じですがおそらく天界の切り離しについてでしょう。」

「ああ…言われてみれば確かに…。」

そう、この前千古から言われた、天界の切り離し政策だ。武志もそれについて天界から招集がかかっている。

「まあ、この束を終わらせたら天界に向かうから留守番をよろしく頼むよ。」

「分かりました。」

そのまま1時間弱かかって仕事を終わらせる。

「やっと終わったか…。それじゃあラダヴィーニヤ、他の奴らと留守番を頼むよ。あと千古の所までつなげてくれ。」

「分かりました。」

そういうと千古の元へつながるポータルが出来る。

「じゃあ行ってくるよ。」

「お気をつけて。」

武志は千古の元へ向かうのだった…。

In 高天ヶ原

「お邪魔しまーす」

武志はポータルから勢いよく出てくる。

「… あら、武志じゃない。もしかして例の用事で来たの？」

「話が早くて助かるよ。勿論その件で来た。」

「分かったわ♪ならついてきて♪」

武志は千古についていく。そしてかれこれ15分後…

「ここが天界よ♪」

「前に来た時よりなんかのどかになったな。」

そこには天人たちが宴会をしたり、自由に俳句や短歌を詠みあつたりしているのだった。

「とりあえず私の能力で一時避難させるからあととはよろしくね♪設計図は覚えているでしょ?」

「勿論だ。」

千古は一時避難（強制）を行うが、武志は、心の中で（流石チート能力の化身だな...）と、思うのであった...。

数分待つと、

「避難が完了したわ♪一思いにやっちゃって頂戴♪」

「言われなくとも。」

武志はチエルベツコの板からカタストロフィーを取り出す。そして、

【「破壊神災厄の一撃」】

前に書いたと思うが、この技は「破壊神の鉄槌」のHard/Lunatic用のスペカだと思ってください。あまりにも威力が強すぎてこれを人間や妖怪、はたまた千古や理都以外の神様に使うと消し飛んでしまうので、このような場でしか使えないのである。

その技を打ち、カタストロフィーを振り下ろすと、天界に巨大なヒビが入り、粉々に砕け散る。そして武志の能力で破片を浮島状に整え、自然や建物を整える。

「こんな物でいいか?」

「上出来ね♪ありがとう武志♪」

「ああ。とりあえず天人らに戻してみなよ。」

「そうね♪また少し待ってくれるかしら♪」

千古はまた能力で避難させた天人たちを天界に戻す。また数分待った後、千古にこんな質問をする。

「そういうば千古の能力ってチートの具現だろ?一人でできなかつたのか?」

「うーん、一応できるにはできるんだけど、そうすると他の神達の存在意義は無くなっちゃうし、私は全ての力を持つ反面、使いこなせるわ

けじゃないからね。それに時間もかかるし。つまり器用貧乏って感じなのよ。だから貴方を呼んだのよ。その方が早いしいい物もできるからね。」

「なるほど」

言いたいことは分かった。確かに母さんは他人の力を最大限に引き出すという事はよくやってたからな。

「とりあえず一回休憩しましょう♪」

「そうだな。」

武志たちは一回高天ヶ原に帰るのだった…。

「そういえば他の奴らは？」

「須佐之男は黄泉軍の指導、天照と月読は高天ヶ原にいるわ。ユレイドスは仕事場ね。」

「分かった。ならその二人だけでも顔を合わせておくかな。」

「その方が良いわね♪なら皆呼んできましょうか♪」

「天照く、月読く、ちよつとこつち来てく！」

すると、二人がすぐにやってくる。千古はこの場から離れて台所の方へ向かう。

「お婆様どうかされました…え…！」

「武志様だく。久しぶりですく。」

「おう天照、月読、久しぶりだな。」

「本日は一体何の御用で？」

「いや、千古からの頼み事で天界の方で作業してたんだよ。それで休憩がてら来た感じかな。」

「なるほどく。まあ久しぶりだしゆつくりしてよく。」

「ああ。そうするよ。」

「お待たせく♪」

「お婆様。一体どこへ行かれてたのですか？」

「それはねく、これを取りに行ってたのよ♪」

千古が持ってきたのは天界饅頭と書かれた箱と、龍ちゃん焼(もも)と書かれた袋だ。

「こつちは天界のお土産、こつちは今度高天ヶ原のお土産として出す

予定の物だから味の感想が欲しいのよ。」

「なるほどな。だったら私からもお茶ぐらいは出そうかな。」

武志はチエルベツ口の板から湯呑みと茶葉を取り出す。

「この湯呑みは能力で作った奴だけど、茶葉は「創玉」と呼ばれている我が世界の超高級茶葉だよ。」

因みに栽培方法だが、民成農業プラントヒルズという場所で育てられている。人工的な畑だが、作る品種は最高級だし、武志が栽培に最適な環境に整えているので美味しい作物が育つのである。因みに、工業地帯だが見た目だけの為空気の心配はない。

「あなたの世界でもそんなのが育つなんてねえく。」

「その分苦労はしたけどな。」

武志はお茶を煎れながらそう返事する。

「ほら、お茶が入ったぞ。」

「それじゃあ皆さんで頂きましょうか。」

「いただきます」

いただきますをして皆食べ始める。

「この龍ちゃん焼って奴うまいな。」

「本当ですね。生地とあんこのバランスが取れてておいしいですよね。」

「私がプロデュースしたからね♪美味しきは保証するわ♪」

「え、そうなのか？」

「そうよ？あれ、言っていなかったっけ？」

「聞いてないな。」

「皆こっちの龍ちゃん焼のこと言ってるけど天界饅頭もおいしいよ。」

パクリ「本当だな」モグモグ

「ええ。このあんこって桃の味がしますね。」

「確かにな。しかもピンク色だし。」

「それは桃餡と言って桃が入っている餡子よ。天界は桃の産地で有名だからそれをふんだんに使っているらしいわ♪」

確かに特産品を使うのはお土産として物凄い大事な事だからな。



「しかし武志様の創玉もかなりのおいしさですね。この味を知ってしまつたらもう他のお茶は飲めませんよ。」

「あく、私の世界で誰かをもてなす時用のお茶だからな。要望があれば神界に私の世界のアンテナシヨップでも開こうかな？」

武志の言う通り、創玉は誰かをもてなすために創られた最高級の茶葉である。その味はこの世で一番美味と言われているほどである。最も、流通量が少ないのと飲んだ人が少ないため幻の茶葉だと言われているが。アンテナシヨップでも作ればそれなりに認知されるだろう。許可がもらえらるとは思えないが。

「いいわねそれ♪」

意外にも千古は乗り気なようだ。

「だつたらまた今度にも作ろうかな。」

「そう♪楽しみにしてるわ♪」

そんなこんなで優雅な休憩時間は過ぎていくのだった……。

PART・54 蘇生

休憩も終わり、武志は千古に例の話始める。

「そういえば母さん、例の話はどうなったんだ？」

「あく、今案内するわ。ついてきて。」

武志は千古の後についていく。

「この先よ。」

そこはかつて過去に武志が作ったラボの準備室があったところだった。今は理都が入っているであろう棺と神聖な感じを醸し出している。

「これが理都よ。」

千古がその棺の蓋を開けると、そこには光り輝いている黒こげの何かがあった。

「酷い有様だな……。」

「でしょ……？ 高出力のレーザーか何かで焼き尽くされたみたいだね。今のままでは復活には1000年近い期間がかかるわ。だから武志、貴方が理都の新しい肉体を作りなおしてそれを依り代に理都の神霊……まあ本体みたいなものね……。を宿らせるわ。そうしたら10日くらいで復活すると思うわ。」

「なるほどな……。」

我々肉体を持つ神々は桁外れの力を持つことが出来るが、復活や治療が遅い。だから肉体ごとつくりなおして神霊を宿らせる。神霊とは神の御霊で要は神様の本体みたいなものである。神霊だけでも形をつくることはできるが、よほどのことが無い限りは力は劣る。(例外も中にはいるけど)

「分かった。外見はそのままでもいいよな？」

「勿論よ。」

それを確認すると、武志は理都の新しい肉体を生成する。青白い光と共に理都の肉体が生成されていく。

「完成だ。あとは頼む。」

「はいはい♪」

今度は千古が何かの術式を組み立てる。恐らく神霊を肉体に宿らせる術だろう。まばゆい光が数秒間照らした後、

「終わりね。しばらく理都には休んでもらいましょうか。」

「…終わったのか？」

「ええ♪遅くても10日後、理都は貴方と比べて治癒能力が高いからもう少し早く回復するかもね♪」

「ならよかった。」

しっかりと成功したようだ。とりあえずは一安心だがこれからどうするか。

「ところで母さん、理都が完全回復するまではどうするべきだ？」

「ん、暫くかかるだろうから下界に戻っても構わないし、神界を散策してもいいわよ。」

「そうか。だったら他にやることもあるから一度自分の世界に戻るとするよ。」

「分かったわ♪完全復活しそうになったら連絡するわね。」

「了解。」

武志はポータルをつなげて自分の世界に戻る。

「あ、マスターおかえりです。」

「ああ。ただいま。」

「そういえば神界ってどんなところなんですか？」

あれ、ラダヴィーニヤとかってまだ神界に連れて行ってなかったわけ。確認のために一度聞いてみる。

「ラダヴィーニヤって神界には行ったことなかったっけ？」

「少なくとも私と吉美さんはあの映像で見ただけですね。」

そうだったか。少なくとも天界はあのころから大分変わったから見せるのもアリだな。どうせなら皆連れていくか。

「なるほどな。また近々神界の方に行く用事があるからその時は他の奴らも連れていこうか。」

「いいんですかマスター？」

「むしろ人数が多い方がいいさ。私の弟と改めて顔合わせしたいからな。」

「分かりました。他の方々に伝えておきますね。」

「ありがとうございます。気が利くね。」

「これも秘書の務めですから。」

私が創った人だから死ぬことは無いだろうけど過労で倒れる事だけはしないでほしいと思いつつ、ラダヴィーニヤの日々の働きには感謝だなと思った。

「とりあえずラダヴィーニヤ、今日は休んでいいぞ。」

「そうですか。ではお先に失礼します。」

「ああ。」

そう言つてラダヴィーニヤは執務室から出ていく。

「さて、他にやることが多いが、片付けていかないとなあ……。」

目の前には【創武殿警備隊編成図】【諏訪洩矢郷防衛警備隊  
Suwa Moriya Defence Security teams  
S M D S】編成図と書かれた書類や、理

都の事が書かれたメモが置かれてある。

「とりあえずやれることからやらないとなあ……。母さんからの連絡を待つとするか。」

重要書類を前にそう呟くのだった……。

PART・55 軍備拡張

翌日になり、武志は目の前におかれた書類とにらめっこをする。

「はあ…さすがにそろそろこの書類にも目を通さなければいけないかな…。」

武志は前回の最後に出てきた書類… 創武殿の警備編成と諏訪洩矢郷の警備隊の書類を見る。

「流石にこの世界が出来てから4か月くらいたってますからね…。町の方も特に目立った犯罪などは起きてないとはいえそろそろ何とかしてほしいですね…。」

「だってさ、侵入者や凶悪犯罪者がいてもさ、私が速攻で飛んで行って、速攻で制圧して、刑務所へ放り込んだ方が早くない？ つかそもそもこの世界の人間は飾りみたいなものだから特に目立ったアクションはしないし…。」

実際この世界の人間は武志が創ったアンドロイドであり、一部の感情や思考が制限されているため、犯罪を起こすとか暴動を起こすようなことはしないのだ。

「…でも私達も忙しいわけですし、マスターもよく現世や天界へ行かれるじゃありませんか。それに私たちも結構暇ですからね。仕事を与えるという意味でもお願いしたいですね…。」

「君達が暇でも私が忙しいんだけどなあ…。」

でも確かに私もかなり忙しいし、月面戦争みたいなことになったときは確かに警備隊が必要なため確かに編成してもいいのかもしれない。屋敷の警備もせっかく警備班のスペースを確保しているため無駄にはしたくないところだ。何なら一緒に創武殿も増築して15階建てくらいにしてもいいんじゃないか？

「…分かった。取り組むとしよう。何なら創武殿も増築しようか？」

「私は手狭だと思ったことはありませんが…。確かにあのお二方を迎え入れるのにいくつか部屋を犠牲にしますからね…。」

ここだけの話、創武殿の6階と5階はもともとリネン室やら洗濯室

やら客間があつたところを削つて、二人の部屋にしているため、洗濯室は2Fのお風呂場・洗面所と一緒にしているのである。

「とりあえず軽く5F増やしておくよ。」

すると高速で上昇するエレベーターに乗ったときみたいな感覚になり、すぐに止まる。

「今のは…?」

「ん?ああ。増築をしただけさ。」

「そんな軽くできるものなんですね。」

「まあな。能力のおかげさ。」

「どんな感じにしたんですか?」

「ああ。こんな感じさ。」

武志は一枚の紙を見せる。そこにはこんなことが書いてある。

- 15F (屋上) : 屋上庭園、展望台
- 14F : 執務室、リアルタイム地図、上部セキュリティルーム
- 13F : パーティホール、パーティホール用簡易キッチン
- 12F : 武志の部屋
- 11F : ラダヴィーニヤの部屋
- 10F : 吉美の部屋
- 9F : バンデイの部屋
- 8F : 大無の部屋
- 7F : 客間
- 6F : 客間
- 5F : 客間
- 4F : 視聴覚室、洗濯室、リネン室
- 3F : 食堂、キッチン
- 2F : お風呂、休憩室
- 1F : ロビー
- B1F : ガレージ、ポータルルーム
- B2F : ラボ、地下セキュリティルーム、地下倉庫
- B3F : 地下電子図書室
- B4F : サーバルーム

B5F：地下発電室、非常電源ルーム

という説明書きが、建物のフロアイラストと共に書かれていた。

「分かりやすいですね。」

「まあな。特に異論がなければ今後はこれで確定とするけど。」

「私は特にはいいですね。ですがガレージって前までも使ってたからいらない気がするんですが……。」

確かに飛んだ方が早いし快適だから車とかいらないし、ガレージもなくていいのだが、理由がある。

「ああ、その事だけだね、これ見てよ。」

そこにはカッコいい車の写真が一枚。

「カッコいいですね。何の車ですか？」

「神界のとある高級自動車メーカー、RYUGU社の車なんですけど、私もこういうのが欲しいからね。そのためのガレージさ。」

「なるほど。ところでRYUGU社ってあの竜宮の使いの奴ですか？」

「中々凄い所を聞いてくるな……。まあ竜宮の使いネットワークという組織が神界と天界にあるんだが、その親会社が竜宮グループというんだけど、その自動車部門がRYUGU社だったはず。」

「なんか……。凄いですね……。」

「他にも民間警備会社の竜宮セキュリティ、竜宮食品、終いにはRG—thunderという服のブランドのメーカーとかもあったり。」

「へえ。吉美ちゃんが喜びそうだね。」

「どうだろうか。この世界では結構似合わないんじゃないか？」

イメージとしては衣玖さんの服とかを製造しているメーカーだと思ってください。

「マスターが言うなら相当独特なセンスの店なんですね。」

「まあな。吉美には似合わないだろ。」

そんな事を話していると時間がかなりすぎていたことに気づく。

「おっと、そろそろこの書類たちを片付けなければいけないようだ。ちよつと外に行ってくる。」

「分かりました。」

武志はまず創武殿の警備班の建物へ向かう。

「さて…と。どんな奴らを創るかね…。」

武志は考える。この警備隊は屋敷の中と武志などの要人のボディガードくらいしか用がないため、そんな重装備にする必要はないなと思いつつ、ある程度の装備は欲しいなと考える。そして、「できた。」

そこには紺色の官帽(創武殿のエンブレム付き)に、淡い水色のシャツと紺色のパンツ、黒いネクタイを身に着け、ベルトにはハンドガンとそのマガジンと懐中電灯を所持している警備員と、サングラスに黒いスーツ姿で、黒のチェストプレートを装備して、ライフルやショットガンを所持している警備員がいたのだ。人数はそれぞれ4名と16名となっている。そして彼らもまた武志の作ったアンドロイドの為、普通の人間や、そこら辺の下級妖怪よりは強い。

「軽装備の方が警備員、重装備の方がボディガード。交代人員も含めたらこんな物だろう。」

彼らはアンドロイドとはいえ、ラダヴィーニヤや吉美と同じく、感情や、休みたいという欲を持っているため、適度に交代させた方が効率がいいのだ。まあより強靱な肉体を手に入れた代償ともいえる。

「…そうだ。緊急時用のアンドロイドも数体作っておこう。」

武志は能力で5名のアンドロイドを生み出す。その全員がボディーマー・ライオットヘルメット着用の超重装備で、さらにそれぞれがガトリング、連射できるショットガン、火炎放射器、レールガン、そしてチェーンソーを持っている。

「…まあこいつらが永遠に出番がないことを祈るが…。どうだろうな。」

この五人は他の警備員と違って普段は休止状態にして、警報が鳴らされた時に地下警備室に出現させるように設定する。

「これでよし…。この警備隊は私が直々に指揮を執るかな。次は諏訪洩矢郷全体の警備隊か。」

武志は創武殿を出て民成方面のとある基地に向かう。

「よしよし…。どんなものを作るかな。」



武志は考える。考えた末に警備隊をこの基地に120名作る。そのほとんどの人がナイトマルチカムの迷彩服を着て、頭にはヘルメット着用。そしてケブラーマスクもしくはバラクラバとゴーグルなどで顔を隠している。胴体は黒のプレキャリで統一感のある感じとなっている。装備もライフルとかなり本格的となっている。そして残り20〜30名くらいが盾を持ち、ライオットヘルメットを着用した部隊もいる。さらに5名くらいだろうか。スナイパーを持った人もいる。

「まあ一部隊ならこんな物か。他の所にも似たような感じで作るか。」  
武志は桜田、倉富、匠ヶ浦、西川の似たような基地。（倉富だけ地下基地、西川のみ高層ビルだが…）を回り、同じような装備や編成の部隊を作る。違うのは服の色のみで、それぞれ黒、紺色、深緑、黒の色のみの戦闘服。西川のみアーマーの色がタンカラーとなっている。「とりあえず警備隊の大半は完成したな…。あとは交通警備隊位か？」

ぶつちやけた話、この諏訪洩矢郷には車道こそあるけども車はほとんどない。だから交通警備隊はいらないかもと思ってしまいが、  
「まあ警備隊作った後に車も走らせるか…。」

武志は西川の基地の近くにある他のビルに行き、能力で間取りや地下を組み替える。そして、警備隊500名を派遣し、車両もバイクやパトカー、さらにスーパーカーやスポーツカーを基にしたパトカー隊も編成する。

「まあこんなもんでいいだろ。流石に能力の多用で疲れたし帰るか。あとで誰かにこの警備隊をまとめさせよう。」

武志は創武殿へ帰る。

「ただいま。つとバンデイと大無か。」

「おかえりボス。どこへお出かけへ？」

「… ああ。少し周辺を回った。」

武志は思っていたことを切り出す。

「そうだ。二人にもそろそろ仕事を与えようと思ってな。」

「… ほう。」

「どんな仕事だ？ボス。」

「何、この世界の警備隊の管理をしてほしい。西川のオフィスと創武殿地下にポータルを設定しておいた。そこから自由に行き来できるからよろしく頼む。」

創武殿地下というのはポータルルームの事だ。ラダヴィーニヤが話を広めていると思うから大丈夫だろう。

「分かった。力になろう。」

「任せたぞ。2日後までに顔合わせくらいはしておいてくれ。まあアンドロイド兵だから大丈夫だとは思うが。」

この警備隊のアンドロイドはこの世界を守ることしか考えていない操り人形みたいなものだから顔合わせも何も無いが、装備と編成を見ることは大事だろう。そのための顔合わせだ。

「さて、そろそろ日も暮れる。中に入ってご飯でも食べようか。」

「そうだな。」グ？

バンデイの腹の音で皆笑いつつ武志は忙しい一日を終えるのだった……。

PART・56 理の神の復活

武志は部屋から軍備拡張された創武殿を見る。

「やっぱり警備員がいた方が偉くなった気がするな。まあ偉いのは好きじゃないが。」

武志はそんな事を呟きながら手元にあるココアを飲む。

「…そうだ。そろそろこの服から着替えるか…。」

武志の現在の服装は前に書いた戦闘服から、マスクとヘルメットを取った姿である。

「どんな服が良いか…。ずいぶん前に来ていた軍服を再び出してもいいんだが、何かアレンジが欲しいんだよなあ。」

武志は考えた末、幾つかの服を出す。それは前の軍服を基にした黒のコートとベストとストラックス。そしてシルバーのシャツと黒いネクタイ。さらに黒の皮手袋や黒の官帽（諏訪洩矢郷のエンブレム入り）、ミリタリー系の黒のサングラスそして金の鎖、そして黒の皮のショートブーツなど、いろいろなアイテムを出していく。

「…このくらいでいいかな。とりあえず着てみるか。」

武志はその服装に着替えて鏡の前に立つ。

「うん。悪くはないな。」

武志は感心しつつまた外を見る。因みにだが、大体のイメージは“挿絵管理”から見る事が出来るのでそれでイメージを掴もう。

すると今度は武志の後ろに誰かがテレポートしてくる。

「武志く〜♪」

「うん…。？ああ、母さんか。いきなり入ってこないでほしいな。」

「似合っているわねその服♪」

「ありがとう。」

しかし執務室にノックもなしにテレポートしてくるとは思わなかった。ただ、千古が私の服をほめるためだけに直接来たとは思えないため、少し尋ねてみる。最も、ある程度の予想はついているが。

「で？どうしたんだ？わざわざこんな辺境の土地まで。」

「それは勘の良い貴方も気づいてるでしょ？理都の事よ。」

「ああ……。やっぱりその事か。完全復活したのか？」

「ええ。正確にはあともう少しと言ったところね。だから貴方にもそろそろ戻ってきてほしくて。」

「分かった。すぐ行くか。」

武志がポータルをつなぎ、理都の棺へと向かう。そこには、寝ぼけているのか棺の中から体を半分起こしている理都がいたのだ。た……。

「理都……！」

「復活したのか……。」

「ん……。おふくろと兄さんか……？」

「そうだ。私は武志だ。覚えてるか？」

「もちろん。すっかりと覚えているさ。まあやられる前後の記憶は覚えていないが……。」

「そうか。まあ生き返ってよk……。」

「理都……♪」

武志の声を遮って千古が理都に抱き着く。ただいきなり来ると思っていないかったのか理都が反動で後ろに倒れる。

「よかったあ……。」

千古はとても喜んでいるみたいだが、理都は迷惑そうにしているため、千古を押しつける。

「だあ……。死ぬ……。しかし、ここは……。？そして俺は何があったんだ……。？」

「聞きたいか？」

「ああ。月面戦争に行つて、途中まで優勢だったのが途中から劣勢になり、それを覆すために奮闘していたことまでは覚えている。」

結構覚えてるなコイツ。まあいい。全貌を話すか。

「ああ。お前は簡単に言うて出力の高い迫撃レーザーで吹き飛ばされた。それを月読経由で千古に回収されて、私と母さんの力で復活を速めて今に至る。」

「……思い出した。確か俺は紫をかばうために犠牲になったんだっけ……。元気にしてるかな……。紫も……。皆も。」

紫：．． 確か理都をお師匠様とか言うあの胡散臭い金髪の妖怪だったっけ。

「あく、確かお前は妖怪集団のリーダーをやってたんだっけ。」

「そうそう。人々から幻想百鬼夜行と呼ばれていた妖怪たちの集まりさ。今頃どうなっているんだろうか。そして従者はちゃんとやっていてくれるのだろうか。」

「ん．．？お前従者いたのか？」

「ああ。狼、狐、兎の三人組なんだがな。元気にやつてるかな。」

狼、狐、兎の三人つて．． かなり豪華なメンバーだな。まあ、その手の事なら適役がいるが。

「だったら私が連れてくるわよ？何なら武志の従者たちも連れてきましようか？」

「ああ。頼む。」

理都は承諾したようだ。なら私もokとしよう。

「なら連れてきなよ。私も理都の従者見たいからさ。」

「分かったわ♪」

すると大きめの術式が展開され、光と共に従者たちが現れる。

「あれ．．？ここはどこだ？」

「．．． 何があった？」

「ラダちゃん、何があったの？」

「分からないけど．．． マスターに呼ばれたのかな？」

「おい！何があった？」

「え？え？」

「何かの術か．．．。 って理都様生きてたのですか！」

皆困惑しているようだが、九尾の尻尾を持つ妖怪が理都に気づき、理都の従者の三人と思われる三人は理都に駆け寄る。一方で、

「マスター、これは一体？」

なんて冷静な従者なんだろう。最初は驚いていたが現在は皆落ち着いているようだ。

「ああ。理都が復活してな。理都が従者に会いたいと言ってきたから千古が私の従者もろともここに連れてこられたのさ。」

「マスターのお母様もなかなか凄いことしますね…。」  
「だろ？」

向こうを見ると理都が何かを話しているようだった。会話は断片的にしか聞こえないが、紫がどうのこうのとかが聞こえることから考えるとバレてないかとかどうなっているのかを聞いているんだろう。また、別の方向を見ると千古がそれを見て微笑んでいた。皆から相手にされていないがまあ大丈夫だろう。

武志は理都の元へ向かう。

「理都、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫さ、それより従者の自己紹介をしないか？」  
「いいぞ。」

自己紹介タイムが始まる。

「まあまずは言い出しつぺの俺からいこう。俺は洩矢理都。こいつらの主で大能神をやってる。武志とは双子の弟でな、まあよろしく頼むよ。」

次に元狼と思われる中性的な男性が自己紹介をする。

「私は紅桜こうおうと申します。主様こと理都様の神使で、元は白狼天狗の一員でした。理都様はいじめられていた私に手を差し伸べてくれた優しいお方ですからこれからも忠誠を尽くしていきます！よろしくお願ひします！」

最初から中々に重い自己紹介だったな。次に黒い九尾の狐の男性が自己紹介をする。

「我は楓かえでと申す。と同じ理都様の神使で、元は九尾の狐だ。主の行く道は私の道でもある。主ともどもよろしく頼むぞ。」

最後に桃色の髪をしたうさ耳の少女が自己紹介をする。

「私は葵あおいです。前の二人と同じマスターの神使で、元々は竹林に住むしがない白兔です。今はマスターの元で頑張っているからよろしくお願ひします！」

何だろう。吉美とほぼ同じような感じがする。とりあえずあっち側の自己紹介は終わりを告げる。

「次は私たちかな。私は洩矢武志。普段は諏訪洩矢郷の創武殿という

ところで暮らしている。肩書は創造神だが、破壊神でもある。理都とは双子の兄の関係でな。まあ従者と諏訪洩矢郷をよろしく頼むぞ。」

「私はラダヴィーニャ・ハルトマンです。マスターこと武志様の秘書をやっています。私はマスターに作られた人造人間で、そこら辺の人や妖怪よりは強いです。よろしく願います。」

「私は金河吉美だよく♪ラダちゃんと同じくマスターによってつくられた存在で、主にマスターの雑用をやっているよ！皆よろしくね♪」

「俺は望月バンディだ。元月の傭兵でスナイパーをやっていた者さ。ボスもとい武志様から直々に諏訪洩矢郷の警備隊を任されている。よろしく頼むよ。」

「…俺の名前は白魔大無だ。よろしく頼む。」

「とりあえず皆自己紹介は終わったわね〜」

千古が皆に呼びかける

「で？俺たちはこれからどうすればいいんだ？」

理都が隣で問いかける。

「そのことなんだがな主よ。恐らく今後は戻らない方が良いでしょう。」

理都の従者… 確か楓といったかな。が理都にそう告げる。

「なんでだ？」

当然理都はそういうだろう。理都からすれば仲間たちの元に帰りたいのは当たり前だ。なのにそれをやめた方が良いと言われたらそうなるだろう。

「主様、お言葉ですが、最近の幻想百鬼夜行は主様がいなくなったことによる紫様達についていく妖怪達とそうでない妖怪達による内部抗争が発生し、ばらばらになってしまったのです。」

「ああ。更にそのうわさが知れ渡った人間たちに攻められボロボロでな。現在は紫についている天狗や鬼、河童達と幾つかの妖怪達しかいなくなっている。」

「更に、紫ちゃん達が盛大にお葬式を挙げて弔ったからね〜。今マスターが地上に戻ればマスターが今まで隠し通していた自分が神様つてことももしかしたらバレてしまうかもしれないよ？」

「…そうなのか。」

納得したようだ。しかしこのまま過ごすというのも可哀想な気がする。ここは少し誘ってみるか。

「あー、お前らが良ければ私の所に住まないか？客間で良ければ案内するぞ？」

「…いいのか？兄さん。」

「ああ。一時的な寝泊まりなら大丈夫だ。それに君達の事も聞きたいしな。」

「だったらお願いするよ。兄さんの事を聞きたいってのもあるけど、暫く行く所もないしな。」

「分かった。案内しよう。…っと、ラダヴィーニヤと吉美は千古の所へ行つてアンテナショップの事を聞いてきて欲しい。こつちで品物を準備しておくから頼んだぞ。」

「分かりました。」

「それでは理都とその従者達よ。私の世界へと案内しよう。このポータルをくぐるといい。」

すると理都やその従者達、バンディと大無もポータルをくぐり、最後には武志もくぐる。そしてその行先は創武殿の入口である。

「どうだ？…ここが私の世界【諏訪洩矢郷】だ。そしてこの建物が私達が住む創武殿だ。」

と武志が説明するが、理都達はそのスケールにただただ驚くだけだった…。

「兄さん達はここに住んでたんだね…。」

「規模がデカすぎるな…。」

「陰陽師時代の屋敷なんて比になりませんね…。」

「これからここに住むのー？」

「…確かにボスの拠点ってビル一棟分だもんなあ…。そりやあ最初は驚くだろうよ。」

「…俺らも最初はそうだったな。最も、見慣れてたからまだ反応は薄かったが。」

皆が思い思いの感想を述べていたが、流石にこのままではいけない



ので現実に戻す。

「とりあえずお前らの部屋を案内するからついてこい。」

武志は客間まで案内する。

「1フロア4部屋あるからこのフロアの客間を全て使っていていいぞ。」

「… かなり豪華だな。」

客間を開けた理都はそう感想を述べる。客間の内装はダークブラウンの床と白い壁というかなりシンプルなつくりとなっていたはずだが、今まで妖怪の山で暮らしていたらしいからその辺には疎いのだろうか？

「まあユレイドスの力を借りて大体500〜600年後の世界を参考にしていくからな。目新しいだろ？」

「ああ… 確かに見たことないな。」

「未来の世界はこうなっているんですね。」

「とりあえず今日は各自で部屋決めて休めよ。色々あつて疲れてるだろ？またご飯が出来上がったら呼ぶからさ、それまではここを探索したりしなよ。なんせこの島全体が私達の拠点の敷地だからな。」

「あ、ああ…。そんなに広いのか。また回ってみるよ。」

「楽しみだねー♪」

こうして武志は理都達を迎え入れるのであった。そして、ラダヴィーニヤと吉美も合流し、ラダヴィーニヤ曰くアンテナショップは無事に完成したとの事で、商品も陳列したとの事。

そしてそのアンテナショップは後に神界でもかなり人気のあるお店となったのだった…。

PART. 57 思い出（理都編）

理都達がこの世界に来て3時間がたった頃……、皆は夕食を楽しんでいた。

「それでね♪マスターはね♪基本的に冷たいけど、仲間や大切にしている人に対してはとても優しいの♪」

「やめてくれよ吉美。照れるから。」

「ハハハ。確かに兄さんは基本的に冷酷というか無機質というかあんまり感情の起伏は少ないけど身内に対しては甘いし、意外と気が利くし優しいからね。それに神々の生みの親とだけあって信仰についてもかなり積極的だし、黄打たれ弱いけど戦闘もかなり強かったからね。実際黄泉軍を指揮していたし。それに仕事もできるカリスマだったから皆憧れていたよ。」

「……意外だな。」

「いやこっちのマスターも、仲間を大切にしている、人望が厚く、皆から慕われていたよ♪」

「それは意外だな。私の知ってる理都は自由奔放で自分のルールだけで生活しているサボり魔だからな。まあ仲間思いだし悪い奴ではないから仲間は多かったが。戦闘もそんなに得意じゃなかったよね？今はそうでも無いみたいだけど。」

「おいその事を言うのはやめてくれよ。恥ずかしいじゃん。」

「まあ主の自由度には確かに呆れる所もあるからな。」

そんなこんなで会話しつつ料理を楽しんでいるのだった。

「しかし、バンディが料理上手いのに驚いたよ。」

「まあな。一応スナイパーやってるけど、趣味で料理をやっていたからね。傭兵仲間が集まる時も大体俺が料理を作ってたからな。」

基本的に武志も料理は出来るが、能力を使って手早く作るため、ごく一般的な味になってしまうのである。だからバンディの料理がより一層美味しくなるのである。

皆が自由に飲み、酔いが回り武志と理都以外が寝落ちしてしまった所だろうか。理都がこんな質問を投げかけてくる。

「…：そういうえば兄さんのことも色々聞きたいな。」

「いいけど、先に言い出しっぺから話してくれよ。私も気になるからな。」

「そうか。なら先に言おう。」

理都は淡々と過去を語り始める。

「俺が地上に降りてからは暫く修行に明け暮れていてな。数十年位たった頃かな？ある1人の妖怪に出会ってね。その名を八雲紫…：まあ俺が付けた名前だけど、紫と出会ってな、その時はぼろぼろで匿ってくれと言われて言う通りに匿ったのさ。そうしたら武装した人間に追われていたみたいで当然紫について聞かれたけど、”俺は知らん”と言って追い払ったら、紫から感謝されて、暫く一緒に修行をしていたのさ。」

紫。ああ、あの胡散臭い妖怪か。かなり力のある妖怪だったみたいだが最初はそんなに弱々しかったのか。

「それで、修行するうちにお互いの夢について話す機会があったんだよ。俺は”これから自由に暮らせたらいい”みたいな事を言ったんだが、紫は”人間と妖怪が共存できる世界を作る”と答えたのさ。」

「それはまた大層な夢だな。」

「だろ？それで俺はその夢に賛成して、紫と一緒にその夢を叶える旅を始めたのさ。」

「いや賛成したのかよ。」

「だって夢があるじゃん。それに共存できたらどんなにいい世界が出来ることか…：。兄さんは反対派なのかい？」

「反対ではないが…：、賛成でもないな。」

人間と妖怪が共存してしまつたらどちらかが滅びてしまう。それに神様が治めていない世界は黄泉軍や破壊神である私が直々に破壊しなければいけない為、あんまり賛成したくないのだ。

「ありや。そうなのか。まあ続き行くけど、その夢を叶えるうちに【妖怪の山】という所に辿り着いたのさ。そこは天狗達が独自の社会を築いている山で、当然天狗集団と戦う羽目になったから軽くリーダーを倒して、この山の覇権をもらおうと思つたけど…：、」

「ど？」

「その山には鬼がいて、実は山の覇権は鬼だったのさ。だから鬼との決闘に赴いて、山の四天王のうち3名をフルボッコにして無事覇権を貰ったのさ。」

鬼を軽くフルボッコにしたと言ってるけど、鬼って単体でも割と強かった気がするし、四天王クラスとなるとかなり強かった気が……。

「……よく勝てたな。」

「まあ戦いは得意だからね。」

「それで？ 覇権を取ってどうしたんだ？」

「覇権を取ったあとは妖怪の山で仲間と共に暮らしていたね。紅桜が仲間になったのもその時だったかな。」

理都は横でうつ伏せになって寝ている紅桜を見ながら言う。

「確か同族から虐められてたんだろ？」

「そうそう。特殊な能力を持っていて、本人曰く『炎を纏う程度の能力』なんだけど、その能力が嫌われて虐められていたらしい。まあ俺の神使になった後はその能力を遺憾無く発揮してもらっているけどね。」

「なるほどな。」

確かに炎を自由に使えるならかなり便利だからな。戦いにも普段の生活にも。

「それで、結構長い間そこで修行とかしていたんだけど、ある時から人間の都で陰陽師として働く事にしたんだよ。」

「また唐突だな。なんでいきなり人間の世界に飛び込んだんだ？」

「話すと長くなるけど、人間の暮らしを知りたかったのが1番かな。それでだ。人間の世界に行ったら、妖怪が敵視されていて、俺らの組織も知れ渡っていた訳よ。俺の首に多額の賞金がかけていたなあ。」

「まあ巨大組織の頭ならそうなるか。でもよく生きてたね？」

「顔の特徴が詳しく出てなかったのもあるけど、認識阻害の理を付与していたから直接の証拠が無かったってのもあるね。で、陰陽師では様々な妖怪を退治する機会があつて、例えば鵺、妖狐、鬼、天狗

等々……。俺の従者の楓も任務中に出会ったんだぜ？ 強大な九尾の狐が暴れてるから退治してくれて現地に行ったらそいつが暴れててな。恐らく陰陽師時代に戦った妖怪で1番強かったのは楓だろうな。他にも任務で輝夜姫の護衛をしたり、気に入った妖怪は退治するフリをして組織に勧誘したりしたね。」

「もしかして命蓮寺の時の戦いも？」

「そうだね。強大な妖怪達を匿う尼僧がいると聞いてその方の退治……。まあ結果的には魔界に封印したんだけど、まさか兄さんがいるとは思わなかったよ。」

「私も驚いたぞ？ 陰陽師集団が来ると聞いて迎撃の準備をしていたらまさかお前がいるとは思わなかったぞ。」

「實際理都がいなければあの戦いは勝てたはずなのだ。多分。」

「で、ついに妖怪という事がバレて、陰陽師を引退したんだけど、今度は紫が月の連中と戦争をするとか言い出してな。兄さんはやめろとか言ったけど、その時は河童の技術でいい武器や装備が作れていたし、信頼出来る仲間もいたから行けると思ってたんだよな……。因みにこの準備中に最後の従者の葵が仲間になった。」

「それで、妖怪達の軍団は最初は優勢だったけど、持久戦により壊滅して、お前も一回休みになったと。」

「そうそう……。ってか、兄さんも参戦してなかった？」

「どうだかな。月の技術欲しきに向かったけどお前らがいたかは分からないな。」

「昔話も終わったようなので武志は聞きたかったことを聞く。」

「……。それで？ 今後はどうするんだ？ ずっとここに居る訳にもいかないだろう？」

「そうだね……。とりあえず暫くはここに居るけどその後の事はまだ考えてはないな。」

「分かった。まあ暫くはここにいろ。また先の事はゆっくり考えていけばいい。」

「ありがとう兄さん。ところで、兄さんの過去はどんな感じなんだい？」

「そういえば話す約束だったな。いいだろう。」

「創造神回想中」

武志は一通り話し終わる。理都も素直に感心しているようだ。

「兄さんも結構色々な事に巻き込まれてたんだね。」

「まあそうだな。でもそのおかげで友人が増えたからいいけども。」

確かに巻き込まれていたおかげで聖徳太子もとい神子達や、命蓮寺の妖怪達、摩多羅隱岐奈とその従者など、色々な方面の友人が出来たからいいのかもしれない。

「… とりあえずあえず今日はもう遅いし寝なよ。また明日以降のことは明日考えたらいいんだ。」

「そうだね。従者を寝かせて俺らも寝るか。」

「だな。」

2人は自分の従者達を布団に運び、一日を終えるのであった…。

PART・ 58 兄弟対決 二柱の戯れ

理都がこの世界で暮らし始めて2日目のこと。理都はとある悩みがあった。

理都は執務室と書かれた部屋に入る。するとそこでは武志が書類の山を高速で片付けていた。

「兄さん、いきなりだけど俺と手合わせをしてくれないか？」

「いきなりだな。別にいいがどうしてだ？」

「いや…、復活したばかりで少し体が重くてね。体を慣らしたいつてのと、単純に兄さんの今の実力を知りたいからかな。」

「分かった。そういう事なら相手をしよう。」

武志は屋上庭園に向かい、そこから上に飛ぶ。

「私も久々に戦いたいと思っていたからな。手加減はしない。今お前が出せる全ての力を使って戦え！」

「望むところだ兄さん！もちろん全力でいかせてもらうよ！」

こうして武志vs理都の戦いが始まるのだった…。

「遅いね！」

武志は唐夜叉丸を二本とも構え、雷と炎で攻撃をし、理都はそれを避けつつ、弾幕を放って応戦する。

「あの時よりも強くなっているじゃないか…。ガードマンよ、奴をやっつけろ！」

武志の掛け声とともに2人のガードマンが召喚され、武志が手に持っていた唐夜叉丸二本がガードマン達の手元へ向かう。因みにこのガードマンは創武殿のガードマンとほぼ見た目は同じだが、頭にナイトビジョン付きのヘルメットを被っている特殊仕様だ。

武志はチェルベツ口の板からMR24を取り出し連射する。

「特性貫通弾だ。受け取れ。」

「…っ！」

理都はガードマン2人を相手しながら武志の放つ弾丸を避けなければいけないため、結構辛そうにしている。

「ならば俺の陰陽師時代の成果を見てもらおうか！【陰陽「六芒星無尽結界」！】」

理都がそう唱えると巨大な六芒星が出現し、ガードマンの攻撃と弾丸を防ぐ……が、

「甘いな。」

ピシッ

理都の結界にヒビが入る。理都も結界が突破されるとは思っていないから焦り始める。

「言っただろう。特製貫通弾と。これは私の破壊神の力を込めたどんな結界も貫通する弾丸だぞ？数発防いだのには私も驚いたが所詮結界の前では無力だ。さて、追撃をしましょう。【拡散バレットヘル】」

たけしの周りに6つのタレットが出現し、一斉に散弾を発射し始める。理都は流石にまずいと感じたのか、結界を閉じ、また別の技を唱え始める。

「仕方ない……！【理「絶対強者の理」!!】」

すると高出力のレーザー弾幕が多数出現し、タレットとガードマンをまとめて吹き飛ばす。

「あのガードマンも割と丈夫なんだがな……【音響兵器「テラノイズメガホン」】」

「兵器がなんだ！もう一回だ！」

理都はもう一回多数のレーザーを打ち込むが、

「GHAAAAAAAAAAAAA!!!」

武志の音響兵器が先に発動され、理都にこの煩い音波が響き渡る！

「耳が！耳が！頭がガンガンする！」

「チャンスだ！全てを破壊する弾幕の嵐を喰らえ！【ガトリングバレットヘル】！」

武志の周りにミニガンのタレットが召喚され、砲身が回転を始める。

「ぐぐぐ……【理「身体強化の理」】！そして来い！黒影御剣くろかげみつるぎ！」

理都は黒影御剣と呼ばれた黒い飛燕剣を構え一気に距離を詰めて



くる。

「なっ…！」

ガトリングが発射されるが、それよりも早く距離を詰められ、間一髪で武志は交わすが理都の猛攻が続く。武志は技をキャンセルし、ガードマンが持つていた唐夜叉丸二本を引き寄せて回収する。

そして2人の鏢迫り合いが始まる。

「やるな… 理都…。」

「兄さんこそ… 前よりも強くなってるね…！」

そして2人は鏢迫り合いをやめ、互いに攻撃を仕掛ける。

ガキン！                      チャキン！                      キーン！

「罅が明かな… 来たれ黒金刃！そしてガードマンよ！再び奴を葬れ！」

武志はチエルベツ口の板から黒金刃を取り出し、復活したガードマンの元に唐夜叉丸を飛ばす。

ウイイイイイ

黒金刃は静かで不吉なモーター音を奏で始める。

「そして追加だ！【小分隊「ワンマンプラトウーン」】

この技は自身のクローンを大量に生成し、攻撃してくる技だ。武志の手にはカタストロフィーやMR24、黒金刃がある。その数およそ20名。ガードマンを含めると合計22名の攻撃が容赦なく理都に向かってくる。

「容赦がないな… ならこっちもいかせてもらおう！【理「弱化の理」！」

すると武志やガードマンが一瞬だけ青く光る。

「体が思い… だが関係ない！行け！」

「それはどうかな？【後光「大能神の絶対後光」！」

すると理都の周りから全方位にレーザーが放出され、理都の理により鈍足&防御力低下の効果をくらった武志とガードマンは被弾する。

「… やるな。私もそろそろ本気を出そうじゃないか。」

「あのコンボを食らってもなお立てるなんてね… 流石兄さんだよ。」

「ただどそろそろ倒れてもらおうよ。」

2人は身構え、本気の技を繰り出す。

「全てを破壊する究極の力よ、その力を以て奴をやれ!」【殺戮衛星「あじさい」】

「禍いよ、嵐と成りてその爪痕を残せ!」【災厄「禍津神の審判」!】

ドドドドドドドド　ゴオオオオオオオオ…　　チュドーン!

上空から高出力の大きなビームが理都に目掛けて降り注ぎ、禍をもたらす大嵐が武志に向かう!

そして二つの技がぶつかり合い、周囲一帯に大爆発が発生する。

暫くすると土煙が晴れ、そこに二つの人影がうつすらと見える。そこには満身創痍の武志と理都が立っていた。二人は暫く見つめ合い、そして、

「…やるな兄さん。」バタリ

理都がその場に倒れる。よってこの勝負は武志の勝利となるのだった…。

「…勝利したはいいがこの惨状はどうするか…。まあ、今はそんなこと考えずに少し休むか。」

お互いかなり本気の技を使ったため、満身創痍ですでにヘトヘトなのである。

そして二時間後、この惨状を知ったお互いの従者達は、二人に長い説教をするのだった…。

前回の話から約数年後。理都とその従者もこの世界に慣れ、現在は創武殿から倉府市のとある高級住宅街に移り住んでいる。

「しかしまた最近は平和になったなあ……。」

「いい事じゃないですか。平和な事は。」

「まあな。でも理都もそろそろ移住させる頃だろうし、平和ボケしすぎていけないからな……。適度な刺激は大事だよ?。」

最近の武志達の娯楽といえば、ゲームやシヨップピングだったり、訓練と称して逃○中等の様々なイベントをやったりしている。

「だったら暫くは理都様の行先探しですかね……。?向こうの妖怪たちもそろそろ忘れていく頃でしょうし。」

「まあこの事については理都次第だからね。また本人と話して決めることさ。」

そんなことを話していると、部屋の中にひとつの扉ができる。そこから1人の神様が出てくる。

「……久しぶりだな。創造神様。」

「武志でいい。それにしてもいきなりだな隠岐奈。何かあったのか?。」

「……え、ちよつと待ってください。この方は誰ですか?そしていきなり執務室に入ってくるとは非常識ですか?。」

ラダヴィーニヤが驚いているため、武志は説明を入れる。

「ああ、彼女は摩多羅隠岐奈。摩多羅神と呼ばれる神様で私の旧友さ。」

「そうだ。私は武志の言う通り摩多羅隠岐奈。後戸の神であり、障碍の神であり、能楽の神であり、宿神であり、星神であり武志の古い友人でもある。」

割と長い自己紹介だったが、そんな事は気にせず話を続ける。

「しかし隠岐奈がここに来るなんて珍しいな。何かあったのか?。」

「ああ。お前は八雲紫を知っているか?。」

八雲紫。武志とは1度会ったことがあるが、武志の記憶にはあんま

り残ってない。武志は割と人の名前を覚える方だが、それでも分からない事はきつと名前の残らない程平凡な存在だったのだろう。

「名前は聞いた事あるが知らないな。」

「そうか。八雲紫は幻想百鬼夜行の現在のリーダーで、過去には月に行ったり、前総大将と一緒に都にもよく行っていた奴で私の友人なんだが、」

そこまで聞いてやっと思ひ出す。

「ああ思ひ出した。あの金髪で理都の事をお師匠様とかいうあの胡散臭くて無謀な事が大好きな奴だな？」

それを聞いて隠岐奈は苦笑いしつつ、

「まあお前と紫の間に何があったのかは聞かないがおそらく合ってるな。しかし前総大将の洩矢理都ってどこかで聞いた事あるなと思ったらお前の兄弟だったのか……。」

「そうだ。私も1度月面戦争関係でお呼ばれたが、あそこまで無謀な奴は初めて見たし……。まあ理都も同じだけど、それにかなり慕っているように見えたな。」

「ああ……。紫は理都の事をかなり信頼していたからな。葬儀の時も1番悲しんでいたのは彼女だったな……。まあお前の兄弟だったら今頃生き返っているだろうけど……。」

「勿論だ。何ならこの世界にいるぞ？呼ぼうか？」

理都は現在中心地西川の方へ買い物に行っているため、呼ぼうと思えば呼べるため聞いてみる。

「いや、いい。私は紫ほど総大将に思い入れもないからな……。あと、総大将が復活した事は黙っておいた方がいいだろう。」

「その理由は？まあ大方想像は着くけど。」

「総大将は自分の身分を妖怪と偽っていた……。それが”実は神様で復活しました”とか言ってみろ……。総大将と組織の関係は大きく変わるところか永遠に合わさる事のない大きな亀裂が入ってしまった……。それに神様が身分を明かして地上で生きるのは大変な事だと知っているだろう？総大将……。いや理都の生活を守りたければこの事は言わない方がいい……。」

確かに武志自身も過去に修行人や旅人として潜入していた事があるため、身分を隠す事の重要性はよく分かっている。

「確かにそうだな。」

長話が過ぎたが、そろそろ本題に入ろうとする。

「それで？ わざわざここに直接来たと言うことは当然何か重要な事があるんだらう？」

「察しがいいな。その通りだ。」

遂に隠岐奈が本題に入る。その前にラダヴィーニヤの方を見て怪訝な顔をする。

「すまないラダヴィーニヤ、1回席を外してくれ。」

「分かりました。外で待っておきますね？」

ラダヴィーニヤが部屋の外へ出ていく。

「さて、これでいいだろう？」

「ああ。今回お前に手伝って欲しいのは、人間と妖怪が共存する世界”の創造だ。」

「ほう、因みに発案者は？」

「八雲紫だ。これは紫の夢らしい。」

武志は心の中で頭を抱える。また彼奴かと…。

「それで？ その人間と妖怪を共存させる為に何をすればいいんだ？」

「その点は問題ない。幻想百鬼夜行はその夢に賛同した妖怪達の集まりだし、人間達の方も手頃な里を見つけたからそこにいる人達に協力してもらおう。」

なんか物騒な事が聞こえた気がするが、とりあえず人妖については問題なさそうだろう。

「じゃあ何だ？ 冥界や地獄との連携をしろと？」

「その点も大丈夫だ。紫の友人には冥界の管理人がいるし、地獄の方も新人の閻魔を就任させるみたいだ。」

「じゃあ私は一体何をやればいいんだ？」

「お前にやって欲しいことは2つ。1つはこの大和の土地を少し分けて欲しいという事。もう1つはその土地と他の土地を完全に区別する結界の創造を任せたい。」

「そうかそうか…。答えはNOだ。」

隠岐奈は少し驚いた様な顔をするが、気にせず続ける。

「第一、大和の土地を使うのではなく新しい世界を創造してそこに住み着くというのは駄目なのか？結界の件はいいとして、それに紫本人からも聞かないと私は何も言えないな。」

「そうか。だったら少し待て。」パンパン

隠岐奈は手を二回叩く。すると不思議なスキマが出てくる。

「久しぶりね。お師匠様のお兄様。」

「武志でいい。それよりもまさか直接出てくるとはな。八雲紫。」

そのスキマからは八雲紫が出てくる。

「しかし私はお師匠様のお兄様を連れてこいと言ったのにかなり遅かったわね？隠岐奈。」

「ああ。すまない。位置の特定が困難だったのと、話が弾んだからな。」

「お前が八雲紫か。久しぶりだな？」

「月面戦争の時以来ですわね。」

「それで？お前は人間と妖怪が共存する世界を創りたいと？」

「ええ。その様子だと隠岐奈から色々聞いていると思うけど、私は人妖が共存する世界を創り、そこで平和に過ごしたいのよ。貴方は隠岐奈から結界制作の天才と聞いているわ。だからその世界を外の世界と区別する結界を作って欲しいのよ…。」

「なるほどな…。」

武志は考える。とりあえずこの世界には死んでいるはずの理都がいるため、顔を合わせないようにするということもこめてとある提案をする。

「とりあえずその世界の予定地を見せてくれないか？隠岐奈の話とお前の言い草的にここ大和の世界に作るんだろ？」

「流石はお師匠様のお兄様だけがありますね。その通りですわ。このスキマを通ってくれたらすぐですわ。」

「分かった。」

武志はそのスキマを通る。その向こうにはのどかな人間の里が見

える山の上に来ていた。

「ここは【妖怪の山】と呼ばれている場所ですわ。私たち幻想百鬼夜行の本部があるのもここですわ。」

とりあえず諏訪洩矢郷から離れたため、武志はずっと聞きたがっていた質問をぶつける。

「そうか。とりあえず3つ位聞きたいことがある。1つはその世界とやらの名前はないのか？」

「名前ならありますわ。【幻想郷】という人と妖怪、更には神様や妖精までもが住む幻想的な世界になる予定ですわ。」

とりあえず1回ごとに長々しい名前で呼ぶ必要が無くなった。武志は次の質問をぶつける。

「2つ目はその幻想郷を創りたいと思った理由を聞かせて欲しい。」

「理由ねえ……。私やお師匠様の友人が人間だからかしらね。それ以下でも、それ以上でもありませんわ。」

「そうか……。」

「それで？貴方はこの計画に賛同してくれるのかしら？これは貴方の弟さんの夢でもあるのよ？」

そういえば前に理都から聞いたな。その時私は賛成でも反対でもないといったつけ。でも理由を聞いて考えはほぼ固まったかな。そう考えながら最後の質問をぶつける。

「そして最後の質問だ……。私も自分の世界を持っているから分かるが、ここ大和の土地にその様な世界を創るには神々の許可がいるんだぞ？新しい空間にその世界を創るならまだしも、大和の土地に創るには大変だぞ？」

「その点なら問題ないわ。あなたも知っているとと思うけど隠岐奈はそこそこ高位な神様だし、創造神様にも顔が利くらしいからきつと許可を取り付けてくれるでしょう。それに先程も言いましたけど貴方には強力な結界を創ってもらう予定だから分別という点でも問題ないわ。」

隠岐奈が後ろで苦笑いしているが、それを聞いて考えはほぼ固まった。

「そうか。残念だが協力する事はできないな。」

「…っ！貴方！」

紫がこつちを睨んでくるが、隠岐奈がそれを宥める。

「まあ私は生前の理都からもその話を聞いているし、もちろん悪い事ではないと思う。」

「だったらなぜ…。賢い貴方なら分かるでしょう？」

「だがな…。私もその創造神様に会ったことがある。」

「待って！なら尚更どうして！」

「その創造神様が言ったからだよ…。」勝手に大和の土地を使う不届き者は私が世界ごとそいつの存在をかき消す。だからって許可を取りに来ても絶対に許可しないけどね。」と。隠岐奈なら分かるだろう？創造神様はよくこの土地を散歩してるからな。その時に聞いたさ。私みたいに別の空間に作ってはいけないのか？」

勿論自身が創造神の為、この話は半分くらい嘘だが、神としての持論を述べる。

「それはダメよ…。私もこの大和の土地が好きだし、その方が人間たちや妖怪達にとっても都合がいいのよ。」

「そうか…。だったら1ついい方法がある。」

「私が創造神様に許可をとる。恐らく拒否されるだろうがそこは1つ秘策があるから大丈夫だろう。」

それを聞いて紫の顔が喜びに変わる。

「ただし、私と戦って勝ったらの話だ。ほかの妖怪達を読んでくれるも構わない。まあ、要は強くなければ世界を作る資格は無いということだな。」

「…。分かったわ。隠岐奈、美晴と颯を呼んできて。」

紫がそう言うのと隠岐奈は無言で扉を作り、その中に入っていく。

数分した後、先程美晴と颯と呼ばれた2人がやってくる。

「隠岐奈に呼ばれてくれれば…。何だお前？」

「隠岐奈殿、これは一体なんと申すか？」

「ああ、幻想郷の件でな、今から目の前の奴と戦う事になったから協力してくれ。」



すると鬼と海賊を足して2で割った風貌をしている方が目を輝かせる。

「ああ、そういう事か！おい！そこのお前！名をなんという！」

「私は洩矢武志だ。もしかしたら隠岐奈から聞いているかもしれないが、私を倒せば幻想郷を作つて貰えるように掛け合つてみよう。」

「そうか。私は叢雲颯むらくも はやて。天魔だ。この山の天狗の頭領として活動している。」

「私の名前は金平鹿美晴こんへいか みはる。この山の鬼をまとめている者だ！」

簡単な自己紹介を終わらせた後、紫が口を開く。

「さて…、役者も揃つたことですしそろそろはじめましょうか…。」

「ああ。お前達の夢に対する熱意を見せて貰おうか。4対1でかかつてっいー！」

「あんまり1対多数の対決はお師匠様のポリシーに反するから避けたいのだけれどねえ…。いいわ。皆、手加減なしで攻撃するのよ。」

「御意。」

「もちろんさあ！」

こうして幻想郷の創造を賭けた4 vs 1の戦いが始まるのであった…。

PART・60 対幻想百鬼夜行 〽 The Dream Qualification

「うらあああああー！」

美晴が鋭いパンチを繰り出すのが、武志はそれを容易く避ける。

「この程度か？」

「いいえ……。こんな物ではないわ。やりなさい隠岐奈。」

「む。」

後ろに扉が出てきたと思えば、無数の弾幕が飛び交ってくる。更にスキマからも槍や刀が出てくる。そこへ、

シュツ！

……！

颯が目に見えない速さで突撃してくる。流石に4対1のため武志も回避や防御に専念せざるを得ず、分が悪い状況となっている。

「ふむ……。美晴が前線で攻撃し、颯の隙を着いてくる攻撃と後ろからの隠岐奈の攻撃で隙を見せた所を後ろから紫が攻撃か……。なかなかの連携だな。」

「そうでしょう？ 私達の仲間意識は固いですわ♪」

「だが、これはどうかな？ 【拡散バレットヘル】」

毎度おなじみのこの技だが、タレット6基が散弾による一斉射撃を開始する。

どう避けるのかと思ひながら、MR24で精密射撃しながら観察している、どうやら紫と美晴はスキマで回避、隠岐奈は扉に入って回避、颯は恐らく飛んで回避したのだろうが、見当たらない。だが大方予想はついたため、後ろを向いて射撃する。

「おっとー！」

案の定後ろから颯が槍を構えて突進してきていた。射撃を回避するため逸れていったが、かなり危なかった。

「なるほど……。やっぱり1人ずつ片付けていった方が良いみたいだな。【ガトリングバレットヘル】」

ガトリング砲の照準が隠岐奈に向けられる。

「見切った！」

隠岐奈は扉に入って弾丸の嵐を避けるが、隠岐奈が扉に入った瞬間、こっちに突撃してくる美晴に照準を向ける。

「しまったー！」

ドドドドドドドドドド

美晴は間一髪紫のスキマに入るが、それでも何発か掠ったようで、所々に傷があった。

「いてて…、掠っただけなのに一撃が重いな…。」

「当たり前だ。特性の貫通弾を連射する技だ。寧ろ掠っただけなのにその程度で済むことが驚きだ。」

「次は私達の番よー！」

紫が武志の死角から弾幕や刀を放ち、美晴と颯が近接戦を仕掛けてくる。武志はタレットの確認をするが、隠岐奈がタレットを破壊しているのに気づく。

「む…。近接戦で来るならこれでどうだ！【火炎放射「アタゴフレイム」！】」

武志はそう唱えると火炎放射器が出現する。そしてそこから高温の炎が吹き出す。

「あんたばかり技使ってんじゃねえぞ！火なら水だ！【熊野灘大嵐】！」

すると一面に大波が大量に出てくるが、神の火。それも創造神の火がそんな簡単に消えるわけが無い。

「無駄だ。この大波ごと消し炭にしてやる。」

武志は更に火力をあげ、美晴に攻撃を当てる。だが周りは波のため、そんなに意味は無さそうだ。だが、少しでも掠るだけで火傷する火なのでダメージは大きいだろう。

【天魔王の威光】

上から何かか聞こえたと思うと後ろから颯が突撃してくる。後ろには燃料タンクがあるため、そこを攻撃されるのはまずい。

だが、あまりの速さだったのと、燃料タンクはそれなりに重かった

ため、振り向くのが少し遅れる。すると後ろから衝撃がくる。どうやら体当たり十槍が刺さったようだ。すると、

ボカーーーーン！

タンクは爆発して武志は吹き飛ぶ。そこに美晴が一撃を叩き込む。

「もらったー！」

ドカツ！

武志は地面に叩きつけられる。

「うぐぐ… なかなかやるな。だが、まだまだのようだ。」

「あら。その割にはボロボロそうだけど？」

「確かに燃料タンクを攻撃されるとは思わなかった。だが、ここからはそう簡単にはいかないと思っておけ。」

「それはどういう事だ？」

隠岐奈が問いかけてくるが、私はそれに答える。

「勘のいいお前なら分かるだろう。こういう事だ！【核「ニュークリアミサイル掃射作戦」！】

これは武志特性核ミサイル「M・T・09—lev・NC」を掃射するということかなり危険な技である。一応、着弾した瞬間に放射能は消えるため、環境への心配もない。（そもそも大爆発させる時点で環境も何もないが）

「喰らえー！これが私の本気だー！」

因みにこの前撃った【殺戮衛星「あじさい」】をここで照射すると紫や隠岐奈達の存在ごと消し飛ばすため、敢えて黙っておく事にする。因みに理都は特別な訓練を受けているため消えることは無い。

「させませんわー！」

紫はミサイルをスキマに入れる。

「こっちもだー！」

隠岐奈も同様にミサイルを扉に入れて回避する。

「させぬぞー！【叢雲百裂斬】」

颯はまたものすごい速さでミサイルを避ける。更に、隙について槍で攻撃を仕掛けてくる。この技の発動中はあまり動く事は出来ないが、幸いにも直線的のため、気をつけていれば当たる事はなさそうだ。

「これでトドメだ！【四天王奥義「三步滅亡」！】  
「えっ」

だが颯に気を取られていたため、美晴がなんか凄そうな技を打ってくる。

「1歩！」

1歩歩けば周辺に衝撃波が起こり、ミサイルが誤爆する。

「2歩！」

2歩歩けばそれよりも強い衝撃波が起こり、正直立つだけでもきつくなる。流石に3歩目は危険と判断し、技をやめて逃げようとするが、相手の方が早かった。

「3歩！」

山全体が揺れる衝撃波がモロに直撃し、武志は吹き飛ぶ。よってこの勝負は武志の負けとなるのだった…。

（少し手を抜いていたとはいえまさかあんなに強いとはな…。最後にそこそこ強い技も撃ったがあれも完璧に対処されるとやはり実力はほんもn）ガサガサガサッ！

武志は山にぶつかる。幸い、木がクッションとなったため、すぐに抜け出して紫達の元へと向かう。

「見事だ。お前達の実力なら大丈夫だろう。」

「でしよう？ 私達の絆は土蜘蛛の糸よりも丈夫なのよ。」

「そうか。」

土蜘蛛の事はあまり分からないが、武志は紫に手を差し出す。ゆかりもその意志を汲み取ったのか固い握手をする。

「お前達の夢の為に色々頑張つてやろう。それで？ 結界が欲しいんだろ？」

「ええ。とびきり強い奴を頼むわ。」

「だったらいい物がある。誰か紙と筆を持っていないか？」

「恐らく私の屋敷にあらう。着いてくるが良い。」

武志達は颯の後について行き、山の中腹にある大きめの里の中心にある屋敷に到着する。

「この者たちは私の客だ。粗相のないように。」

「はっ！」

門番らしき天狗の所を通り、武志はそこそこ大きめの部屋に案内される。それ以外の方々は別の部屋に行ったので、おそらく間取りを知っているのだろう。

武志が案内された部屋はおそらく応接室の類だろうか。いつもは数百年時代を先取りした世界に住んでいるため、こういった日本古来の雰囲気も悪くないと思った。

「今、私の部下が紙と筆を持ってくる。暫し待ってくれ。」

少しすると1人の天狗が紙と筆を持ってくる。

「届いたか。暫く1人にさせて欲しい。少し集中したいからな。」

「分かった。文、行くぞ。それと武志殿、私達は部屋のすぐ外にいる。書き終わったら呼ぶなり出てくるなりしてくれ。」

「分かった。終わったら術式を持って外に出よう。」

その返事の後すぐに、颯は文と呼ばれた天狗と部屋の外に出る。

「さてと、書きますかね。」

武志は術式を書いていく。武志は術を仕込む時に、まず魔法陣やエンブレムを描き、その中に、自らが創造した術式を多数書き込む。因みに武志自身はMT言語と名付けている。概要は現代のプログラミングとほぼ同じで、簡単かつ、多数の要素を詰め込むことができ、更に武志しか読めないようになっていたため、解読もされにくい。因みに武志のいつもつけているサングラスに解読機能がついている。(サングラスが壊れた時や無くした時どうするんだろう...)。

... そんな解説をやっていると武志が術式を完成させる。

さて、これを紫達の元へ持っていったら完成だな。

武志は部屋を出て颯と合流する。

「颯さん、完成しましたよ。」

「... 天魔殿もしくは颯でいい。完成したなら紫殿の元へ向かおうか。着いてこい。」

武志は颯と一緒に紫達の元へ急ぐのであった...

「... あ、戻ってきたようね。」

「本当だな。いい物は出来たか？」

「ああ。とびきりのやつが出来た。今から見せようか。」パラリ

武志は紫達に術式の書いた紙を広げる。

「…これは？」

「ああ。簡単に説明するなら、この結界は【常識】と【非常識】を分ける結界さ。」

「??？」

みんなの頭に？マークが浮かんでいるため、更に細くする。

「まあお前達ならわかると思うが、この先妖怪は文明の発達によってどんどん非常識の存在へとなっていく。だからその非常識の中にその幻想郷とやらを作れば、永遠に妖怪達が住みやすくなる環境を整えられると言う事さ。」

つまりは結界の中なら妖怪達が安心して生活できるよ！という事です。

「なるほどねえ…。これはどうやって起動・維持すればいいのかしら？」

「起動は簡単だ。霊力と妖力を同時に流し込めば勝手に起動する。そして申し訳程度の自己修復機能があるから基本的には放置してもOKだな。ただ起動・維持に霊力が必要だから強力な霊力の扱える人間が必要だな。」

「なるほどね…。分かったわ。」

「今日はありがとうな。」

「いいよ。お前達の夢とやらに参加出来て光栄だ。」

「因みに貴方は幻想郷に住む予定はあるのかしら？」

「いやないね。私は自分の世界があるからな。」

それを聞いた紫は少し残念そうな顔をするが、

「まあ幻想郷ができる時は呼んでくれ。私も楽しみにしているからな。」

「分かったわ。あ、許可お願いね？」

そうだった。一応許可を取るという名目でも呼ばれていたんだっ  
た。

「了解。また次会う時に教えよう。」

そして武志はポータルを生成し、諏訪洩矢郷へと戻るのであつた……。

「……疲れたな。」

「お疲れ様です。」

武志は自室に戻って椅子に深く腰かける。

「結局外で待つてつとと言われていつまでも戻って来なかつたですよね？」

「ああすまん。成り行きで現世に連れていかれてな。」

「ああ……。それは大変でしたね。」

「だろ？……あ、そうだ。今度また呼ばれると思うからその時はラダヴィーニヤも連れて行ってあげよう。」

「分かりました。」

次回：幻想郷完成。乞うご期待。



PART・61 人間と妖怪が共存する世界

前回の話から大体1週間位がたった頃……。武志は自分の従者達と一緒に幻想郷などについて話をしていた。

「一体なんだ？ボス。珍しいじゃないか。そっちから呼ぶなんて。」

「ああ。前にも言ったがそろそろ紫が来るとに限らない。だから幻想郷について少し話しておこうとな。」

武志はこの1週間で千古に幻想郷設立の許可をとり、それを隠岐奈に伝達、そしてそれが紫に伝わり、現在は強力な霊力を扱える人間を探している最中である。最も、武志は探していないが……。

「幻想郷は現世のとある山奥にある。それも誰も行かないような所だ。そこには妖怪の山、鬼の住処、人里、向日葵畑等、色々な場所があり、とても美しい所だった。」

武志はその後1回幻想郷（の元になる土地）を巡り、そこでの感想を述べる。だが今回の本題では無いので話を戻す。

「まあ話がそれだな。で、その霊力が扱える人間だが、このチエルベツ口の板を使って調べた結果、この大和の土地に1人だけ該当する人物がいた。場所的にも紫がすぐ見つけるだろうから私からは接触しないけど。」

と言っているが、実際は該当する人物がいなかったので武志が創造した人物である。おそらくこの事実を闇に葬られる事だろうが。

「それで紫がその子を見つけ次第保護、そこから紫とその子で結界設置。これで幻想郷の完成という流れだ。」

「マスター、1つ質問をよろしいですか？」

「ん？なんだ吉美。」

「その紫ちゃんという妖怪がその子を見つけなかったらどうするの？」

確かに近くにいるとはいえ忌み子等で幽閉されて見逃しているという可能性があるかもしれないからな。まあその子は巫女として神社ごと創造したのでおそらく大丈夫だと思うけど。因みに祀っている神様はユレイドスだ。まあ彼の神社はなかったはずだから丁度い

いだろう。無断だけど。

とりあえずそのまま言うのもあれなので適当にそれっぽいことを言って誤魔化す。

「んー、それでも見つけるのは紫の仕事だからな。それも一種の試練という事だ。まああまりにも見つからないようなら連絡をとって引き取ってもらおう。」

「それがいいですね。」

~~~~3日後~~~~

「まだですかね?」

「情報収集から入っているならまだ掛かるだろう。気長に待つしかないな。」

~~~~更に1週間後~~~~

「結構時間かかるね。マスター。」

「うむ、流石にもう見つかったてもいい頃だが…。遠くの方から探しているのか?」

~~~~そして更に2週間後~~~~

「ボス、流石にここまで来て見つからないのは訳がありそうだぞ?そろそろ助言したらどうだい?」

「かな…。ちよつと紫の所へ行ってくる。ラダヴィーニヤ、ポータルを出してくれ。」

「分かりました。」

武志は紫の所へ助言をしに向かうのだった…。

~~~~その翌日~~~~

武志がラダヴィーニヤと吉美とで作業していると、目の前にスキマが出現する。

「ちよつといいかしら?」

「…紫か。やつと見つけたのか。」

「ええ。必要な人間が見つかったのでその報告に来ましたわ♪今からにでも結界を起動する儀式を始めるけど、貴方はどうする?」

「なら着いていこうかな。行くぞ2人とも。」

「分かりました。」

「はいー！」

3人はゆかりの後に続きスキマの中へ入っていく。その先は前に来た幻想郷（の元になる土地）だった。前に来た時よりも色々なものが置かれてごちゃごちゃしているため、この場所で儀式を行うのだろう。

「とりあえずあともう少し掛かるみたいだから邪魔にならないところで見学してくれないかしら？」

「分かった。」

武志達は近くにある里に向かう。そこで団子を食べ、時間を潰す。そしてゆつくりと里を見て回る。

~~~~30分後~~~~

武志達が時間を潰していると隣に怪しいスキマが現れる。

「ここにいたのね。そろそろ儀式の時間ですわ。」

「分かった。さあ行こうか。」

皆はそのスキマを通って儀式の地へ向かう。

儀式の地では天狗と河童と鬼が周りを囲って（警備して？）おり、他にも謎の機械があったり、紫が呼んできた巫女もいる。

「すごいー！」

「凄いですねマスター。」

「ああ。所であの機械はなんだ？」

「あの機械は私にもよく分からないけれど、河童達は結界の状態を見る機械とか言ってたわね。ほんと用意周到なこと。」

「準備が念入りなのはいい事だ。」

数々の妖怪たちはこちらに気づいたのか、美晴と颯がこちらにやってくる。

「おう、この前の奴じゃないか。」

「久しぶりですな。武志殿。」

「おう、2人とも元気だったか？」

「ああー！元気いっぱいだぜ？」

「勿論、万全の状態である。」

そして巫女も気づいたのかこちらにやってくる。

「ねえ紫、こいつらが前に言ってたそのお師匠様とやらの兄なの？」
「ええ。一応自己紹介しておきなさい。」

「はい。私は神夢。それだけよ。」

「ああ。私は洩矢武志。理都の双子の兄だ。それと、」

「私はラダヴィーニャ・ハルトマンです。マスターの秘書をやっています。」

「私は金河吉美だよ！よろしくね〜！」

各自の自己紹介が終わるが、早速神夢が仕事モードみたいなものに入る。

「よろしく。で、もう準備は終わっているみたいだけどその儀式とやらはまだなのかしら？」

「ええ。彼らも来たことですし始めましょうか。貴方達は少し離れていなさい。」

そう言われて武志達は少し下がる。すると神夢と紫、そしてどこからか現れた狐の妖怪と共に術式を詠唱する。

すると地面に書いてある、前に書いた術式が光りだし、眩い光とともに術式が展開されていく。その様子はとても美しく、なんとも言えないような感じになったあと、光が治まる。3人の顔と横で見ている河童の顔からおそらく…

「成功ね…。ここまで長かったわ。」

紫のその言葉と共に周囲は歓声に包まれる。その中で武志は3人に近寄っていく。

「良かったな。それと貴方は…？」

「ああ、そう言えば初対面だったっけ？彼女は私の式よ。」

「紫様。という事はこの方が…？」

「ええ。彼がお師匠様の兄にしてこの結界の設計図を書いた人よ。さあ藍、自己紹介しなさい。」

「私は八雲藍。紫様の式です。」

——自己紹介が続くためカット！——

「よろしく。」

「こちらこそよろしく。」

「藍はね、月面戦争の時から居ただけで、あの時はスキマで幽閉中だったし、前に来た時は幻想郷関連であちこちに行ってもらってたからね。ほんと私の優秀な式よ〜！」

「そうか。」

「ところで貴方達はどうするの？これから幻想郷設立祝いの宴会をやるけど来ないかしら？」

「いややめとく。こちらも忙しいからな。」

「残念ね〜。まあ分かったわ。それじゃさよならね。」

「ああ。またいつかな。」

武志達はポータルを通って創武殿へと戻る。

「マスター、本当にやるの？」

「ああ、结界を作った張本人だからな。これくらいの恩恵があっても構わないだろう。」

武志は設計図を書いた時にある程度の細工を施していたのである。

「まず、あの结界は幻想郷での侵入者探知结界としても役立つのだが、そこから私を検知しないようにしておいた。勿論理都達も一緒だ。」

これは単純にいつでも幻想郷に楽に来れるようにする為である。特に深い意味はない。

「次にこれを見てみる。」

武志はチエルベツコの板にとある画面を映し出して見せる。

「マスター、これは？」

「もしかしてですが幻想郷…ですか？」

「これは私の…というか天界の観測衛星だが、そこから幻想郷を見ることが出来るようにしてある。いつでもどこでも様子が見ることが出来るってことだな。」

ちなみに武志の最終兵器である殺戮衛星「あじさい」もここに照準を合わせることが出来る。まあ滅多に使わないと思うが。

「さて、これからどうなるかな。」

「楽しみです。人間と妖怪が共存する世界なんて。」

「きつと素敵な世界になると思うよ！」

「だといいな。ハハハ。」
武志達は幻想郷の将来が平和な世界になるように祈るのだった。。。

幻想郷・設立。

PART・62 理都の旅立ち

前回の話から約30年が経過した頃の話……。幻想郷の方もかなり落ち着いたようで、隠岐奈曰く反対派の妖怪もほぼ鎮圧し、かなり安定し始めたようだ。そしてやっとまた裏方から見守ることが出来るとも言ってたっけ……？

ちなみにこの頃の幻想郷が現在の幻想郷の基礎である。

「……いいかい兄さん？」

「……珍しいな。理都が従者たちとこっちから来るなんて。」

「まあね。相談したいことがあるんだけどいいかい？」

大方想像はつくが一応聞いておくとする。

「いいぞ。」

「ありがとう。そろそろこの世界からまた現世の方に移り住みたいと思ってるね。どこかい場所がないか聞きたいんだけど。」

「いい場所ね……。希望はあるのか？」

まず理都が希望を言う。

「そうだな……。紫達の近くがいいかな。遠すぎず近すぎずで見守りたい。」

「なるほど……。」

「だったら自ずと場所は狭まるだろう。他の希望を聞くとするか。」

「他にはないか？」

「じゃあ俺からも1つ。」

楓からも要望があるみたいなので聞く。

「できればこの日ノ本の中がいいな。つまり外国や他の世界……。例えばここみたいな所じゃないところがいい。そうだろう？主よ。」

「ああ、その方が助かるよ。」

「分かった。だったら少し探してみる……。つと、ここはどうだ？」

武志が示した場所は冥界だ。ここなら要望は大丈夫だろう。

「ご主人様、ここにっつて……。」

「ああ……。完全に白玉楼だな……。」

「どうやらこの建物の事を知っているらしい。だとしたら話は早い

だろう。

「どうだ？ここがいいなら天照経由でアポとるけど。」

「いやそういう事じゃなくてだな…。ここはダメだ。」

「そうか。いい所だと思っただけだな。」

武志は他の場所を探す。見つけたのはなんか禍々しい森だ。今でいう魔法の森である。

「どうだ？ここなら文句ないと思うぞ。」

「… 試しに行けたりする？」

「勿論。」

武志はその場所へ向かうポータルを生成する。理都が試しに向かうと、30秒ほどで戻ってくる。心無しか苦しそうだ。

「ゴホツゴホツ…。おい！だいぶ瘴気が濃いじゃないか！流石に俺でも敵しかったぞ！」

「悪い悪い。大丈夫だと思っただ。」

「他になんかないのか？こう…。もつと人がいない所とか。」

「人がいないところね…。」

武志は必死に探す。すると1つの最適な土地を見つける。

「だったらここはどうだ？元々地獄があった場所だが、現在は移転して寂れているところだ。多少怨霊は居るがまあ大丈夫だろう。それに紫の所にも近いからな。」

「ふむ…。いい所じゃん。ここでいいか？」

「私は大丈夫だよー！」

「我は大丈夫だ。」

「私もいいと思います。」

3人の従者は皆許可する。

「どうやら決定したようだな。」

「ああ。その場所へ行けるかい？」

「待った、その前に何か変装の道具はあるか？本当に紫と近い場所だから下手したら鉢合わせる可能性があるぞ？」

皆様も薄々気づいていると思いますが武志が言ったのは旧地獄跡。幻想郷の地下である。

「だったら頼むよ。何か欲しいものはないか？」

「だったら私は顔を隠す長めの布と腕などにつける鎧みたいなものが欲しいです。」

「いいよ。」

武志は紅桜に似合うような白い布と、黒の籠手を作る。

「なら我は狐の面が欲しい。お願いできるか？」

「任せとけ。」

武志は楓の雰囲気壊さない黒い狐の面を出す。

「ありがとう。」

「私は可愛いマスクがいいなく！」

「マスクか・・・こんなのはどうだ？」

武志は葵に動物の口のイラストが描かれたマスクを渡す。

「ありがと〜♪」

「じゃあ、最後に俺だな。といっても俺はコレがあるから大丈夫なんだよな。」ドサツ

理都は鎖が巻きついた本から白と金の衣装をだす。

「俺はこのフード付きコートがあるから隠す必要が無いんだよね。地上だと邪魔になるから神界に置いてきたけどまさかまた着ることになるとはな...。」

理都はそう言うのが武志には気になる点が1つ。

「... そう言えばその本は？」

「ああこれ？【理の書】という俺の神具だ。この中に色々なものを入れたりしている。そして左手にこれを持って右手にこの【黒影御剣】を持つたらいつもの俺の戦闘スタンスになるな。」

「なるほどな。私のチェルベツロの板みたいなものか？」

「そうかもな。」

ちなみに武志の戦闘スタンスは、チェルベツロの板を周辺に浮かせて、ガードマンに唐夜叉丸と黒金刃を持たせて自身はカタストロフィーかMR24を持つのが基本である。

「とりあえず向かおうか。一応私の情報では他に妖怪は居ないみたいだが怨霊が大量にいるから注意だ。」

「分かった。」

皆はポータルを通って旧地獄跡に向かう。そこには廃墟と怨霊が沢山いる光のささない地底の都市だったのもがあった……。

「…立地を整えたらいい所だろうか？」

「なんで疑問形なのさ。住めば都とかいうじゃないか。」

「まあそうだが…、私はあまり住みたくはないかな。光の射す所の方がしつくりくる。」

周辺を見渡すとそれぞれの従者が寛いだり遊んだりしているがとりあえず指示を出す事にする。

「とりあえず紅桜、楓、葵。ここの怨霊の掃除をしてくれ。」

「おい、怨霊なら私がどうにかするが？」

「んー、折角だし俺の従者の力でも見なよ。そういえば見たことないでしょ？」

確かにあんまり理都の従者達が戦っているのを見たことがないためここはその言葉に甘える。

「…分かった。お前の言葉を信用しよう。」

「主様、もう始めてもよろしいですか？」

「暴れるのは久しぶりだからな。腕が鳴るぜ。」

「マスターが良ければ私達もOKですよ♪」

向こう3人はやる気のような。もつとも、この広さを3人というのかなり無茶な気がするが。

「じゃあいいよ、始め！」

理都の合図を皮切りに従者達は物凄い速さで怨霊達を狩り始める。

「マスター、あれは？」

「理都の従者達が怨霊を掃除しているところだ。」

「すごい速さですね。」

しかしこの動きができるのはすごいため、理都にその秘訣を聞いてみる。

「どうしたらこんな早く動けるんだ？」

「んー、特にはないけど、常人がやったら死ぬような厳しい修行をさせているからね。それを積み重ねたり、あとは死戦が多かったから実践

慣れしたのもあるかも。」

実践慣れ……か。今度訓練と称じて強めの敵を諏訪洩矢郷に解き放とうかな？確かに経験は不足しているから考えようだ。

「なるほどな。ありがとう。」

「いいよ。確か兄さんの従者は人造人間と不老不死でしょ？」

確かにラダヴィーニヤと吉美が人造人間、バンディと大無が不老不死の蓬莱人だ。

「そうだ。」

「だったらまだやりようはあるからね。あと蓬莱の薬って余ってない？」

理都は後半の方を小声で言ってくる。そのため武志も小声で返す。

「いや、従者2人……紅桜と楓も蓬莱人なんだが、葵の分の蓬莱の薬が無くてな。妖怪兎だから万単位で生きるとは思うが一応飲ませたいから欲しいんだがいいか？」

そういう事か。てか理都の従者も蓬莱人だったのか。特に断る理由もないし先程のアドバイスのお礼もあるからね。

「いいよ。別れ際に渡そう。ただし飲んだあとの入れ物は粉碎して燃やしてくれよ？万が一残るととても厄介だからな。」

「分かった。」

そんな話をしながら30分後、理都の従者達が戻ってくる。

「主様、終わりましたよ。」

「そうか。」

紅桜が完了の報告をする。武志は周りを見渡すが確かに怨霊は1匹もない。

「とりあえず怨霊は片付いたみたいだな。」

「この次はどうするんだ？廃墟を片付けるのか？」

「マスターなら一瞬で片付けて新しい都市を創りそうですね。」

「マスターはすごいからね！仕方ないね！」

理都はそれを聞いて少し考えるが、

「……いや、建物とかは自分たちでやりたい。だから手を出さないでくれるか？」

「そうか。分かった。なら私達はそろそろ帰らせてもらおう。」

武志は従者達を呼び集める。

「それじゃあ私達は帰るが、先程も言ったようにここは紫達を作った世界の真下だ。見つかるのが嫌なら暫くは大人しくした方がいいだろう。あとこれ例のもの。」

武志は注意と蓬莱の薬入りの壺を渡す。

「ありがとう。気をつけるよ。」

「それじゃあな。またいつか逢おう。」

「さようなら。マスターの弟さん。」

「じゃあね〜!」

皆は別れの挨拶を言いながらポータルを通る。向こうも、

「ああ。また遊びに行くことがあれば向かうよ。」

「今までお世話になりました。ありがとうございました。」

「おう。さらば主の兄さんよ。」

「またね〜!」

武志達は手を振りながら、向こうの世界に戻る。

~~~~~

「…戻ってきたか。」

「おかえり、ボス。」

バンディと大無は元々理都との繋がりが薄かったというのもあり、留守番を任せていた。

「どうだったかい？ボス。」

「ああ。彼奴らは新しい世界での第1歩を踏み出したよ。」

「そうか。いい生活になるといいねえ。」

「そうだな。」

「よし、今日は理都達の新たな門出を祝ってパーティーでもするか!」

「やった〜!」

「いいですね〜。」

また彼らの新たな旅立ちを祝うパーティーをするのであった…。

しかし彼らはまだ知る由もない。この世界にもとある危険が忍び寄っていた事を……。

【諏訪洩矢郷・郊外】

「……ここが例の世界ねえ……。侵入者検知の結界があつたようだけどこの私にかかれば屋敷の門を通ると大差なかつたわね！……さて、ちよつと観光してからこの世界の統治者を軽く捻りましょうかね」

1人の招かれざる客が入り込むのであつた。

次回・新章突入。

## 第九章 忍び寄る悪魔、諏訪洩矢郷の乱 PART・63 悪魔襲来

前回、武志達を送り出してから3日くらい後のことの話……。

武志はいつも通りの日々の仕事をこなしていた。

「いい加減そろそろ量減らしてくれないかな。この辺の奴とか明らかに私じゃなくてもいいでしょ。」

「分かりませんよ？マスターの地位が高い事を利用して、グレーゾーンな書類を送り、許可を貰ったのをいい事に好き勝手するという人がいるかもしれませんよ？」

怖いな。だが確かにそんな感じの書類は届くが、そういうのは全て不許可なため問題は無い……はず。

「それは無いな。そんな感じの奴は全て不許可にしているし、大抵が三貴神の内の誰かだったり、母さんこと龍神様だったり、ほかの上位の神が目を通してから渡されるからね。上位の神からの奴は後で母さんに送るから変な内容が混じっても問題は無い。」

「なるほど。」

ラダヴィーニャはよく分からなそうな顔で返答する。そんなに分かりにくかったかな……今の説明。

「次は……ああバンデイからのSMDSの奴か……。」

そこにはバンデイ名義で送られてきたSMDSの再軍備見直しの紙が送られてくる。SMDSについて覚えてない人もいると思うためもう一度説明しておく、諏訪洩矢郷防衛隊の略で、名前の通りこの諏訪洩矢郷の警備をしている。

せっかくなので今後の安全面での話でもするか。

「なあラダヴィーニャ、侵入者はこの先来ると思うか？」

「いや、来ないんじゃないですかね。そもそもこの土地自体が現世からは隠されていますし、存在も認知されてませんから。」

「だよなあ。なら現状維持でいいか。」

武志はその書類に印を押し、次の奴を見る。すると、

ビーツ！ビーツ！ビーツ！

「…！」

「アラートか。という事は侵入者か？」

「ええ…？このタイミングで来ますか普通？」

続けて放送が流れる。

『侵入者検知。侵入者検知。現在連絡橋を強行突破したとの通報あり。侵入者5名が現在連絡橋を通過中。繰り返しますー』

やっぱり侵入者か。しかも5名とは。チエルベロの板で確認をすると、悪魔らしき風貌だが狐のお面を付けた女性と、その仲間と思われる金棒を持ったペストマスクの不気味な男性と、杖を持ち、体の至る所から金色の液体を垂らしているロングコートの男性、明らかに魔法使いです！という格好をした男性と、禍々しい雰囲気、剣士が向かってくる。

「…なんだありや。悪魔か？」

「でしょうね。しかもかなり強そうです。」

「とりあえず吉美を招集しろ！なんか此奴らヤバそうな感じがするぞ！」

「ですね。ポータルを開いて呼びますね。」

ラダヴィーニヤがポータルを開いて吉美を呼び戻す。

「マスター、このサイレンは何？」

「3名の侵入者だ。敵意があることも確認済み。迎撃するぞ。」

「分かりました」ドコーン

「…！」

爆発音の方を見ると、先程の5名が武装して立っていたのだった。

「あなたがこの世界の管理人かしら？」

「ああそうだ。私がこの諏訪洩矢郷の管理者だ。侵入者さん達。」

「そう。この噂は間違ってたのね。わざわざ大和まで来たかいたがあったわ。」

噂？一体なんの噂だというのか？この世界に関する事は一切頭になってないと思うのだが。

「なんの噂だ？」

「ええ。この世界には数々の宝があり、それを護るように大和の最強クラスの神様が住んでいる…とね♪」

「ここに宝と呼べる宝も無いと思うけどね…。どこで錯綜したんだか。」

本当に宝と呼べるものがないため正直に答えるが、相手は信用していないようだ。

「ふふふ…。嘘よね。仮にあっても私たちに教えるはずないし、そもそも宝だけが目的じゃないもの。」

「どういう事だ？」

「感が鈍いわね！私たちの目的は宝の奪取及びあなた達のお命よ！さあ！最強クラスと言われるその強さを私にみせなさい！」

「どうやら向こうはやる気のようにだ。仕方がないがこちららも応戦するしか無いようだ。」

「ラダヴィーニヤ、吉美、どうやら私達でやるしかないようだ。」

「その様ですね。」

「分かった！フルボッコにすればいいんだね！」

だが流石にここだと分が悪いため、外に出るか。逃がしてもらえないからならない上に入口は向こうが押えているため、やることは一つ。

「ふつ…。」バリーン

窓ガラスを突破して外に出ることだ。2人も気づいて武志に続く。

「外で殺りあおうって事ね。いいじゃない。私としても助かるわ。」

「こちらとしても屋内は都合が悪い。いざ尋常に殺ろうではないか。」

武志は話しつつ創武殿の重歩兵を起動する。更に物音やサイレンを聞きつけてやってきた警備兵もいるため相手も逃げられないだろう。

「カーター、タルボット、貴方達は周りの連中をやりなさい！そしてメルヒエンとエクセルは私と一緒に戦うわよ！」

カーターとタルボットと呼ばれた医者風の男と金色液体散布男は別の所へ行く。流石に見過ぐせはしないので、

「吉美！奴らを追え！」

ドサツ



「させる訳無いだろう…。？姫様の命令だ。ここから先に行かせることは許さぬ…。」

禍々しい剣士風の男が手に持っている大剣を振りかざす…。てか今改めて見て思ったけどなんでこいつは頭に鉄製の大きな三角コーン被ってるんだ？

「…。まあいい。なら仕方ない。軽く倒して奴らを追うぞ！」

「分かりました！」

「やっちやうよ！」

「メルヒエン、エクセル、貴方達は横の従者をやりなさい！私はそのこの男と戦うわ！手は出さないでね！」

「了解だ。」

「御意」

こうして3vs3での決闘が始まるのであった…。

PART・64 敵前逃亡？いや、戦略的撤退だ。

武志達と侵入者達の戦いが始まる……。

「帰れ！この世界からな！」

武志はいつも通りタレットを召喚する。しかも今回は火力が増した榴弾マシンガンだ。着弾地点に小規模の爆発を起こすかなり強い代物だ。だが、

「そんな攻撃当たらないわよ！」

マシンガンの弾は全弾避けられる。そしてお返しに巨大な斧から斬撃が繰り出され、タレットは破壊される。

「流石だな……。今回はかなり丈夫に作ったんだが……。」

「私をナメないことね。そのくらいじゃ簡単に破壊できるわ。」

武志は考えるフリをして周辺をチラツと見る。すると吉美はメルヒエンと、ラダヴィーニャはエクセルと戦っているのが見える。

「しかし罫があかなそうだな。まずはお前のその狐面を外すところから始めるか。」ギューーン

武志は黒金刃を取り出し振り回す。流石に相手もチェーンソーはまずいと思ったのか受け止めたり回避する。

「さっきまでの威勢が嘘のようじゃないか。神をも殺せるこの武器に恐れ慄いたか？」

「……。」

「何も言わないか。だったら追撃するでしょう。【神殺「悪夢のチェーンソーダンス」】」

武志はチェーンソーを踊るかのように振り回す。しかも一切の隙がないため距離を詰められると一瞬でバラバラになる。

「もらった！」

「……！」パリン

目の前の女性の狐面が割れる。すると中からは美人な女性の顔が出てくる。

「……！」

「中々の美人さんなんだな。」

「… どうやら貴方は絶対に殺さなければいけないみたいね。ここ大和のとある高貴な狐の神様から奪ったお面なのに…。それにこつちの世界で私の素顔を見たものは絶対に殺すと決めているからね。もう容赦はしないわ。」

するとさつきまでとは比にならない速さで武志に攻撃を仕掛けてくる。

「…！」ガキーン

「… 今のに反応するとはね。驚きだわ。」

「そうだろう。伊達に死戦をくぐり抜けた訳では無いからな。」

「でもその武器は限界みたいね。」

「… え？」

武志は黒金刃を見ると、確かになんか少し嫌な音が…。

ぼふん！

その音とともにチェーンソーが動作を停止する…。

「まじかよ。これを壊されるとは驚きだな。」

「そう。ならまだまだ行かせてもらおうわね！」

先程とは比にならない速さで攻撃を仕掛けてくる。武志はそれを必死に避けるが、流石に一撃貫つてしまう。

「… つ！なかなか一撃が重いな…。」

「でも刃の直撃を避けただけでも上々よ。今度はしくじらないわ。」

「武志はカタストロフィーを取り出し、迎撃体制に出る。」

【破壊神のロックブラスト】

地面から石が飛び出し、敵に命中する。早すぎて曲がりきれなかったようだ。

「流石に対応されちゃうか。だったらもう付き合う理由もないしそろそろ終わらせるわね。メルヒエン！エクセル！貴方達はそろそろ逃げなさい！」

それを聞いて嫌な予感があるのでこちらも従者を避難させる。

「ラダヴィーニヤ、吉美！お前らはどこか安全な所へ逃げろ！」

お互いの仲間がどこかへ逃げていく。

「あら、貴方は逃げないのね。」

「ああ。ここで刺し違えてもいい。お前はここで止める！」  
相手の方も術式を唱え始める。ならこちらも応戦するまでだ。

【殺戮衛星「あじさい」】

何が来るかわからないため相手の詠唱に合わせてチャージする。  
一応少しでも溜めておけば打った後の反動が楽になるからな。

・・・と、そんなことを考えていたら相手の術式が終わったみたいだ。何かデカイ技が来る。

「ここで貴方は終わりよ！」【ラファイネ・デラロビーナ】

斧を一振りするといくつかの球体が出現し、そこから武志めがけてビームが飛んでくる！武志はそれに合わせてあじさいの破壊光線を発射する。

二つのビームは互いにぶつかり合い、大爆発を発生させる。

「・・・やったか？」

「それはフラグと言うんですよ？」

ラダヴィーニヤがポータルから頭だけを出してそう告げる。そんな事を話していると煙の向こうから先程の悪魔が現れる。

「あの爆発に巻き込まれてまだ生きてるのか・・・。」

「貴方こそまだ余裕そうね？」

「まあとびきり強力な結界で防いだからな。しかしお前のような骨のある奴は久しぶりだ。お前は名をなんといい？」

「あら？まだ名乗ってなかったかしら。私はオタワ・ヴィヴァレティ。巷ではヴィヴァレットデビルとも呼ばれているわ。どうぞお見知りおきを。」

「そうか。私は洩矢武志。この地球の創造神の一人でありこの世界の管理人である。よろしくな。」

因みにこの地球の創造神の一人というのは説明するとややこしくなるため、ここでは地球などを作った存在がいて、それが地域によって様々な伝わり方をして、神道の創造神武志だったり、他の神話の創造神が生まれたということにする。勿論このことは他の神様たちにも言える。

「しかしお前はまだやるのか？」

「勿論よ。貴方を倒すまでは終われないわ。」

「執念深いな。しつこい女性は嫌われるぞ?」

「あら、それはあなたにも言えることじゃなくて?」

お互い睨み合いが続いたあと、お互いの従者達が戻ってくる。

「さて、決着はまだのようすな。姫様。」

「ええ。貴方達は先ほどの奴らの相手をしてなさい

「分かりました。」シユン!

先ほどの従者四人たちがラダヴィーニヤと吉美を搜索する。どこに逃げたかは知らないがおそらくこの世界にはいないと思われる。バンデイと大無が心配だが彼らなら何とかなるだろう。

「それで?まだやるのか?」

「ええ。ここまで骨のある相手は久しぶりよ。まつ、まだまだ私を楽しませなさいね!」シュツ!

今度は槍が飛んでくる。武志はカタストロフィーを手に応戦する。

「流石にきつくなってきたな。【創造神式防御結界 $\alpha$ 】」

ちなみにこの防御結界は何通りかあるが、 $\alpha$ 型が一番単純かつ一番強度が強いものである。それゆえ敵の妨害にも強い代物である。

武志は向かってくる槍を迎撃しながらオタワと距離を詰めていく。そして、力を込めた一撃を決める。

「〜っ!」

「その様子だと随分響いたようだな。いまならまだ見逃してやるがどうする?」

「... まだまだね。しかしその防御結界は反則じゃないのかしら。」

「勝手に襲撃してきた奴が言う台詞ではないな。それでは決めさせていただく。【破壊神災厄の一撃】」

しかし武志は気づかなかった。オタワの口元が少し吊り上がって  
いたことに.....

「甘いわね。【ルイン・ペネトレイター】」

するとほぼノーモーションで斧が下から上がってくる。この技は威力は強いが少し振りかぶる上に動けなくなるので避けることが出来ず、斧が命中する。しかも防御結界まで貫通してくる始末だ。

「そんなに隙が多い攻撃はいい的よ。おバカさん。」  
「…。」

流石に今の一撃は結構こたえたため、まともに戦えそうではない。「まあいいわ。貴方の首でも持ち帰って飾りましょうか♪きつといいコレクシヨンになるわ。」

流石にまずい。あまり動けないうえに首を持ち帰るとかいつて斧を構えてきた。仕方がないがここは最終手段をとるしかないか。

「じゃあね！ここまで骨のある奴は久しぶりだったわ！」シユツ！  
ガキン！

「…逃げられたわね。仕方ない。探しに行きましょうか。」

「姫様、ご無事で？」

「…ああタルボットじゃない。私は無事よ。結構いいセンスだったけど寸前で逃げられたわ。」

「そうですか。追いますか？」

「勿論よ。恐らくこの世界からは出ていないはず。急いで捜すわよ。」

~~~~~

…非常にまずいことになった。緊急テレポートで吉美やラダヴィーニヤの所に飛んだ方がいいが、思いつきり諏訪洩矢郷の中である。二人の話を聞くに、脱出阻害の術がかかっているらしい。つまりここからは逃げられない。どうすればいいか。

「とりあえずマスターは大丈夫なの？」

「問題ない。ここで少し休めば回復するだろう。」

「一体あの侵入者たちは何なのでしょうか。」

「んー、私には心当たりがないが…、ちよつと回復したら調べてみよう。」

うか。」

「お願いします。」

「ああ。流石に敵前逃亡はシャレにならないからな。この分はきつちりとお返ししないとな。」

武志たちはつかの間の休息を過ぎすのだった…。

PART・ 65 情報戦

武志達は繁華街・桜田のとあるビルの中でつかの間の休憩をとる。

「しかしまた災難ですよ。侵入者が来て荒らしていくつて。」

「…。」

「ほんとだよ。大無君とバンディ君とも連絡がつかないし、2人のことだから死んではないと思うけど心配だよ。ねえ。」

「…。」

「ところでマスターは大丈夫ですか？」

「…。」

「マスター？」

「… ああ。なんだって？少し調べ事をしていな。」

「… その様子だと大丈夫そうだね？」

「ああ。大丈夫だ。」

少し敵について調べていたが、あまりにも熱中しすぎて周りが全く見えてなかったようだ。従者から心配されていたがどうやら大丈夫と見られたみたいだ。まあ大丈夫なんだが。

武志はもう少し調べ事を進める。そして数分後、

「そういえばマスターはさつきから何を調べているんですか？」

「… ああ、敵の情報を少し。ああいう強い奴は何かしら載ってるんだよ… ほら、これを見て。」

武志が最初に見せたのは“ヴィヴァレットデビルの恐怖”と書かれた記事である。

「これはあの敵の…？」

「ああ。私には名乗ってくれたから。そこから情報を掴んだ訳だ。そしてこれはどうやら魔界の新聞記事で、あの悪魔が何かやったらしいな。」

記事を読むとそこにはこのような事が書いてあった。

“○○日、魔界の中心都市パンデモニウムにて、ヴィヴァレットデビルによる強盗が発生。魔界にある有名な学会であるアルタ学会の本部に侵入し、学会のトップであるブランディ・M・ワトソン氏を殺

害。彼の最高傑作である【アルターサファイア】を盗んだとみられる。当局は…。」

「…だつてさ。」

「え、中々の危険人物じゃない。」

「こんなのが攻めてきたのですね…。」

「他のやつも出てきたね。」

今度はまた別のビラを見せる。

〃 【錬金術師謎の失踪】

××日、魔界の郊外にて爆発が発生。現場にはとある小屋があり、おそらく薬品と魔道具が爆発したと見られるあとがあった。この小屋の持ち主であるトルボツタ・ウイリアムスは現在行方不明となっているため、当局は捜索を続けている。〃

「こんな人っていましたっけ。」

「ああ。タルボットと呼ばれていた奴だな。元は錬金術師としてそこそこの知名度があったらしい。とある花の蜜の研究をしていたけど道半ば潰えた感じかな。」

「でも顔が似てないよ。言われたら面影があるようにも見えるけど。」

「おそらく爆発で顔が変わったか、カモフラージュのために顔を変えたかだろうな。まああいつ顎が割れてたから前者だろうが。」

「しかしなんでそこまで…。」

「おそらく連れ去られて洗脳でもされたんだろう。結構前の奴だからな。」

「そして、次はこれだ。」

今度はまた別の記事を見せる。そこには電撃の悪魔現る。と見出しがついている。

〃 魔都パンデモニウム郊外にあるスペクター記念研究所にて、50名を超える研究員の遺体を発見した。鑑定によると全て脳に高圧電流が流されたあとがあり、当局は唯一遺体の見つからなかったトルマン・カーター氏の行方を探している。〃

「…いつって…。」

「あの電撃ペストマスク野郎の事だな。彼は電撃を操っていたから間

違いじゃないだろう。」

「この写真ではかなりイケメンですが…あの感じだと面影は無さそうですね。」

「しかもあの電撃を食らうと気がおかしくなりそうですね。1番警戒しなければいけない相手のようです。」

「次はメルヒエンと呼ばれてた奴だな。これが1番妙なんだよな。」

武志はとある記事を映し出す。そこには、

【有名魔道士メルヒエン・パンチエツタ氏殺害】

“魔都パンデモニウムで1番の魔道士、メルヒエンパンチエツタ氏が、○○日自宅で殺害されているのが見つかった。即死系の呪いがかけられた跡があり、当局は捜査を続けている。”

「…ということなんだよな。」

「つまり死んでいるってことですか？」

「わからん。偽装死もあるし蘇生されたってこともあるからな。ただ相当腕利きなのは確かだ。」

「手強そうな相手ですね。」

「そして最後のがこいつだ。」

たけしは2枚の写真と1つの記事を見せる。1つはエクセルとそっくりの石像が飾られている祭壇の写真で、2枚目は同じような祭壇から石像だけが消えている。

記事の方にはこんな事が書いてある。

【トライアングル・エクセル消失！】

法界にあるトライアングル・エクセルの封印の祭壇からエクセルが消失されているのが発見された。封印が解かれたあとはないが、もし解かれていた場合、見かけたら直ぐに逃げる事。エクセルは元々魔界の最強の剣士で、メトロンの祭壇の守護神とされていたが、ある時を境に暴走。周辺の村を次々に壊滅させた。魔界の最高神神綺の手によって祭壇ごと石化して封印された。非常に強力なため…
「という感じだな。後の方読めないけど。」

「祭壇の守護神って…また強そうな…。」

「全員魔界出身なんだね。」

「そうだな。」

「それで？これからどうするんですか？」

「部下は全員抹殺して、あの悪魔は自らの手で裁くしかないな。」

「… いやそうじゃなくて、対策の方です。」

「… え？そんなの知らないよ？」

心無しか2人とも落胆する素振りを見せる。

「あのさ… これからどうするの？」

吉美がそう聞いてくる勿論何も手をうつていない訳では無い。

「安心しろ。もう既に手は打ってある。とりあえず見つからないように空港へ移動するぞ。」

「分かりました。」

「… あとバンディと大無だが、彼らは今日神界の方に出かけている。」

言い忘れていたが彼らは有給？的な物をとって神界で楽しく過ごしているはずだ。そろそろ日が暮れそうになるが無理に呼び戻す必要はないだろう。

「とりあえず早めに向かうぞ。そんなに遠くないはずだ。」

「しかしなんで空港ですか？」

「それは行ったらわかる。さあ行くぞ。」

3人は見つからないように空港へ向かうのであった…。

PART・66 反撃の援軍

武志たちは空港にたどり着く。そこにはただ広い滑走路が延々と広がっているだけだった。...

「マスター、何も無いよ?」

「本当だな...。来るのが早すぎたか?」

「本当にここに何か来るんですか? 気配も何も感じられません。」

「まあ気楽に待つしかないさ。ここに指定してあるはずだから間違うはずもない。」

数分待つと、空が光り輝きはじめ、光の通り道、いわばポータルのようなものが出現する。

「... 来たか。」

そこから多数の兵士らしきものが出てくる。おまけに空を飛ぶ何かまで現れた。

「マスター、もしかしてあれを待ってたんですか?」

「その通りさ。」

そして最後にリーダーらしき人物が出てくる。

「須佐之男、来てくれたか。」

「おお、父さんじゃないか! 久しぶりだな!」

「須佐之男こそ久しぶりだな。」

「なんか雰囲気変わったな?」

「そっちこそ。前よりも幾分たくましくなったな。」

「そりやそうだろ! 今では黄泉軍を率いる立派な名将だからな! 戦神にふさわしい活躍をしてるさ!」

「そうかそうか。私も創造神として自分の世界でうまくやってるからな。元氣そうで安心したよ。」

と、援軍に来た須佐之男と会話を楽しむ。

「... マスター、その人に会う事がここへ来た目的ですか?」

「正解。因みに彼は須佐之男と言って、戦神をしている。今回来てもらったのは彼の兵隊である黄泉軍を引き連れて奴らを倒そうという算段だ。」

「おう。須佐之男だ。よろしくな。」

「金河吉美だよ。よろしくね。」

「ラダヴィーニヤです。マスターこと武志様の秘書をやっております。よろしくお願ひします。」

自己紹介を済ませたところで、須佐之男が本題に入ろうとする。

「それで？なんか強い連中が父さんの首を取りに来たからやつつけてほしいと聞いているが、どんな奴らだ？」

「それはな……この記事を見てもらえばわかるけどこんな奴らで……」

「ええ。こんな奴らよ。」

「……！」

そこにはオタワ達悪魔集団が勢ぞろいしていたのであった。

「遠くの方で物凄いことが起きてると思つたら……。まさか援軍を呼ばれるなんてね。ついてないわ。」

「それで？お前らは誰なんだ？」

須佐之男が誰か聞いてきたので横から補足する。

「奴はオタワ・ヴィヴァレット。魔界の危険な悪魔らしい。彼女の従者も全員魔界出身で死亡もしくは行方不明扱いらしい。」

すると、オタワは感心した様子で話す。

「あら、もうそこまで特定してるのね。仕事の早いことで。さて、長引くのも嫌いだし始めちゃおうかしら？」

「ああ。そうさせてもらおう。須佐之男、吉美、ラダヴィーニヤ、お前は全員で従者をどうにかしろ。私は大将を叩くでしょう！」

「その作戦乗ったわ！皆、奴以外をやっちゃいなさい！」

「もうこっちが優勢だ！慈悲はいらない。殺せ！」

開戦の火蓋が落とされるのであった……。

PART・67 やられたらやり返す、倍返しで。

空港の滑走路上で決戦の火蓋が落とされる…。！

「お前らの相手は俺だ！二人共、後方支援をよろしく頼む！そして兵士達よ！お前らはこいつらが逃げ出さないように包囲網を敷いてくれ！」

須佐之男は積極的に前線に立ち、四人の相手をする。

「草薙剣の錆となれ！」ザシユ！

須佐之男はカーターの鉄の棒を根元から切断する。流石のカーターもこれには驚いているようだった。

「ウウウーッ！シカタナイ、コレデモクラエー！」ジジジジ…。バン！

カーターは左腕に電流をチャージし、地面に向けて放電する。

「わあああああ！」

「キヤーーツ！」

「キヤーーツ！」

その電撃を喰らった三人は一斉に叫びだす。

「ワタシノデンゲキハアビタヒトスベテニガイヲオヨボス。アビタガサイゴキヨウキノドンゾコマデオチルガイイ！」

半ば何言っているか分からないが、この電撃は喰らわれない方が良かったろう。

「とりあえず厄介なお前から倒すとするか。」ザシユ！ ドサツ！

須佐之男はカーターを切りつける。血が吹きでているため、かなり傷は深そうだ。カーターも地に伏せている。

「全く…。4対1で来るからにはもつと俺を楽しませろ！」

そう叫ぶ須佐之男の周りにいくつもの魔法陣が生成される。

「おつといけない。」

須佐之男はそれを避けようとするが、下から火柱が出てくる。

「熱っ！だが迦具土神の野郎よりは温いぜ！」

すると今度は須佐之男がメルヒエンに向かって剣を振り下ろそうとするが、エクセルの剣で弾かれる。そしてその勢いで今度はその剣を振り下ろそうとする。

「なっ…！」

「させるかよ。」パアン

エクセルの右肩に銃弾が命中する。これにはエクセルも思わず後ろにのけぞる。銃弾が飛んできた方向を見ると、見知った人影が見える。

「…バンディ君！」

「神界を楽しんでいたらいきなり兵士に連れてかれてこっちに戻されたが、まさかこんなことになってたとはな…。」

「プギヤアアア」

そんな事を話していると今度はタルボットが突進を仕掛けてくる。だがいきなり横に吹っ飛ぶ。

「…待たせたな。」

「大無さんまで…。」

「おい！そっちに一人行ったぞ！」

須佐之男が警告する。見るとタルボットがまた突進を仕掛けていた。

「…。」ガキン

今度はバンディがナイフを構え、近接戦闘になる。タルボットはその杖で応戦する。

ガキン ガツン ガツ

暫く応戦しているとタルボットは引いて金色の液が入った注射器を体に打ち込む。

「プギヤアアアアア！」

するとまた突進してくる。今度は吉美が応戦する。

「私だってやるよ！【魔術兵器「緋緋色金人形」】」

真つ赤で全長3mくらいのゴーレムが二体ほど現れ、タルボットを蹂躪する。だが、結構互角である。

「… 援護する。【虚無殺法「闇の型」】」

大無の姿が消えたかと思うと、敵の背後にまわって重い一撃をくらわせる。

「グワアッ」

元々前のめりな体勢だったのも幸いし、タルボットは後ろからの不意打ちで体勢が崩れ、そのまま崩れ落ちゴーレムに帯に蹂躪される。「させぬ。【ファイアーゾイル・デス・グリーツ】」

また魔法陣が生成され、ゴーレムを囲うように火柱がでる。ゴーレムは火柱に耐えかねず消滅してしまう。だが、タルボットがまた金色の液体が入った注射器を取り出す。

「もらった。」パアン

「ブギヤアツ！」

バンデイが注射器を狙撃する。勿論注射器は粉々になり、中の液体も無駄になってしまう。

「今だ。今なら致命傷を与えられる。」

「そっか！わかった！【現代兵器「二撃必殺レールガン」】」

吉美はレールガンをどこからか召喚し、タルボットに撃ち込む。そして爆発が起こり、タルボットは粉々となって消える。

「…吉美ちゃん？そんなのがあるなら別の敵に打ち込んだ方が良かったんじゃない？？」

「大丈夫大丈夫！しばらくしたらまた使えるから！」

「…なんか怖いなそれ。」

「それほどでも♪」

「いや誉めてないから。」

「おいお前ら！仲良くしゃべっている暇があったら俺に加勢してくれ！」

須佐之男の方を見ると、エクセルとカーターと一緒に相手をして、奥でメルヒエンが後ろから援護をしていた。しかしそれだけの相手をするなんてやっぱ強いね。

「俺は狙撃で援護する。お前らはあそこに混ざって頑張ってくれ。」

「分かったよバンデイ君！」

「私もバンデイさんと一緒に後方で支援します。どうも前線は苦手で…。」

「…分かった。」

バンデイとラダヴィーニヤを残し吉美と大無は加勢する。

「…俺が相手だ。」

「…。」

大無はエクセルと、

「私が相手だよ！覚悟してね！」

「私はまだこんな小娘に負けるほど老いぼれてはいない。見せてあげよう。本当の魔術を。」

吉美はメルヒエンと、

「さて、援軍も来たことだしお前を最後まで相手してやろう！」

「カマワン！オマエヲジツケンダイトシテエイエンニキョウキニシバリツケテヤル！」

須佐之男はカーターと対峙する。

《大無&エクセルSide》

「…そのふざけた三角頭を破壊する。」

「…主に危害を加える者は…成敗だ。」

【虚無殺法「剣舞」】

大無はナイフを構えて背後から一撃を入れる。

「甘い。」ガッ！

ギリギリのところに対応される。

「気配を消すなど面妖な…。だがそんな奴は山ほど見てきた。お前もその中の一人にすぎない。」

だがエクセルは気が付いていなかった。大無の攻撃は終わりではないことに…。

「甘いのはお前だ。」

「…。」

剣舞は気配を消してひたすら死角から切りつける技。ただ一回切りつけただけでは終わらない。

「ぐっ…！」

これは対応するが、その間にも次の斬撃が来る。エクセルもいくつかには対応できず、いくつか傷を負う。

「まだだ… まだ終わる事は出来ない…！」【煉獄の罰】

エクセルが剣を地面に突き刺すとそこから3方向に禍々しい斬撃が放たれる。だがあくまでも直線的な攻撃のため容易く避ける。

「まだだ…」【煩悶の枷】

また剣を突き刺すと今度はエクセルを中心とする円上に術が展開され、赤色の閃光が発生する。

「…！」

大無は避けられずに被弾する… が、特にダメージもなく不思議に思う。

「… 見掛け倒しか。ならいい。これで終いだ。」【無心拳「鴉雀無声の鉄槌」】

「… 今、貴様の終焉の時となろう！」【苦しみの枷からの解放】

エクセルが剣を抜いて今度は上に構える。すると謎のエネルギーがその剣に蓄積されていく。そして振り下ろそうとするが、大無の方が早かった。大無の攻撃がクリーンヒットし、エクセルはその剣を手放してしまう。大無はその剣を拾い、エクセルに振り下ろす。エクセルはそのまま動かなくなり、この勝負は大無の勝利となるのだった…。

「… さて、吉美あたりに加勢に行くか。」

チルドーン！

吉美の方へ向かおうとすると爆発音が聞こえる。その方向を見るとどうやら決着がついたようだ。

「… さて、一度俺も戻るとするかな。」

大無はバンディとラダヴィーニャの所へと戻っていくのだった…。

《須佐之男&カーターSide》

「さあ、この戦神である私が直々に相手してやろう！」

「ノゾムトコロダ！ジツケンダイニシテヤル！」

カーターはすぐさま左腕に電流をチャージするが、その間に須佐之

男も距離を詰める。

「くらえっ！」ブオン！

須佐之男の一閃を間一髪でかわす。

「オカエシダー！」

「なっ…！ぐわあああああ！」

カーターはその帯電した左手で須佐之男の顔面を掴み、そのまま放電する。そしてそのまま須佐之男を叩きつける。

「いてて…、だが前に感電事故起こした時よりはマシだな！とりま一発もらつとけヤブ医者！」

須佐之男は草薙の剣を振り下ろすが、カーターは隠し持っていたステッキで応戦する。

「まだそんなものを隠し持っていたとはな…。だが俺の能力の前では無力だ！思い知れ！」【八岐大蛇の断罪】

勢いよく草薙剣を叩きつけるがステッキは折れることなく応戦される。そしてカーターはステッキの中から剣を出して切りかかる。

「ほう…まさか仕込み杖とはな…。だがお前の腕ごとダメにしてやるぜ！」

草薙剣と仕込み杖が鏝迫り合うが、カーターは仕込み杖に電流を流す！

流星に耐えられないと思ったのか須佐之男も一旦距離をとる。さでどうしたものかと迷っていると今度は向こうから仕掛けてくる。

「センジヨウデノマヨイハイノチトリ！クラエ！」【カタトウンボの狂雷】

すると無数の雷が須佐之男を襲う。

「これはきついな…！」

「マダソンナコトハナスウチハヨユウダロ？」

「バレたか。まあいい！【戦神の審判】」

須佐之男が草薙剣を上に掲げると、そこから多数のレーザーが発射される。

「ウウウウーッ！」

カーターもかなり被弾しているようだ。

「止めを刺してやろう！【天下無双草薙剣】」

「ヤ、ヤメローツ！」

「黙れヤブ医者！」ザシュ

須佐之男はカーターの頭を割る。カーターは流石にもう動かなくなる。

「ふん。口程にも無いやつだ。さて、向こうの援護にでもい」シュン！

突然須佐之男の姿が消える。それもそのはず、

「危なかったですよ？須佐之男様。」

「ん？ああラダヴィーニヤとか言ったか。危ないとは？」

ラダヴィーニヤはカーターの方を指さす。するとカーターの体で分かるほど帯電しているのが分かる。そして、

ポーン！

かなりの規模の爆発が発生する。おそらくカーターの最後の抵抗だろう。

「私がここに能力で飛ばさなければあれに巻き込まれてましたよ？」

「そうか。危なかった。ありがとうお嬢ちゃん。」

「いえいえ。マスターのお子様ですから当然ですよ。それよりしばらく休んだ方がいいですよ？かなり焦げてますからね？」

「えっ」

須佐之男の体や衣服はカーターの強い電撃で焼け焦げたり、所々火傷になっている。

「後は私達で何とかしますのでそこで休んでください。傷の手当をしますから。」

「おう。助かる。」

ラダヴィーニヤと須佐之男は傷の手当に勤しむのであった…。

《吉美&メルヒェンSide》

「負けないよ！」

「ふおっふおっふお。お主には本当の魔術というものをみせてあげよ

うじゃないか。【ネロピストロ・タナトス】

メルヒエンの後ろに多数の青い魔法陣が出現し、そこからものすごい勢いの水が飛んでくる。

「おっとーそんなの当たらないよー」バババババ

吉美は吉美で華麗によけながら銃を連射する。

「ふん。」シールドー

「ありやく、銃は効きそうにないね。ならこれはどう？【戦闘ヘリ大包囲網】」

そう唱えるとともに四台の攻撃ヘリがサーチライトを照射する。

「ふおっふおっふお。知っておるぞ。この手のはライトに入らなければ安全なんじゃ。」

「だどいいね♪それー♪」
「…！」

吉美は多数の弾幕をばらまく。そしてメルヒエンはシールドだけじゃ心もとないと思ったのか回避する。その時に運悪くサーチライトの視界に入ってしまう。

「ぐっ… しまった…。」【エンボリオ・アスファリアス】

メルヒエンはとっさに強力な防御魔法で身を守ろうとするが、

「結界なんて無駄だよー！それー！」

戦闘ヘリ四台の無慈悲なロケット弾の弾幕が炸裂する。流石のメルヒエンもこれには耐えきれていないようだ。

「うむむ…。物凄い火力じゃな…。だがまだ終わりではない。【ハIRON・メヒ】」

メルヒエンはどんどん回復していく。

「そしてここからが本番じゃ。思い知れ。【フィシキ・エミーフィシキー】」

するとメルヒエンは杖を片手に肉弾戦で攻めてくる。

「ちよっ！いきなり格闘！」

「何を驚いておる。身体強化も立派な魔法じゃ。」

吉美は偶然落ちていたタルボットの杖の残骸で対応するが、それも力の差は一目瞭然だ。

パシユン!

「ふえ?」

見るとメルヒエンの眉間に銃弾が命中したのが見える。そして後ろ向きに倒れる。そしてバンディ君から通信が入る。

『危ない所だったな。』

「あ、バンディ君援護ありがとう。」

『相手が格闘に切り替えてきたからって焦るな。冷静に対処しろ。』

「分かった。ありがとう。」

『とどめを刺してやれ。強化していたとはいえ特製貫通弾だ。肉体には致命傷だろう。』

バンディ君からの通信を終え、吉美はメルヒエンの方へ向かう。

「ぐぐ…この儂としたことが…。」

「ごめんね。これも戦争だから。」

「む、無念…。」

とどめを刺す前に力尽きたが、一応私からも一撃入れるために少し間を取る。

「死体打ちみたいになるけどごめんね。【一撃必殺レールガン】」

放たれたレールガンがメルヒエンの亡骸に直撃、爆発を起こして粉々となる。

「ふう。終わった。マスターは見当たらないから一回戻っちゃいますか。」

吉美も二人の所へと戻っていく…。

「…皆さん戻ったようですが、マスターとあの悪魔がいませんね…。」

「本当だな。悪魔も戻ってこない以上まだ戦闘がどこかで続いているんだろうが、どこ行ったんだ?」

「ラダちゃんならマスターと繋がるでしょ?」

「確かにそうですね。一応連絡も兼ねて通信繋がりますね。」

~~~~~「少女通信中」~~~~~

「もしもしマスター？こちらは片付きましたよ？」

『そうか。とりあえず待つてくれ！こちとらまだ戦闘中だ！』

「分かりました。」

『終わったらすぐにそっちへ戻る。それまでは暫く待機しててくれ。さうば。』

「・・・切れましたね。」

どうやら未だ戦闘中のようだ。しかも声の感じから結構いいところまで来ているみたいだ。

「それで？ボスは何と？」

「しばらく待機してろとのことです。仕方がないのでトランプでもしますか？」

「一気に平和になったな・・・。」

須佐之男が苦笑いしながら言ったその発言で皆笑うのであった。

PART・68 いざ、決着の時

須佐之男たちが戦ってる一方、こちらでも熾烈な争いが生まれていった。

「今度こそ決着をつけようじゃないか。」

「あら、そっちが逃げたというのにそんな事よく言えるわね。決闘では逃げるなど教えられなかったの？」

「決闘じゃないからノーカンだ。これは逃げないさ。」

「ホントかしらねえ。まあいいわ。」ブオン

そう言うとともに禍々しい珠を飛ばしてくる。しかも精度の高い自分狙いだ。

「小手調べにしては厄介だな。」パパパ

武志もMR24の射撃で珠を打ち消す。やっぱり迎撃にこの武器は便利だ。

「…あら、そんなに脆い珠ではないんだけどね。」

「神のご加護が付いているからかな。」

この武器の弾には若干ながら破壊神としての力を込めているため、装甲などを貫通させたり、今みたいに迎撃が可能である。

「神のご加護ねえ…。生憎私はそんなのは信じないわ。消えなさい。」

【ヴィヴァレット革命弾】

すると構えた斧から今度は激しい弾幕が発射される。だが武志もそれに対抗する。

「流石に防がれるわね…。でも同じ技を見せてはいけないと教わらなかったのかしら？」【ルイン・ペネトレイター】

前回の戦いでのカウンターが飛んでくる。だが武志は見切ったと言わんばかりに回避する。

「同じ技を見せてはいけないと習わなかったのかな。」フツーンカウンタータアタック

カウンターとしてカラストロファイをクリーンヒットさせる。オタワはそこそこ吹っ飛ぶが、まだ余裕そうだ。

「きついの貰ったわね…。」



「まだ話しているという事は余裕なんだろう。」

少々メタ込みで話すと、戦闘中話すのは場面が持たないからである。実際の戦場では敵と会話する余裕なんてまずないだろう。

「それはどうかしらね。」ブオン

また禍々しい珠を出現させる。今度は数が小さい代わりに数が多い。

それに対して武志も「拡散バレットヘル」で対応する。

「弹幕には弹幕で応戦するのが一番いい。」

互いの弹幕が打ち消しあうが、オタワの弹幕は継続して出し続けるものではないため武志の多数の弹幕が襲い掛かる。オタワはそれを避けるが所々弾が掠った跡が見える。それでもかなりポロポロであるが。

「……まだやるのか?」

「当り前じゃない。私は目を付けたものは必ず手に入れる。それが私のモットーだからよ。」

「その宝というものが何なのかが分からないからなあ。それに準ずるものはいくつかあるけど。」

「貴方には教えないけどとても価値がある物とだけ言っておくわ。」

宝……ほんとに何か分からないし、困るものじゃなければ特にあげても問題ないのだがな……。

「その宝とやらを教えてくださいませんか? 困る物じゃなければあげるぞ?」

「別にそうしても良いのだけれど……私の仲間を全員殺されたからね。それで手打ちにするには犠牲が大きすぎたのよ。さつき宝がどうのこうのと言ったけれどもうここまでくると仇さえ取ればなんでもいいわ。」

自己中が過ぎるが、確かに仲間を全員やられて、戦わずに宝をもらうとなるとかなりの屈辱だろう。

「まあそうか……。」

「そうよ。だからおとなしくやられなさい。」「ダークデビルキャノン」すると魔法陣が展開され某マスパもびつくりの高威力レーザーが

発射される。

「うおー!」ドーン

後を見るとビルに大穴が開いているのが見える。

「ヤバそうだな。」

「あら、まだ終わらないわよ?」

すると今度は魔法陣が二つ出てくる。流石にまずいので距離を取りつつ有利な所に誘導する。

「隠れようたってそうはいかないわよ!」ドーン

また別のビルが崩壊する。ってかいつのまにか匠ヶ浦の方まで来てたんだな。

そして戻ってくるのは創武殿と本土を結ぶ橋。通ってきたところは崩壊して瓦礫の山となっていたり、焼け野原となっているが復興自体はすぐに終わるので問題ないだろう。

「派手にやるじゃないか。」

「ええ。これ以上逃す訳にはいかないからね。まだまだ行くわ!」

またまた魔法陣が生成され、レーザー砲が飛んでくる。一体いくつ打つんだ。

流石に武志も簡単に回避するが、避けた先が…、

「げ、創武殿吹き飛んだか。まあいい。復興するのは簡単だからな。あとで謝らなくてはいけないうが…。」

「あっそう。」【アトーメント・ジャツジ】

今度はまた斧を装備し、縦向きの斬撃を飛ばしてくる。軌跡が残っていること以外は普通の斬撃だ。

「ここに来て技が単調になったな。」

「それはどうかしら。」

すると先ほどの斬撃から多数の小さい斬撃が飛んでくる。

「そういうことか!」

武志もとつきに対応するが流石にいくつか被弾する。

「貴方もそろそろ余裕がなさそうね?」

「どうだろうか。」【創造と破壊の交響曲<sup>シンフォニー</sup>】

この技は何か大きな物体をランダムで出し、その破壊した時の瓦礫

で攻撃する技である。今回創造されたのは大量の自動車である。

「自動車か。そこそこ運がいいな。」バララ

武志はMR24を取り出して自動車たちに掃射する。すると自動車は爆発し、その破片が砕け散る。

「創造と破壊は表裏一体、物が出来たらいつかは壊れるのさ。」

「そうね。かつこいいキメ台詞をありがとう。」

「いえいえ…ん？」

振り返るとオタワが斧を構えてまさに斬りかかろうとしていた。武志はすかさずMR24で受け止めるがそれでも歯が立たず一撃貫う。

「全く…。爆発四散するのは予想外だったわ。危なかったわよ？」

「そうか。「爆発は芸術だ」とかどこかで聞いたんだがなあ。」

「何よそれ。まあいいわ。そろそろ楽にしてあげる。今の一撃は堪えられないでしょ？」

「ああ…。仕方ない…。これは普段使いたくないんだが…。【森羅万象の裁き】」

すると天から光と共に数々の裁き（物理）が降り注ぐ。それはとても神秘的で且つ、残酷である。

この技は武志が本当に奥の手の時にしか使わない技で神の裁きである。文字に起こすことはできないほど神秘的な技で、まあ簡単に言えば人知を超えた何かで攻撃する技である。因みに「あじさい」よりも比べ物にならないほど高威力、高精度であるが、それゆえこのような相手にしか使うことが出来ない。

「…さすがに気絶したか…。」

武志は倒れたオタワに近づく。大分弱っているようだが生きてはいるようだ。

「…これで生きてるとかどんな生命力だよ…。はあ。とりあえず須佐之男の所までもっていかか。」

武志はオタワを担いで須佐之男や吉美たちが待つ空港へ戻るのであった。

武志は戦いを終え須佐之男とラダヴィーニヤ達の元へと戻る……。  
「全く、はた迷惑な奴らだったぜ。」

オタワを担ぎながら向かうため、戦闘後の疲労も相まりとても疲弊する。ワープで戻ればいいじゃんとも思うが市街地の被害確認の意味もあるためわざわざ飛んで戻る。

「しかし荒れたなー。ここら辺とか中心地でいい感じの街並みだったぜ?」

武志の作る町並みは都会的で洗練されているが息苦しさを全く感じない街並みである。

「……さてそろそろか。戦闘後で疲れているのもあるが重すぎだろ。」

……決して人に向かってはいけけない愚痴を零した後、目的地の空港が見える。

「さて、こいつどうしようかな。」

そんな事を思いながら空港内へ侵入する。

~~~~~

「お待ちせう。戻ったぞ。」

「あつ、マスターおかえりなさい!」

「おかえり、マスター。」

「戻ったか。ところでその女は……?」

須佐之男がお姫様抱っここの要領で抱えているオタワについて質問してくる。因みに肩への負荷が凄いので途中でお姫様抱っここの形に抱えなおした。

「ああ、こいつが今回の騒動の首謀者さ。まあ最初に顔合わせくらいはしたから覚えているとは思うが。」

「まあ俺らは初対面だからいいんじゃないか?復習的な意味でも。」

「……だな。」

「とりあえずどうするんですか？」

「どうするって言ってもなあ……。とりあえず拘束して意識が戻るまで放置するかな……。」

武志は完全物質製の鎖と枷を用意し、オタワの四肢を拘束する。

「……手際が良いですね？」

「……そりゃ動かないから同然だろう。とりあえず、この枷には力を封じる効果もあるから目覚めるまで待とうか。その時に判断しよう。」

「了解です。」

その時、須佐之男がこちらに話しかけてくる。

「……なあ、俺はもうそろそろ帰ってもいいか？兵士たちは結局役に立たなかったし俺も忙しいからな。」

「構わない。処分の結果は後で送るよ。」

「おう。頼んだぞ。」

返事してから思ったが、確かに兵士たちは何もしてなかったなど。まあ部下たちが逃げ出さないようにするという意味ではいい抑止力にはなったかもだが。

須佐之男率いる黄泉軍たちはまた天へと帰っていくのであった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~30分後~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「……うくん？」

「やつと起きたか。」

「……！何よこの枷！外しなさいよ！」ガチャガチャ

オタワは鎖を引っ張るがびくともしない。それもそのはず完全物質で出来た鎖はこれくらいではびくともしないし破壊的な魔術を用いた高威力の攻撃でしか壊れないようになっていたため今のオタワに枷を外す手段はない。

「まあまあ。焦らなくてもいい。いくつか質問をするから答えてくれよ。」

「……まあいいわ。どうせこの枷も外れそうにないし。」

呑み込みが早い。実力者故限界を感じ取ったのかな。

「まあいいや。一つ目の質問だけど、何を目的としてここに来たのか？ 確か最初に宝をよこせと言っていたが。」

「宝の詳細ね……。いいわ。一つ目は聖徳太子の作った未来の面という能楽の面よ。」

「未来の面……。か。」

未来の面とは、聖徳太子……もとい豊聡耳神子が仙人になるため仮死状態になったときに武志に送られたお面である。因みにどう見ても絵が下手な人が描いた布都と屠自古の面である。因みに遂になる物として河勝に送られた希望の面があるが、あれも絵が下手な人が描いた豊聡耳神子である。

「他にはないんですか？」

「そうね……。あとはそのチエルベツロの板とかかしら。」

「これか……。」

チエルベツロの板は説明不要だと思うが、武志の倉庫兼便利ツールの役割を担うタブレットである。

「これだけか？」

「そうよ。あとは単純に貴方と戦ってみたいだけよ。日ノ本の国の最高神としての実力を見たかっただけ。」

「そうか……。」

意外とあっさりした理由だった。でも確かに二つともとても価値がある物だろう。

「まあいいや。次の質問だ。この世界にどうやって干渉してきた？ 一応この世界は自身が認めるものじゃない限りは神界の高天ヶ原にあるテレポーターからでしか来れないはずなんだが。」

「それは簡単よ。その高天ヶ原のテレポーターから入ってきたわ。メルヒエンの虚無魔法を私がさらに強化して誰にも見つからずに入ってきたわ。」

「マジかよ……。」

一応高天ヶ原って上位の神様……それこそ龍神である千古や三貴

神レベルの神様、そして黄泉軍から選抜された警備隊が警護しているはずなんだが。

「マスター大分驚いてますけどそんなに凄い事なんですか？」

「ああ高天ヶ原って千古や須佐之男たち三貴神が最低二人はいるはずだし、警備隊も黄泉軍から選抜された凄い奴らが警備している。多分大無でも気づかれるんじゃないか？」

「……そんなにか。」

「へえ……。龍神っぽい神様もいたけど私達には気づかなかったわね。」

「何やってんだ……。母さん……。」

こればかりは脱帽だ。あとで警備の見直しについて提案せねば。

「そしてこれが最後の質問だが、貴方は私達についていきたいか……？」

「えっ、マスターそれって……?」

「あんなに怒ってたのに仲間にしちやうの?」

「別にいいだろ。実力はあるし真面目に正面から戦ってたからな。それに決着がついた瞬間から仲間に取り入れようと決めていたさ。」

「まあボスがそういうならいいんじゃないか?別に危害を加えないなら何でもいいだろ。」

「そういう事だ。因みに仲間にならないなら今回の騒動の真犯人として四肢を全て切り裂いた後神界に引き渡して龍神様からの審判を受けてもらう。因みにこれだけのことをしたんだ。軽くても磔刑だろうな。」

「いやいやいや!軽くても磔刑って何?もう極刑じゃない!」

因みに磔刑とは十字架に磔にされる刑罰である。どんなのかは教会に行けばおそらく見ることが出来るだろう。

「まあいい好敵手だったから口添えはするが期待はするな。それにもう貴方の仲間たちは全員死んでいる。ここから逃げ出しても孤独の道を歩むだけだぞ。」

オタワは少し考えた表情をする。

「ねえ、私からも一つ質問をいいかしら?」

「いいよ。」

「貴方達についていつて暇はしないかしら？」

「どうだろうな。少なくとも磔刑よりは暇しないんじゃないか？それにこつちには素敵な仲間たちもいる。絶対に暇しないとおもうぞ。」

「そう……。じゃあこれは契約よ。貴方達の仲間になるわ。その代わりにこれから私のことをよろしく頼むわ。」

「悪魔との契約か。なんか裏はないだろうな？」

「いや……。これは純粋な取引よ。破ったからって特に何も起こらないわ。」

「そうか。ならその取引に乗った。これからもよろしく頼むぞ。オタワ。」

「ええ。これからもよろしくね。武志。」

二人は固い握手をする。

「とりあえず恒例の自己紹介と行きますか。私は洩矢武志。もう知っていると思うがここ諏訪洩矢郷の管理人で創造神をやっている者だ。これからもよろしく頼むよ。」

「私はラダヴィーニャ・ハルトマンです。武志様の秘書をやっております。よろしくお願いします。」

「私は金河吉美だよ！吉美ちゃんと呼んでね！よろしく。」

「俺は望月バンデイ。スナイパーだ。一応あんたと同じ元敵兵として色々やってたが今ではボスに忠誠を尽くしている。よろしくな。」

「……白魔大無だ。よろしく。」

「私はオタワ・ヴィヴァレットよ。由緒正しきヴィヴァレットデビルでもあるわ。この一件の事は水に流してこれからもよろしく頼むわ。」

一通りの自己紹介が終わったところでそろそろ日が傾いていることに気づく。

「とりあえず復興とかそういうのは明日するとして今日はどこか空いている建物で歓迎会でもするか！」

「いいね〜！」

「賛成だ。」



「よし！じゃあ桜田の建物は一通り生きていると思うからそっちに向かうぞ。」

「は〜い！」

こうして武志たちはオタワという新しい仲間と共に桜田にあるとあるホテルで歓迎会をして一夜を過ごすのだった……。

PART・70 復興及び改築

歓迎会の翌朝、武志は清々しい朝を迎える。

「さて、今日はいよいよ復興とかしなければいけない……。」「そんなことを言いながら起床、そしてバンディ達のいる食堂へむかう。」

「おはようボス。」

「……おはよう。」

「おはよう。吉美とラダヴィーニヤは？」

「オタワの所へ行つたぞ。なんか袋を持って言つてたな。」

「そうかそうか。」

しつかりと袋を持つて言つていたか。因みに袋の中身はオタワのために作つた新しい服である。昨日ラダヴィーニヤに渡しておいたやつである。

「ところでボスはなぜ敵を仲間に引き入れるんだい？聞いた話だと相当頭にきてたみたいだろ？」

「ああ。その理由か。」

勿論理由もしつかりあるので述べる。

「オタワを仲間にした理由だが……、単純に気に入つたからだ。戦闘面でのセンス、強さ、見た目とかが良かったからだ。」

「……つまり一目惚れしたと？」

「いやそんな訳では無い。第一、恋愛とか考えてない。」

「そうなんだな。」

振り返つてみると我ながら理由になつてないとか思つたけどまあいいかとも思う。

「キヤーーーーー！！！」

上から悲鳴が聞こえてくる。恐らくオタワのだろう

「……敵か？」

「いや違うだろ。仮に敵なら今頃爆発音がしてるさ。」

それに敵の力も感じないため襲撃ではないと考える。

「まああれだ。お楽しみという奴だ。戻ってきたら『先程はお楽しみ

でしたね』とでも言おうか。まあ、私達が行くのも野暮だろうから待っておこうか。」

くくく三分後くくく

「お待ちせ〜♪」

「すみませんね。待たせちゃって。」

2人が戻ってくる。

「先程はお楽しみでしたね？」

「……やっぱり分かりました？」

お約束のやり取りをして気づいたことを述べる。

「ところでオタワは？逃げたのか？」

「ちゃんといますよ。」

そしてオタワを呼ぶと、向こうから武志の創った服を来たオタワがやってくる。

「似合ってるな。流石だ。とても尊い。」

「いいじゃん。」

「……いい。」

男性陣からは歓喜の声上がる。オタワが着てきたのはそう。赤のマイクロビキニである。武志がこの戦争に対する責任として渡したものである。

「なんでこんなもの着させるのよ！」

オタワは顔を赤くしながら武志にキレかかる。まあ無理もないだろう。男性陣いるし。

「だって昨日までの戦争でこっちは多大なる犠牲を払ったんだぜ？それ相応の報いを受けるのは当たり前前だろ？」

「はっ……！……！……！どうせエ□同人みたいなことするんでしょ！」

正直そこから先は考えていないため冗談めかした感じで言う。

「……いや磔にしたあと銅像に変えて創武殿の地下で永遠に飾る予定だったか？」

「どっちもち磔だった！」

「冗談だ。磔にするつもりもない。ましてやエ□同人みたいなことなんて絶対にしないさ。この小説がR15の限りは。」

「それに裸なんてなんて事ないしな。長く生きてるのもあるけど人間や動物を創ったのも私だから構造も熟知してる。」

「……それ一步間違えたらセクハラ案件ですよ？」

「……残念だけでもうなってるんだよね……。腕がしてる時点で。」

女性陣からはドン引きされている気がするため流石にすっかりとした服を出す。

「……とりあえずその衣装で居られるのも困るから新しい服をあげよう。どこかで着替えてきなさい。」

「……ありがとう。」ダツシユ

オタワは大急ぎで隣の部屋へ消える。数分後、

「お待たせ。」

「こつちも似合ってるじゃないか。」

「こつちもは余計よ。」

武志がオタワに手渡したのは白いシャツに赤のリボン、朱色のベストと襟に白いラインが入ったグレーのジャケット、そして紅色のスカートである。

「そしてこれを付けるといい。」

更に渡したのは黒い帽子である。狐の面がくつついた特別仕様である。

「未来の面を欲しがっていたからな。さすがに本物は渡せないが本物そっくりのレプリカを付けておいたよ。」

「これが未来の面ねえ……。思ったよりまともな面なのね。」

「そうだろう。」

因みに完全な別物である。本物は絵が下手な人が描いた布都と屠自古の顔が半々で描かれた面である。

「まあ、それをつけて生活するといい。」

「ありがとう。武志。」

「おいおい、名前呼びとか久しぶりだな。普通にマスターとかでいいぜ？」

「私が呼びやすいからそれでいいの。」

「そうかい。」

照れ隠しとしては下手だと思ったがまあいいだろう。こうして正式にオタワが仲間となった。

そして本題に入る。

「それで？この諏訪洩矢郷とか創武殿とかを復興するが、なんか意見ないか？この際お前らの意見も取り入れようと思うんだが。」

この諏訪洩矢郷を創った時はまだ仲間が一人もいなかったためリニユールすると同時に従者たちの意見も取り入れて更により良い都市を作ろうと考える。

「まあ、なんだ。食べながらでいいから考えてくれ。」

『『『『はーい』』』』』

返事の後みんな遅めの朝食を食べ始める。早速ラダヴィーニヤが意見を言う。

「諏訪洩矢郷の方は何も問題はないんですけど、創武殿の方は色々ありますね。例えば見ええないとはいえ全面ガラス張りな所とか。」

その意見にはみんな首を縦に振る。かっこいいからやったが酷い不評だ。

「そ、そうか。他にはないか…?」

「そうね。住んでないからなんとも言えないけど私もガラス張りなのはおかしいと思ったわね。着替える時とか見ええない？あれ。」グサツ  
「ビルで高いのは良いんだけどやっぱり移動が大変だよ。」グサツ  
「ベーターがあるとはいえやっぱり大変だよ。」グサツ

「そうだな。プライベートバーがあるのはいいが他の設備で建物と切り離してもいいのは切り離れた方がいいと思うな。単純に落ち着かない。高いのは良かったんだがな。狙撃ポイントとしては。」グサツ  
「……自惚れの塊。」グサツグサツ

「……マスター生きてます?」

批評の嵐で瀕死になりかける。大無に至ってはただの暴言だろ。

「……大丈夫だ。致命傷だが。」

「そんな冗談が吐けるなら大丈夫ですね。」

あれ今サラツと見過ごされた？まあいいか。

「え、そこまで批評するなら何か意見はあるか?」

そこまでボロクソに言うならさぞいい意見をお持ちなんだろう。武志はそれに期待する。

「そうですね。建物は今みたいなビルではなく豪邸みたいな感じにしてガレージも小さくしていいと思います。車使わないし。」

「島を広げるなり増やすなりして施設等は全部分けた方が良いでしょうな。俺は狙撃ポイントがひとつあれば十分だ。」

「今よりもより生活感のある間取りにして、あとは倉庫とかあったらいいんじゃない？物置が大きさの割に少なかったし。あとやっぱり部屋を狭くしてもいいからもつと家つぽくして欲しいな。」

「……門をもつと立派にするべきだ。」

……完璧である。確かにそうだな。私が間違っていたかもしれない。

「……そうか。だったら今の意見を参考にしてよりよい創武殿を作ってくるよ。」

武志は建物を後にして街の中心部へ向かう。

「こんな時の為に作っておいて良かったなあ。」

武志はとあるビルの中に入っていく。そこにはとてつもなく大きな機械が置いてある。そう。これは少ない神力でこの諏訪洩矢郷を修復することが出来るようになる機械である。

武志は慣れた手つきでボタンをいじり、スタートボタンを押す。

すると機械が光輝き始める。武志はその様子を見届けてその建物から出る。そして創武殿へと向かうのであった。

「うん。しっかり動作してるね。元の諏訪洩矢郷に戻ってる。」

武志は修復の確認をしながら創武殿方面へと飛んでいく。そして創武殿があつた島へとたどり着くのであった。

「……跡形もないな。」

武志は先程のアドバイスで貰った意見を反映させていく。

島を広げ、新しい建物を建てて、あつたら便利なプライベートな施設を建て、倉庫も作る。また、もうひとつ小さめの島を出現させ、そこに警備員たちの詰所を作る。

「……これで良いだろう。警備兵たちも前の服装とほぼ同じで良いよな……？」

諏訪洩矢郷中に住民や警備員を出現させる。これで前のような賑わいを見せる地へと戻るのであった……。

「さて、オタワ達を呼ぶか……。」

武志は通信機を取り出す。ラダヴィーニヤの能力を使った高性能通信機である。

『ラダヴィーニヤ？復興が終わったから創武殿へ来てくれ。』

『分かりました。すぐそちらへ向かいますね。』

数分後、武志の所にポータルが出現する。そこから仲間達が全員出てくる。

「お待たせしました。早いですね。」

「まあ復興は直ぐに終わるからな。殆どこっちの方で悩んだよ。」

「それで？後ろに見えるのが新しい創武殿ですか？」

「ボスがここまで意見を反映してくれるとは思わなかったな。」

「おいバンディという事だ。」

そんなやり取りを続けるのも不毛なのでそろそろ案内に入る。

「まあいい。ここで話すのも何だからそろそろ案内に入ろうか。……

あと誰か倉庫あった方がいいと言ったな。」

「私だね。」

「倉庫はあれだ。」

武志は白、グレー、ライムグリーンの3色の建物を指さす。さしずめ物流センターを小さくしたような感じだ。

「……結構大きくない？」

「……え？いい感じの大きさだと思ったんだけど？」

「マスターの実家って倉か何かあるんですか？」

「あるな。」

「なら納得だね。」

因みにあの倉庫は地上は1階だが、全部で地下2階まであり、創武殿とも地下で繋がっているがそれは黙っておくことにする。

「あとバンディのために狙撃ポイントも作っておいた」

武志は反対方向にある鉄塔を指さす。見た目は完全に通信塔だが実際も通信塔である。

「ありがとう。ボス。」

「いいよそのくらい。じゃあ中を案内しようか。」

武志達は創武殿の中へとはいる。因みに創武殿の外見は白とグレー基調のモダン風な豪邸である。

「内装だいぶ変わりましたね。」

「貴方達のマスターってかなりセンスいいのね。」

「そりゃあマスターだからね!」

内装も小綺麗なモダン風で、白基調で下に黒い線が入った壁壁に白いタイル風の床となっていて、家具もガラスだったり、黒や金属の家具で統一されてかなり洗練された雰囲気になっている。しかもアイランドキッチンまでついているという徹底ぶりだ。

そのまま武志達は浴室、ダイニングキッチン、リビング、応接室、客間を順番に見て、2階に上がっていく。

2階の廊下は1階と同じだが、部屋に入ると濃い茶色のフローリングとなっていていい感じとなっている。

「とりあえず部屋決めジャンケンでもしようか。広さはここが1番広くて次にこの部屋で、こことこの部屋が同じで…」

~~~~~ジャンケン中~~~~~

「やった〜!1番広い部屋だ〜!」

「やっぱり私が1番強いわね。」

「窓際の部屋で良かったよ。」

「…いい部屋で良かった。」

「広いけど窓がない……。まあ仕方ないです。」

「……そういえばマスターはジャンケンに参加しなかったけど部屋どこにするの?」

「ああ私は奥の部屋にするよ。因みに1番広い。」

「え、そんなのズルくない?」

「いや間取りの都合でね……。上に仕事の部屋があるんだ……。」

「それは仕方ないですよ。」

「むー。」

いじける吉美はもう置いて屋上テラスを見る。

「ここで寛いだり何か見たりすることが出来る。」

「いいわね。楽しそうで。」

因みに1階にもプールとかウッドデッキがある。

「とりあえず部屋も決まったし今後はここで暮らして行くことになる。要望はできる限り反映したが何か意見がある奴はいないか？」

「私はいいいと思います。」

「大丈夫だよー！」

「私は特にないわ。」

「……特にない。」

「最高だと思ふな。ありがとうボス。」

みんないい意見ばかり言ってくれる。とてもありがたい。

「じゃあこれで行こう。諏訪洩矢郷の復興と新しくなった創武殿を祝って少し贅沢な夕飯にしようか。」

「いいわね。」

「2日連続でご馳走だ〜♪」

「いいじゃん。最高だぜー！」

そしてその夜、新たな船出のパーティをするのであった。

第十章 幻想郷への片道切符 PART・71 いざ幻想郷へ！

時は流れ19**年…。武志達6人は諏訪洩矢郷の中で楽しく優雅に暮らしていた。ある時は外の世界に出向き戦争や国内の動きに目を向けたり、またある時は天界に向き仕事等を行った。

諏訪洩矢郷の方もある程度改変され、1部地名の変更や地域統合などがあり、最終的には昔のような雰囲気は残しつつ、景観重視で、規模も昔よりもだいぶ縮小した。(1辺10km四方の島と言ったらわかりやすいかな？(兵庫県西宮市とほぼ同じ面積))

さて、そんな風になり果てた世界での話が始まる……。

「……。」

武志は創武殿の執務室から黄昏れる。

ガチャ「どうしたんですか？マスター。」

「ん、ああ。ラダヴィーニヤか。この先のことについて考えてたんだ。」

「この先とは？」

「ああ。このままここで隠居していてもつまらないからな。そろそろまた外の世界に顔を出したいと考えていてね。随分前に幻想郷のために動き回っていた時期があつたら？」

「ありましたね。」

「だから幻想郷に新たな拠点でも作ろうかなと考えているんだ。ラダヴィーニヤはどう思う？」

「ええ……。」

ラダヴィーニヤは迷ったような口調で話し始める。

「マスターが何をしたいかは勝手だと思えますが、私はその案は賛成ですね。確かマスターの弟さんも近くに住んでましたよね？」

「ああ。最近は全く連絡が無いが確か幻想郷の地下にある旧地獄に送ったな。」

「ええ。それにこのままここで過ごしてもなんの刺激も無いですから

ね。新しい拠点を作るのはいいんじゃないですか?」

「なるほどな。なら私達も幻想郷に向かうか。」

武志はラダヴィーニャと一緒に外へ向かう。

「あつ、マスター。どこ行くの?」

吉美とオタワに出会う。隠す意味もないしむしろ知って欲しいので正直に話す。

「ああ。幻想郷という所は覚えてるか? まあオタワは知らないと思うが。」

「ああ、確か人間と妖怪が共存する世界だっけ? 今頃になつてどうしたの?」

「いや、そこに新しい拠点でも作ろうかなと考えていてね。2人とも来るか?」

「行く行く♪」

「面白そうね。ついて行くわ。」

「わかった。」

吉美とオタワが仲間に加わる。

「あとバンデイと大無は知らないか?」

「私は2人とも知りませんが...?」

「バンデイ君ならちよつと前に外へ行つたからそろそろ戻つてくると思うよ?」

と、言ったそばから、

「呼んだか?」

「.....」

「タイミングいい所に来た。今から幻想郷に新しい拠点を探すけど一緒に来ないか?」

「うん? 待て待て。ボスはここを捨てて幻想郷に引越すのか?」

「いや、単純に幻想郷に行動用の拠点を1個作りに行くだけさ。まあこの世界を再編した時から考えてはいたけどな。」

「確かに前の3分の1位ですからね...。でも案外狭いとは思わないんですよね。」

「というより前が広すぎた。」

「という訳で幻想郷に向かうんだけど、どうしたら幻想郷の方々に気付かれずに入れるかな。」

「このこと天界を結んでいるような物を向こうに作ればいいんじゃないですか？」

つまりテレポーターを置けということか。最終的にはそうするつもりだが致命的な欠点があるので教える。

「いや最終的にはそうなるんだが……。あれ置くには、現地に入らないと意味が無い……。あ、因みにこっち側のは向こうにあるゲートセンタ―に置いてあるからまた見ておいてね。」

武志は向こうにある建物を指さして言う。

「いつの間にも……。」

「やっぱボスすげえや……。」

あまりの仕事の速さに皆驚く。こつちとしても嬉しい。

「強引に結界をこじ開けるのは……。」

オタワが合理的かつ簡単な方法を提案してきたが、

「却下。即バレる上に戦いは避けられないだろうな。」

今度は大無が挙手したので指名する。

「……誰か幻想郷へ行ける人の所から行くのはどうだ？呼べさえすれば俺の能力で姿と気配を消して迎えるぞ？」

「それいいね。」

名案だ。しかも適役がいる。

「別と呼ばなくてもラダヴィーニヤの能力で向かえばいいじゃん。」

「……確かにそうですね！」

そして幻想郷へ行ける人に心当たりがあるのでそいつの元へと向かう。

「だったら隠岐奈の所まで繋いでくれ。彼女なら行けるはずだ。そして大無は私についてきてくれ。準備出来次第他のメンバーも呼ぶ！」

「分かりました！」

そして自分の気が薄くなったような気がする。

「今ボスに能力を付与した。いつでも行けるぞ。」

「今開きますね。」

目の前にポータルができる。武志と大無はそこをくぐって後戸の国へと向かう。

「……ここはどこだ？」

「後戸の国かと思ったが…、どうやら幻想郷に直で来たらしいな…。」
武志達が来たのはとある一軒家。窓から中を覗くと隠岐奈と紫が談笑しているのが見える。

「とりあえず気づかれては無いかな…？」

「…だな。」

「とりあえずここに呼ぶ訳にはいかないからとりあえず人気のない場所に向かうぞ。」

「了解。」

因みに武志達が来たのはマヨヒガである。八雲家の敷地に降りてきたようだ。

武志達はしばらく歩く。

「ボス。幻想郷というのはこんなに綺麗な場所なのか？」

「ああ。この他にも綺麗な場所がたくさんある。案内できればいいな。」

一体どのくらい歩いただろうか。気づけばマヨヒガから抜けて草原を歩いていた。

「綺麗だな。」

「そうだな。草原なんて今の日本にはあまりないから珍しい。…つと、人里が見えてきたな。」

「…入るのか？」

「勿論。適当な家屋の中でみんな呼ぶかな。」

2人は人里へ入っていく。

「賑わってるな。」

「そうだな。人間達ってなぜ群れるのが好きなのだろうか？」

「ここに来てそう思うのはボスだけだぞ…。」

「え？」

因みにもう姿や気配は隠していない。ただ目立つのを避けるため2人とも町人の格好をしている。

「とりあえずこの家屋に入るぞ。」

特に鍵はかかっておらず、そのまま入る。なにかの倉庫らしく誰もいない。

『ラダヴィーニヤ、もう来ていいぞ。』

「するとすぐ横にポータルができてラダヴィーニヤ他4人が出てくる。」

「えくと、その格好は？」

「目立つとまずいから着替えた。とりあえず君たちも着替えてくれ。」

武志は指を鳴らす。するとその瞬間4人の服が切り替わる。因みに武志・バンデイ：商人、大無：坊さん、ラダヴィーニヤ他女子組：町人の格好となっている。

「さて、今幻想郷に来た訳だが、とりあえず夜まで時間を潰すか。」

「夜の方が危ないのでは？」

「いやそうなんだが、昼は幻想郷の有力者が監視している可能性があるから迂闊に動けないんだ。」

「なるほど。」

いつ紫や隠岐奈が気づくかも分からないため、しばらくは人里で時間を潰す事を選択する。

そして人里と甘味屋や、料亭でご飯を食べたり、買い物をして時間を潰すのであった…。

PART・72 探索

人里が寝静まったころ……。

「さて、そろそろ行動に移すか。」

「夜まで時間をつぶすのもなかなか大変でしたけどね。」

「そうかな？ 私は楽しかったよ〜？」

「人それぞれの感性つてもものさ。少なくとも俺は色々な酒を堪能出来てよかった。」

「あまり飲みすぎるなどは言ったけどね？」

「狙撃の腕はこのくらいじゃ落ちないから大丈夫だ。」

「ほんとかよそれ……。まあいいや。とりあえず周辺から見えていくか。」

武志達(ご)一行は人里周辺を探索する。

「人里の周りは人気があるだけあって周りにもお店とかあるんだね。」

吉美の指さす方には「香霖堂」と書かれた看板を掲げたお店がある。

「香霖堂か。今は閉まっているみたいだけどまたいつか行きたいね。」

「… そういえば幻想郷にお忍びできていますが何ですか？」

「… 考えてみる？ 幻想郷に勝手に拠点創って好き勝手やるんだぜ？」

堂々と来る奴がどこにいるんだ？ 登場するときには派手になんかやりたらしさらに紫や隠岐奈にはまだ秘密にしておきたいしその他にも……」

「あーはいはいもういいですから。」

「絶対めんどくさくなくなったな。」

まあ簡潔に言えば暫くは隠れて隠居したいのがあるからだな。

香霖堂からすぐ歩くと森に入る。

「うっ……。この森なんか嫌な感じがしますね。」

「… 同感だ。」

「この力は魔力による瘴気ね。私は大丈夫だけど魔術を扱わない人からしたらきついんじゃないかしら？」

「気分悪い〜。」

「うっぷ。今までこんな空気悪い所に来てないからな……。流石にし

「んごいな。」

「まあ無理もないわね。この気は人間には有害。むしろ気分が悪いくらいで耐えてるのが凄いくらいよ。」

「そうだな。私も平気だがここは出ようか。拠点にするには危険すぎる。」

「… そうですねば拠点探しでしたね。」

従者たちの気分が相次いで悪くなったため退散。皆様ご存じの通りここは魔法の森で、化け物茸が放出する瘴気が漂う危険なエリアである。オタワは耐性があるので無事、武志は自分の周りに新鮮な空気を創造したため無事だった。

「… とりあえず森を迂回していこうか。」

「そうですね…。」

回復が早い。流石私の従者である。

森を迂回するように歩いていくと、大きな湖が見えてくる。

「大きい湖だな。」

「そうですね。霧が多いのが残念ですけど。」

「でもそれがいい味を出してる…。最高だ…。」

現在いるのは霧の湖。いつも霧が立ち込めている湖である。武志達は霧の湖の外周に沿って歩いていく。

「… っと、マスターあれ見て!」

「あれって… ん?」

そこには周辺の景観と恐ろしく不釣り合いな赤い館が見える。

「趣味悪いな。」

「誰が建てたんでしょうね。」

「しかし先客がいるか。まだ普通の建物ならまだしも、あんな趣味が悪い館の周辺には住みたくないな。悪影響が過ぎる。」

「目に悪いですよね…。ほんとうに。」

「そうね…。けどあの館見覚えがあるのよね…。」

オタワが結構衝撃のカミングアウトをする。

「え、そうなのか?」

「ええ。私が魔界にいるときにヴラド・スカーレットというとても強

い吸血鬼が地上にいるという話を聞いたのよ。それでタルボットと共にそこへ出向いて戦ってきたんだけど、強さが私と互角でね。吸血鬼の弱点と言われる銀の武器を沢山持って行ったのにほとんど効かなかったのよね。だから私が戦った中では貴方と同じくらい強かったわ。それでその時に行った屋敷がああ館よ。間違いないわ。」

「じゃああの館にはそのブラドという奴が？」

「…いや。ヴラドは死んだわ。人間たちによる吸血鬼狩りでね。正直私も驚いたわ。あんなに強かった奴があつさりと死んだのにはね。生きてたら今でもいいライバルになつてたと思うんだけどね。」

「だったらあそこには誰がいるんでしょうか。」

「これは私もよく分かんないんだけど、ヴラドには娘がいると聞いたから多分その娘でしょうね。」

「なるほどなあ…。だったら戻るか。」

「…結局戻るんだな。」

「素性が分かつてああの館の近くには住めんよ。存在が公害。」

「それは分かるわ。」

と、紅魔館をさんざん言いつつ香霖堂の所まで戻る。

「そういえばこの隣にも道があるんだよな。そっちに行ってみるか？」

「そうですね。行ってみましょうか。」

武志達はもう一方の道へ行く。そしてしばらく歩くと鳥居が見えてくる。

「なんだここ。神社か？」

「そうですね。上に博麗神社と書かれていますね。」

「…寂れてるな。」

「この巫女に会ったら軽くお灸をすえるか。」

境内は荒れ果て、お賽銭箱の中身は空っぽのため誰も来てないという事がよく分かる。

「まあここに神社があると分かっただけでもいい事だ。」

「いい事なんですか？」

「神社があるという事はある程度信仰の需要があるという事だから

な。」

「えくと、一体何を作る予定で？」

「神社。それも私を祀る奴。」

「自分の神社を自作するってそれ悲しくないんですか？」

「大丈夫大丈夫表向きは名前伏せてるから。」

「それってどういう？」

「いや神名や肩書とは別に神様のニックネーム的な奴があつて、例えば全能神の千古の事を龍神様とか言ったり、狐の神様に葛の葉って神様がいるんだけど、それをお稻荷様とか呼んだりすることだね。私も伊邪那岐とか伊弉諾とかで地上に浸透してると思う。理都はそういうのは無かつた気がするけどね。」

「そうなんですか？」

「あくまでも下界に浸透させるために自分でつける愛称だからね。いらないならいらないでいい。」

「なるほど。」

「・・・つと、こんな話している時間はないな。次の所へ行くぞ。」

「分かりました！」

武志達は急いで幻想郷を南下していく。

「さて、適当に来てしまったがなんか竹林に来てしまったな。」

「そうですね。入ります？」

「行こうか。竹林にある神社とか神秘的でよくないか？」

「なんかわかりますね。それ。」

武志達は竹林に入っていく。この竹林は迷いの竹林のため、入ったが最後迷い続けるという魔の竹林だとは知らずに・・・

「しかし霧が酷いですね。」

「そうだね。気味が悪いよ。」

「そうだな・・・。ところでここって今どこだ？」

「迷ったんですか？」

「ああ。どうやら人を迷わせる術がかかっているらしい。」

「あー。確かにそれは分かるわ。最初入った時からなんか違和感を感じ

じてたもん。」

「まあ術も何も地形が悪いだけだけだな。」

「何だよ！」

「… つと、適当に歩いてしまったら元の出口に戻ってしまった。」

「どうします？ここにします？」

「そうだな。とりあえず竹を一本道になるように消してみるか。」

武志は竹を消去させる。消した後は一本道になった。

「この先に作るのはいりだけどここの地面って若干傾いてるんだよね。整地は別にいいけど。それに迷わなくするための結界とかいろいろ準備はあるね。でもいい感じ。」

候補の一つには考えておこう。

「さて、次が最後だが、あれだな。」

武志は向こうに見える山を指さす。

「あれは妖怪の山と言って天狗はじめ鬼や河童が住む山だ。」

「あそこに行くんですか？」

「そうだ。私の本命でもある。」

最悪許可なくどこかに作るので大丈夫だがまあ大丈夫だろう。文句があるなら武力行使で思い知らせてやる。

「それじゃあ早速向かおうか。」

「」

PART・73 探索（隠密）

武志達は迷いの竹林方面から妖怪の山方面へと向かう。妖怪の山はここ幻想郷で一番高い山であるためたどり着くのは容易だった。距離は遠かったけど。

「ここが妖怪の山ですか？」

「そうだな。この山には天狗や河童、その他色々な妖怪のテリトリーとなつている。見つかったが最後数の暴力で打ちのめされるだろうな。」

まあ天狗の里にはかつて来たことがあり、今回はその周辺を避けるように進むため大丈夫だとは思うが。

武志達は麓から進んでいく。

「緑が豊かですね。」

「狙撃がやりやすそうだ」

「きれいだね〜」

各自が各々の感想を述べる。久しぶりに来たがこの自然は綺麗だと思う。

「それで？どこまで行くの？」

「裏手の方に偽天棚という高地があるらしい。そこに向かおうかなと。」

「裏手って…また辺鄙なとこね？」

「そうか？少なくとも迷いの竹林で迷うよりはマシだと思うけどな。」

「それもそうね。」

迷いの竹林はほんとに酷かった。もう二度と入りたくない場所ラッキング1位だと思う。

「まあ裏手にする理由というのが、まず景色が綺麗。」

「それはどこも一緒では」

「確かに」

まあそう言わずに見て欲しい。また違った一面があるから。

「それに天狗達の目をかわせるのがいいからな。」

「そうなんですか？」

「ああ。天狗達は独自の排他的社会を築いているから見つかるうものなら全面戦争が開幕する。」

「そんなに?」

「そんなだ。」

逢えては言わなかったが、私の顔を知っている天魔に見つかろうものなら更に話がめんどくさくなるからな。

「しかしなぜそんなに姿を隠したいんだ?ボス。」

「…ああ。正直な話あまりここの住民達と関わりたくないからかな。地下にいる理都やあのめんどくさい紫BBA、古くからの仲である隠岐奈やほかの神々達に会わないようにしたいからな。」

「…なぜだ?」

「居心地が悪くなるからさ。隣に世界作りましたって奴が現れてみる、凄い空気になるだろ。」

「…確かにそうですね。」

ラダヴィーニャは色々な意味で呆れていたが。

「それに、どうせ来るなら派手に登場しないと。」

「マスターはああ見えて目立ちたがり屋だから何言っても無駄だよ?」

「…そうみたいです。」

「…ここら。」

そんなこんなで麓から玄武の沢、九天の滝を通り過ぎ、偽天棚の近くに辿り着く。

「この急な坂を登れば目的地だ。」

「中々に遠かったですね…。」

「道無き道を進んだからな…。また神社作る時は道も整備しよう。」

「その方がいいだろうな。ボス。」

中々に急な坂を登る。登るとそこには草花が咲き誇る神秘的な高原が姿を表すのであった。

「ここが偽天棚。妖怪の山の裏手にある高台だ。」

「すごい!きれい!」

「いい景色ですね。」

「これは…駒草ね。綺麗だわ。」

「いい所を見つけたな。ボス。」

「だろ?」

「…素敵だ。」

各自感想を述べると本題に入る。

「こことさっきの迷いの竹林。どつちに拠点を作りたいか?」

「私は断然こつちですね。マスターは龍にもなれると聞いたのでこつちの方が似合うんじゃないですか?」

「確かに龍にはなれるが早々なる気は無いぞ?」

「私もこつちがいいわ。向こうははじめじめして不快だったし。」

「俺もこつちに一票だ。」

「…なら決まりだな。こつちに拠点を作るからすこし待ってろ。」

武志は良さげな所を探すとそこはかなり大きな神社を建てる。まるで伏見稲荷大社や八坂神社のような赤と白の佇まいに、出雲大社程ではないがかなり大きな注連縄がついている。

「…仕事が早いわね。」

「私も慣れたつもりでしたがさすがに驚きました。」

「ここが私達の幻想郷での拠点、『洩矢大社』だ。」

「…意外と安直ですね?」

「…そういうものじゃないのか?」

「…まあいい。本殿裏手は普通の生活スペースだが、この部屋の中にテレポーターが仕込んであってね、ここから自由に創武殿と行き来できるようになってる。」

「私の能力やマスターの諏訪洩矢郷限定ワープは使えないんですか?」

「ラダヴィーニヤの能力は使えるがお前がない時に使えないし、私のワープも幻想郷だと使えなくてな…。前は使えたんだが紫が細工でも施したのか行けなくなってるんだよな。」

ただもう1つの細工としてテレポーター1台分の接続が出来るようにした事は見つからず、今こうして使えるようになった訳である。「おっと、こんな所に神社なんてあったかな?」

「???!

見知らぬ人物がやって来る。敵対するようなら排除せねばならないが……?

「すまないが貴方は?」

「私は山如。皆からは駒草太夫と呼ばれているがね。お前さん達は?」

「私は洩矢武志だ。先程こっちに來たばかりだ。」

「ああ。新入りと言う奴か?」

「そうだ。敵対するようなら貴方を倒さねばならないが……?」

話を遮って山如は話し始める。

「敵対なんてしないさ。ここは天狗の里じゃない。だからお前さんたちを排除するつもりはない。後ろの建物もお前さんたちのものだろう? だったらご近所同士仲良くしようじゃないか。」

「ああ。よろしく。ところでご近所さんと言ったがどこに住んでいるんだ?」

「ああ。私はこの近く……とはいえ少し離れているが、そこで天狗や河童相手に博打を開いている。お前さんたちも興味があれば来ていいぞ。」

この時武志は(やっちゃった)という感情があつたが今更遅いのでどうにかするとしよう。

「ところで後ろにいるのはお前さんの仲間だよな?」

「はい。ラダヴィーニャ・ハルトマンと申します。よろしくお願いいたします。」

「金河吉美です。よろしくね!」

「オタワよ。」

「望月バンデイだ。よろしく頼む。」

「…白魔大無と申す。よろしく。」

「ああ。よろしくな。先程の自己紹介を聞いていたと思うが駒草山如だ。皆からは駒草太夫と呼ばれているがね。」

「ああ。こちら共々よろしく頼む。…そうだ、私たちの事は暫く秘密にしてくれないか?」

「何か事情があるんだな。良いだろう。ほれ。」

山如が手を差し出す。

「…ああそういう…。いくらだ？」

「まあ20万で手を打とう。」

「高いな…。まあ仕方が無いか。ほら、受け取れ。」

「武志は口止め料を支払う。」

「確かに受け取ったぞ…。それでは今後ともよろしく頼む。」

「そちらこそよろしくな。決してバラすなよ。」

「流石にそんな事はしないさ。それにバラすと報復が怖そうだからな。」山如はそう言いながら帰って行く。

「…さて、私達も戻ろうか。」

「そうですね。」

武志達も創武殿へ戻る。

「…疲れたな。」

「そうですね…。」

「今後はどうするのかしら？」

「そうだな…。常に行き来できるし途中まで道も整備したから好きなように行けばいいんじゃないかな。私も神界からくる書類を自動で終わらせる様にしておこう。」

「分かったわ。」

こうして、翌日武志は課題を自動で終わらせる事が出来るよう分身を1人設置し、幻想郷という新たな地を楽しむのであった。

PART・74 スペルカード

前回の話で幻想郷に新たなる神社【洩矢大社】を創った数日後の話…。

「…。へへ。今の流行りってこんななんだな。」

「何見てるんですか？」

「ああ。これさ。」

武志はチエルベツロの板を見せる。そこにはこんなことが書いてある。

『幻想郷に命名決闘法案可決！』

「…。何ですかこれ。」

「なんでも弾幕を使って美しく戦うらしい…。あ、下にルール書いてる。」

「どれどれ…？」

ルールにはこんなことが書いてある。

『壹. この法案は先の吸血鬼異変に基づき種族間を超えた平等な決闘の方法として制定する。以後、揉め事や紛争はこの法案に則って決着をつける。』

『貳. 弾幕を用いて美しく派手に魅せる。攻撃より人に見せることを重要とする。』

『参. 武器に制限はない。各自の好きな武器を用いて戦うべし。尚、式の戦い方に則って行う必要がある。』

『肆. あらかじめ技の名前と、その技名を体現した技をいくつか考えておき、技名を契約書形式に記した紙を任意の枚数所持しておくことになる。この契約書を「スペルカード」と呼ぶ。このスペルカードをいくつか持つべし。』

「…。っと、ここから先はどうでもいい情報ばかりだな。」

「そうですね。なんか死ぬとか不穏な事が書かれている気がしますか…。」

「いや私たちは死なないからいいんだ。」

一応説明しておく、武志は持ち前の再生能力で滅多なことでは死

ならないし、仮に死んでもしばらくすれば生き返る。ラダヴィーニヤと吉美は武志による超回復機能により、ひとかけらでも残っている限り時間が立てば再起可能。勿論寿命もない。大無とバンデイは蓬莱の薬による不老不死。オタワも上級悪魔のため特別な方法でないと死なないのだから。一応寿命はあるらしいがまだ平均の1/10も行っていないとか。

「…確かにそうですね。」

「まあ何が言いたいかってこれから幻想郷での争いがあつたらこのルールに則って戦わないといけないってわけだ。」

「そうですね。」

「とりあえず皆を呼ぼうか。」

武志とラダヴィーニヤは皆を呼ぶ。

「マスター、用ってなに？」

「ああ。俺達も暇じゃないからな。早めに終わらせてほしいんだが。いきなり前座から入る。」

「すまないな。今ここに集まってもらった理由はこれだ。」

武志は先ほどの記事を見せる。

「これは幻想郷にあるとある新聞記事なんだが、ここに書かれてある命名決闘法案に則っていくつかスペルカードを作ってもらおうと思う。」

「それって何なの？」

オタワが訪ねるので武志はいい感じに返答する。

「美しく戦うために技をセットするものだ。カードは沢山あげるから好きな風に作っていい。勿論、今の技をオマージュしたものでもいいし新技でもいい。ただし必ず避けることが出来るようになる。」

「二はーい。」

とりあえず一人に予備含めて一束ずつ渡す。一束50枚なので一生分のスペルカードがあるだろう。そんなに技が出てくるとは思わないが。

「さて、私も作るとするか。折角だから名前もこの際一新するか。」

一度技名を決めるとあまり変えることが出来ないため古いネーミ

ングセンスの名前を一新しようと考えてる。

「どんなのにしようかな…。」

武志達は一生懸命スペルカードを考える。

~~~~~約一時間後~~~~~

「できたわ。」

「私も♪」

「やってみると楽しいもんだな。」

「わかる。」

「今後幻想郷内で争いが起こったときはこれで戦えばいいんですよね？」

「そうだ。」

全員のスペルカードが出来上がる。勿論武志も満足するものが出来た。

「一応補足しておくどスペルカードを使わなくても簡単な攻撃はしていいらしいから覚えておくといい。」

「なるほど。それってつまりスペルカードが無くなってもそれで攻撃できるということ？」

「いや、どうやら最後のスペルカードを使いきっても負けらしい。」

「そうなんだ。」

「一応ある程度の枚数は決まっているから注意が必要だな。」

「…なくなる前に火力で圧倒すればいいだけの話だ。」

「間違っではないけどな…。さて、皆スペルカードも作ったことだしさっそくテストプレイと洒落こもうじゃないか。」

「…つまり模擬戦をする？」

「そういう事だ。一応ここに基本的なルールがあるからそれに則っついていこうか。」

武志は模擬戦のルールを説明し始めるのであった…。

PART・75 愛する従者達への試練

「それじゃあルールを説明するぞ……。」

武志は今から行う模擬戦のルールを説明する。

「基本的なルールは先ほどのスペルカードルールに則つてするつもりだ。だから先ほど作ったスペルカードを駆使して戦つてほしい。」

「つまり弾幕とかで戦つてねってこと？」

「そうだ。まあここら辺はあまり深く考えなくてもいいかな。」

元々の戦闘もあまり変わらなかったなので別に詳しく説明する必要もないだろう。

「まあ対戦形式だが、1vs5で私と私以外でいいか？」

「……それでいいんですか？」

「ああ。最近大きい戦闘もなかったからな。ここらで一回発散したい。」

最近の相手なんてテロまがいの事をする集団とかだったから骨が無かったからな。自分の部下の訓練も兼ねてこれでいいだろう。

「私は構わないわ。」

「マスターがそれでいいと言うのならOKですよ。」

「わかった。あと殺さない程度に本気でかかってこい。これは今までの訓練の集大成と言ってもいい。私を被弾させたものにはこれをあげよう。」

武志はチエルベツクの板から唐夜叉丸二本を取り出す。

「マスター、それって……。」

「唐夜叉丸・焰と雷だな。ここ最近カタストロフィーと黒金刃があれば十分だからこの際あげようかなって。唐夜叉丸・雷は専ら充電器代わりだったしな。」

「なるほど。」

「さて、繰り返しになるが、死なない程度でかかってこい！もし大けがをしても直してあげるからな……それじゃあこの剣が地面に刺さったら開始とする。」

武志はやわらかい土の所に剣を放り投げる。

グサツ

戦闘が開始する。ラダヴィーニヤが先制でレーザー攻撃、オタワがよく分からん球体で攻撃を仕掛けてくる。

武志も応戦してレーザーをよけつつ球体を打ち消している。

「言い忘れたが、弾幕を打ち消すのはありみたいだ。だから容赦なく消すが良い！」

武志も負けじと弾幕をばらまく。

「それで、スペルを使う時はこう宣言するんだ！【後光「輝かしき創造神の御威光」】

武志がスペカを唱えると金色のレーザーが次々に発射される。

「とりあえず私達もやろっ♪【空中兵器「攻撃ヘリコプター大包囲網」】

吉美がそう唱えると攻撃ヘリが四機出現し、一斉にミサイルを計八発発射する。しかし、

ドゴン！ ぼかん！ ドドドドン！

レーザーに触れ爆発する。そのうえ誘爆して武志に届くことは無いばかりか、ヘリがどんどん撃墜されていく。

「俺に任せろ。【狙撃「百発百中ストライクショット」】

バンデイが銃を構えて狙撃する。スペルカード中はあまり動けないので武志は狙撃をモロに受ける。

「…これ被弾にはならないのか。」

「…どうやらスペルカード中にあててもスペルカードブレイクという扱いになるらしいな。ただ無敵時間はあまりないから連続で当てられたらきついし、大技とかだと貫通してそのまま被弾になるらしい。それにスペルカードブレイクを一定回数繰り返すと自動的に被弾になるとか。」

因みにここでいう大技とはラストスペカやラストワードの事である。

「まあお固いルールで行ってるが流石に暗黙の了解とかが出てきてもう少し緩くなるだろ。」

「…そうか。ならもう一発喰らってくれよな！」 バアン

「おっとー！」

武志は間一髪避ける。だが次の狙撃がどんどん飛んでくる。しかもバンデイ自身も弾をバラまいているので物量が多いが、それほど難しくはない。

「まだまだ甘い…。狙撃に気をつければ楽だな…。」

「なら畳み掛けるよ！【古代兵器「エンチャントアロー」】」

「なら私も！【伝符「人と妖を繋ぐ道」】」

「…。【虚無殺法・影舞】」

「早々に片付けるわよ！【黒魔術「呪われた枷」】」

吉美からは大量の火矢が、ラダヴィーニヤからは道らしきものが移動を制限し、そこから多数のレーザーを放ち、大無は後ろに回り込んで攻撃、オタワは円状の弾幕を放ちつつ、下からも弾が飛んでくる弾幕をうつつ。しかも相変わらずバンデイの狙撃が飛んでくるため厄介だ。

武志はそれらをギリギリで回避しつつ、スペルを構える。

「行け！【拡散バレットヘル】！」

そう唱えると武志の周りに6つのタレットが出現し、射撃を始める。その弾幕はほかのスペルカードを凌駕する。

「ぐぐぐ…。流石の弾幕だな…。」

バンデイはスペルを解除して回避に励む。

「ちよっとー！こんなの反則でしょー！」

「でも避けられるからまだ大丈夫じゃない…。？」

「しかし撃墜されるとは思わなかったね。」

オタワ吉美ラダヴィーニヤの三人も弾幕を放ちつつ回避する。しかし、吉美の弾幕はほぼ打ち消されて届いてないため、オタワとラダヴィーニヤのスペカしか届かない。ただ、二人のスペカもタイミングよく一緒に来るとそこそこ大変になる。避けられないほどではないが。

「…。甘い。」

「おっと。」

後ろから大無が奇襲する。だが間一髪のところかわすことが出

来た。しかし大無の攻撃は続く。

「ボス…やるな…。」

「そっちこそな。だが手加減はしないぞ。」

タレットのうち2つが大無の方を向き、銃撃を開始する。しかし、

「弾幕が減ったらこっちのものだよ！」ズバーン

「…やってるのは俺なんだがなあ。」

吉美の号令に合わせてバンデイがタレットを撃ち抜く。どうやら弾幕が減った事により相殺され、狙撃する時間ができたみたいだ。

「…やってしまった…。ならこれはどうだ？【ガトリングバレットへル】」

壊されたタレットが復活し、今度は時期狙いの高密度の弾幕が一斉に襲いかかる！

「ガトリングとか卑怯だろ！」

「危ないわね！これ！」

「止まったら被弾しますよ！気をつけて！」

弾速が早いので止まったり、変な避け方をすると被弾するためかなり危険な弾幕であるが、逆に止まらない限り当たることは無いので完全に見た目負けしている弾幕である。しかし火力は凄いのでそこそこの結界を使って防ぐものなら、結界ごと相手を葬り去ることができる弾幕でもある。

「ああ何よもう！くらいなさい！【黒魔術「破滅を貫く者」】」

いつかのカウンター技が来る。心なしかオタワの移動速度も上がっている気がする。

「早っ！」シュン！

「間髪だったわね。だけどまだまだあるわよ！」

「…え？」

ザシュ！

二発目に避けられず被弾する。

「流石にスペルカードルールだからね。既存の技の強化版も作らせてもらったわ。というよりみんなやってるんじゃないかしら？」

「…確かに。あの記事にも『手加減用と本気用を使い分けるのも

いいかも』とか書いてたな。」

だから二発目が飛んできたのかな。しかし油断はできなくなった。

「… まあ手加減用を使うことは無いだろう。常に本気で行け！【召喚「ゴッド・オブ・ユレイドス」】」

「久しぶりの出番ですね！」

「うわああああ何よあれええええ!!」

一名ほど怖がっているがユレイドスとは馬の頭に人の胴体、そして龍の足と翼をもったキメラ進退を司る神様である。因みに本作のあとがき担当でもある。

「… まあ実際に召喚するんじゃないやなくて本物そつくりのクローンなだけでどね。呼ぶわけにはいかないし。」

「… 実際に見ると凄いインパクトですね。」

「おいおい、これでも神界での直の部下なんだぜ？君らの先輩にもあたる方だから注意しなよ？」

「ああ、この方たちが創造神様の現在の部下ですね。私はユレイドスです。よろしくお願いいたします。本物の方もよろしくね。」

「あつ偽物なんですねこれ。」

「偽物じゃない。クローンだ。」

「どっちも同じよ。それ。」

「… まあいいや。とりあえずその失礼な奴らを一扫しろ！」

「分かりました！」

するとユレイドスのもつ【進退の槍】が光り、多数のレーザーや弾幕を全方位にばらまき始める。武志も後ろからMR24で援護射撃をする。

「また激しすぎる弾幕だ〜」

「感心してる暇じゃないですよ。攻撃しないと、【伝符「人と神をつなぐ糸」】」

ラダヴィーニヤを中心に糸が多数垂れてくる。その糸が上から分解されて弾幕となって落ちてくる。

「…厄介だな。」

「ええ。ですがうち消せば関係ありませんよ！」



するとまたユレイドスの槍が光り、多数の弾幕を打ち消すようにレーザーや弾幕をばら撒き始める。

「加勢してやろう。【狙撃「一離七散」】」

バンデイがユレイドス目掛けて狙撃すると、ユレイドスには避けられるがその弾は壁に跳ね返り、7発が増える。しかももう1回跳ね返って計49発の弾が襲ってくる。

「こんな芸当もできるのか……」ブツブツ  
「……」

また次の弾が飛んでくる。今度は私狙いのようだ。

「創造神様！私はもう無理そうです！あとは任せました！」

そう言いながらユレイドス（複製）は消滅する。

「おいおい……」

「まだまだ行くわよ！【詠唱「禁じられた黒魔術」】」

オタワがスペルを撃ってくる。詠唱と言っていることから、隙の多い詠唱をスペルにすることでこの後大きな攻撃が来ると予想する……マジ？

スペル自体はオタワを中心に弾幕が渦巻くだけなので特に難しくはないが、

「加勢します！【伝符「神と妖を結ぶ線」】」

物凄い数のレーザーが飛び交い始める。流星に少しきつくなってきたか。

「仕方ない……【創造神式防護結界】」

自身にバリアを貼ってラダヴィーニヤに攻撃する。他の部下の攻撃もやまないたため別のスペカを構える。が、

ピチューン！

被弾音が鳴り響く。どうやらバンデイがカードを構えた瞬間に狙撃したようだ。

「やるなあ〜」

「……なんで死なん？」

「先ほどの防護結界が守ってくれたのさ。今は一枚しかないけど。」

この説明を弾幕をよけながら説明する。とりあえずこの結界の効

果を後で二回分に変更しようと考えてる。

「とりあえずこの弾幕をよけながら説明されるのなんかむかつくわね。」

「同感です。」

「わかる。」

「酷いなあ。じゃあ迎え撃とう。【爆符「無人爆薬積載貨物列車」】」

すると大量の爆薬・弾薬を積んだ貨物列車が走り抜ける。武志が火炎弾をバラまくと、爆薬たちに引火して貨物列車が大爆発を起こす。

「…てか先ほどから大無の姿が見えんな。気づかないうちにやられたのかな。」

「…呼んだか？」

「なっ…！」

「これで決める。【無我の境地】」

スペルを唱えると大無の姿が消える。すると後ろから攻撃してくる。その間にも次の貨物列車が爆発するが、大無は一向にやられる心配がない。

「…これ耐久かよ！」

「見ると上にタイマーがある。残り20秒のようだ。」

「さあさあ準備が出来たわよ！デカイのくらって頂戴！【禁忌「悪魔達の宴」】」

そう唱えると多数の悪魔達がこちらへ飛んでくる。禁忌と呼ばれるだけあってかなりの物量である。（多分関係ないと思うけど。）

武志も負けじと貨物列車を爆発させるが間に合わない。

「仕方ない。次だ。【創造「二億分の一スケールの太陽」】」

直径7メートルの太陽を創造して攻撃する。某地6面のラストスペルを参考にしてほしい。（説明放棄）

「えっちよっ、これ吸い込まれるだけだ」ピチューン

偶然にも近くにいたオタワが吸い込まれて被弾。

バン！ガン！ドン！

大無との近接戦が始まる。バンデイと吉美とラダヴィーニヤもスペルをキャンセルして避けることに専念しているため余裕はありそ

うだ。

互いに数発入れながらインファイトを続けるが、流石に練度の差がありすぎる。大無の一撃が重くてかなりキツイ。

大無が奇襲しようと思える。大体こういうときって後ろに出てくるよね。気配をうかがっていると、案の定後ろから出てくるので、掴んで太陽に向けて投げる。

「うああああああ」ピチューン

「久しぶりに肉弾戦したな。」

大無は太陽に放り込まれ、被弾した音が聞こえる。一応そんなに熱くはないのでまあ大丈夫だろう。

「さて、残ったのは三人かな。それなら一気に片付けさせてもらおう。」

武志は次のスペカを構える。

「死ぬなよ！【破壊「天地崩壊」】

武志はカタストロフィーを取り出し、思いつきり地面に振りかざす。すると上から多数の瓦礫が落ちてくる。

「荒々しい弾幕だね！消しちゃうよ！【現代兵器「一筆抹殺の超電磁砲（レールガン）II」

吉美はいつぞやのレールガンを取り出す。エネルギーが満タンになる前にもう一回攻撃を行うが当たらない。エネルギーがチャージされ、レールガンが発射される！

バーン！ バーン！ バーン！

おいまで。レールガンって一発ごとにチャージするもんじやないのかよ。なんか三発ぐらい飛んできたんだけど。しかも着弾点から破片が弾幕として飛んでくる。かなり危ないスペカだな。

武志はそれを一通り避けるとまた攻撃を行う……が、

チユーン！

バンデイの狙撃が命中し、後ろにのけぞる。だがかなり勢いがあったせいか一応攻撃が発生する。かっこ悪いけど。

ピチューン！

謎の被弾音が鳴り響くが、顔を上げると吉美のレールガンのチャー

ジが終わっていたため、回転して避ける。

一瞬だけ見ることが出来たが、どうやら追撃しようとしたバンディの頭に瓦礫が落ちてきたらしい。運がいいな。

バーン！ バーン！ バーン！

武志はそれらをよけきると起き上がろうとするが、レールガンの衝撃やらでかなりボロボロである。かろうじて立ち上がると後ろから声が聞こえる。

「マスター。チェックメイトですよ。」

「…そういう事か。」

… どうやらラダヴィーニヤに裏を取られたようだ。流石に模擬戦でここから抵抗する必要もないと思い、素直に降参する。

「マスターにしては諦めるのが早いですね？」

「流石にこれ以上はやらんさ。さ、勝負を決めなさい。」

「はい。すみませんマスター。」

バババババン！

容赦なく銃を連射される。しかし、その武器は連射力が高いから連射でヘッドショットする必要ないだろうと思いつつ、武志は倒れるのであった。

「…。」

「…ター。」

「マ…ター…。」

「マスター！起きてください！」

「ファッ!？」

「全く、マスターったら寝すぎですよ。いつまで気絶してたんですか？」

「いや頭にフルオートで連射してきたやつが何言ってたんだ。」

月面戦争の時に渡した銃はそこその殺傷力があるため模擬戦で頭に連射するものじゃないんだけどな。普通に死ねるぞ。あれは。

「いや…それは…すみませんでした。」

「それで？他の皆は？」

「別室にいますよ。」

「OK。だったら皆集合させてくれ。」

「分かりました。」

~~~~~

「あつ、マスターやつと復活したんだね〜♪」

「ああ。」

「それで？皆を呼び出して何をしようっていうの？」

「そうだな。最初に、”よかった奴には唐夜叉丸を進呈しよう”と言ったからそれをあげようかなと。」

「…大体もう誰がもらうか想像ついてるんだが。ボス。」

そうかバンディ。安心してほしい。その予想は合ってるから。

「と言う訳でラダヴィーニヤと吉美にあげるから好きな方取って。」

「やったく〜！」

「マスターありがとうございます。」

二人は相談しつつ選ぶが、結局はラダヴィーニヤが雷を、吉美が焰を受け取るのであった。

「それじゃあ解散！二人はそれ大事にしろよ？」

「分かりました。」

「はい〜♪マスター。」

うん。それじゃあ私はまた少し休んでくるから。ラダヴィーニヤ。

あとは任せた。」

「…はい？」

「それではおやすみ。」

後でなんかラダヴィーニヤが嘆いてた気がするが、頭が痛すぎるのでもうどうでもいいやと思いつつながら、武志は自室でゆっくり休むのであった。

番外編 ここまでの設定集
番外編1 すべてのオリキャラ設定

~~~~~主人公組~~~~~

○「創造と破壊の裏表」 洩矢もりや 武志たけし

【能力】 万物を司る程度の能力

【種族】 神（創造神・破壊神）

【危険度】 極高

【人間友好度】 普通

【活動範囲】 諏訪洩矢郷・妖怪の山

【性別】 男

【身長】 177cm

本作の主人公であり、この世の創造神である神様。神名はもりやたけしのそうぞうしん【洩矢武志之創造神】龍神である千古せんこによって最初につくられた太古の神様でもある。神界のほぼ全ての上位神、更に日本神話とつながりのある神様は全て彼が生み出している。そのためか神々からの信仰も高く、彼のニックネーム（地上に普及させるための名前）である伊弉諾いざなぎも地上で良く知られているため物凄い信仰力を持っている。

高天ヶ原にいるときに古代都市へ月読の使者として潜入。その時に永琳やサグメと顔見知りになっている。また、諏訪地方の方に別荘として諏訪大社を創造。その時に洩矢諏訪子を生み出している。因みに諏訪大戦の影の黒幕でもある。地上に降りてからは豊聡耳神子ら、そして命蓮寺の聖白蓮らと行動を共にし、命蓮寺を去った後諏訪洩矢郷の創武殿に住居を移したという経歴を持つ。因みに摩多羅隠岐奈とは古い仲である。

能力はあらゆるものを何も無い所から創造し、すぐに消すことが出来るというかなり便利な能力である。

性格は仲間思いでとてもやさしく、クールな印象だが、敵には容赦ない。彼を怒らせたら最後命はないと思った方が良いだろう。

○神が創りし完璧秘書ラダヴィーニヤ・A・ハルトマン  
R a d h a v i n a · A n n · H a r t m a n n

【能力】人妖神をつなぐ程度の能力

【種族】人間（強化済）

【危険度】低

【人間友好度】高

【活動範囲】諏訪洩矢郷・妖怪の山

【性別】女

【身長】155cm

武志の従者であり、サポートを行っている人間。種族的には人間だが武志が身体強化の魔法をかけているのでそこの妖怪よりは強くなっているし、再生力も高い。

性格は真面目で、マスター（武志）に忠誠を尽くしている。基本怒らないが怒るときはしっかりと怒る。戦闘は弱いがサポート面は優秀。

○「兵器少女」金河 吉美  
きんが よしみ

【能力】兵器を操る程度の能力

【種族】人間（強化済）

【危険度】高

【人間友好度】極高

【活動範囲】諏訪洩矢郷・人里

【性別】女

【身長】163cm

武志の用心棒であり、創武殿の警備を行っている人間。ラダヴィーニヤと同じく身体強化の魔法をかけているため、そこそこの妖怪より

も強い。

能力は手を使わずに有人兵器を操ったり、無人兵器を上手に操作できる能力だが、本人曰く使い道がなさ過ぎて面白くないとのこと。

性格は楽天家でとても明るい。ただし戦闘になると人が変わったように暴れだす。怒らせない方が賢明だろう。

○「動を視る狙撃手」スナイパー 望月 もちづき バンデイ

【能力】動くものを捕える程度の能力

【種族】月人

【危険度】普通

【人間友好度】高

【活動範囲】諏訪洩矢郷・妖怪の山

【性別】男

【身長】176cm

元月の傭兵のスナイパーで、第一次月面戦争の時に吉美に連れられてられ仲間になった。仲間になってから、地上の穢れや武志に生涯付き合うことを決意し、蓬萊の薬を服用した。現在では創武殿に続く橋を警備している。彼の狙撃からは避けられない。因みに愛銃はMk14 EBRにそっくりな銃である。

元々は月のスナイパーだったが、その自由すぎる振る舞いにより除隊。同じく彷徨っていた大無と合流し傭兵を始めた。そして様々な戦場で数々の手柄をあげ、一時は月のエリート部隊である【月都親衛隊・通称GST】にもスカウトされたことがあるが、傭兵で自由にやりたいという意志で断っている。

性格は社交的で饒舌。話していても面白いし喜怒哀楽が一番わかりやすい。ただし元スナイパーとあってか人を殺めることに何の躊躇もない。

○「無の世界の執行人」白魔 しろま 大無 たいむ



【能力】 無を操る程度の能力

【種族】 月人

【危険度】 極高

【人間友好度】 低

【活動範囲】 諏訪洩矢郷

【性別】 男

【身長】 180cm

元月の傭兵で、バンデイと同じく第一次月面戦争の時に吉美に連れてこられ仲間になった。仲間になってから、地上の穢れや武志に生涯付き合うことを決意し、バンデイと共に蓬萊の薬を服用している。いつも白いマスクを着けていて、バンデイですら素顔は見たことないらしい。その能力を使い背後からの奇襲や不意打ちを得意とするが、真正面から戦っても普通に強い。

その能力の故元居た軍隊から嫌われていた過去を持つ。相棒のバンデイを見つけてからは、傭兵として数々の戦争で手柄を上げ、正式にGSTにスカウトされたことがあるが、規律に縛られた軍隊や自らを捨てた月軍が嫌いなため拒否している。

性格は根暗であり話さないし、殺しに関して何の躊躇いもない。

○ 「最強で最凶の悪魔」O t a w a · v i v a r e t t i オタワ・ヴィヴァレットイ

【能力】 魔法（主に黒魔術）を扱う程度の能力

【種族】 悪魔

【危険度】 極高

【人間友好度】 普通

【活動範囲】 諏訪洩矢郷・妖怪の山・魔法の森

【性別】 女

【身長】 167cm

諏訪洩矢郷を襲撃した悪魔。武志に気に入られ今では武志の仲間として暇しない生活を送っている。元々は魔界で最も恐れられてい

る悪魔のうちの一人で、魔界の悪魔四天王の内の一人でもあった。自分が欲しいと思ったお宝をあらゆる手を使って入手するという危険な悪魔で、目的を果たすためには殺害や拷問、果ては一つの集落を丸ごと消し去るようなこともしたらしい。

性格は高圧的で、自分より弱い人すべてを見下すような発言が多かったが、武志の所に来てからは性格も丸くなった。ただし怒らせるとどこへ逃げようが地の果てまで追い詰めてくるのは変わらない。

~~~~~理都組~~~~~

○「絶対正義の理神」もりや 洩矢 りと 理都

【能力】理を司る程度の能力

【種族】神様（理神）

【危険度】極高

【人間友好度】極高

【活動範囲】旧都・人里

【性別】男

【身長】184cm

【体重】82kg+信仰の量と記載されている。

この世のあらゆる理を作った神様で武志の双子の弟。千古によって創造された太古の神であるが、神界にいた時は遊び惚けてばかりで神々からは嫌われているし、信仰もあまりない。因みに神名は洩矢理都之大能神もりやりのだいのうしん

過去に人間の都に陰陽師として潜入したり、妖怪たちを引き連れて理想郷を作ろうとしたことがある。その時の正体は妖怪の総大将「山本五郎左衛門」と言い伝えられているが、伝承を見た理都曰く、「どう伝わったのかは知らないけど、俺はこんなことはやってないし、籠に乗って移動したことはあるが流石にこんなアホみたいな移動はしない。」とのこと。たまにぬらりひよんとも言い伝えられているが、理都曰くぬらりひよんは別にいるとのこと。

性格は素直で、相手の実力を見定める癖がある。尚、一度怒らせる

と死ぬことになるので、もし怒らせた場合は心から謝罪しよう。

○「燃える炎の天狗」こうおう 紅桜

【能力】火を操る程度の能力

【種族】白狼天狗

【危険度】低

【人間友好度】普通

【活動範囲】旧都、妖怪の山

【性別】男

【身長】約173cm

理都の部下1号。元々は山の哨戒を行う白狼天狗だったが、圧倒的弱さと火を出すという能力故他の天狗たちからはいじめられていた。いじめられているところを理都に助けられ、蓬萊の薬により不老不死になると、かつてのいじめっこたちを見返すような力を手に入れる。唯一自分の事を慕っていた椀とはそこそこ仲が良い。

仲間になった後は、理都たちを守るため日々鍛錬しているようだ。

性格は常識的で、すこし優柔不断な所もあるが、仲間を守るためなら自分の犠牲も厭わない。

○「狡猾な黒き狐」かえで 楓

【能力】人を騙す程度の能力

【種族】妖狐

【危険度】高

【人間友好度】普通

【活動範囲】旧都、人里

【性別】男

【身長】180cm

理都の部下2号。とても頭が良く、人間に化け、他の人間たちを巧みに騙し、富や名声を手に入れて豪遊していた妖怪狐。ある時どこからか彼が妖怪であることと、人々から富を奪っていたことがバレ、当

時陰陽師である理都に追われていたが、その頭脳や人々の心をつかむ術を気に入られ仲間として匿った。

仲間になった後は、理都組の頭脳担当として他の部下をまとめたり、理都やさとの手伝いをして過ごしている。因みに紅桜同様蓬菜の薬を服用している。

性格は真面目で、人の心を掌握することが上手だが、冗談が下手なためあまりしゃべらない。実は人里の甘味が大好き。

○「幸せの白兔」あおい 葵

【能力】 幸福を与える程度の能力

【種族】 兔

【危険度】 低

【人間友好度】 高

【活動範囲】 旧都、迷いの竹林

【性別】 女

【身長】 165cm

理都の部下3号で紅一点。元々は竹林に棲む妖怪兔で、同じ幸福を呼ぶ能力のためとは対立していた。彼女のもとにもたくさんの仲間がいたが、ある日てゐが永遠亭の方々と仲良くなったことで、永琳から竹林の兔の管理を任せられ、葵は実質的に居場所と地位を失ってさまよっていたところを、偶然永遠亭から帰宅の理都に拾われ、その能力のため理都のもとで暮らすこととなった。因みに彼女だけ蓬菜の薬を服用していないが、本人曰く、兔の寿命は長いし私は生まれてから数百年の新参だから、まだ1万年くらい余裕で生きるよとのこと。

性格はとても明るく楽道家。甘いものが大好きで、甘味巡りに楓をよく誘う。

くくく神界の愉快的な神達くくく

○「八百万の頂点」もりや 洩矢 せんこ 千古

【能力】全てを司る程度の能力

【種族】龍神、全能神

【危険度】極高

【人間友好度】高

【活動範囲】高天原、天界

【性別】女

日本の八百万の神々の頂点であり、武志や理都の実の母である。神界では神々の頂点として圧倒的なカリスマ性を見せ、他の神々だけでなく、下界の人間たちからも信仰されている。能力は文字通り全てを司るが、本人曰く器用貧乏のため、実質力の付与と、ワープ能力と、召喚能力しか使わないが、やろうと思えば普通に扱えるため、おそらく他の神様たちの役目を作っているのだろう。

幻想郷を作った神様として人里に銅像が立っているが、実際は武志が作ったものであるため、正しい歴史を教えるべきなのか迷っている（武志は別にどうでもいいらしいのでそのままにしてるが。）

性格はとても明るく、気楽な性格で、その奇想天外な行いによく天照が頭を悩ませている。

○「太陽の神」天照 あまてらす

【能力】太陽を司る程度の能力

【種族】神様

【危険度】極高

【人間友好度】普通

【活動範囲】高天原

【性別】女

三貴神の一人で太陽を司る神様。神使として八咫鳥を使役する。高天原ではしつかり者で、千古や他の神様のサポート役としても活動している。

○「月の神様」月読 つくよみ

【能力】月を司る程度の能力

【種族】神様

【危険度】高

【人間友好度】高

【活動範囲】高天原、月の都

【性別】男

三貴神の一人で月を司る神様。かつてはほんわかとした性格でも緩かったが、月の都から多数の信仰を得た結果、ここぞというときには頭が回るようになった。

現在もその性格は変わらないが、高天原の頭脳担当として活動している。

最近ではよく月の都にお忍びで遊びに行っているとか……。

○「百戦錬磨の戦の神」須佐之男スサノオ

【能力】あらゆるものを断つ程度の能力

【種族】神様

【危険度】極高

【人間友好度】極高

【活動範囲】高天原、神界

【性別】男

三貴神の一人で戦神。諏訪洩矢郷の対オタワ戦では黄泉軍を率いて諏訪洩矢郷へとやってきた。非常に大雑把な性格。漢らしさは100点。高天原では黄泉軍を率いている。かつては武志が黄泉軍をまとめ上げていたが、武志が下界に降りる際に、武志本人から任命されている。

無類の酒好きで、神界でよく酒瓶片手にうろつくさまがよく目撃されている。これには皆さん困り果てているようだ……。

因みに移り住んではないが下界にもよく行く。

○「進退と時の神」ユレイドスYleiddoss

【能力】進退を操る程度の能力

【種族】神様（キメラ）

【危険度】低

【人間友好度】普通

【活動範囲】高天原、神界

【性別】男？

頭は馬、胴体は人間、脚は蛇、尻尾（脚）の先には蠍のようなハサミを持つ四メートルくらいのおおきな怪物。武志が作り出した神使で、現在では武志の神使を離れ、独立した神様として頑張っている。人間形態になることもできるがやっぱり頭は馬となる。

いつも進退の槍という金ぴかの槍を持っていて、この槍の力で時間を操っている。

本小説のあとがき担当である。

~~~~~古代都市（現月の都）の兵士達~~~~~

○「月の頂点」なかの那珂 おうじ皇子

【能力】月の力を制御する程度和能力

【種族】月人

【危険度】低

【人間友好度】極高

【活動範囲】月の都

【性別】男

月の都の王様。部下として月の頭脳のサグメと綿月姉妹を従えている。

人前に姿を滅多に現さない。そのくらい高貴な人物である。

○「月の指揮官」ばんどう坂東 ろむ魯鷓

【能力】なし

【種族】月人

【危険度】低

【人間友好度】極高

【活動範囲】月の都

【性別】男

月の軍隊のトップ。かれこれ数千年くらいトップをしている。その立場から月の都の幹部会にも呼ばれるほどの実力者。

月の都の幹部の中では異色の存在で、彼だけが能力を持たない。

○「紅一点の剣士」大鹿おおが 美晴みはる

【能力】剣舞を行う程度の能力

【種族】月人

【危険度】低

【人間友好度】高

【活動範囲】月の都

【性別】女

月の都のエリート軍隊である【月影つきかげ】のトップ。甘いものが好き。彼女の長剣は特注の剣で、【星斬ほしぎり】という名前がある。

○「月軍の最終兵器」一ノ瀬いちのせ 世界せかい

【能力】目標を的確に狙う程度の能力

【種族】月人

【危険度】低

【人間友好度】極高

【活動範囲】月の都

【性別】男

月影の主要メンバーで、スナイパー他銃器の扱いに長けている人物。

その能力故敵を確実に仕留めることからその二つ名が付いたが、好きな女の子のハートは打ちぬけなかったようだ……。

○「月の勇者」山本やまもと 比呂士ひろし

【能力】怪力を使う程度の能力

【種族】月人

【危険度】普通



【人間友好度】普通

【活動範囲】月の都

【性別】男

月影の主要メンバーで、物凄い大きな大剣を扱う。

メンバーどころか月の都随一の力持ちで、力自慢コンテストでも何回も一位を取り、殿堂入り扱いされ出禁になった経歴がある。

仲間には優しいが、自分や仲間の事を悪く言う奴には容赦がない。

○「月の守護神」勝馬かつま 純平じゆんぺい

【能力】

【種族】

【危険度】

【人間友好度】

【活動範囲】

【性別】

月影出身の兵士で、盾とハンドガンを持って戦う。現在はその腕を買われ別の小隊の隊長を務めている。

月軍の勝利のためには自分の犠牲も厭わないタイプで、盾を持って無謀な突撃を行い、戦いを終息させることもしばしば。

○「知略家槍使い」華田かだ 翔しょう

【能力】敵の動向を察知できる程度の能力

【種族】月人

【危険度】低

【人間友好度】高

【活動範囲】月の都

【性別】男

月影の兵士で槍を使って戦う。月影では戦略担当として働いていた。

月影の兵士の中では一番話しやすい奴ともいわれていた。

現在とはある日の純狐の侵略によって殉職している。合掌。

くくく諏訪大国の仲間たちくくく

○東風谷<sup>こちや</sup> 瑠美<sup>るみ</sup>

【能力】不明

【種族】風祝

【性別】女

守矢神社（旧洩矢神社）の初代風祝。武志によって創造された人間で、武志の力を少しだけ扱うことが出来る。現在は亡くなっている。

○東風谷<sup>こちや</sup> 翠<sup>みどり</sup>

【能力】不明

【種族】風祝

【性別】女

守矢神社の二代目風祝で、東風谷瑠美の子。外見は早苗さんと瓜二つである。現在は亡くなっている。

くくく幻想郷のオリジナル有力者たちくくく

○「海から来たりし山の鬼」金平鹿<sup>こんへいか</sup> 美晴<sup>みはる</sup>

【能力】嵐を操る程度の能力

【種族】鬼

【危険度】極高

【人間友好度】低

【活動範囲】旧都

【性別】女

鬼の四天王で嵐の多娥丸と呼ばれている海賊風の鬼。

元々はとある海で海賊を率いて人間たちに悪行をはたらいていたが、とある人間によって壊滅、そんなときに天魔である颯の呼びかけに応じて残りの仲間と共に妖怪の山へと旅立った。その時の名残で左目は負傷したままとなっている。

妖怪の山に到着した後は一晩で暴れている鬼たちを全員片付け、自身の支配下に置くという実力を発揮している。

旧都では勇儀と共に他の鬼たちをまとめ上げている。そして勇儀が旧都温泉街の元締めをやっているのに対し、美晴は旧都温泉街の治安維持を行っている。

海を捨てたものの海賊としての力と影響力はまだ生きているようだ……。

○「山の頂点」むらくも 叢雲 はやて 颯

【能力】 重力を操る程度の能力

【種族】 天魔

【危険度】 極高

【人間友好度】 低

【活動範囲】 妖怪の山

【性別】 女

妖怪の山をまとめあげると天狗の首領。天狗の社会は上下関係が激しいため誰も彼女に逆らうことはできない。

そのカリスマ性も高く一部天狗からは人気を集めている。

その一方でせんべいと熱いお茶が好きという年寄り臭い一面も持つ。

~~~~オタワの仲間たち~~~~

○「電撃を操る狂気の医師」Carter カーター

【能力】 電撃で狂気を付与する程度の能力

【種族】 魔族

【危険度】 高

【人間友好度】 低

【性別】 男

【元ネタ】 DBDのドクター

オタワの仲間です拷問担当。本名はトルマン・カーター。

かつては魔都パンデモニウムでスペクター記念研究所という病院で診療を行っていたが、ある時50名を超える研究員を全員殺害する。当局の鑑定によると全て脳に高圧電流が流されたあとがあるとのこと。

これはオタワに洗脳されたからなのか、カーターが狂気に侵されたからなのかは不明である。

諏訪洩矢郷襲撃時に須佐之男の手によって殺害されている。

○「錬金術師の成れの果て」タルボット^{Talbot}

【能力】錬金術を扱う程度の能力

【種族】魔族

【危険度】極高

【人間友好度】低

【性別】男

【元ネタ】DBDのブライト

本名はトルボッタ・ウィリアムス。オタワの仲間で様々な研究を行っていた。

いつも彼特製の金色の液体を摂取しており、体中のいたるところからその液体がにじみ出ている。

オタワ曰くあの液体は身体強化の薬であり、自分の身体能力を高め疲労を飛ばす役割があるらしいが、副作用として急激な倦怠感があるため、常にあのおくすりを注射しているのだとか。成分はとある花の蜜らしいが、何の花なのか、またどこに咲いているのかは知らないらしい。

諏訪洩矢郷侵攻時にやられても蘇るといふプレイをしていたが、吉美のレールガンで消し飛ばされている。

○「蘇った大魔法使い」メルヒエン^{Merhien}

【能力】魔法（ほぼ全て）を扱う程度の能力

【種族】魔法使い

【危険度】普通

【人間友好度】低

【性別】男

本名はメルヒエン・パンチエツタ。魔界一の大魔導士で彼に扱えない魔法はないとされていた。

実際、生前は魔法研究のパイオニアで、彼が作った魔法も多数あり、オタワも彼に魔法を教えてもらっていたらしい。

一度オタワに殺害されているが、その後オタワとカーターの手によって蘇っている。

諏訪洩矢郷侵攻時に殺害されている。

○「封印されし守護者」T r i a n g l e · E x c e l

【能力】祭壇を守る程度の能力

【種族】魔族

【危険度】極高

【人間友好度】低

【性別】男？

【元ネタ】サイレントヒルの三角様

元々魔界の最強の剣士で、メトロンの祭壇の守護神とされていたが、ある時を境に暴走。周辺の村を次々に壊滅させた。魔界の最高神神綺の手によって祭壇ごと石化して封印された。

頭には鉄製の三角コーンみたいな被り物をしている。

諏訪洩矢郷の侵攻時に物凄い強さを見せたが、武志達の前にあえなく敗北して殺されている。

~~~~~その他~~~~~

○「この世界の管理人」みずや 水矢 てんな 天那

【能力】不明

【種族】神様？

【危険度】不明

【人間友好度】不明

【性別】 男

作者のアバターの存在。自称小説書き。すべてが謎に包まれているが千古に顔がきくところから高貴な神様だと言われているが真偽は不明である。

本作のあとがき担当の一人で、あとがき以外は出てこない不思議な人物である。

以上、ここまでの主要なオリキャラたちでした。またキャラのイラストも鋭意制作中のため、出来次第更新されていくと思います。それでは皆さんさようなら。

## 番外編2 その他設定まとめ

【1、場所について】

○諏訪洩矢郷すわもりやきょう

武志、ラダヴィーニヤ、吉美、オタワ、大無、バンデイ（以下、武志達）が住む世界。元々の大きさは約300?と名古屋市くらいの大さきだったが、のちに行った地域再建で約100?（大体一辺が10kmの正方形）となった。因みに比較として、兵庫県西宮市と同じくらいの面積となっている。本編では省かれているが地名なども結構変わっている。詳しくは下記の【主な地名】を参照。

人口は13.5万人程度と少なめ。よって人口密度は1350人/?。

名前の由来は武志が昔創った楽園の守護者である神様からとっている。因みにその神様は洩矢諏訪子だったりする。決して勢いで作者の推しからとった名前ではない。

【主な地名】

中心部：西川区にしかわ：巨大なビル群が立ち並ぶオフィス街やデパートなどの大きめの商業施設などがある。区の中では二番目に狭い。

北部：倉富くらとみ↓栖張区すはり：閑静な住宅街。一番広い区でもある。北の果てには鈴蘭台すずらんたいという高級住宅街がある。

西部：桜田さくらだ↓神代区かみしろ：諏訪洩矢郷一の繁華街。西川区とほぼ同じ区域として扱われることが多いが別の区である。三番目の広さを誇る。

東部：民成区たみなり：民成工業地帯を中心とした工業の町。ほとんどが工場。面積もダントツで狭く、人口も少ない。まさに産業のターミナル。

南部：匠ヶ浦区たくみがうら：モダンでおしゃれな港町。町中にはおしゃれなお店が多数ある。

【主な名所】

西川区：諏訪郷立図書館…この世界一番の蔵書数を誇り、この世界

の学問を詰め込んだような場所。漫画や雑誌などの本から、難しい学問の本や魔導書までも置いてある。

八坂屋本舗…この世界一番のデパートであり、いつも人でにぎわっている場所である。因みに駅から繋がっているため、アクセスも良好である。

諏訪西川駅と駅ビル「ルナティック」…八坂屋本舗と対をなすように存在するデパート。駅を挟んで対極にあるが八坂屋本舗の方が人気である…。諏訪西川駅はこの世界で一番の利用客を誇る駅である。凄い。

栖張区…げつかみさき月華温泉郷…栖張区北西にある【月華岬】にある温泉街という名のリゾート地。旧倉舞温泉。北にあるがそれほど寒くなく（諏訪洩矢郷自体が一年を通して温暖なため）、各地からリゾート客が集まってくる。

やたゆけむりおんせんきょう八咫湯けむり温泉郷。月華温泉郷で一番人気な宿。広い温泉のほかにも大きいプールや海水浴場、二つの宿泊棟に土産屋も多数あるという外国の豪華リゾートホテルが元となっている。面積も半分を占めている。温泉とは。土地の縮小により温泉郷はここだけとなった。因みに統合でホテルニューモリヤのリゾート機能がこちらへ来たため、現在一番豪華なホテルはここである。

イドラパーク…神代区との境にある巨大遊園地。全部遊びつくすのには一日じゃ足りない。

神代区…かみしろおどおり神代大通…神代区と西川区を結ぶ大動脈。旧桜田通。一般道路だが観光客は多い。（なんで？）

神代センター街…神代区にある商店街。結構長いし賑わっている。ブランドの店がそこそこある。

諏訪国際空港…すわこくさいくうこう国際空港と銘打ってる割には外国との接点はない。主に神界とこの世界をつなぐ役割をしているが、千古も武志もワープで直接向かえるため、空港を使う者はいない…。ただ一部の神様が娯楽で来るときに使うくらい。

民成区…民成鉄道博物館…この世界の鉄道や外の世界の鉄道についてまとめられている。ただ諏訪洩矢郷の鉄道の歴史の大多数は武志



による捏造である。

民成工業地帯…この世界の工業の9割を占める工業地帯。近くには物流センター街もあってトラックでにぎわっている。

匠ヶ浦区：ゴールドタワー…この世界で一番高い建造物。地上564mである。展望台からの眺めは絶景。

ホテルニューモリヤ…かつてこの世界で一番豪華だったホテル。部屋の豪華さは八咫湯けむり温泉郷にも負けないし、海水浴場もあるが、温泉はどこかへ消えた。悲しいね。

水渡港…この世界唯一の港。豪華客船【おき号】みわたりこう（という名の動かない客船）が止まっている。

### ○創武殿そうぶでん

武志達の住む家。他にも拠点はあるが基本的にはここに住んでいる。二階建ての豪邸で、敷地内には地下室や地下ガレージもついている。本島と別れていて、匠ヶ浦区にある橋を渡れば到着する。

こちらにはプライベートのプール、海水浴場、パーティ会場（屋外・地下）がある。元々は神界にあったサーバーもあったが、現在では邪魔という理由でチェルベツコの板に統一されている。ただし図書室代わりのサーバルームは健在で、諏訪郷立図書館にも引けを取らないくらいに蔵書がある。

さらには倉庫もあり、白、グレー、ライムグリーンの建物からは物流倉庫を彷彿とさせる。他にも通信塔や、更に別の島に警備員たちの詰め所がある。

内装は小綺麗なモダン風で、白基調で下に黒い線が入った壁に白いタイル風の床となっていて、家具もガラスだったり、黒や金属の家具で統一されてかなり洗練された雰囲気になっている。しかもアイランドキッチンまでついているという徹底ぶりだ。更に、2階の廊下は1階と同じだが、部屋に入ると濃い茶色のフローリングとなっていていい感じとなっている。

○この世界の警備員について

この世界にいる警備員は大きく分けて二種類存在する。一つは  
SMD S (Suwa Mori ya Defence Service) 諏訪 洩 郷 防 衛 隊  
と、

SPAS (Spacial Professional Assault team) 諏 訪 洩 郷 特 殊 警 護 隊  
オタワの襲撃を受けて再編成された。全員が強化されたアンドロ  
イド兵で、多少の攻撃ではびくともせず、倒れても一定時間後にリス  
ポーンするといった使用をもつ。

SMD Sは総人数2400名の部隊で、主に諏訪洩矢郷の警察的な  
役割をしている。警察の制服に身を包んでいるが、全員がアーマーを  
着こみ、拳銃やSMGで武装しているといった特徴をもつ。一部はS  
PASみたいな感じの武装兵もいるが数は多くない。こちらは迷彩  
はつけず、紺色の衣装に身を包んでいること以外は後述のSPASの  
装備と一緒にある。(何のために分けたのだろうか。)

SPASはSMD Sの特殊部隊的扱いで、総人数は500名。創武  
殿の警護や、対テロ組織に対する防衛手段として活躍する。全員が  
MCBKの迷彩に身を包み、黒のアーマー、ヘルメットを着用してラ  
マルチカムフラック  
イフルなどで武装している。創武殿の警備兵の中には重装備兵が十  
人いて、それぞれ火炎放射器、ミニガン、チェーンソー、LMG、ロ  
ケットランチャーで武装している。創武殿の警護兵は他とは違い、  
スーツにアーマーとヘルメットを着用している。人数は40名。そ  
の様子はシークレットサービスのスーツを着た兵士のよう。

### ○洩矢大社

幻想郷は妖怪の山、偽天棚にある神社であり、武志達の幻想郷の拠  
点。

ただ、普段は創武殿の方にいるのであまりこつちに全員揃う事は少  
ないが、オタワや吉美、仕事のない時の武志はよくこつちに来てゆっ  
くりしていることが多い。

洩矢大社は、三つの建物とその周りを囲う堀、そして本殿まで続く  
道にある多数の鳥居から成り立っている。

見た目は八坂神社や伏見稻荷大社みたく赤と白の見た目に、諏訪大社や出雲大社のような派手なしめ縄が付いている。本殿と、その両隣に創造殿、破神殿があり、本殿の裏手に生活スペースがある。因みに地下にもいくつか部屋があり、その中の一つに創武殿とのテレポーターが設置されている。創造殿にはラダヴィーニヤを、破神殿には吉美の、本殿表には武志をモチーフにした銅像が鎮座されている。（自分の銅像を崇め奉っているって何？）

本殿から麓までは道が整備されていて、現在は途中までしかないが、いずれ麓まで多数の鳥居を作る予定であるらしい。（因みに鳥居には魔よけの効果があるとか。）

○神界・天界・高天原

【天界】

天人たちが住まう場所。いくつもの浮島から成り立っており、天人たちはその間を移動しながら生活している。浮島と浮島の間には橋があつて、そこを移動している者もいれば、羽衣を使って飛んで移動している者もいる。その他にも竜宮の使いも多数見受けられる。

【神界】

神々たちが住まう場所。和風チックなビル群はどこか昔の古代都市を連想する。諏訪洩矢郷に劣らずの都会感で、かなり綺麗な街並みとなっている。因みに車とかはないので歩道しかない。道が広いっていいね。

【高天原】

神界の中央にある屋敷のエレベーターから行ける、神界よりもさらに上の空間。かつては屋敷の下に武志の研究所があつたが、今はもう残っていない。

ここには千古や武志達の屋敷や、神々たちの集会場がある。神々の会議は主にここで行っている。

○月の都

中華風の感じの街並みである。人物はオリジナルが多いが、町の外観は原作と一緒である。

中央にはお偉いさんたちが集まる建物があり、そこで重要な会議などが行われている。

また、外部からの侵入者が来た時のみ、町全体を巨大な防護壁が囲む。これにより敵の侵入を妨げることが出来る。流石月の科学力。尚、武志には意味をなさなかった模様。

【2, その他用語集】

【黒金刃くろがねやいば】

武志の武器であるチェンソー。切れ味もよく、モーター音も静かである。ただしチェンソーという性質上生半可な相手には使えないため、あまり戦闘では使わない。外観自体は黒い持ち手部分に金色の刃とかなりおしゃれである。

【カタストロフィー】

武志の武器であるハンマー。大きさの参考としてバイオ8のハイゼンベルクのハンマーを思い浮かべるといいだろう。黒金刃と比べて取り回しは悪いが、武志のお気に入り武器となっている。

戦うには適切な間合いを取ることが重要であるが、近づかれても吹っ飛ばせるし、そこから詰めてハンマーを振り下ろすだけで致命傷を与えることが出来るため案外悪くないのかもしれない。

因みにカラーリングはハンマーの頭の部分が金色、持ち手の棒が艶消し仕様の黒となっている。

【MR24】

武志が持つライフル。外観は現代のHK 416に似ているが別物である。神力でコーティングされた特殊弾を連射することが出来る。この弾は破壊神でもある武志の力が込められているため、そこその障壁だと貫通される。何なら物理的な壁もある程度は貫通する。しかも撃つたところからまた弾を生成するためリロードもいらぬという神仕様である。流星に連射しすぎるのは良くないけど…。

からやしやまる・らい  
【唐夜叉丸・雷】

元々は武志が持っている双剣「唐夜叉丸」の内の片割れ。現在はラダヴィーニヤが所持している。

黒い持ち手に金色の刃というどこぞやのチェーンソーと同じカラーリングをしているが、どちらも同じ人が作ったからセンスも似たんだろうなあ。

小型化機能も付いているため、ラダヴィーニヤの手に渡ってからは短刀として忍ばせているらしい…。

からやしやまる・ほむら  
【唐夜叉丸・焰】

元々は武志が持っている双剣「唐夜叉丸」のもう片方。現在は吉美が所持している。

黒い持ち手に金色の刃というどこぞやのチェーンソーと同じカラーリングをしているが、どちらも同じ人が作ったからセンスも似たんだろうなあ。

小型化機能も付いているため、吉美の手に渡ってからは短刀として忍ばせているらしい…。

… ところで説明が一緒だなこれ。

フェムトマテリアル  
【完全物質】

とても頑丈で、溶けず錆びず劣化せずという似たような究極の素材。武志が独自に生み出したものだが、実際は区別していないだけで何種類もあり、

①鋼鉄を武志の力で強化したもの。

これは創武殿の建材や唐夜叉丸と黒金刃の刃として使われている。通常の鋼鉄よりも数倍長持ちするらしい。

主に建材などに扱う。

②カーボンファイバーを武志の力で強化したもの。

これは武志の武器（黒金刃の持ち手）に使われている。軽くて丈夫なため使いやすいのだとか。しかも元々の素材も丈夫なのでかなり安定性が高い。

主に乗り物や大型の物を作るときに使う。

③樹脂やプラスチックを強化したもの。

MR24やそのほか様々な小型のものに使われている。一番使用回数が多いのもこれ。

がある。強化の方法は物体を武志の結界でコーティングするだけである。単純だが特殊な攻撃でしか壊れないためかなり優秀である。

#### 【バンディの愛銃】

バンディはいつも狙撃銃を持ち歩いている。月の傭兵時代からの愛用品らしい。見た目はMk14EBRとほぼ一緒であるが、本人曰く違うらしい。

#### 【ラダヴィーニヤと吉美の愛銃】

ラダヴィーニヤ：P10RONIカスタム。

元々は連射のきく拳銃だが、カスタムすることで安定性を増している。

吉美：P90↓M249

LMG。一応ある程度軽くする術式をかけているため現物よりも大分軽くなっている。ある意味吉美らしいといえよう。

だがこの二人共普通に弾幕を出せるようになったため、銃は全く使わなくなった。成長を感じるが少し悲しさもある。B.V. 武志

以上、オリジナル地域の解説と用語集的な奴でした。他にこれ何？というものがあつたらコメントなどで教えてもらえると幸いです。

それでは皆さんさようなら。

第十一章 東方紅魔郷 く公害 ダメ ゼツタイく  
PART. 76 青い空、白い雲、紅の霧……？

前回の話からおおよそ一週間が経った頃、武志はいつものように幻想郷の自分の神社でゆっくりしていた。

「こう屋根に寝そべって寛ぐのは最高だなく。」

武志の手にはココア入りの紙コップと、隣には人里で買ってきたどら焼きが置いてある。そしてチエルベツ口の板で神界や諏訪洩矢郷の情勢やアニメなどを見て過ごしている。

「…… 暢気な事ね。」

気づけば隣にはオタワの姿が。リラックスしすぎて気づかなかった。

「お、いたのかオタワ。いつ来たんだい？」

「さつきよ。ってか気づかなかったの？」

武志はうなずくとオタワはため息をつく。

「あのさ、ここは向諏訪洩矢郷こうみたい諏訪洩矢郷に安全じゃないんでしょ？不審者が来たらどうするつもりなのよ。」

「…… そんなこと言ったっけかなと思いつつ確かに一理あるとは思  
う。だが対策してないわけではないんだなあ。」

「あー大丈夫大丈夫。誰か来たときは」パシユン！ピチューン！

武志は護身用の拳銃を素早く構えて撃つ。その弾は偶然近くを通りかかった妖精にあたる。

「…… とまあこんな風に最近はずっと拳銃を構えてるからとつさに  
来ても守れるし、スペルカードもあるから戦えるさ。」

「確かに。」

一応基本はスペカだが、スペカを使うような相手じゃない場合や、  
使えない場合には拳銃で対処しようとは思っている。まあいずれ使  
わなくなると思うが。

「そんなことよりこっちのきれいな空を見つつ寛いでみたらどうだ？

青い空、白い雲、そして赤い霧が…… 綺麗じゃないか。」



武志はここまで行ってココアを飲むが自分の発言に疑問を持つ。

(この間0・5秒)

ブーッ！

武志はココアを吹き出すとともに今起こってる事態を理解しようとする。

「ちよつと待て、赤い霧ってなんだ赤い霧って！」

「いや赤い霧は赤い霧でしょ。」

オタワは妙に落ち着いている。

「しかしお前は落ち着いているな。まさかとは思うが……」

武志が言い終わる間もなくオタワが遮る。

「いやそんなわけないでしょ。でも心当たりが一つあるから心配しなくてもいいと思うわ。どうせ三日たてば収まるわよ。」

「心当たりって犯人のか？」

「そうよ。前に散策した時に赤い館があったのを覚えているかしら？」

そこまで言われて武志も察する。

「ああ、つまりあの趣味の悪いスカーレットという奴がこの異変を起こしているの？」

「そういう事ね。」

武志はこの紅く染まった空を仰ぐ。

「……とりあえず戻るか。あの館ですら存在が公害だというのに本物の公害を巻き起こされたらかなわん。目に悪すぎだろこれ。」

「毎回思うんだけど言いすぎじゃない？」

「事実だから仕方ない。文句はそいつに言ってくれ。」

武志達は諏訪洩矢郷へ引き返す。

~~~~~

「……空が赤いって？」

「そんな話あるわけないだろ。ボス。」

「そうだよな。私もそう思う。」

武志はそう言いつつチエルベツ口の板に幻想郷の様子を映し出す。

「…… まじかよ。」

「これは合成じゃないのか？」

「合成じゃないんだよな……。」

「で、二人にこのことを話した理由なんだが、この霧の原因は前に見つけたあの赤い館だ。その頭首のスカレットとかいう奴を軽くひねろうと思うんだが、それに一緒についてこないか？」

大無とバンデイがいれば絶対にこの目標は果たせそうなので誘つてみる。駄目ならダメでまあ天誅のミサイル落とすか。

「…… まあボスがそういうならついていこう。」

「ああ。久しぶりの任務になるのかな？腕が鳴るぜ。」

「任せたぞ。二人共。それでは簡単な作戦に入るがくくくく」

武志は今回の作戦を大まかに話し始める。

「…… 大胆だな。」

「でもしっかりと筋は通ってるし無茶な所やダメな所もない。」

「だろ？」

「…… ただやっぱりスペルカードルールとやらは慣れんな。」

「それは分かる。」

「同じく。」

スペルカードルールは基本異変の時に使われる決闘方法として今回もそれで決着がつくだろうと考えていたが、あれは少女向けのルールであり、いわば遊びのようなもののため武志達にはあんまり合わないようだ。まあオタワもあまりいいようには思っていないが。

「…… とにかく、軽く痛めつけばいいくらいだろ？」

「まあ言っちゃえばそうだな。」

「OK。だったら話は早い。早速現場へ向かおうか。」

「分かった。早速近くへゲートをつなげよう。」

武志達は紅魔館の近くに移動するのであった……。

PART・77 いざ紅魔館へ！

「…… 実際に見ると凄い気分悪いな。」

「だろ？ 公害だぜこんなの。」

「なんかボスが怒ってるのも分かる気がするな。」

「じゃあ作戦開始だ。各自の健闘を祈る。」

「了解。」

「了解。」

そういうとバンデイはギリースーツを着用し、愛用のスナイパーライフルを準備して狙撃体制に入りつつ、双眼鏡で様子を確認し、武志と大無は紅魔館の外周へ向かう。

「…… この柵って登れそうか？」

「…… 侵入者検知かは知らないが何かの術式を感じるな。つてか飛べばいいんじゃないか？」

「…… いや俺飛べん。」

「えっ意外。」

バンデイが短時間なら飛べるから大無も飛べるのかと思ったけど無理なのか。

「…… あいつは力の扱いが上手だからな。俺が下手だからかもしれないが。」

「ああ…… そうなのか。」

「そう言ってる間に正門らしきものが見えてくる。」

「…… つと。あれが正門か。」

武志達はその正門を見るが正門は見るも無残な姿になっていた。

「…… さすがに元からこの見た目ってことは無いよな？」

「…… さすがにないだろ。そもそも門としての役割を放棄してる。」

「まあそうじゃなければそこに門番は倒れてたりしないよな。」

門の所に門番らしき中華風の人物が倒れている。見たところかなり武術に長けてそうだがどうなんだろうか。

「…… まあ気にせず入るか。」

「そうだな。」

武志達は中へと入っていく。

~~~~~

「…… まあボス、さつきから小さく爆発音が聞こえる気がするがこれって気のせいなのか？」

「奇遇だな。私も聞こえているんだ。」

さつきの正門といい恐らく先に同じく恨みを持つ人が来ているんだろう。あんまり顔を覚えてもらいたくないため見つけた人はこちら側でも容赦なくやる方針で行くつもりだ。

「…… とりあえずこれつけとこうか。」

「…… いやまた古いな。」

武志は潜入用ペスト医師セットを取り出す。常世神討伐の時も役立った逸品である。

「そういえば月の都はかつて古代都市の人々が移り住んだものだったつけ。」

「…… え？」

「あー、……、この話はまた今度しよう。今ここで話すことじゃない。」

とりあえずマスクを着けて進んでいく。大無の能力も駆使しているためそう簡単に見つかることは無いはずだ。

「…… しかし先に来た奴はかなりやり手だな。」

「分かるのか？」

「ああ。分かん。」

「おい。」

間取りがよく分からないため適当に散策していると正面にちよつと大きめの扉にたどり着く。

「…… この扉の中に入るぞ。」

「…… 了解。」

武志はカタストロフィーを取り出すと扉に向かってたたきつける。

すると扉はすぐに開き中に入れるようになる。

「開いたよ。さあいこうか。」

「ああ。」

武志達は先へ進んでいく。扉の先は沢山の本が置かれているところだった。

「これは…… 図書館か？」

「…… だろうな。本がたくさんある。」

「数冊くらい持って行っても怒られないかな？」

「さあな。まあやめといた方がいいんじゃないか？」

武志達はさらに奥へと進んでいく。

「しかし先ほどからの爆発音はどうやらこの部屋で発生しているようだ。」

「ああ。まさかこれほどに広いとは思わなかったからな……。」

「とりあえずこの手の図書館は私達洩矢の神々に対する書物とかが置いている可能性が高いからな。それらの書物はできるだけ回収しておく」シユツ

「……！」

「……！」

何かが飛んでくる。恐らく何かの流れ弾だろうか。飛んできた方向を見るとどうやら二人の少女が戦闘を行っているようだ。更にそこから少し目をそらしてみると悪魔らしき人物が気絶している。どっち側の人物かは分からないがやられたという事は容易に想像がつく。

「どうやらあの二人の戦闘のようだな……。」

「…… ああ。見たところ二人共魔法使いの類か何かか？」

「片方…… おそらくあの本を持って戦っているのがこの図書館の司書だろう。そこに伸びている悪魔はそいつの助手か使い魔かっつとこだらうな。」

これはあくまで推察なので絶対ではないがまあ大方あっていることだろう。となると私たちがとる行動は一つ。

「よし。とりあえず神々に対する書物だけ回収するぞ。手分けして探

すから向こうを探してくれ。」

「分かった。ただボスは一人でいいのか？」

「あれだけ派手な戦闘をしているなら他の連中はやられたか避難しているかだろうよ。ここの入り口の扉も強めの結界がかかってたからな。戦闘が終わるまでは安全だろう。」

「……なるほどな。ところでボス、戦闘は終わったようだがどうするんだ？」

「あ？」

みると白黒の魔法使いが勝利している。司書が勝利するよりはマシだがちよつとマズいことになったな。

「おそらくあの白黒は部外者だろう。ただ私たちの姿を見られてはまずい。大無、やっておしまい。」

「分かった。気絶させるだけでいいか？」

「それでいい。」

あの魔法使いはまだ私達には気づいていない。やるなら今のうちだろう。

「???」さくて、パチュリーも倒したことだしちよつと本を借りてから霊夢の所へ合流するとするかね。」バシユ

恐ろしく早い手刀。私じゃなきや見逃しちゃうね。

「……いいぞボス。完全にダウンした。」

「おう、少女相手に容赦ないな。」

戦っているときは気づかなかつたがこの子思ったより若いな。今の人間の成長は早いな。

「まあいいや。ありがとう大無。起き上がる前にさつさと目的の物を探すぞ。」

「分かった。ただこんなに広い図書館で案内もないのに見つかる物なのか？」

「それは問題ない。このチェルベツコの板があればね。」

このチェルベツコの板にある位置検索機能を使えばこの通り、近くにある欲しい物の位置が分かるのである。ああ便利。因みに原理は不明である。神様パワーという事にしておこう。

「…… 便利だなそれ。」

「だろ？とりあえずコピー渡すからそれを頼りにとって来てくれ。」  
「分かった。」

~~~~~10分後~~~~~

「ボス、とりあえず目的の物はすべて回収してきた。」

「ごつちも回収してきたよ。」

「…… 思ったより多くないか？」

目の前には本の山が形成されていた。

「まあ取った物の傾向から犯人が特定できるとも聞く。だからカモフラージュのためにバンデイに料理本、オタワに魔導書、吉美に兵器の本、ラダヴィーニヤのために純文学、そしてお前にはこれ、格闘の師伝書を数冊ずつ取ってきた。」

数冊と言いつつ1種類につき10冊近くあるためかなりの量となっている。武志はそれをチェルベツロの板に収納する。

「ところでボス、本を探している途中に地下へ続く階段を見つけたんだ。」

「お、本当か？なら行ってみようか？」

「行くのはいいんだが、なんか相当な殺気を感じてな、それでも行くのか？」

「何を言ってるんだ。私がいるんだ。どんな奴が来ても余裕さ。」

「だといいいんだが……。」

心配する大無をよそに自信満々で余裕綽々な武志。

「それにそういうところって大体財宝とかが置いてあるもんだぜ？これはもう行くしかないだろ。」

「…… なら行くこうか。」

「武志達は例の地下へとむかうのであった。」

武志達は大無が見つけた地下への階段を下っていく。しかし結構長いこの階段。

「思ったより長いな。」

「…… ああ。」

と、会話になってないような会話をしていると底にたどり着く。

「つと、下に着いたな。」

「ああ。ただこれは……。」

「迷路だなー。」

長い階段の次は迷路。一体この先には何があると言うのか。

「とりあえずこういう時は左手を壁に付けて歩けばいずれ出口に着くって聞いたことがある。」

「…… 本当か？ボス。」

「…… 途中に落とし穴がない事を祈るんだな。」

「（絶句）」

「とりあえず遠回りにはなるが行ってみるぞ。」

~~~~~1時間後~~~~~

「…… やつと…… ついたぞ……。」

「…… なあボス、やっぱり真面目にやった方が早かったんじゃないのか？」

「考えてみる？……ここで迷ったらもう終わりだぞ？」

「…… テレポートで帰ればいいじゃん。」

「」

「…… 忘れてたんだな。」

「いや、面目ない。とりあえずこの扉を開けるぞ。」

「しかし鍵が外からなのが気になるな。」

「ああ。しかも結界がかかっているとはいえ開錠さえすれば大した脅威



ではない。これは……嫌な予感がするな。」

「……どうする？今なら戻れるぞ？」

「ここまで来てそれはない。たとえこの先出てくるのが魔物でも私はそいつと対峙してやろう。さあ！開けるぞ！」バーン

武志は扉を開錠し思いつきり蹴とばす。その先は子供部屋……？

「なんか拍子抜けだな。誰もいないし。」

「ああ……いや後ろか！」

大無が後ろを振りむくとそこには金髪で綺麗な七色の羽をした赤い服の少女が空を飛んでいた。

「あら、流石に気づかれちゃったわ。ずいぶんと勘が鋭いのね。」

「……誰でも気づくだろう。君は誰だ？」

「あら、私のいたところでは自己紹介するときは自分の名前を先に名乗ると聞いたわ。貴方達マナーがなってないのね。」

煽られて大無がちよつとキレてきたので抑える

「私のいたところでは違ったのでね。まあいや。私は洩矢武志。そしてこつちが、」

「……白魔大無だ。」

「私はフランドール・スカーレット。ここで495年過ごしている住人よ。よろしくね。」

「ああ。よろしく。」

周りを見渡すといたるところに血痕があったり壊れた玩具が散乱している。

「ところで君はここに長くいるようだけど寂しくはないのかい？」

「生まれてからずっとここだったから分からないわ。ただ一つ言えるのは……」

「貴方達が新しい遊び道具ってことね！」

「……！」

「……！」

今まで知的でちよつとミステリアス雰囲気だったが人が変わったような雰囲気になる。

「ギア一緒に遊びましょー！」

「来るぞー！」

フランドールがよく分からない鉄の棒を持って突撃してくる。とりあえずカタストロフィーの柄の部分で応戦する。

「凄い力だ……。約500年の狂気はここまで人を狂わせるのか。」

「……ホラーだな。」

そういういつつも圧倒的な弾幕も飛ばしてきて初っ端から熾烈な戦いになってきている。

「とりあえずこつちからもやらないといけないようだ。」

「そのようだな。【虚無殺法「虚空拳」】」

大無は姿を消し後ろに回り込んできつめの一撃をくらわす。フランはその反動で吹き飛ぶがまだまだやれそうだ。

「痛いわネ！まずはアナタと相手しましょー！」【禁忌「レーヴァテイ  
ン」】

するとフランは持っている鉄の棒を発火させ振り回してくる。しかも振り回した場所には弾幕まで出現するというおまけつきだ。

「流石にまずそうだな。【破壊神式防御結界】」

前に使った創造神式防御結界が結界を作って防御するのなら、こちらの破壊神式防御結界は範囲内の弾幕をすべて消去するという防御である。

「……これならどうだ？【虚無殺法「剣舞」】」

大無はナイフを投げまくる。

「援護するよ。【乱射「拡散バレットヘル」】」

さらなる弾幕で追い詰めるがそれでも炎の剣でさばっている。

「おいおい……、化け物かよ……。」

「ただ者ではないな。」

「次ハコレ遊びましょー！」【禁忌「カゴメカゴメ」】

すると武志達を囲むように弾幕が生成される

「なんだこれ。」

「油断するなよ……？」

「後ろの正面だあ〜れ？」

すると弾幕の檻が崩れて襲い掛かってくる！

「やっぱりな！」

「武志達は必至で回避するが思ったより密度が高いためやりにくい  
「やっば消すのが早い！大無！」

「了解した。【結界「虚無の間」】

そう唱えると大無の周りの弾幕が消えていく。

「そういえばスカーレットは吸血鬼の一族だと聞いたな！これでとど  
めだ！【後光「輝かしき創造神の御威光」】

武志を中心に無数のレーザーが輝いて飛んでいく。

「キヤアアアアアアアアア！」

吸血鬼が故、光がきついのかフランは思わず顔を覆う。

「大無、引導を渡してやれ！遊びに付き合うことは無い！」

「了解。【無心拳「雅雀無声の鉄槌」】ドゴシヤ！」

またまた見事な一撃が入りフランは床にたたきつけられる。

「手ごたえはあったが…、やったか…？」

「それはやってない奴なんよ。」

見るとフランはまだ立ち上がろうとしている。

「まだ…遊び足りないわ…！」

「嘘だろ…？」

「いやまて、様子がおかしい。」

先程の狂気にもみれた言動から少し落ち着いた言動になっている  
ことに気付く。ただ確認するすべはないし向こうはやる気なので、

「…とりあえず詳しいことは後だ。今は目の前の敵を黙らせること  
に集中しよう。」

「ギア第二ラウンドよ！」【禁忌「フォーオブアカインド」】

フランは四人が増えて攻撃してくる。

「マジかよ。だがこっちは数が違うんだな。【小分隊「ワンマンプラ  
トウーン」】

向こうが四人ならこっちは20人だ。MR24で応戦しつつ大無  
も、

【「虚無殺法「微風乱舞」】

大無も気配を消しつつ一人ずつコンボを決めている。他の分身が援護しようとするもこちらの弾幕により変に動けないようだ。

「君が最後だ。」ドカツ

最後の一人である本体にもコンボが入る。その隙を見計らい、

「こんどこそ引導を渡してやろう。【破壊神災厄の一撃】」

カタストロフィーを思いっきり振りかぶって攻撃する。

「…さすがにここまで決めたら大丈夫だろう。」

武志達は一応武器を構えてはいるが流石にあの一撃が効いたのか動く気配はない。

「…むしろここまでやって大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫。この子はおそらく吸血鬼だろうしあの技もスペル用に多少威力は下げている。死ぬことは無いだろうさ。」

武志はチエルベツコの板からとあるケースを取り出す。

「何だそれ。」

「これか？記憶改竄装置。」

前に月面戦争の時に依姫に使ったやつである。この吸盤を頭に着けたら様々な記憶が出てくるので好きな記憶を消すことが出来るし、何なら自分の都合のいいように記憶を改ざんすることもできる。

「何でそんな事をするんだ？割と派手に戦ったから誰か来ても可笑しくはないんだが。」

「ここは地下深くだ。多少の戦闘の音も聞こえないだろう。それにこの子は少々困った性格をお持ちでね…。それを直してあげようかと。」

「困った性格とは？」

「どうやら二重人格みたいだな。普段のこの子の性格は知らないけどちよつと知的な感じなんだと思う。それが何かのトリガーによってあの約500年分の狂気を煮詰めたような性格になったってわけさ。なのでこの装置で二重人格の部分をトリガーごと消去してあげようかとね…。おっと、これだな。」

武志は説明しつつ該当の部分丁寧に消去していく。

「…再発したら？」

「ないない。この子はもうここに495年間幽閉されていた事実を肯定的に感じていることだろうさ。」

「…その装置本当に怖いな。」

とりあえず記憶の改竄も終わり、今回の戦闘の記憶もついでに消去しておく。

「…ううん。」

「お目覚めか…!」

「とりあえず変装しておこう。」

武志はフルアーマーに、大無はいつぞやの虚無僧の姿にさせておく。

「…貴方達は…?」

「私たちは貴女を救いに来た者です。」

「勝手にレディーの部屋に押し入って何が救いに来たかしら。自殺願望でもあるの?」

「…失敬しました。貴女はお姉様と仲が悪いので仲直りさせてあげようと思っただのです。」

「レミリアお姉様と…?」

「ええ。」

何気にこの頭首の名前を知らなかったのでありがたい。いい感じに話をつなぐ。

「…お姉様は私を長い間閉じ込めてた。今日だって。お姉様は今頃私を置いて何か大きなことをやっているわ。私はまた仲間外れなよ。」

「それは違います。あれは貴女のためにやっているのです。」

「…え?」

「現在お姉様はこの幻想郷一帯の空を赤い霧で染め上げています。ですが、それは貴女とたくさん外で遊びたいから行っているのです。貴女は長い間に閉じ込められていた。その罪滅ぼしとしてその分一緒に沢山遊びたいからこの異変を行っているのです。」

我ながらここまでの出まかせがスラスラと出てくることに驚く。合ってるかどうかは知らないができれば合ってほしいと祈っている。

る。ここでバンディから通信が入る。

「こちらバンディ。現在館の、館の屋上で巫女と魔法使いがこの頭首らしき人と対峙している。何かご指示を。」

「…分かった。そのまま観察を続けてくれ。決して手を出すな。」

「…了解。」プツリ

武志はすぐさまチエルベツロの板にその状況を映し出す。

「現在、ここの屋上で貴女のお姉様がこの異変に終止符を打ちに来た人たちと戦おうとしています。今ならまだ間に合いますがどうしますか?」

フランは即答で、

「分かった。私、お姉様と仲直りしてくる!ありがとうございます。マスクマンさん♪」

フランは上の方に向かう。つてか今更だがさっきの魔法使いはやっぱり異変を止めに来た側だったか。武志達は変装を解き、これからのことについて考える。

「…さて、これからどうする?」

「とりあえず上に行こうか。」

「分かった。じゃあこの公害を引き起こした奴に制裁を与えに行くか。」

「そういえばそれが目的だったな。」

とりあえずバンディに一報入れておくか。

「バンディ、聞こえるか?」

「ボス。どうした?こちらは今もう一人金髪の子が増えてな。これからどうしようか尋ねようと思ってたんだ。」

フランは無事にそのお姉様の所まで行ったみたいで安堵する。

「とりあえず決着がつくまではそのままで、決着がつき次第、元からいた頭首の方に一撃入れて。」

「了解。」プツリ

「…さて、これでよし。さて、私達も上へ向かうか。」  
「分かった。」

武志達も急いで上の方へ向かうのであった。

PART・79 愛と絆の姉妹戦

武志達は上に行き、近くの屋根から戦いを観察する。

「あの金髪がフランという事はあの紫の髪の人が姉のレミリアか？」  
「そうだな。」

双眼鏡片手に観察する。何を言っているのかまでは聞こえないがあの様子だと無事に和解はできたことだろう。

「まあ無事に和解してるようだしこの迷惑行為への制裁を一撃入れて帰りますか。」

「…ぶれないなボスは。」

観察していると戦闘が始まる。ってか大分会話長かったんだな。

巫女は札で、魔法使いは八卦炉みたいなものを構えつつ様々なアイテムを使って攻撃、レミリアは槍、フランは先程の炎の剣を使って応戦している。

「…こうしてみると攻撃手段って様々なのがあるんだな。」

「だなー。」

そうこうしていると大技なのかレミリアの周りに巨大な魔法陣が展開されレーザーと弾幕が展開される。フランもそれに合わせて巫女と魔法使いの周りに小型の魔法陣を展開させ、囲うように弾幕を出していく。

「…あの子まだ技隠し持っていたのか。」

「本当にお遊びだったんじゃない？まあこっちがやりすぎたつてもあるけど。」

「じゃあ茶々でも入れるか。」

「こちら武志。バンデイ、あの魔法陣と違和感がないように紅白か白黒を狙撃することってできるか？」

「朝飯前だ。紅白を狙う。」パシユ

放たれた弾は寸前の所で回避される。あの巫女の勘は鋭いようで。巫女は辺りを確認しつつ攻撃をよけているがバンデイは割と遠くから狙撃しているし私たちは大無の力で気配を消しているから気づくはずはない。案の定諦めたのか暇が無くなったのかまた回避に専念し

ているようだ。

「…嘘だろ？悪くないと思っただけだな。」

「ああ。偶然か、それとも…？」

バンデイの狙撃が珍しく当たらないことにより変な空気が流れる。「…いつかあの二人とも戦う日が来るだろう。その時に備えて戦いのスタイルとか癖を見た方がいいだろうな。もしかしたらそれで何が分かるかもしれない。」

「了解。」

三人は観察に勤しむ…。

~~~~~ 霊夢 side ~~~~~

全くどうなっているのよ！魔理沙は誰かに気絶させられたというし私も明らかにレミリアらの攻撃じゃない弾が飛んできた！一体この館には何がいるのよ！

それに相手の攻撃も激しくなってきた。ここは手分けした方が早そうね。

「魔理沙！あなたはフランの方をお願い！私はレミリアの方をやるわ！」

「分かったぜ！」

二人は手分けして各個撃破を目指すようだ。

「あんたの相手は私よ！覚悟しなさい！」

「いいわ。かかってきなさい。」

霊夢は距離を詰め接近戦に持ち込む。レミリアもグングニル片手に応戦する。だが流石に身体能力に差がありすぎるのかはじかれる。その隙に、

「あら。それは悪手じゃないかしら。【紅符「スカーレットシュート」】

レミリアは紅色の大きな球をいくつか発射する。霊夢はそれをもとたやすく避ける。

「まだまだ！」

続けて発射するがそれも簡単に避けられる。

「鬱陶しいわね！これでもくらいなさい！」

「甘いわね！」

霊夢はお札で攻撃するが物量の前にはじかれる。だが、

ボンボンボン！

「これは…？」

見ると魔理沙は四人のフランと忙しそうにしている。流れ弾にでもあたったのかしら？

「とりあえず今がチャンス！」

霊夢はお祓い棒とお札を構えて距離を詰めるが、

「ちっ…！させないわよ！」【呪詛「ヴラド・ツェペシユの呪い」】

するとナイフと紅い弾幕が辺り一面に展開されるが、それは全く当たらず、すぐに距離を詰められる。

「はっ！」

逃げるのが遅れたせいなのか攻撃に被弾する。

「まだ私はやられるわけにはいかないわ…。皆に示しがつかなくなるじゃない…！」

「私はそんなの関係ないわ。早くこの霧を収めてほしいだけなの。」

「こちらの気も知らないで！これでおしまいよ！」【レッドマジック】

するとあたり一面に真っ赤な弾幕が生成される。流星の密度に霊夢も少し圧倒される。

「… あんたにどんな事情があるのかは知らないけれど、少なくともあんたの行いのせいで皆迷惑してるの。そっちがその気なら私だって考えがあるわ。」

霊夢はそう言いまた距離を詰める。

「… くっ！」

密度が上がるが霊夢は止まらない。そして、

「これで終いよ。【霊符「夢想封印」】

すると七つの光輝く大きな弾幕が追尾してレミリアを襲う。レミリアの放つ弾幕もむしろかき消されている始末。そして、
ピチューン

レミリアは被弾しこの戦いに幕を閉じるのであった。

「おう！そっちも終わったのか！」

「ええ。あんたは？」

「何とか勝てたぜ！」

「じゃあフランを日陰になりそうなところに運んでくれないかしら。

私はレミリアを運ぶわ。」

「分かったのぜ。」

~~~~~武志side~~~~~

「…勝負がついたようだな。」

「そのようだ。」

この様子だと勝利したのは巫女と魔法使いのペアだろう。二人共かなりの実力者と思われる。

「ボス、どうしますか？」

「そうだな…。とりあえず二人がレミリアたちを近くに運ぶみたいだから下ろしたタイミングでレミリアに追い打ちすることってできるか？」

「分かった。」

「あと先程の援護も上々だった。ありがとうな。」

「いいって事よ。」プツリ

攻撃命令も出した。どうなるか見ものだな。

「…さて、私たちもバンディと合流しよう。この後ここにさらなる攻撃を仕掛けるからここにいと危ない。」

「了解。」

二人は退却を始めるのであった。

~~~~~霊夢side~~~~~

「運び終えたわね。」

「…ううん。」

「… つと、起きたようね。レミリア、この霧を元に戻してもらえ
?」

「… わかったわよ。… これよし。これでじきに霧は晴れる
わ。私たちの負けよ。」

すると霧の間から微かに青空が見え始める。

「おい霊夢！青空だぜ！」

「やつとこの霧も晴れるのね。」

「うう… わたしまけちゃったの？」

続いてフランも起きる。

「ええ。でもあなたもよく頑張ったわ。この戦いは負けちゃったけど
また新たに頑張りまsh」

パシユ

「… え？」

レミリアの眉間に弾が命中し、レミリアはまた倒れる。

「敵の攻撃か!？」

「ええ。まだ誰かいるようね。」

「お姉様ー！ー！」

周りが阿鼻叫喚の中、霊夢は近くの木に光が反射したのが見える。

「あそこか！」

霊夢はそこに行こうとするが、その時、上空にとあるポータルが出
来る。

「霊夢！上だ！」

「上？」

するとそこから貨物列車が落ちてくる。そう。武志の【爆符「無人
爆薬積載貨物列車」】の奴である。貨物列車はそのまま落ちた後近く
に激突する。そして、

ドゴオーーーーーー！

すさまじい威力の大爆発を発生させる。一応爆弾はそこそこに抑
えているためいつもよりは火力控えめだがそれでも凄い威力である。

~~~~~武志side~~~~~

「…ボス、派手にやったな。」

「まあね。だが彼女たちは無事のようにだ。」

「…え？」

チエルベツロの板を見せる。そこには封魔陣を展開して爆発を耐え忍んだ霊夢達の姿があった。

「だが紅魔館は半壊だな。他の連中が無事だといいいけど。」

見た感じ犠牲者はいないみたいだが紅魔館の屋根には大穴が開いている。

「おーい、ボス。」

向こうからバンデイが走ってくる。

「おつと、よくやったバンデイ。」

「ああ。一瞬気付かれそうになったがああ爆発は…？」

「ああ。ちよつと置き土産をな。」

「は、はあ。」

「…てか気づかれそうになったとは？」

「ああ。恐らくスコープの光が一瞬だけ反射したのかな、明らかにこつちに敵意を見せた瞬間があったんだ。その直後に爆発があったからこつちへは来なかったけど。」

「なるほどな…。」

とはいえ一瞬の反射に気付く方もなかなかである。やっぱりあの巫女はただ者ではなさそうだ。

「とりあえず早めに戻るぞ。」

「了解。」

武志達は諏訪洩矢郷へ帰っていくのだった…。そしてこの話を聞いたオタワに長々と叱られるのはまた別のお話…。

PART・ 80 宴会。そして不穏な影（霊夢編）

異変が終わって数日後、霊夢はじめ紅魔館メンバーや魔理沙は博麗神社で小さめの宴会をしていた。

「しかしあんたが異変ねえ。」

「こつちだつて色々あったのよ。結果は残念だったけどね。」

「流石に見過ごせなかったからね。」

「よっ、霊夢！」

「魔理沙、遅いじゃない。」

「いや、ちよつとこれを作ってたら遅れちまつてな。飲むか？」

魔理沙が差し出したのは禍々しい色をしたスープである。明らかに怪しい物のためその場にいた霊夢とレミリアは警戒をする。

「魔理沙… それ飲んで大丈夫なの？」

「大丈夫だぜ！材料も安全なものしか使ってないし、ちよつと見た目はアレだが味は保証するぜ！」

「… そこまで言うなら魔理沙が飲んでみなさいよ。」

「… 遠慮しとくぜ。」

魔理沙はスープが入ったお椀を霊夢に押し付けて逃げようとする。

「全く…。自分が飲めないものを人に押し付けるんじゃないわよ…。… ところで魔理沙、ちよつといいかしら？」

霊夢は逃げようとした魔理沙を呼び止める。

「どうしたんだぜ？」

「そういえばあんた大図書館の真ん中で寝てたけどあれはどうしたのよ。」

「あー、あれか。なんか後ろから誰かに殴られたんだよな。あまりに重い一撃だったからそのまま気絶しちゃったぜ☆」

語尾に星が付きそうなのりで言うが決してそんなことは無いと思う。

「… 誰がやったかは覚えてないの？」

「気配すら感じなかったから覚えてないんだぜ。ただあれはかなりのやり手な予感がするな。」

「なるほどね……。レミリアは何か心当たりないの?」

「心当たりね……。咲夜なら気配を消すのは簡単かもだけど彼女はナイフを使うからそんな真似はしないとと思うし……」

「ええ。同感ですわ。」

「おつ、いたのか咲夜。」

「ええ。ちよつと裏方の準備がありましたね、続けてもらって構いませんわ。」

「そうね……。美鈴なら貴女を気絶させるのは簡単かもだけど彼女は最初にやられて以降ずつと気絶してたらしいから違うわね……」

確かに彼女は武術の達人だったわねとも思ってたけど最初に魔理沙がマスタースパークで門ごと吹き飛ばしてからは気にも留めなかったと思う霊夢であつた。

「……まあ一番有力なのは最後私を狙撃した奴がいるじゃない?」

「あーいたわね! 戦闘中なんか変な妨害があつたと思つたけどそれらも彼奴がやったのかしら。」

「マジ? 私は気づかなかつたぜ?……つてか大丈夫だつたのか?」

「ええ。弾幕ごっこ用の弾を高威力にしたような感じだつたからね。痛かつたけど別について感じだつたわ。」

「マジかよ……」

「そしてその後爆弾が降ってきたじゃない?」

「私に対処したやつね。危なかつたわよあれ。」

「その爆弾魔と狙撃手が手を組んでいたとしたら……? さらにその格闘家も別にいたとしたら……?」

全員がその敵の想像をする。

「……得体のしれない敵程怖い物はないんだぜ。」

「同感ね。厄介な第三陣営がいそうだわ。」

「……そういえばフランが仲直りしてくれた時、親切なマスクマン二人が教えてくれたのとか言つてたわね。」

「あーそういえば! もしかしてそのマスクマン二人が……」

「ええ。爆弾魔と格闘家つて線もありそうね。生憎詳しい所までは覚えてないって言つてたけど。」

「なんだそれ。」

「パチエ曰く高度な認識阻害魔法とかがかけられていた可能性があるとか。」

「マジかよ、。そんな奴らを相手にしないといけないのか？」

「横やりを入れるならまだしも完全に牙をむいてこないことを祈るばかりね。」

「全くですわ。最も私達紅魔館の方々からすれば完全に牙を向かれていますのようなものですけども。」

四人の間に沈黙が流れる。

「… そうですねば魔理沙、パチエの本は返してあげた方が良いと思うわよ？また異変に乗じて本が消えたとか言ってたわ。」

「え、本なんて盗ってないけどな。… ってたて、今なんて言った？」

「え… ？パチエの本は返してあげた方が良いと思うわ。また異変に乗じて本が消えたとか言ってたわねって… まさか！」

「どうやら本を盗んだのもあいつらのようね？」

「全く、はた迷惑な話だぜ。勝手に人のせいにするなんてな。」

魔理沙は内心”また今度本を借りに向かおうかな”なんて思うのであった。

「それで、何が撮られたんだぜ？」

「確か、日本神話の神様の本、料理本、魔導書。それも黒魔術関連の物が中心ね。更に軍事関連の本や純文学、美鈴宛ての格闘書も多く取られたとか言ってたわね。更にアウトドア関連の本や図鑑関連、辞書も数冊取られたとか言ってたし、まだ確認できてないだけでいくつか取られてるんじゃないかしら…？」

「… これらからある程度推測できないかしら？」

「… 爆弾魔、狙撃手、格闘家から抜いて考えると日本神話の神様と黒魔術使いがいるとか… ？あと料理家とアウトドア大好きな人？」

「… あんまりアテには出来なさそうね。」

「第一盗った本から推測するというのが間違いなんだぜ。本なんて多少の興味さえあれば簡単に手に取れるからな。単純に盗ったやつらがその辺の奴に興味あったんじゃないか？まあ黒魔術の本は流石に

危ないけど。」

「… やけに詳しいわね。」

「これでも私は魔法使いだからな！」

「… だとしても厄介な連中がいるのは変わらない事実。いつどこに現れるかは知らないけどいつ現れてもいい準備はした方が良さそうね。」

「だな！」

「そうですね。」

そんなこんなで少人数ながら宴会は続くのであった…。

~~~~~紅魔郷編 完~~~~~


第十二章 東方妖々夢 く終わらない冬、春を探して

PART・81 さつむ!

紅霧異変も終わり、夏が過ぎ、冬になり、年が明け、春になったころ。。。。

武志達は諏訪洩矢郷にてのんびりしていた。

「いやー幻想郷で買い物するのも悪くないがやっぱこっちで買い物する方が楽しいなー!」

「変装しなくてもいいのは楽ですよね。」

基本的に人里で買い物する時は町人の変装をする必要があるため手間がかかるのである。でも向こうの工芸品も好きなのでたまに行ってしまうのだが。

「まさか幻想郷が豪雪地帯なんてなあ。」

「さすがにあの時は驚きましたよね。」

幻想郷の冬は基本的に雪が物凄い積もるため大変なのである。雪かきも最初は人力で行っていたが最近では洩矢大社周辺に結界を張ってこれ以上雪が積もらないようにしている。そのくらい雪が降るのである。

「でももう5月ですよ?そろそろ結界を畳んでもいいんじゃないですか?」

「…:そういうえは忘れてたな。また後で畳みに行くか。」

結界を張るのにも力を使うためいらぬ結界を畳むのは割と常識である。イマイチピンと来ない人は電気代などに置き換えるとわかりやすいだろう。

「まあとりあえず今日は楽しもうか。」

「そうですね。」

武志とラダヴィーニヤは買い物を楽しむ。

翌日、武志とラダヴィーニヤは結界を畳みに幻想郷へ向かう。だが、

「ぎつむ！」

「寒い〜〜！」

幻想郷は5月現在も大雪。桜どころか新緑の気配もない。完全に5月の暖かい気候を想像して行ったため、思わぬ寒さに悶絶する。

「とりあえずこうだ！」

「…寒く無くなりましたね？」

「我ながら便利な能力だ。」

武志の能力で身の回りに結界を作り、その中だけ5月の暖かい気候になる。

「…まあ長く生きていればこんな異常気象もあるか。」

「…そんな訳無いですよね？」

「いや？十数年後にはほら、6月で40℃を超えるところもあるし、5月で平均気温30℃の所がざらにあるから、その逆があってもおかしくないだろう。」

「…これ本当ですか？」

武志は今年の気温の表を見せながら説明する。実際今年は暑すぎたもんね。

「という訳でそんな年もあるだろう。しかし、なんか結界の効果貫通してないか…？」

思えば確かに物凄い雪が積もっているような気もする。

「確かにそうですね。また雪かきするんですか？」

「…あれは別に冬の風物詩を楽しもうってだけでする必要は無いんだよな。ほら、この通り。」

「…最初から全部こうするので良かったのでは…？」

武志は能力で境内の雪を全部消す。本当に便利な能力である。

「まあ、どうせこれも異常気象の1種だ。暫くしたら雪も解けて春になるだろう。」

「…そう、なんですかね？」

「この私が言うんだから間違いないさ。」

「まあ、マスターが言うならそうなんでしょうね。」

実際地球作ったのも武志なのでいちばん信用ができる訳ではある

が、

(…5月でこんな雪降ることあるのか?)

実際武志もこれはおかしいと違和感を抱くのであった。

「…とりあえず結界をもう少し強くした。これで暫くは大丈夫だろう。」

「だといいですけどね。」

「とりあえず、この件は龍神様こと母さんに相談する必要があるだろう。」

「…でしたら私も他の方々に知らせてきましようか?」

「ああ。よろしく頼む。」

「分かりました。」

「とりあえず戻ろう。長居は無用だ。」

2人は諏訪洩矢郷に戻るのであった。

PART・ 82 理都からの手紙

諏訪洩矢郷に戻った2人は早速仕事に取り掛かる。ラダヴィーニヤはこの事を他の方の仲間たちに知らせ、武志は千古にこの事を問い合わせる。

チエルベツロの板から千古の姿が飛び出る。これが武志流のテレビ電話である。

「もしもし龍神様。武志だ。」

「あらく♪久しぶりね♪」

「挨拶はいい。ちよつと緊急事態でな。現在幻想郷が季節外れの大雪なんだが、他の所はどうなってる?」

「えくそうなの?他の所は……、うん。今日は爽やかな晴れ模様ね♪雪なんてどこにも降ってないわ♪」

「…マジ?」

「ええ♪確かに幻想郷だけは雪のようね♪」

「…誰かが人工的に雪をふらせているというのか…?」

「んく、それはまだ分からないけどその可能性はありそうね。一応幻想郷にもその手の力に長けた妖怪はいるみたいだからね。」

千古の横にウインドウが出てくる。そこにはレティ・ホワイトロツクという人物とチルノという人物が出ている。

「あなたがこの雪を止めさせたいというのなら、1度2人に会ってみるといいわ♪もしかしたら何か分かるかもね♪」

「…感謝する。」

「いいのよ♪子の悩みに付き合うのも親の務めってモノだし♪それに、神界の方でも少しだけ話題になってるのよ。」なんてここだけこんなに大雪が続くんだけだ”って。」

「続いているのか?」

「かれこれ1ヶ月くらいね。」

よく神社潰れなかったなと思ったが、それよりもあの雪はそんなに続いてたのか…。

「とりあえずこちらの方でも少し調べてみる。ありがとう。」

「いえいえ、武志も頑張った」ピロン

武志は通話を切る。それを見計らってカラダヴィーニヤが入ってきた。

「…ラダヴィーニヤ、早いな。」

「マスター宛に手紙が届いてまして。」

「…手紙？」

手紙を見ると、どうやら理都からのようだ。

「理都からか…。」

「確かマスターの弟さんでしたっけ…？」

「ああそうだ。」

手紙を開封して早速読んでみる。

『兄さん、元気ですか？こちらは元気です。旧地獄はいつも活気があつてとても有意義な生活を送っています。ただ、地上の方は5月とこのにまだ大雪が続いています。調べたところ“春度”と呼ばれるものが不足しているらしいです。その春度がどこに向かっているのかを調べたところ、遙か上空の方に沢山集まっています。遥か上空には冥界というところがあります。冥界には西行寺幽々子という亡霊とその従者がいます。もしかしたらその2人が何か関係あるのかもしれない。ですが、私は既に死んだと思われる身。それに幽々子の方には従者まで顔が知られています。そのため迂闊には動けないため兄さんに調査を依頼します。聞いたところによると既に動いている人がいるようです。その人たちと協力するのも手でしょう。健闘を祈っています。』

「…冥界か…。」

「更に下になんか書いてありますよ？」

『P. S. 冥界にはたぐさんの桜がありとても綺麗な所です。但し、その中に1本、とても大きい桜があります。それには十分気をつけてください。あれは西行妖といって人の生気を吸う殺人桜です。現在は嚴重に封印しているので大丈夫だとは思いますが、誤って封印を解かないよう気をつけてください。解いたが最後幻想郷が滅びま

す。』

「…怖いな。」

「その西行妖の封印ってどのくらい嚴重なのでしょうね？」

「分からないが理都が嚴重に封印したと言うからには大丈夫だろう。封印術に関しては私より上手だからな。」

武志は封印＝消滅なのでそもそも封印という概念がないからである。最も、そっちの方が安全ではあるのだが。

「…だけどそれを解くためにその春度とやらを集めてるとしたら…？」

「…まさかな。」

武志の中でも少し嫌な予感がする。

「桜が開花したら滅びると考えると春度とか最適なものでは…？」

「…。」

武志は少し考え、

「ラダヴィーニャー！急いで吉美とオタワを招集してくれ！急いで冥界に向かう！」

「…分かりました！」

数分後、吉美とオタワがこっちに来る。

「話は聞いていると思うが今から幻想郷に向かう。一応この2人に会ってから冥界に向かう。」

「レティ・ホワイトロックと…。」

「チルノね。この2人はなんの関係が？」

「もしかしたらこの雪を止ませることが出来るかもだからな。」

「なるほどね。」

一応雪を止めるのも目的ではあるため2人へのコンタクトも目標に入れる。

「しかし吉美は分かるけどなんで私も？」

「人数が多い方がいいからな。あとは最悪バレても顔が割れない。」

まあオタワは紅魔館組には顔割れてるらしいし吉美も1回幻想郷創設時に連れていった気がするが気にしない事とする。

「…まあ技が2人とも派手だからな。」

「確かにね。」

「それは言えてるわ。」

「とりあえず今から早速向かう。各自、気を引き締めるように。」
「分かりました。」

3人は早速白銀の幻想郷へ向かうのであった…。

PART・ 83 幻想郷雪中行軍

武志達は幻想郷でチルノがいるとされる霧の湖周辺に来ていた。

「本当にこの辺にいるんですか？」

「そのはずなんだがな。」

あたりを見渡しても誰もいない。仕方がないがとある手段を使うとしよう。

「あんまり目立つからやりたくなかったが仕方ない。」

「… え？」

武志は大きく息を吸うとこう叫ぶ。

「チルノのバカーーーーーー！」

「…。」

武志の叫び声だけがむなしく響く。やっぱり意味なかったのかと思っただその瞬間、

「おい！この辺からあたいをバカと呼ぶ声が聞こえたぞ！このサイキョーのチルノ様が直々にわからせてやるぞ！あたいがサイキョーってことをな！」

「チルノちゃん、待って〜。」

何という事でしょう。チルノと名乗る少女とその後を追う緑の髪をした妖精が食いついてきたではありませんか。

「ほらな。」

「… うそでしょ？」

「てつきり寒さでおかしくなったかと思っただけどそんなことなかったんだね。」

部下からのコメントが痛い気にならない事とする。

「… おい！そのヤロー！あたいの事をバカと言ったのはお前か？」

「… ああそうだ。いきなり罵倒してすまなかった。少し君に用があつてね。」

「あたいをバカと呼ぶなんてサイテー！これでも喰らいなさい！【凍符「パーフェクトフリーズ」！】」

チルノはいきなり攻撃してくるが……。あれ、この弾幕もしかして正面が安全だったりする？とにかく攻撃が来ないので淡々と話を続ける。

「少し君に聞きたいことがあってね。この雪を降らせているのは貴女かい？」

「ふふん！これもあたいがサイキョーだからさ！このあたいがサイキョーだからこんなに雪が降ってるのよ。」

「そうかそうか。なら話が早い。」

武志はカタストロフィーを構え、素早くフルスイングする。チルノは吹っ飛ばされて遠くへ消えていった。

「……さて、君はどうしようか。」

武志は一緒にいた緑の髪の少女にも圧をかける。

「すすすみません！チルノちゃんがなんか変な事を言つて！」

「……というと？」

「この雪はチルノちゃんが降らせているわけではなくて随分前から自然に降っているものです。それを調子に乗って自分が降らせているように振る舞っているものですから……。ほんとうにすみません！」

つまり、チルノはただの自意識過剰という奴でこの大雪を降らせているわけではないのか。そうなるとレティ・ホワイトロックを無視して急いで冥界に行った方が得策か……？

「マスター、これって、」

「ただの吹き飛ばし損って奴だな。」

「……まあチルノちゃんも悪いですから気にしないでください。」

「……分かった。ところで、レティ・ホワイトロックって方を知らないか？」

「ああ、その方でしたら向こうに。」

緑髪の妖精は向こうを指さす。すると確かにレティが見える。

「ありがとうございます。ご協力に感謝いたします。」

武志達は足早にそちらへ向かう。

「すみませくん。」

「あら、今度は誰かしら？」

「この雪ってあなたが降らせているものですか？」

「いいえ？ 私は関係ないわ。ふざけて私のせいですって言ったら霊夢と魔理沙にやられちゃってね。もう最悪だわ。」

「霊夢と魔理沙って…？」

「あら、知らないの？ 霊夢は博麗神社に仕えている巫女さんでこのような異変の時には解決に向かっていているのよ。魔理沙は霊夢の友人の魔法使いで日々魔法の鍛錬を頑張っているらしいわね。」

「…なるほど。ありがとうございます。」

どうやら前に紅魔館でレミリアと戦ってた紅白巫女が霊夢、白黒魔法使いの方が魔理沙らしいな。またいつか対峙することがあるかもしれないので覚えておこう。

武志達は効きたい情報も聞けたので今後の方針を少し練ることにする。

「この様子だと冥界にいる連中が春度を集めているから大雪が降っているみたいだな。」

「そうだね。だったら冥界に急いだ方が良くない？ 仮に西行妖の復活を目論んでいるなら急いで止めた方が良くない？」

「私も吉美の意見には賛成。ところで冥界ってどこにあるの？」

「幻想郷の上空らしいが…、とりあえず飛ぶか。」

武志達は上空に向かって飛び始める。10分くらい上昇していると、

「温かくなってきたな。」

「これはまさしく春の陽気だね。」

「やっぱり冥界に春度とやらが集まっているのね。」

「はるですよ。」

「「!」」

気づけばなんか一人増えている。

「えっと君は…？」

「私はリリーホワイト。春を告げる妖精なのですよ。ほら、はるですよ。」

そのままどこかへ飛んでいく。

「… 本当に春なんだな。」

「そうだね。… つと、マスター、見て！」

武志が振り返るとそこには大きな門と、その奥に吸い込まれていくピンク色の桜の花びらみたいなのが見えるのであった…。

「あれが冥界への入口か…？」

「つてことは吸い込まれているのが春度？なんか桜の花びらみたいだね。」

「…量多くない？」

確かに尋常じゃない量の春度が集められている。これは急いだ方が良さそうだ。

見ると結界の一部に穴が空いている。どうやらそこから侵入できそうさ。

「…行くぞと言いたいがその前にこれをつけて欲しい。」

「…何よこれ。」

武志が2人に手渡したのは特製のグラスサンと、通気口付きのちよつといい感じのマスク。因みに、グラスサンは武志のとはまた別物であるが、効果はほぼ同じである。

「…まあ、正体をわからなくする効果もあるが、1人眩しい弾幕を使ってるやつが居るからな。その対策だ。」

「…傍から見たら不審者よね？それ。」

「…実際不審者どころか侵入者になるんだが？」

まあ今からすることは不法侵入に近いためあながち間違っては無い。

「…行くぞ。」

武志はお得意の衣装チェンジをしていつもの潜入時の服装に着替える。そして、偶然空いていた結界の穴を通り、冥界へと進むのであった…。

PART・84 冥界にて

冥界へ足を踏み入れた武志達は長い石段を登る。

「ちよつと長くない？この階段。」

かれこれ数分上っているがまだ先が見えない。気分は終わりの見えない登山をしている気分だ。

「しかも何が恐ろしいかってこの辺から周辺の石灯籠が破壊されてるんだよね。」

少し前ぐらいから灯りとして私たちを導いていた石灯籠が、刀で斬られたような姿になっている。

「凄腕の剣士と石をも斬れる刀があるんだろうな。」

「…そんな奴がこの先にいるんですか？」

「だろうな。ただ刀に至っては唐夜叉丸の方がいいぞ？鋼鉄も斬れるし石なんてリングゴを切るようなものさ。」

あまりにも切れ味が良すぎて普段の戦いでは刀や剣を斬れないようにする術を使う。そうでもしないと速攻で相手の刀が斬られて終わりであるからだ。

「…つと、そろそろ終点が見えてきたようだ。急ごう。」

…ところで、先程からなんか戦闘の音が聞こえるが、これが気の所為であることを信じたい。

武志達は階段のてっぺんまで登る。そこには絶賛戦闘中の霊夢と魔理沙、そして冥界の主であろう人と、

「…何だこの人」

手前で伸びてる剣士らしき人の姿があった…。

「…大方冥界の奴だろうな。先程の石灯籠を斬り捨てたやつも多分こいつだろう。」

「…だとしたら相当なやり手だね。どうする？」

「…まあ放置でいいだろ。」

わざわざ敵を増やす理由もないので放置とする。

「それよりも、西行妖だっけ？なんか花咲そうな雰囲気ないか？」

「言われてみれば…。封印している割にはなんか蕾っぽいものがちら

ほら…。」

「そうね。それに周りの木を見ても桜だらけ。あれは時間の問題ね。」
「…急ぐぞー！」

武志達は急いで西行妖の方へ向かう。勿論桜の陰に隠れながら。
武志達が近寄る頃には戦闘も終了したようで、何かしらの会話が聞こえる。

~~~~~

「…さ、幻想郷の春を返してもらおうか。」

「仕方ないわね。せつかく満開になるところだったのに。」

そういつて幽々子が西行妖に近づいたとたん、

「…え？」

西行妖が一斉に開花する。

「!!!」

その瞬間、幽々子の姿が黒く染まる。その間も西行妖はどんどん開花する。

「…おい、どうなってんだあれ！」

「西行妖の封印が解けた…？」

「…よく分からないけど最高に嫌な予感がするわ！」

~~~~~

「なぜ開花した…！」

「…おそらく私たちが来たことにより封印に必要な春度が足りたとか？」

「…聞こえますかマスターさん！私です！」

いきなりラダヴィーニヤが切羽詰まった様子で通信をかけてくる。

「西行妖が開花したそうです！封印の量的に満開までとはいかなさそうですがそれでも八分咲きくらいは覚悟してください！」

「…わかった。満開じゃないなら何とかなるだろう。」

「…分かりました。くれぐれも西行妖を野放しにしないでください。最悪冥界ごと消し去ってしまったても構わないのでなんとかして封印なり消滅なり、とにかくなんとかしろとのことですよ。」

「…誰から？」

「龍神様からです。」

「…分かった。何とかする。」プツッ

通信を切る。とりあえずどうするか考えないといけないようだ。

「…二人共、とりあえず西行妖に攻撃を敢行してくれ。私は嚴重な封印術式をこの刀にインプットする。」

「分かりました。」

「10分…いや5分くらいあれば行ける。とにかく耐えてくれ。」

「うおおおくん」

そのとき、急にあたり一面が眩しくなり、更には何かがうなる音が聞こえる。

「ちっ、どうやら目覚めたみたいだ。急いで奴を相手にしてくれ！」

「分かりました！」

二人は西行妖討伐のために霊夢達と合流する。向かった先ではすでに霊夢達が戦っているのが見えた。

「…さて、急がないといけないな。」

武志は急いで強力な封印術を作成するのであった。

PART・85 VS 西行妖 〱 伐採も神様のお仕事です〱

〱Side 霊夢達〱

…困ったわね。異変の黒幕の幽々子を倒したら、西行妖の封印が溶けて攻撃し始めたわ。

「…攻撃が激しいわ。何とかならないの？霊夢。」

「何とかなる方法が知りたいわよ。」

霊夢達はとりあえず攻撃を躲しつつ、西行妖に攻撃を仕掛けるが全く聞く気配がない。

「…ここまで手応えがないのも気味悪いわね。」

「そもそも大木だから効いてないんじゃないか？」

「一理ありそうで怖いわね。」

その時、背後からなにかの気配を感じる。

「…魔理沙、後ろ！」

「…え？」

〱Side 吉美&オタワ〱

「…マスターは封印すると言ったけど別に破壊しても構わないよね？」

「…物騒だけど良いんじゃない？破壊する気概で行かないと多分攻撃入らないわよ？あの様子だと。」

「OK。じゃあ遠慮なく行くね♪【兵器「パンジャンドラム制御不能」】」

すると多数のパンジャンドラムが生成され、西行妖目掛けて転がっていく。ただ、転がっていくだけのものに制御なんて物はなく、いくつかあらぬ方向に転がっていき、

ドガアアアアン

大爆発を起こす。

「beautiful！」

「…なんか巻き込まれてなかった？」

「まあ大丈夫じゃない？ほら。」

見ると結界を貼って防いだように見える。

「…まだ残党がいたのかしら？」

「ヒエツ」

「…厄介な奴がいたようね。」

いきなり後ろからナイフを突き立てられる。

「ええ。厄介な奴ですわ。貴方達も西行妖を復活させたいのかしら？」

「いいえ。私達は西行妖の再封印に来たのよ。ところで西行妖の方はいいのかしら？怒った奴がこっちに攻撃を仕掛けてくるわよ。」

「…！」

急いで3人とも避ける。…あのメイドさん、さっきもそうだけど瞬間移動してない？

「…アイツ、霊夢らと会話してるわね。これで誤解が解けると良いんだけど。」

「…来るよ！」

「分かったわ！【黒魔術「暴君の魔法陣」】」

「援護するよ！【古代兵器「エンチャントアロー」】」

禍々しい魔法陣が生成され、そこから大量の弾幕が流れ込む。更に、火矢も大量に降ってくる。

「…負けてられないわね！【霊符「夢想封印・集」】」

「そうだな！【魔符「スターダストレヴァリエ」】」

「…私達もいきますわ。【幻符「殺人ドール」】」

更にいくつもの大きい弾に、多数の星の形をした弾幕と大量のナイフが降り注ぐ。が、

「…嘘だろ？」

「…全く効いていないようね。」

「…火力が足りないのかな？」

「…それはないと思うわ。」

見るからにピンピンしている。やっぱり封印を待たないの意味が

ないのか。

「… とりあえずもう少しやってみよう。危ないから下がっててね？」

【爆符「ミサイルの雨は地に降り注ぐ」】

前にマスターの技から着想を得たスペルを撃つ。多数のミサイルが西行妖めがけて降り注ぐ。

「Oh…。」

「ほぼ効いてないじゃないの!」

「ありや一筋縄ではないかなくてことかく?」

すると西行妖も大量の蝶の弾幕を放ってくる。【反魂蝶 ―八分咲―】

「綺麗だね…。」

「バツカ、見とれてる場合じゃないわよ!」

「ああ、迎撃しないとまずそうだな!」

そう言いつつ霊夢や魔理沙、咲夜は回避していく。オタワと吉美も続けて避けるが、霊夢達ほどスタイリッシュではない。

「やっぱ避けるのは性に合わないや。【オペレーション・G】」

すると戦車や装甲車、更には飛行機までもが出現し、一斉に西行妖に向かって攻撃を仕掛ける…が、

「… 飛行機墜ちてない?」

「…。」

どうやら蝶が多すぎて撃墜された様子。これがバードストライクならぬバタフライストライクか。

「ま、まあ、弾幕は打ち消せたからセーフじゃない?」

しかし打ち消せているとはいえ物量が間に合わないようで、また密度が増えてくる。

「仕方ないわね…。私も一撃入れてあげるわ。」

「… いや、いい。」

不意に後ろから声が聞こえる。

「… マスター!」

「封印は出来上がった。後は私に任せておけ。」

「… 分かった。」

武志は黒金刃を構えて【破壊神式防衛結界】を唱え、すべての弾幕を消して、西行妖に単騎で突っ込む。

「西行妖、私が相手だ！」

「… またなんか増えたぜ！」

「… おそらくあのお二方の仲間でしょう。ですが、相手が西行妖なら無視して問題ないのでは？」

「そうね。それにあれだけの弾幕を一瞬で消す力も持ち合わせている。あれはかなりの実力者よ。」

武志は一気に距離を詰め、黒金刃で攻撃をする。元々がチエーンソーのため、大木相手には効率が良い。

流石に西行妖も枝や根っこで応戦するが、黒金刃の前には無力。あつという間に剪定されている。

「これで終わりだ！西行妖！【対西行妖用特殊封印結界】」

武志は後ろに回り込み、特製の封印術付きの刀を思いっきり刺し込む。一応破壊神パワーも少しだけ込めているので割と深く刺さる。

すると西行妖は瞬く間に落ち着き、八分咲きだった花もすぐに散ってしまった。

「儂いってものだな。桜も、野望も。」

「… マスター！」

「お疲れ様。マスター。」

「… おっ、お疲れ。」

二人も戻ってくる。さ、目的も達成したので帰ろうか。

「… 待ちなさい。」

「おっ、怖いね。」

霊夢が凄い形相で私たちの事を呼び止める。

「あんだ達は何者かしら？」

「西行妖を止めに来た慈善団体の会長だ。」

「そう。」

次はメイドの人が後ろから詰め寄ってくる。

「貴方と似たような人が私たちの館に殴り込みに来たのですが心当たりはありませんか？」

紅霧異変の時の奴かと振り返りつつ、むしろそこまで分かるのかと少し感心するが、しらを切りとおす。

「知らないね。そもそも紅魔館を知らない。」

「… 私達の館の名前が紅魔館だとは一言も言ってません。やっぱり貴方達でしたか。」

「ははは、一杯食わされたね。」

別に隠し通すつもりもないしいいやとは思う。

「… あんた達の目的は何よ。」

「目的ねえ…。 そんなものはないかな。 強いて言えばとある方の依頼って事かな。」

「ここら辺はもう正直に言う。 隠したところで何もなし。」

「そのとある方って誰だ？」

いきなり魔理沙がグイグイ来る。

「私の口からは言えないが、私の旧友とだけ言っておくよ。」

霊夢達との間で沈黙が流れる…。

「… 決めたわ。 やっぱりあんた達を見過ごすわけにはいかない。 幻想郷の守護者としてあんた達を退治するわ。」

それを聞いて他二人も戦闘態勢に入る。

「マスター、どうする？」

「戦ってもいいならサクツとやっちゃうけど。」

オタワと吉美から確認があるがそんなのはもう決まっている。

「… 悪いが私は君達と敵対しに来たわけではないのでね。 ここでおいとまさせてもらおう。」

そう言つて武志はコートからスタングレネードを落とす。すると、フラツシュが霊夢達の目をつぶすので、そのうちにワープで諏訪洩矢郷に直帰する。

「… 逃げられたわね。」

「… 目が痛いぜく。」

「まさか奥の手を隠し持ってたとは…。」

「… 敵対の意志はないようだけど不気味な奴らだったわね。」

「嘘だろあんなの！絶対いつか私達に牙を向くって！」

魔理沙のいう事も一理あるわね…。しかしもう逃げたものは仕方ないしまった現れた時に問い詰めるとしましょう。

「…それより幽々子の方を確認するわよ。封印も無事にできたみたいだし。」

「…そうだな。」

~~~~~

「…ただいま〜！」

「疲れたぜ。」

「おかえりなさいマスター。どうでした？」

「無事に封印して暫くはあのままだろうよ。」

「それは良かったです。報告しておきますね。」

「ああ。任せた。私は疲れたから少し休むとするよ。」

こうして春雪異変は終了したのだった…。

第十三章 東方永夜抄 〔異変の裏仕事編〕  
PART・86 再開

春節異変からしばらくたった時のこと。武志たちは創武殿で通常業務を行っていた。

「…なんでこの時期は忙しいかな?」

「だって10月ごろに出雲の方で大きな会議があるんでしよう?そのための書類じゃないんですか?」

10月はまだ先ではあるが、今年は例年よりも書類の量が多い気がする。そのため、残暑厳しい中から書類の準備をしなければいけないのだ。

「… そうですねマスターは会議に参加していないような気がしますが大丈夫なんですか?」

「あー大丈夫大丈夫。位だけは高いから。それに資料関係は大体私だから問題ない。」

「… それ大丈夫なんですか?」

「大丈夫じゃないから今年は行かなければいけない。」

「… それ大丈夫じゃないですよねやっぱり。」

だってあの会議は無駄に遠いし話はだるいしで参加するメリットがないから仕方ない。千古から示しがつかないとは言われているが行く気分には到底ならないので分身を作って向かわせるべきかな?それとも創造神権限で開催場所を変える?

その時、内線通信から連絡が入る。

「… ボス、どうやら客人のようだ。」

「了解。応接室まで案内してくれ。」

武志は応接室に向かう。しかし客人とは珍しい。千古や天照あたりは直接レポートしてくるし、他に訪ねてくる人もいないため誰が来たのかを楽しみにしつつ応接室へ向かう。

「… 来たか。ボス。客人はすでに案内してある。」

「分かった。ありがとう。」

武志は扉を開く。

「お待たせして申し訳ない。ようこそ創武殿へ……。え？」

そこに座っていたのは永琳だった。ってかどうやって来たんだ。

「久しぶりね。武琉……。いや、武志って言った方がいいかしら？」

「こちらこそ久しぶり。ってかどうやってここまで来たんだ？簡単に  
は来れないはずだろ？」

「そうね……。月読がすべて教えてくれたわ。」

「……ん？」

とりあえず月読は後でシバくとして、永琳ってそんな位が高かつたっけ？

「まあ無理もないわね。私は月読と面識があるのよ。」

「マジ？」

衝撃の事実過ぎる。でも月の都があるしおかしくはないのか……？

「月の都を創設するにあたって月読といろいろ話したことがあるのよ。結果的にはお互い頼りにしていたわ。」

「へえ。今はどうしてるんだ？」

「いろいろあって地上に戻ってきたわ。今は姫様やうどんげたち他の  
兎と一緒に迷いの竹林ってところに屋敷を構えてるわ。その点は理  
仁とかいう陰陽師に感謝ね。」

その名前にピンとくるが、黙っておくことにする。絶対理都じゃ  
ん。

「……そうか。で、そろそろ本題に入らないか？用もなしにここまで  
来たわけじゃないだろう？」

「そうね。今回はとある依頼を持ってきたのよ。」

永琳は内容を事細かに話し始める。

「今回貴方に依頼したいのは姫様の護衛よ。」

「……なんでまた私に？」

「そうね……。私が今頼れそうな人で一番腕が立つのが貴方だから  
よ。」

「……私は爆発で死んだことになってるはずだろ？」

「…あなたが月読の使いという名目で視察に来ていたというのは覚えてるわ。だから月読に尋もn…訊いてみたの。そうしたら今も元気にしていると聞いたから場所と行き方も聞いてここまでやってきたのよ。」

今尋問って言わなかった？まあ気のせいだという事にしておくが、よく連絡をとれたなと思う。

「今、月読にどうやって接触したと思ったでしょ。答えは簡単よ。彼に秘密裏に手紙を送ったのよ。そしたら地上に来てくれたからその時に聞いてみたわ。」

「…凄い行動力だな。」

まさかそこまでするとは。永琳の行動力には脱帽である。

「…で、何から姫様を守ればいいんだ？」

「月の使者が姫様を取り返しに来るはずなのよ。私の方でも秘策を講じるけど、念には念を入れて、ね。」

「…なるほど。作戦日はいつだ？」

「○○日よ。」

「分かった。こつちの方でも兵士を準備しよう。ところで迷いの竹林ってあの幻想郷の？」

「そうね。あの幻想郷のよ。」

「…てことは異変解決者たちが来ることも想定しなければいけないのか？」

「それは大丈夫よ。もし来ても月の使者たちと戦いあえばこちらの利にはなるし、最後には対峙するでしょうけど彼女たちは懲らしめるだけで別に姫様を連れ去ろうとかいう目的ではないでしょうから安心よ。」

「…それでいいのか。」

「いいのよ。」

かなり楽天的な考えではあるが、そう簡単に戦わない気がするけどな。まあ、なんとかなるか。

「…ところで、別れた時の約束は覚えているかしら？」

「もちろん。」

武志はチエルベツロの板から酒瓶を数本出す。

「このために最高の酒を保存してたんだ。景気よく行こうじゃないか。」

「分かってるじゃない♪」

二人はプチ宴会をする。ラダヴィーニヤとオタワにバレて説教されるまではそう長くなかった…。



PART・ 87 初仕事

数日後、武志達はミーティングを開いていた。

「〜という訳で、今回の仕事に連れて行く人を選びたいんだが…、大無、バンデイ、吉美、行けるか？」

今回は三つ巴の戦いになる可能性が高く、なるべく多くの仲間が欲しいため、この3人をお願いをする。

「…承知。」

「分かった。」

「OKだよー！」

「よし、今回は大無とバンデイで異変解決者の撃退を、私と吉美、後永琳とで月の民の抹殺を試みる。バンデイは遠くから1人ずつ狙撃で、大無は奇襲で異変解決者を1人ずつ倒して欲しい。殺さない程度に痛めつけるのは許可しよう。」

「分かった。地味にパーっと行こうじゃないか。」

「で、私と吉美は永遠亭で待機して迎えに来た月の民の奴らを殺害する。私の元仲間の奴らは来ないだろうが、もし来たら私が相手をしよう。途中、異変解決者が来たら臨機応変に対応しよう。」

「分かった♪」

「…よし、それじゃあ実行日までに戦闘の準備をしようか。ここ最近は大規模な作戦とかやらなかったからね。」

武志達は来るべく戦いに備えて戦闘準備をするのであった…。

~~~~~後日~~~~~

作戦日当日、武志達は永遠亭に来ていた。

「貴方達は…？」

「永琳に頼まれて護衛をする者だが永琳はいるか？」

「お師匠様ですか？案内するのでついてきてください。」

永琳の部下だろうか。うさみみの少女に連れられて永琳の所へ行

く。

「お師匠様ー、お客様を案内しましたよー。」

「ありがとう、うどんげ。」

「…そちらの方は？」

「ああ、この子はうどんげよ。私の優秀な実けん…部下よ。」

今なんか不吉な肩書きが合間見えた気がするが気にしないことにしよう。

「お師匠様からご案内預かりました鈴仙・優曇華院・イナバと申します。よろしくお願い致します。」

「私は洩矢武志だ。永琳の旧友で今回の作戦を共同で行う者だ。よろしく頼む。」

吉美達も軽く自己紹介を済ませ、早速本題へと入る。

「…さて、そろそろ概要を説明するわ。今現在特殊な結界を張って侵入者が入れないようにしているわ。でもこの結界は強力なあまり欠点があつてね、結界が作動している限りは夜が明けないの。更にいずれは侵入してくると思われるためそれを撃退するのが私たちの仕事。」

続けて武志も作戦内容を話す。

「で、私と吉美は永琳に加勢して月の民の抹殺、大無とバンデイは夜が明けない原因を探りに来るであろう異変解決者の撃退だ。2人とも、くれぐれも殺害しないように。」

「…おそろくあと数時間後に侵入者、そして霊夢達が来ると思うわ。各自の健闘を祈るわ。」

作戦開始から数時間後…。

「…何も起こらないよ。」

「…。」

武志は月をじっと眺める。

「…ねえ？聞いてる？」

「…。来たか。」

「…え？」

空を見るとよく分からない乗り物に乗っている軍団がこちらに向かっていているのが分かる。

「…さてやりますか。」

「撃ち落としていいの？」

「いや、先に警告からだな。帰ってくれるなら本望だしこのまま来るなら迎撃の口実にもなる。」

「…性格悪いなあ。」

武志は早速メガホンを取り出す。このメガホンは武志特製の高性能メガホンでとても離れてても聞こえるというとても便利なものである。

「あーあー、その空中船団共に次ぐ。此方より先は幻想郷の領域として立ち入ってはならない区域である。今すぐ引き返すように。引き返す場合は危害を加えないがこれ以上先へ進むなら残念な事に貴方を敵とみなし即刻迎撃にはいらなければならぬ。今すぐ引き返すべし。もう一度次ぐ。此方より先へ進むなら即刻迎撃する。今すぐ引き返すべし。」

武志は警告を発する。すると敵の艦隊の1つから声が発される。

「こちら月面第七艦隊。我々は姫様を連れ戻しに来た。姫様を差し出せばすぐにでも帰還する。 応答頼む。」

案の定向こうは姫様を連れ戻しに来たと述べるが、それを阻止するために来ているのももちろん拒否する。ってか、月面第七艦隊って月のエリート艦隊だった気がするな…。

「こちら幻想郷特殊警察隊。そちらの要望に答えることは出来ない。諦めて即刻引き返すべし。」

幻想郷特殊警察隊は武志が10秒で適当に考えた架空の組織名だ。

特に深い意味は無い。

「それは出来ない。そちらが引き渡さないなら我々は武力による強行突破を行う。姫様をここに差し出せばすぐに帰還する。」

「悪いがそれは出来ない。貴方を賊軍と見なし迎撃を開始する。」

「…吉美、やるぞ。」

「まっかせて♪」

敵は7艦。確か永琳から第七艦隊は殆どを自動化したと聞いたから歩兵は割と少ないだろう。とりあえず周りの奴から破壊していくしかない。

「さあ、やるしかないな。」

武志、吉美、永琳と月の戦いが始まるのであった。

月面第七艦隊との対戦が始まる…。

「思ったより攻撃が激しいな…。旗艦はどれだ？」

「あの一際大きい奴よ。おそらく歩兵達もあそこにいると思うわ。」
「なるほどな。」

という事はあの旗艦さえ落とせば勝手に撤退すると読めた。

「…永琳は下で歩兵達を倒してくれ。本体は私たちがやる。」

「分かったわ。気をつけてね。」

「ああ。」

武志と吉美は攻撃の間をついて飛び上がる。

「とりあえず1発かますか!」【爆符「無人爆薬積載貨物列車」】

「やっちゃうよ!」【一撃必殺レールガン】

すると線路が旗艦めがけて伸び、貨物列車が突撃してくる。ノーブルレーキなうえ今回は爆弾MAXなので火力は大違いだ。更にレールガンでの援護もあり、周りの敵艦の砲塔が破壊されていつているため、敵の支援砲撃は望めなさそうである。そのため、よけるのに間に合わず、貨物列車は無事に突撃し、旗艦にそこそこのサイズの穴が開くのであった。

「… やったか?」

「それはやってないんだよ。」

まだ飛べてはいるようだ。とどめを刺しに武志達は船内へと入り込む。

「侵入者だー!」

「捕えろ!」

「道を開けろ!」

敵兵たちが襲ってくるが、武志達はそれをいなしていく。

「どこに行くの!」

「指令室さ。狙うは大将首ってね。」

しかし思ったよりも歩兵の数が多い。別に大したことは無いのだが逃げられると厄介なので急いでいく。船の指令室は大体艦橋にあ

ると予想されるのでそこにめがけて一直線へ向かう。

「ここだなー!」どん!

武志達は指令室と書かれた扉を蹴破る。中にはまだ幹部や士官級と思われる兵士が残っていた。

「お前がこの艦隊の大将だな?」

武志は胸にバッジが大量についた男に向けて言い放つ。

「ああそうだ!私がこの第七艦隊の大将だ!」

「大将か。なら話は早い。撤退するかおとなしく死ぬか選ばせてあげよう。」

「なっ…!」

「簡単な事だろうか?勝手に人の領分にこんな派手な艦隊を送つといてただで済むと思ってるのか?」

「我々は姫様を連れ戻しに來ただけだ!お前らと敵対する義理はない!」

「それはごつちも一緒だ。あなた方の言う姫様はお月様に戻りたくないんだとよ。親切に返してあげようとしたのにあなた方がこちらの勧告を無視するから敵対するに至っただけさ。」

「それは…!」

「加えて言うなら姫…いや輝夜様はとある罪を犯して地上に追放されたと聞く。なぜ今になって連れ戻そうとするんだ?」

「それはお前らに言う義理はない!」

「そうか。ならそれを踏まえてもう一度聞こう。今ここでおとなしく撤退するかあなた方全員死ぬか。どつちがいいかい?私は慈悲深いからな。撤退するなら1時間ほど猶予をあげよう。それで地上に送り込んだ奴らを回収するがいい。」

「…くっ。」

「私達を始末しようとしても無駄だぞ。その時はお前と、この船と、それから手下達を全員道連れにさせてもらおう。」

「さあどつちがいい?」

この空間に重い空気が流れ続ける。

「…分かった。撤退しよう。その代わり無事に撤退させてくれるん

「だろうな？」

「勿論だ。」

大将は無線機に向かい通信を行う。

「…全軍に次ぐ、今すぐ撤退せよ。もう一度次ぐ…」

「…それでは私たちはおいとまさせてもらう。」

武志達は堂々と旗艦から撤退するのであった。

「あら、お疲れ様。」

「お疲れ永琳。そっちはどうだ？」

「地上にいたのは粗方片付けたわ。それより残っていた敵が逃げているように撤退していったんだけどあれは…？」

「ちよつと月の大将と話を付けてきた。思ったより話が分かる奴で助かったよ。」

「はあく、貴方はいつも無茶ばかりするのね。」

「悪いな。」

「…それで、地上の方はどうなったの？」

「ここにたどり着いてはいないから大丈夫でしょう。」

一応結界を敷いているとはいえない頑張れば来れないことは無いのだが異変解決者の姿は今のところない。つまりバンディたちが仕事をしているという事だろう。

「ま、奴らの撤退を見届けたら加勢しようか。」

十数分後、撤退が完了したのか艦隊が飛び立っていく。

「…よし、それじゃ様子を見に行こうか。」

「私はここで待つわ。永遠亭は任せて頂戴。」

「心強いな。」

そう言い残して武志は吉美と様子を見に行こうとするが、その瞬間誰かがこちらに走ってくるような足跡が聞こえた。

「…！」

武志は反射的に銃を取り出しその方向に構える。やってきたのはウサギだった。

「兎…？」

「…どうしたの？」

ボロボロの兎に永琳は話を聞く。

「…！」

話を聞いた永琳の顔色が変わる。

「どうかしたのか？」

「マズいことになったわ…。霊夢と魔理沙がこちらに向かっているそうよ。」

どうやらいつものメンバーが向かってきているようだ。

「別にいいじゃないか。目的も達成した。あとは向こうの話を聞いて要求をすり合わせるだけじゃないか。」

「彼女らの事よ。姫様に危害を加えるに違いないわ。」

「…確かに。」

霊夢と魔理沙は異変解決中は目につく者すべて倒すバーサーカーになるというのは永琳から聞いてある。目的を達成している以上永琳が倒されるのは構わないのだが永遠亭に踏み込んだ姫様まで倒されるのは確かにまずい。

「一応兎たちの話によると紅魔館の方々と冥界の方も動いていたようだけどそちらは貴方達の従者が無力化してくれたようよ。ただ気絶させる程度だったから起こされている可能性もあるって。」

「なるほどな…。」

自分の従者たちが仕事をこなしているのは素直に嬉しい事ではある。しかしここは迷いの竹林とだけあってよく道に迷う。道に迷った霊夢達が偶然見つけて起こしている可能性が高いだろう。

「…とりあえず呼び寄せるか。私たちはあまり表舞台にはいけない存在だからな。」

「…幻想郷で何をしているか詳しくは効かないことにするわ。」
「助かる。」

これ永琳の反応的に誰かいるのはバレてるけどそれが誰かまでは分かっていないのか。とりあえず大無とバンディを呼び寄せるか…。

武志と吉美は永琳から離れて通信を行う。

数分後…

「いきなり呼び寄せてどうしたんだい？」

「…終わったか？」

「ああ。月の連中は全て追い返した。だが霊夢達がこちらに向かつているらしい。今霊夢達に私たちが見られるのはあまりよろしくないから直ぐに撤退しよう。」

「マスターはどうするんですか？」

「私はまだここに残る。契約は守らねばならない。」

「わかった。」

「…ラダ。開いてくれ。」

「分かりました。」

通信機越しに撤退用ゲートの生成を行う。従者たちを返した後、また永琳と二人きりの空間になる。

「…帰らなくてよかったの？」

「ああ。約束は最後まで守り抜く。」

「あの時もそれくらいの信念でいてほしかったわね。」

「…悪かったな。」

でもあの件って、元々天界の使者で行ったのを、いつのまにか古代都市に元からいた奴扱いされてあそこまで成りあがったから私は悪くない気がするが、これを口に出すと殺されそうなので黙っておくこととする。

To be continued…

PART・ 89 VS 異変解決者たち

前回の話から十分ほど経ったところである。

「そういえば前に私の所へ来たときに、月読から私の話を聞いたとか言っていたが、どこまで聞いているんだ？」

霊夢達が来るまでの間暇なので、前々から不思議に思っていることを聞く。

「そうね……、貴方の本名が洩矢武志で、創造神であり破壊神。神界では仕事はやるが顔は出さないことで有名で、現在は地上で色々やっている。ってことくらいかしら？」

とりあえず月読は一回拷問のフルコースを堪能させるとして、どうやら知られたくないようなことは一通り知っているようだ。

「……そうか。それらの事は八雲紫及びその従者、また幻想郷の奴らには絶対に黙っててくれ。知られるとちよつと厄介なことがあるのでね。」

理都は自らが神様であることを隠して紫と付き合っていたと聞く。私が理都の兄であることは紫にも知られているため、私が神である事||理都が神である事となるのでそれは絶対に隠さなければいけないのだ。

「分かったわ。武琉の言う事だもの。」

「ありがとう。永琳。」

「逆に私からも質問していいかしら。」

「なんだ？」

「貴方は古代都市で私達を置いて地上に残った後どうしてたの?」

「ああ……あの後は敵をひたすらなぎ倒して、爆弾が落ちる直前に神界へ逃げて、その後……といつてもかなり経った後はまた地上でゆくりしてたかな。正直長くなるからこの話はまた別の機会にしよう。」

「楽しみにしてるわ♪」

「はっはっは。そうか……。で、そこにいる奴は殺されないうちに出てきた方が良いで。」

「…え？」

そう言うのと茂みの奥から霊夢達ご一行が出てくる。紅魔館で出会った奴らや冥界の方々もいるので起こされたんだろう。

「…今着いたところなのによく気付いたわね？」

「それだけ大人数でいたら気づくさ…。で、今の話は聞いていないだろうな？」

「紫が盗み聞きする前に気付かれたから聞けなかったわ。それより満月を返してくれない？」

「あら、それはいけませんわ。もうすぐ朝になる。そうならば満月も返すわ。」

「ああ。生憎姫様を連れ出す輩がいるのでね。この術があれば安泰なのだ。」

「姫？姫なんて興味は無いわ。」

「そうよ。私たちは満月が戻ればそれでいいの。」

「そうは言われてもな。朝になれば自動的に戻るようになっていいる。君達の出る枠はない。」

「とりあえず私についてきてくれないかしら？ここはうどんげに話をつなげてきてもらおうとするわ。」

「了解。」

「なんか言ったらどうだ？黙ってるのと嫌われるぜ？」

「魔理沙は黙ってなくても嫌われてるでしょ。」

「酷いなあ。」

武志は何も言わずカタストロフィを取り出すと、勢いよく地面に振りかざす。すると地面から鎖が出てきて皆を拘束する。

「何よこれ！」

「くそつ、放せコノヤロー！」

「悪いがこの鎖は自分で外すか私が解除するかのどちらかでしか外せないのね。それでは私たちはおいとまさせてもらう。」

「心配しなくても夜が明けたらすべて元に戻ってるわ。」

「あつ、おい、待てよ！」

「外しなさいよこれ！」

「刀が動かせない…！不覚…！」

「ねえ、紫…？」

「というわけで武志達は永遠亭の奥へ向かう。勿論、すべての扉を閉めながら。」

暫くすると後ろから人の気配がする。どうやら四人いるようだ。

「待ちなさい！」

「霊夢、それは絶対に待っててくれないぜ。」

「魔理沙、今は追う事に集中して。」

「…。」

「紫…？」

後ろからの弾幕をよけながら奥へと逃げてく。つてかうどんげやられるの早くないか？

「つてかあの兎はどうしたよ！」

「あーあの兎か？急いでるのに出てきたからちよつと轢いちやつたぜ。」

… とりあえずうどんげが無事な事を祈っておこう。多分大丈夫だろうけど。

「それよりそつちは行き止まりじゃないか？大抵こういう一本道つていつか終わりが来るんだぜ？」

「それこそ何も考えず目の前の敵を追って大丈夫なのか？大抵こんな感じで逃げてるときつて相手の有利な所に行くことが多いんだ。」

「えっ…？」

そうこう話していると終点にたどり着く。そこには廊下はなく、いつの間にか外、それも宇宙空間に来てしまったのである。

「君たちは愚かだな。ここまで誘導されてきたことにも気づかない。」

「魔理沙、周りを見て！」

「見るさ。いつの間にか外だな。」

「ここがどこか関係ないわ。さあ、満月を返して頂戴。」

「せっかちなねえ。でも、私達が今居る場所。何処だか判るかしら？」

「??」

皆頭に？マークが浮かんでいるのが見える。

「ここは偽の月と地上の間。さっきの永い廊下は、偽の月と地上を結ぶ偽物の通路。貴方達は偽満月が生み出した幻像に騙されてここまで来たのよ。」

「で、それが何よ。」

「貴方達には戻る術はあるのかしら？」

「それは貴方達を倒してから考える事。焦る事は無いわ。」

「私たちの掌の上で仲良く踊っているような連中が私達に敵うと考えているのか不思議でならないがな。」

「そうね。でも私達も鬼じゃないわ。朝までなら遊んであげるわよ。」

「よく分からないけどこいつらを倒せば解決するのね？」

「そうよ。」

「今頃、他の方々はここに来るまでに迷って永遠に屋敷を彷徨っているだろうな。だが、それは月の民も同じこと。今頃彷徨っている姿が目に見えな。」

「実際はもう追い返しているのだが、あえてこのような茶番をして真実を隠すのが穏便で手っ取り早い。」

「ええ。これこそが私の最大の秘術の一つ。地上は大きな密室と化したのよ。」

「狂ってるなあ。」

「そうね。とりあえずこいつらを手っ取り早く倒して地上に戻りましょう。」

「あら、遊んでいく気になったみたいね。あいにく私は、永遠に遊ぶ力は持っていないけど…。それでも、朝まで遊ぶこと位は出来るわ。」

「永遠に遊んでみたい物ね。でも、それはまたの機会にでも…。」

「さあ、幻想郷の世明けはもう目の前にある！」

「明けるまで付き合ってもらおうぜ！」

「異変解決者たちとの勝負が始まる…。」

「先手必勝だな！くらえマスタースパーク！【恋符「マスタースパーク」】」

いきなり高出力のレーザーを撃ってきた。ここは永琳と手分けして二人ずつ相手することとする。

「私が相手になってやろう。」

武志はいつも通りの弾幕で応戦する。

「そういえば貴方前の時も会ったわね！数か月ぶりかしら！」

「ああ。そういえば西行妖の封印の時に会ったっけ。」

「霊夢、彼奴との間に何があったのかは分からないけど今は戦闘に集中して頂戴。それに私も聞きたいことがあるから。」

「…分かったわ。」

霊夢は何か言いたげだったが紫に諭される。つてか紫まで用があるとなると忙しくなるな。とりあえずめんどくさくなる前に処理するか。

「とりあえず遊んでやるとは言ったが何か用があるなら別問題だ。勝ってから訊いてみる。」

「言われなくてもそうするつもりよ！【霊符「夢想封印 散」】
すると七つも大きい弾幕が一斉に襲い掛かってくる。

【破壊神式防御結界】
めんどくさいのでそのまま弾幕を全部消す。

「全く、危ないな。【掃討「ガトリングバレットヘル」】
ガトリング式のタレットが生成され、紫と霊夢を一斉に狙う。

「撃てー！」
号令に合わせて弾幕が一斉に掃射される。まあ号令いらんだけど。

「鬱陶しいわねー！」
「…。」

また紫がなんか考えてる。気味悪いな。

「気味悪いな。まあいい。【爆符「無人爆薬積載貨物列車」】
貨物列車が霊夢達めがけて暴走してくるが、スキマで避けられる。
しかし、これは爆弾だ。

どーん！

勿論大爆発する。

【夢符「封魔陣」】
すると武志の周りになんか魔法陣が出来てくる。しかし爆発に気

を取られて気づくのが一瞬遅れた。

どーん！

武志を囲うように攻撃が行われる。

「痛いじゃないか……。」

「まだ耐えてるのね。」

「そちらこそ、な。」

「……やめた。興が覚めてしまった。そこの奴からも戦うという覇気が感じられない。そんな状態で戦おうとしてもお互い楽しくないからな。」

二人共私が気になるのか戦闘そっちのけな気がしたから面白くなくなってしまった。話を聞いてあげようとするか。

「それで？聞きたいことがあるんだらう？」

「……。」

二人は戦闘そっちのけで会話を始めるのであった。

PART・ 90 異変の終わり

「それで？聞きたいことというのはなんなんだい？」

武志は二人に尋ねる。

「前に会った時、春雪異変。あの時は私たちの味方として西行妖と戦った。その前の時、紅霧異変の時では私達に敵対してきた。貴方達は一体何者なの？」

武志は少し考えてから、

「… 少なくとも敵ではない。」

「質問の答えになってないわ。貴方達は何？」

「… 厳しいなあ。」

武志はまた少し考えてから、

「私はとある環境団体のリーダーだ。紅霧異変の時ではあんなひどい霧を流した奴らに制裁を与えた。春雪異変の時には冬が永遠に続いてたからその元凶を伐採した。ただそれだけだ。」

半分嘘だが間違ったことはそんなに言っていないと思う。

「… 分かったわ。」

「私からもいいかしら。」

「… なんだ？」

「その道具、その技、私のお師匠様の兄でありこの幻想郷の大元を作った男と酷似しているのよ。貴方は彼とどんな関係なのかしら？」

… そこまで覚えられていたのか。不覚だった。霊夢も物凄く驚いているじゃん。答えは勿論同一人物だからなんだけどう答えるかなあ。

「… 悪いがそれに関しては黙秘権を使わせてもらう。」

それとなく永琳の方を見るとまだ戦っているようだ。ならば都合がいい。

「そう… 答えられないのね。」

「ああ。そして貴方は知りすぎた。悪いけどここで肅清させてもらうよ。」

武志は右足を地面にたたき。するとまた鎖が二人を拘束する。

「何をするつもりかしら…?」

「殺しはしないさ。ただし記憶を封じさせてもらう。」プシュー
「…っ!」

二人を眠らせると武志は記憶改竄装置を取り出す。いつだったか依姫に使ったものと一緒の物だ。

「… あったあった。これをこうして…。っと。ok。」

武志はその当時の記憶を封じる。ついでに思い出せないようにする術もつける。

「悪いが私が正体を明かすその時までその記憶は闇に葬らせてもらうよ。」

「… さて、向こうも終わったようだな。」

武志は永琳の方へと向かう。

「… お疲れ。永琳。」

「… あら。その様子だと紫達を打ち負かしたのね?」
「造作もない。」

「… マジかよ。霊夢達を倒すとか強い奴なんだな。」

「これは危険人物ね。」

二人が警戒しているがまあ無理もないか。

「… 私は君達と敵対する義理はない。」

「嘘だろ! 前々からの行いは覚えてるぞ!」

「… はあ。そのことについては霊夢と話を付けてきた。彼女が起きたら話を聞くといい。」

「… 分かったよ。力づくで聞いても多分負けるだろうからな。」

「賢明な判断だ。」

「… とりあえずこいつら運んで脱出するか。ここに長居するのもよくないだろう?」

「… そういえば結局満月はどうなったんだ?」

「心配しなくても夜が明けたら元通りさ。夜明けまで後もう少しだろう?」

「… もうそんな時間なのね。」

武志達は永遠亭の前まで帰ってくる。

「… あっ！お前！これ外しなさいよ！」

「随分長かったわね？」

… 残り拘束してたの忘れてた。

「お前らまだ捕まってたのか。」

「… まあ無理もないだろう。君たち以外は抜け出せないようになってたからな。」

武志は残りの彼女たちの拘束を外す。

「永琳、私はそろそろおいとまするとしよう。」

「あら、もう帰っちゃうの？」

「部下たちをあんまり待たせるわけにはいかないからな。また遊びに行こうと思う。」

「分かったわ。待ってるわね。」

「… あっ彼奴逃げるつもりだぞ！」

「咲夜！捕まえて頂戴！」

「かしこまりました。お嬢様。」

咲夜が止めに入るつもりだが流石に間に合わない… は？

なぜか縄で拘束されていた。なんでだろうか？

「変な術を扱う奴もいるものだね。」

しかしこれくらいなら簡単に脱出できるな。どうせなら驚かせてやろうか。

「これくらい簡単ですわ。さあ、貴方の素顔を見せてもらいましょうか。」

「そりゃないぜ。」

そう言うと同時に一齐にヘルメットとマスクに手が伸びる。そして武志の素顔が白日の下にさらされるかと思いきや…。

「… え？」

そこには大きな文字でハズレと書かれた顔…。いや、武志の服装をした人形に化けたのであった。

「… どういう事かしら？」

「… どうやら一筋縄ではない相手のようね。」

「… 敵対の意志はないようだけど気味悪いぜ。とりあえず霊夢ら起

「ごさないとな。」

「確かに。そういえばまだ寝てるのね。」

「… 霊夢く、起きろく。」

「… 起きないわね。」

「ああ。こりやさっきの奴に眠らされてるかな。」

「まあそのうち起きるでしょう。とりあえず今は異変の事について解決するのが先では？」

「そうだな。」

その後、色々話した結果、幻想郷自体が一つの結界で外からは簡単に侵入できないため永琳たちがやったことは無駄であるという旨の話をされたが、実際に起こった出来事は武志達と永琳たちのみ知るこ
ととなった…。

~~~~~

○人里にて。

「… 危ない危ない。予めあのメイドについて話を聞いておいて正解だった。」

春雪異変の時に吉美とオタワが共闘しているためある程度の情報があつたが、正直な所正確な能力については把握しておらず、咲夜に至っては瞬間移動してくるやつという認識だった。

「あれは多分時間停止の類だよ…。ユレイドスに殺されそうなやつもいたもんだ。」

因みにユレイドスは進退を司る神のため、時間などの神様として知られている。まあ温厚な神様なので殺されはしないだろうが。

「今頃あいつらの驚く顔が目には浮かぶな。」

武志は急いで洩矢大社に戻るのであった。

~~~~~

○諏訪洩矢郷にて

「…戻った。」

「お疲れ様ですマスター。」

「結局どうなったんですか？」

「任務自体は成功。そのあと霊夢らと対峙したけど少しまずい情報を持ってたから記憶処理を施して眠らせたさ。ラダヴィーニヤと吉美についての記憶も消しただろうから顔を合わせても大丈夫だろうよ。」

「…大変でしたね。」

まあ天魔とか他の連中に指摘されたらまずいがまあ大丈夫だろう。

「とりあえずゆっくり休むか。なんかすごい疲れた。」

「今お飲み物を用意しますね♪」

「助かるよ。ありがとう。」

こうして武志達の永夜異変は終わりを迎えるのであった。